

どうやら俺は、この眼を持って生きていかねばならないらしい

けし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

致命傷を受け、俺は2年間眠っていたらしい。それだけなら良かったが、おかしな事に、以前とは性格や考え方が変わってしまった。

そして何より、奇妙なものが目に映るようになったー。

目次

幕間の物語

50話記念回 『年の瀬、雪の大晦日』 | 1

第0章 プロローグ 『接触覚醒』”The root of
inners” | 1

1 | 22

2 | 26

3 | 30

4 | 34

5 | 38

6 | 42

7 | 46

8 | 50

9 | 54

第1章 尸魂界編 『進退対極』”The opposite
side” | 58

10 | 62

11 | 66

12 | 71

13 | 75

14 | 79

15 | 83

16 | 87

17 | 92

# 4	# 3	# 2	# 1	千年血戦篇	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42
Replay is not to do most	Way of trust / The fear	Blue On The Red	Souvenir	61ーエピローグ																				
					340	334	328	318	311	303	297	285	279	274	265	260	255	248	242	235	229	223	217	210

373
5

N
o
t

I
n
t
e
r
e
s
t
e
d

i
n

y
o
u

|

380

幕間の物語

50 話記念回 『年の瀬、雪の大晦日』

「なに？穂積のことをどう思うのか、だつて？」

唐突な質問に俺は首をかしげた。

藍染たちの騒動が終息し、それから訪れたひと時の休息。

破面にやられた傷は浅くなく、その傷を卯ノ花隊長に治してもらつてからも、部下たちの熱烈な休めコールに大人しく従つて、俺は庵にて休んでいた。

そんな時、九番隊の隊士が訪れ、俺に穂積のことを尋ねてきた。

「は、はい。藍染惣右介にトドメを刺したのは穂積副隊長であると、もつぱらの噂でして…。それに、『反膜』^{ネカンオン}も斬つたということが事実として広がっていますので、最近売り上げが右肩下がりの我々瀨霊廷通信の、起死回生のチャンスにしようかと…」

「へえー。穂積のやつ、そんな有名になつちやつたか…」

気付けば瀨霊廷のそこらで名前が拡がっているらしい。

本人に言わせれば興味ないだとか面倒だとか言いそうではあるが。

「それで、穂積のことを俺に聞きたいじゃないか？。なんで俺なんだい？穂積本人に聞けばいいじゃないか？」

「い、いや、あの人なんかおっかなさそうじゃないですか…」

「そうなのか？」

見た目は少々目つきは悪いが、万人が見ても整っているだろう。

男から見れば女に。女から見れば男に見える。京楽曰くそんな見た目らしいが、俺にはよく分からない。

たしかに髪の毛は肩にかかるほどだが、切るときはかなり雑だ。身長の低さは密かなコンプレックスらしく、たしか160cmくらいだったはず。出来れば170cmまで伸ばしたいと零していたのは少し覚えている。

まあ確かに、比較的仲の良い虎徹勇音副隊長と比べれば、彼女の肩くらいしかない身長ではある。

七夕で願うほど子どもではないようだが、伸ばせるなら伸ばしたいといったところだろうか。

「まあ、琴線に触れなければかなり面倒見はいい奴だ。気軽に聞いてみるといい」

「睨まれたら逃げますよ…?」

「俺の名前を出すといい。すげなくあしらわれたりはしないさ。それでも無理なら周りの奴に聞いてみるといい。…そうだな、虎徹勇音副隊長や、日番谷くんはどうだ? 比較的交流はあると思うが…」

一般隊士が足を運ぶには少々及び腰になりそうなところだ。

四番隊はともかく、日番谷隊長は彼らにとって怖いかもしれないな！ はっはっは！

…とまあ冗談はさておき。

「取材するのなら連絡はしておこう。どうする?」

「…とりあえず、お願いします…」

「分かった」

最近現世から輸入された技術である電話を使って、日番谷隊長に電話をする。存外に快く受けてもらえて良かった。

それにしてもこの電話というのはすごいな。浦原喜助が各隊に数台ずつ、隊長室に1つ設置したこれは、手にとってボタンを押すだけで相手と繋がるのだから。いや、現世も悔りがたいものだ。

ちなみに電気は各隊に設置された発電機で賄われているらしい。

「ん…、かなり冷え込んだな…」

冬が栄え、一年が終わる瀬戸際だ。病弱の身には響くな。

俺は布団に臥せているときは外の景色をよく眺める。

春夏秋冬、この庵から見える景色は様々で、春は桜が、夏は蝉が、秋は銀杏が、冬は雪がやってくる。

だけど特にこの冬の景色は、早朝の澄んだ空気が気持ちいい。針のような冷たさが、俺を外に連れて行ってくれるから。

だからまあ、冬は好き…、なのかもしれないな。

「冬…か」

「なんだ織。感傷なんて似合わんぞ？」

相変わらず陰気な部屋だ。

変わらず光を取り込み続ける天窓が、外界と内界をつなぐ境界。

電気的な光は、俺の眼に見える世界を満たす光のうちの、ほんの僅かだ。

眼鏡を外したラフな言動の橙子は、やることなすこと終戦いわってしまつた俺を、端的に表した一言を発した気がした。

「四季なんて、そつちの戸魂世界にもあるんだろう？」

「まあ、あるにはあるんだけどな」

こつちの現世世界ほど激しく変化はしない。どちらかといえれば緩やかな変化で、激しい猛暑も厳しい寒さも、中心である瀟靈廷にはやってこない。流魂街の端に行けばあるのかもしれないが、俺の知るところではない。

「へえ、一度はお邪魔してみたものだ。今度喜助にでも言ってみるかね」

「やめとけ。霊力のれの字もないオマエが行っても、なにも感じられないぞ？」

「霊力と魔力は少し似ているようだし、代わりくらいにはなると思うが？」

「…まあ、少なからずはな」

魔術回路から発せられる魔力というものは、己の生命力を交換して得られる力だという。霊力も生命力としてカウントできるのなら、生命力が根幹にあるところから多少の互換性はあるのかもしれない。

といつても、そのあたりをどうこうするのは俺ではなく橙子とか浦

原とかの役割だ。

——最近涅マユリがヤバい研究をしだしたという噂を聞いて、なんとも言えない嫌な予感がしたのは、記憶に新しい。度々虚^{ウエコムン}圏^{クワ}に赴いては、ツヤツヤした笑顔で帰ってくるんだとか。

「ま、その話は追々持つて行くとして、だ」

「なんだよ、妙に嬉しそうだな」

「もう年の瀬だぞ？たまには話せる奴とのんびり過ごしてみたいとは思わないのか？」

「ああ、そんな時期だったなこっちは。あつちでも年の瀬は1人だぞ？やる事ないから流魂街に迷い込んだ虚を殺したりしてたからな」

「…お前らしいよ、それは」

今更な話だ。

しかし、橙子の口数が多いのは珍しい。独り身はつらいと聞くが、あの橙子でもそうなのだろうか。

——やっぱり、センチメンタルなのは否めないらしい。空っぽの俺を満たそうなんて衝動が失せた感じ。

「お前には、何かやりたい事はないのか？」

「だからさつき言ったような」

「違う。お前自身から流れ出る『やりたい事』だ」

「……………」

言われて、何も返せない自分がある。

その時、懐の携帯が震えた。

「……………」

「出たらどうなんだ？」

「…ああ」

下手をすれば護廷十三隊の誰よりも現世に慣れ親しんだ気がする。

手慣れたように携帯の^{P.H.S}パネルに触れる。緑色の応答ボタンを携帯を持った左手の親指で押した。

『もしもし、織さんですか？』

電話の主は、近頃よく話していた虎徹勇音。

身長高いのが少しム力つくけど、知ってる人間の中では多分、最も

親しい部類に入るのだろう。

妙に好意的で、聞こえてくる声は嬉しそうではあるけれど。俺には何の感慨も湧かなかった。

「…なんだよ」

『あ、あの…、31日はお暇ですか!?!』

「っ…、大声出すなよ。…あー、多分大丈夫だろ」

『あ、ありがとうございます!それじゃ、また連絡しますから!』

ブツリ、と電話が切れた。

…テンションが高かったが、何の用なんだ。

ふと、ニヤニヤと気持ち悪い笑い顔をしていた橙子を見て、何かイラツとしてしまった。

「おい、何みてるんだ橙子」

「いや、案外お前にもそういう奴がいるんだねえ」

「何のことかは知らないけど、…友人みたいなものだよ」

浦原と橙子のヘソクリ——橙子は兎も角浦原は現世のお金は最低限しか使わないのでかなり貯まっていた——から出費して得た携帯は、通話以外のことをしないので、暇を持て余している。

橙子の金は、使い込むときには一気に使い込み、本気で困ったら仲の悪いらしい妹の口座から勝手に抜くらしい。災難なことだ。

長い長い有給を、実家でなくこっちで過ごすことにしたのは気まぐれのようなもの。

「そういうえば、お前いつまでこっちにいるんだ?」

「…年明けて2週間弱。やることもないけどな」

「大晦日まであと1週間ある…か」

手持ち無沙汰な右腕。血の通わない右腕の裾を振って遊ぶ。

「私もやる事がないからな。…改造するか?ソレ」

「義骸脱いでもくつついてるコレにはもう何もしくなくていいよ。むしろこんな腕作れる方が驚きだ」

「私の渾身の一作だぞ?」

「ま、ただひとつ文句があるとするなら…」

「なに?不満があるのか?」

「…違和感。どうにかならないのかコレ？」

驚くような目で俺を見る橙子。その不満は考えてなかったようだ。

「傷も塞いだし、違和感なんて感じない筈なんだがなあ」

「実際にあるぞ」

「ふむ…。…お前は肉体の構造に一分の綻びもない。端的に言って完成度が高いんだ。その幻肢痛もどきは、単なる拒絶感だろう。放っておけば無くなる」

「拒絶感？拒絶反応の間違いだろ」

「私がそんな欠陥品を作るか。渾身の一作なのだから、そんな阿呆なミスなぞするものか。…だが、解消する方法はある」

「…それを早く教えろ」

橙子は眼鏡をかけて切り替えながら、こんなことを言った。

「……我慢して？」

なんとなくそんな気がした言葉が、『伽藍の堂』という名の部屋に反響する。

俺は何の気なしに溜め息をついて、この幻肢痛もどきを無視するこ
とにした。

「……」

疼く幻肢痛を左手で抑えて、ぼんやりと薄暗い外を眺める。

厚い雲は、世界という鍋に被さった蓋と同じだ。湿気も熱気も寒気も、渦巻く人間の願望も。押さえ込むようにして蓋をされる。

季節という概念は、人の心を叩くには感情と並んで適したツールだろう。

「なーに織、寒いのは嫌い？それとも冬が嫌い？」

「どっちも嫌いだ。でもまあ、なんでかな…。雪の降る夜だけは、嫌いじゃない」

「で、俺のところに来た訳か」

「は、はい……」

浮竹から頼まれたので、その取材を受けてみれば、中身は穂積のことを聞くというものだった。

この前の藍染に関わる戦いではウロチヨロしたり、かと思えば破面アランカルを一蹴したり。さらには最後に感じた不思議な霊圧は奴のものだというのだから、俺には奴の事がよく分らん。

正直、好ましくは思っていない。理由は簡単。

「あの野郎、何かにつけて俺に蹴りいれてくるわ、見下してくるわ、あんまりいい奴じゃねーぞ」

「そ、そうなんですネ…。アハハ……」

藍染の離反が決まった時も、現世で破面と戦った時もそう。『俺の殺意はお子様だ』なんて訳の分からない台詞を口にする。

俺は奴に比べれば子供だし、実際の戦闘を見る限り、俺は穂積の本気を見た事がない気がする。どちらが強いかと比べることに意義を感じないが、もしかしたら穂積の奴の方が強いのもしれなかった。

…ちなみに同情すべきところとしては身長の小ささだ。俺より30cm近く大きいのが、よく隣にいる虎徹勇音と比べられることを考えると少し同情してしまうこともある。不本意ながら。

「まあ、実際はサツパリした奴だ。敵は敵、味方は味方と割り切れるし、敵だから殺さないとかいう甘さもない。というか、どうにも殺したいと思った時しか殺さないみたいだがな」

「それはどういうことでしょうか？」

「破面を相手にしてる時とかは特にだが、殺意を抱けない相手を殺すつもりはないらしい。穂積が殺意を抱いた相手は、多分藍染辺りだろうけどな」

奴の抱く殺意は、文字通り純粹で、憎悪や怒りのような混じり気のないもの。それはつまり、ただただ純粹な殺人願望であるということ。

俺はゾツとする。それが指すことは、穂積には殺人衝動があるということなのだから。

「…で、他に聞きたいことは？」

「あ、穂積副隊長の戦い方というのは…」

「奴の武器はいくつかあるが、素直に賞賛すべきはその速度。二番隊の連中を遥かに上回る速度で動き回れるらしい。実際、俺も目で追うのがなんとか出来たてくらいだ」

奴の本気を見た事がないから知らないが、噂では奴は、瞬歩とはまた別の歩法を習得しているらしい。

「使う武器はナイフと斬魄刀。基本ナイフで戦うみたいだがな」

「ナイフ……？」

「その辺りは本人に聞け。さて、そろそろ時間だ。記事の足しにもならねえだろうが、まあ頑張れ」

札を言つて去つていく九番隊隊士を見送り、まだほんの少し残っている執務作業に取り掛かる。

「あら隊長。まだ残つてたんですか？」

「テメエ松本……、仕事はどうした？」

「や、やだなあ隊長、休憩してただけじゃないですか？」

「ふざけたこと言つてねえで、さっさとやれ松本!!」

このバカ副隊長は。…だがまあ、少し思うところはある。

カチカチと時計の針が進む。珍しく松本が真面目に仕事をしているのを見て、あとこっちの書類が終わったから、こんなことを言った。

「松本」

「はい？なんですか隊長？」

「1週間、有給くれてやる」

「あれえ？珍しいですね隊長？たまには部下を労つてやろうつて気に」

「うるせえ。とつとつとその辛気くせえ面を直してこい。我慢なんかさ

れてたらこっちの気が滅入るんだよ」

「……分かりました。ありがとうございます隊長」

「礼はいい。今日はもうあがれ」

沈み込む夕日と、光の反対側にできる濃い影。

もうすぐ冬……だな。寒いのはまあ、嫌いじゃない。

「はあ、織さんのことですか……？」

「ええ、穂積副隊長のことを教えてもらえたら……と」

卯ノ花隊長に用かと思えば、まさかの私への取材。そのお題は織さんについてだった。

「うーん、大体どこまで言っているのか……」

「ま、まあ本人にもその辺りは伺いますから、思ったことを言ってくれれば……」

あ、今自分でハードル上げたわ、何してんだ俺、と内心戦慄してしまった九番隊隊士の言った言葉に、私はなるべくプラスなイメージを考えようとした。……したのだけど……。

「め、面倒見がいいとか？」

「浮竹隊長が言いましたね」

「戦いが強いとかは？」

「日番谷隊長が言いました」

「……うう」

今の織さんと一番付き合いが長いのは私だと思うけど、それでも思いついたプラスのイメージはすでに出尽くしたみたいだった。

な、なんて言おうかな……？

「……虎徹副隊長と穂積副隊長の馴れ初めというのは？」

「な、馴れ初めって…!?ちよ、そんな付き合ってるみたいなのやめて下さい！」

「(分かりやすく面白いなあこの人)いや、結構仲がいいから一部では付き合ってるんじゃないか疑惑もあるんですよ？」

「そ、そんなことが…。織さんになんて言おう…。あ、いやでも四番隊の人たちにしてみれば喜ばれるべきかも…?」

以前からかわれた経験もあるけど、それでも面と向かって言われれば恥ずかしいよお……。

実は隊長格の中でもかなりとつつきやすい四番隊の副隊長として、それなりに有名であることは、本人はまだ知らない。

「織さんと初めて出会ったのは、大体50年ほど前だったと思います。織さんは100年ほど前から十三番隊にいたらしいんですが、50年

ほど前に副隊長になったそうです」
「はえ、自分は新参ですから知りませんでしたよ」

ぼそり、ぼそりと、過去を零していく。

「織さんは、2年ほど目を覚まさなかつた事があります。その時に、織さんはここで眠り続けていました」

「そんなことが…」

「彼が副隊長になったのは、昏睡から目を覚ましてしばらくしてからでした。ちょうど私が副隊長になったのもその時期で、同期つていうものなんですかね。こういうの」

反応はとて静かだった。たぶんこの人は、聞きに徹することが正しいと思っただのだ。

「初めて織さんに懐いたのは、多分恋慕なんかじゃなくて憧憬だったんです。強いし、他人とは違うあの在り方が、何か気になったんだと思います」

「……………」

「今の私はみんなが言ってる通り、織さんを恋い慕ってるんだと思います。斬魄刀の力も、戦う力も、言うの恥ずかしいですけど織さんの隣に立つために手にしたつもりです」

「あの、渋いお茶かなにかありませんか?申し訳ないですけど、なんか

甘くなっちゃって…」

「え、あ、すぐに用意しますね…!」

少し疲れたような顔でそう言う記者さん。私は立ち上がったお茶を入れに行つたのだけど、なんであんな顔になってたんだろうか？

「うう、寒…」

給湯室までの廊下は窓が開けっぱなしだから、外の空気が容赦なく突き刺さる。

そういえば、織さんは年末を現世で過ごすって言ってたっけ。

「初詣…。一緒に行けるかな…?」

そうと決まれば、やることは決まった。

浦原さんに頼み込んで用意してもらつた携帯とやらで、織さんに連絡を取ろう。

その日が雪降る日になってくれたなら、きっと最高に違いない。

冬空の下が、私は大好きだから。

「ふええ、口の中が甘い…」

なんで最後に惚気じみた覚悟を聞かされりやならんのだろう。

こちとら独り身まっしぐらだつて言うのにな。

あーあ、週末久々にアイツに会いにいくとするかな。

「いつそアイツに調べてもらうか…?」

探すことに関して言えば、おそらく俺の知る限りアイツより上のやつなんてそうそういないんじゃないか? ずいぶん前金貸してやったんだけど、それを盾にして…なんて、そうやるのはなんか嫌だな。

というか既に調べてたりしてな。

「ま、んな訳ねえか! ははははっ!」

鬱屈しそうな気分を笑って吹き飛ばし、その時入ってきた虎徹副隊長に向けてられた怪訝な目をスルーした。

…うん、苦え。でもまあ、いい感じだな。

「…取材の方は…？」

「ああ、もう十分です。忙しいのに、わざわざありがとうございますございました」

「いえ、そんなことないですよ。こちらこそありがとうございます」

互いに礼を言って、四番隊の隊舎を後にする。

さて、今週は久々に、東流魂街に行ってみるか。

どれだけ妹が距離縮めてるか気になるしな。これで縮まってなかったらED疑うぜマジで。

「さーて、色々纏めてから寝るかあ。全く、編集業も楽しやねえな」

内心死神の仕事じゃねえよなコレとか思いつつ、残った仕事を消化すべく九番隊隊舎——もとい出版社に足を向けた。

もうすぐ一年も終わりになるわけだが…。冬はまあ、夏よりはマシかもな。

「やあ、久しぶり」

「おう。相変わらずそうで何よりだぜ」

「君こそ、変わってないな」

昔から、というと一体いつからになるのか分からないけど、数字にして大体100年と少し。目の前の男とは長い付き合いになる。

50年ほど前に彼が真央霊術院に入学したから少し疎遠になってはいたけど、暇があれば来てくれるかもしれない程度の友人関係ではある。

死神の仕事がどのくらい忙しいのかなんて想像もつかないけど、疲れたような表情をしているように見えるから、かなり大変なんだろう。

まあ、僕だつて負けず劣らず働いてはいる。物を探すのが昔から得意だったものだから、今ではもの探しを生業にして飯を食べている。

鮮花も近くのお店で働いてくれている。

毎度のことながら、勿体無いくらい良くできた妹だ。

「それで？今日は遊びに来てくれたのかい？」

「まあな。それと聞きたいこともあつてな」

「聞きたいことつて？」

「お前、穂積織つて人、知ってるか？」

学人の口から出てきたのは、記憶に新しいある人物の名前だった。

穂積織というのは、今の十三番隊副隊長で、先日の一連の騒動の締めくくりを成した人物。

東流魂街に居を構える中流貴族の出身で、浦原さんも一目置くほどの実力者。

——とまあ、調べれば割とあつさり出てくることを挙げたけど、ここから先は浦原さんのお願いで守秘することになっている。

なので残念ながら、上っ面の事だけしか教えてはあげられない。というか正直な話、こんな経歴は今時そうそうにはお目にかかれないしね。

そんなことを考えながら、一言断って席を外した僕は、奥の棚から彼についてまとめた資料のうちの出してもいい部分だけを取り出した。

それなりに評判は良いらしく、月一くらいのペースで依頼があるものだから、埃をかぶってる資料もあるのだけど、彼の資料は真新しいものだ。

「実は彼のことについてはある依頼で調べてある。まあ想像つくレベルでしかないけれどね」

「お前がか？珍しいもんだな」

「鮮花と違って僕は出来ないことがあるのさ。霊力なんてものも絞り

カス程度しかない僕に比べて、実は鮮花は死神の才能があるんじゃないかって思うんだけど、どうかな？」

「お前、俺が下っ端だってわかってて聞いてるだろ」

まさか。最近席官になれたって聞いたけどね。祝いの品はあるけれど、それは嬉々として自分から言ってきた時にとっておくとしてよ。う。

それから数時間ほど散歩したり遊んだり談笑したりして、久々に充実した時間を過ごせた僕らは、また会うことを約束してその場で別れた。

「…雪か」

チラチラと目の前に舞ってきた白い雨を目で追いながら、季節の変化を知った。のんびりとした変化だけど、こういうのが僕の性に合っている。

急ぎすぎても、得はないからね。まったりと過ごせればいい。

だから、こうして感傷に浸れる冬の空は好きだ。

雪の舞う中、家で待ってるだろう鮮花を思い出しながら、家路へと急いだ。

「冬ですねえ」

「コタツはいいのう〜」

襖に畳、少しお高めの液晶テレビ。コタツにみかん。

冬の代名詞がこれでもかといひしめき合う6畳半ほどの小さな部屋。夜一サンは猫の姿のまま、コタツから起用に顔だけ出してテレビを見ながらグータラしていた。

「もう大晦日っスか」

「早いものじゃ。特に今年は藍染のせいで忙しかったからか殊更早く感じたわ」

「そうっスねえ。あ、橙子サンと一心サンから蕎麦貰ったんスけど、夜一サン食べますか？」

「当然じゃ」

はいはい、と言って態々寒気が居座る廊下に出て台所に向かう。今、鉄斎サンは特製ちゃんちゃんこを製作中で、ジン太と雨は二階でグツスリ。年越し前には起こすつもりっスけど。

とりあえずお湯を沸かし始めたところで、蕎麦を茹でるのが早すぎるんじゃないかと思い、冷えたビールを2つ、冷蔵庫から引っ張り出して部屋へと戻った。

夜一サンは気ままに人の姿に戻って、やっぱりコタツに身体を埋めている。

夜一サン、爆笑してるなあ。

「ハハハ、ハツ、流石じゃのう此奴ら。お、ナイスじゃ喜助」

「相変わらず年末はそれ見るんスね。面白いっスけど」

「当たり前じゃ。年末はコレを見なければ終わらん。プツ、アハハハッ!!」

プシュと景気良くビールを開けてぐびぐびと流し込む。

いや、この苦味。クセになるっスね。

「アハハ、まーたこの人タイキックっスか!? うわー、すっかり体重乗ってるじゃないっスか!? アハハハハ!」

「うむ、惚れ惚れするような蹴りじゃのう。是非とも生で見たいものじゃ」

そんなこんなで23時を回り。ジン太と雨、鉄斎サンも集結した手狭な和室に、ちよつと前に出来上がったエビのかき揚げ付きの少し豪華な年越し蕎麦を用意。

ちなみに夜一サンと雨はシトシト派、アタシと鉄斎サンとジン太はサクサク派と、ウチは男女で完全に分かれているんスけど。かき揚げの食べ方。

さて、もうすぐ鐘がなりますね。

「おや、外じゃ雪降ってるみたいっスよ?」

ふと隣の部屋を覗いた時に、窓から見えたのはチラチラと降っている白い雪。道理で寒いわけだ。

わいわいと団欒出来るし、研究資料の管理も楽なので、冬は好きっスよ?アタシは。

「なんや、喜助のトコにでも押しかけたら良かったんちゃうか?」

ハッチのおかげでどんだけ騒いでも分からんとは言え、大音量でテレビ。それと散らばったウノ。

無人倉庫の地下であるここにあるのは、全員分のバイト代やらで買い揃えた暖房器具とコタツ。あとテレビ。みかんは箱買いして溜め込んでる。

ちなみに俺はみかんの皮むいたらすぐに食べる派や。白いの取るの面倒やん。

「馬鹿言うな真子。この人数が入るわけないだろ」

「地下の部屋でも使えばええんちゃう?」

「雰囲気出ねえだろうが。こういうのは雰囲気大事なんだよ」

「拳西こういうの好きやなあ」

数は揃えた訳やけど、ラブはジャンプ、リサはエロ本って…。年末に読むもんちゃうやろ。

ちなみに拳西は蕎麦を打つとる。…なんでそこまでやるんや…?」

「……このみかん、とても甘いデス」

「んー、やはりE〇ILEはいい。優雅で激しいのが素晴らしい」

「ローズの言ってることの意味分かんないや。ねー拳西く。蕎麦まだ

く?」

「うるせえ! 食いたけりや手伝え白!」

ハッチは黙々とみかん食うとるし、さつきまでウノしとったはずのローズと白は今は紅白歌合戦に首ったけ。ひよ里は…。

「ちよ、熱う!? 油飛んできたやないか!」

「バッカお前、野菜の水気残し過ぎだ。拭き取れって言っただろうが」
珍しく自分からやつとる…やと!?

明日猛吹雪ちゃうか? でも手元の携帯の天気予報は曇りになつとる…。

そーいやひよ里のやつ、綺麗に真つ二つなつたんがこの前完治したばかりなんやけど…。病み上がりちやうんか?

…まあええか。なんもかんもひと段落したことやし。

今日のために買い込んだった秘蔵のお酒ちゃんを放出したるか!

「おい真子、なんか酒の匂いするんだが?」

「さつすがラブ。せや、日本酒やら焼酎やらビールやらジュースやら、今日明日のために買い込んだんやで? 酒屋のおっちゃんやと仲ようなつたつて良かったわ」

「なつ、テメエ真子!? 抜け駆けすんじゃねえ!」

「分かつとるがな。さつさと飯作つて来いや。先飲んどくから」

「抜け駆けすんじゃねえつていつただろうが!」

とんでもなく不満な声が、見た目廃工場の住居に響く。

実は地下はかなりアットホームに改造されとったりするんやが。

10人入つても余裕しやくしやくやで。喜助には頭上がらんわ。

「皆サン、落ち着いて下サイ」

「ハッチ! こいつら止めてくれ!」

「ハッチ、お前の好きなの『剣〇』の焼酎入つとるで?」

「拳西サン、ツマミはまだですか?」

「テメエハッチこのやろう!! 簡単に買収されやがった!」

「拳西く! これどないすればええのん!!」

「ああ! ちよつと待てひよ里!」

喧しいやつちやなあ。せやけど、こんな時間も悪うないわ。

藍染のせいやけど、藍染のおかげ…ちゆうことか。

「…外出てくるわ」

「戻って来いよ真子?」

「わーっとるわ」

そう言つてから地上に上がり、外に出る。

…やっぱ寒いな。

「お…雪かいな…」

吹けば飛ぶような粉雪。心まで白く染まるような。そんな感慨が湧く。

でも、なんかもの悲しゆうなるから、冬は嫌いや。

「織さんっ!」

「遅かったな」

「ご、ごめんなさい。隊の人たちから色々言われちゃつて」

何言われたんだ。

耳のところが真っ赤なのは、寒さと他の何かがあるのだろうか。

まあ、折角の年末だ。まったりした時間を過ごすのも、悪くはないのかもしれない。

「それにしても、もう夜の11時だぞ?家にいた方が良いんじゃないか?」

「何言ってるんですか。丁度お寺も近いことですし、生で除夜の鐘の音を聞きましょう!あとついでに叩きましょう!」

「108の煩惱を払うんだっけか?」

煩惱なんてない。煩惱になり得るとしても、それは煩惱というには重すぎる罪だから。

浦原がどこからか持つてきたイヤに上質な着物と、式からの贈り物の赤い革ジャンという出で立ち。

勇音の格好は厚手の赤いマフラーと白い手袋、灰色のセーターの上にベージュのトレンチコートを着て、下はジーパンにブーツと、後に勇音に言われた。死神でも俗世には塗れるものなんだな。

相変わらずの身長差に辟易としながらも、革ジャンのポケットに手を突っ込んだまま、電灯の光だけが照らす道を歩く。

「織さんは分かりませんが、私はほら、煩惱だらけですからね」

「大体みんなそうなんだろうさ。純粹でいられるのもほんの僅かな間だけ。俺なんか、煩惱というにもおっかない罪だらけだぞ」

数える必要なんてない。たった1つの殺人衝動。

それが、たとえ己の内から零れたものでなかったとしても。

それは、俺のやりたい事だ。

「織さん」

「ん…、なんだよ勇音」

唐突な声は、真剣みを多分に含んでいた。

「私は、織さんの隣にいたい。力も何も無いかもしれないし、覚悟だつて無いかもしれないですけど。守れるようになりたいんです」

勇音は見下ろす形でソレをいうのが嫌だったのか、前を向いて目を合わせずにそう言った。

「…『守る』……か」

人が最も強くなれるのはいつだろうか。

怒った時。恐怖した時。憎んだ時。喜んだ時。自覚した時。

——殺したいと思った時。

——守りたいと思った時。

「…好きにしてくれ。誰かに頼むつもりもないし、誰も立てない。俺は後ろにしか進めない人種だ」

「それでも、です」

——困った奴だよ。ホントに。

なんでだろうか。いつから俺は、コイツに勝てないって思うようになったんだろうな。

「あ、着きましたよ織さん」

そんなことを考えてたら、少し人で賑わいかけている寺に着いた。真つ直ぐ境内に入り、手を合わせて何かを願う。

伽藍に留まる願いなどないのに、空っぽのココロを合わせて何かに祈る。

祈り終われば、境内ではこんな時間にぜんざいを配っているらしい。

紙コップに入った甘い香りのぜんざいを受け取った俺たちは、近くの椅子に腰かけた。

「織さんは、何を願ったんです?」

「オマエこそ、何を祈ったんだよ」

「私ですか?」

「そ。まあどうせ、平和でありますようにとか、そんなところだろ?」

「ふふ、まあそんなところですよ」

ふと、鼻の先に冷たい何かが乗った。

「あ……」

勇音が息を漏らす。

——雪だ。

そして同時に、黒い鐘の音が鳴る。重く、長く。伽藍を叩いたような音がする。

一年が過ぎて、一年が始まる。そんな冬の、雪下の夜。

「さて、じゃあ織さん。そろそろ戻りましょうか?」

「…そうだな」

勇音が一足先に立ち上がって、目の前に回り込んだ。

そして、少し屈んで、長い手を差し出す。

「織さん。明けましておめでとうございます。今年も宜しくおねがいしますね」

「…ああ、よろしく。勇音」

果たして祈りは、誰に通じるのだろうか。

空っぽの願いが届く先には、誰がいるのだろうか。

鐘の音は福音のように辺りに降り注ぐ。

勇音の手を取り、引っ張られるように立ち上がった俺たちは、特に急ぐこともなく、雪下の鐘の音の下に、その足跡を残していった。

第0章 プロローグ 『接触覚醒』 ” The r o
o t o f s i n n e r s ”

1

ここはどこだ。オレは誰だ。

最早どうでもいい疑問だった。

オレには、地に足もついていなければ、浮いているという感覚さえない。

何も分からない。

何も無い。

意識も。時の流れも。全てが、消えゆく蠟燭のようで。

霧がかった頭の中、感覚も何も無いというのに、堕ちているという事だけが、分かった。

目を開けて最初に飛び込んだのは、白い天井だった。それは何処にでもありそうで、ここが何処だか分からない。

…まとまらない。自分が何なのか。

ふと手を伸ばした時、何かが視えた。

屍人のように細く、青白い手の中に、不規則に、気持ち悪い線があった。その手が、ひどく脆い気がした。

俺は身体を起こした。

目を覚ましてからどのくらい経ったのか、少しずつ意識がはつきりしてきた。それと同時に、自分が何なのかを思い出してきた。まるで、久しく使っていないなかった機能を稼働させたようだ。

そうしていると、誰かが近くに来たのに気付いた。

俺は思い出すことに没頭していたから分からなかったが、ひどく狼狽していたような気がする。

持っていた荷物を落として、まるで幽霊でも見たような驚き方だったと思う。

恐らくは長らく動作していなかっただろう鼓膜が、音を拾った。

「た、隊長!!織さんが、目を覚ましました!!」

拾った音が脳内に出力された。だけど俺は、それを聞く事は無かった。

だんだんと理解して来た。何処となく他人事のように感じるが、どうやら俺は、眠っていたようだ。

それも、約2年。

身体に僅かに残っている違和感と、記録のような記憶から察するに、何かと戦った事で、致命傷を負い、ギリギリで一命をとりとめたものの、今日この日まで昏睡していたようだ。

シャツ、という小気味良い音と共に、目の前のカーテンが開いた。

「本当に目が覚めたようですね。——穂積^{ほづみ}第十席」

現れたのは、お淑やかという言葉を体現したかのような女性。長い髪を三つ編みにして前に垂らしていた。その姿は、俺が最後に見たその人と思われる記憶と変わらない。

卯ノ花烈。護廷十三隊四番隊長。

うつすらと細められたその眼は、傍目に見れば微笑みを浮かべているようだが、真正面から見れば何故か本能的な恐怖が浮かび上がる。

「……」

言葉が出てこない。舌が鉛になったかのように動かせない。

いや、違う。声が出ないのは、もっと根源的な恐怖が、俺の中を蛇のように這いずり回っているからか。

「声が、出ませんか?」

「……」

俺は卯ノ花隊長から眼を逸らす。

これも、正確には、卯ノ花隊長に視えてしまった線から眼を逸らしたと言うべきか。

なんだ、これは。自分にも相手にも、眼に見える全ての物に線がある。酷く恐ろしく、弱い線。

それが、俺の奥底にある恐怖を引つ張り出す。眼前の人物の圧力などそよ風にも同じだ。何故ならこの恐怖は、もっと本能的で、原初の記憶が始まりだから。

それはまさしく。言いようもない「死」。

「死」とはなんなのだろうか。「死にそうになった」と嘯く奴はたまにいるが、そんなものの比ではない。

仮に、俺がぼんやり覚えているあの時の感覚が「死」であるなら、事実俺は、卯ノ花隊長よりも遥かに大きな恐怖に慄いている。死にかけた事が勲章だと？ふざけるな。あの感覚はまさしく地獄にも等しい苦痛だ。頭がイッチちまつているのか。

先程から視界にチラつく「線」は、まさしくあの時の感覚を、見たくもないのに克明に魅せてくる。

——この眼がいけないのか。

筋力の衰えた腕を持ち上げて、指先を目ん玉のど真ん中に向ける。伸び放題の爪はさぞかし悍ましく、俺の眼を抉り取ることだろう。だがそれでいい。この恐怖が視えてしまうのならば、光など無い方がマシなのだから。

「！何をしているのです!?!」

あと薄皮一枚、と言うところで、強引に腕を引き剥がされた。多分、卯ノ花隊長だろう。…人前でやるのは無理か。

しかし…それもそうか。目の前で自分で自分の眼を潰そうとした訳だからな。混乱してたのか…。

卯ノ花隊長に止められて、幾分か冷静になった。それでも、眼前に走る線には吐き気がする。

「…すいません」

「何があったか、教えてくれますか?」

何があったか、か。正直、口に出すのもイヤだ。だがそれ以上に、この事を理解できる者は恐らく居ないという、根拠の無い確信めいた何か——敢えて言うなら直感——があった。理解出来ないとわかつて

いながら話すなんて事は、意味が無い。

「……………」

「話せないのですか。…分かりました。無理に聞き出したりはしません。しかし、今後あのような事は絶対にしないで下さい」

「分かりました…」

身体の違和感はもう無い。目が覚めてからの数分で適応したのか。だけど、眼だけは。どうやっても馴染めそうに無い。…しかし。

「どうやら俺は、この眼を持って生きていかねばならないらしい——」

目が覚めてから数日経った。その間、何もせずに惰性で生きていた。生きているようで、死んでいた。現実を俯瞰しているみたいだった。そう、他人事とも取れるような感じだ。

そして、この眼が何かが分かかってきた。

ある日、枕元の花瓶に花が添えられていた。綺麗な百合だったが、やはりそれにも黒い線は走っていた。すこし残念ではあったが、いくらか慣れてしまったせいかな、気持ち悪さは軽かった。

ふと、手を伸ばして、その花に触れた。

一瞬、花がバラバラになる幻影が視えた。しかし、それと同時に、本当に花は崩れた。

花が崩れた。…違う。

花が死んだ。…少し違う。

花が殺された。…少し近い。

花を殺した。…これだ。

これは、俺が起こしたことだ。殺すという、ただそれだけ。あの線に触れれば、あらゆるモノを殺せる。命を持たないモノでさえそうだったのだから、恐らくは生きているなら、全てを殺せる眼だ。もし仮に名付けるなら…、「直死の魔眼」とでも呼んでやろう。

これは少なくとも2年前は無かったはずだ。ならばキツカケは、この2年間にあることになる。

勿論、思い当たる事は1つしか無い。

口にするのさえ憚られるソレが俺を変えた。この事は確かだ。

「穂積さん、診察の時間ですよ」

俺の名前を呼んだのは、その手に俺のカルテと思しき書類を携えた女性。顔立ちは端正で中性的で、身長が高く、気弱そうな雰囲気とは裏腹に、強い意志を持った瞳だった。

俺の記憶が正しければ、彼女は四番隊第三席の虎徹勇音だ。高位席官が直々に診察するとは、なんとも変な気分だった。

…身長が高い。随分と体格もいい。別にそういう意味じゃない。

どうやら俺は目が覚めて以来、欲求というものが死にかけているらしい。それは決して三大欲求に留まらず、眼を潰しかけたことに現れる「生」への欲求も薄くなっている。俺は殺したつもりは無いのだが。

ぼんやりと診察の様子を見ていた。焦点を合わせなければあの線は現れないらしい。だが、いつもこんな視界だったら、顔の判別がつかなくなってしまう。誰かこの眼を抑えこめるアイテムを使ってくれないだろうか。

…今度技術開発局に足を運んでみよう。確か、涅マユリだったか。あそこの隊長は。……やっぱやめところ。

とは言え……当然、しばらくはこんな感じで俯瞰して過ごすのだろう。

「はい、お疲れ様です。明日明後日には退院出来そうですね」

「そうですか。ありがとうございます」

「どういたしました。では、お大事にして下さい」

失礼しました、と一礼して去っていく虎徹三席。

1人になった俺は、相変わらず、心の中はがらんどろ。虚無が、俺を操っていた。

しばらく経たないうちに、また別の人が訪ねてきた。

「やあ、失礼するよ」

いかにも優男らしい顔と雰囲気。間違えようがない。

「…浮竹隊長」

「本当に目が覚めたのか。良かった」

俺は第十席という肩書きを持っているが、それは各隊で1人ずついるわけで。当の俺は、十三番隊の第十席だ。それで、目の前のこの人はその十三番隊の隊長である浮竹十四郎。つまり、俺の上司にあたる。病弱で、隊首会の時以外ではあまり外に出ないはずなんだが…。

もしかしくなくても、俺を見に来たって事だろう。十席などという、末席も末席の奴に見舞いとは、なんとも優しい隊長だ。

「2年も眼を覚まさなかつたんだ。結構心配したぞ、穂積」
「そうですか…」

俺は、どちらかと言えば古参と言われるほどには死神をやっているつもりだ。流石に隊長程ではないが、同期に海燕がいるくらいだ。年数にして100年と言ったところか。もつとも、海燕はそこから6年で十三番隊の副隊長になり、対する俺は変わらず下っ端だ。

そんな俺の事も覚えていてくれたのだから、やはりいい隊長なのだろう。

「浮、竹隊長…」

「ん？どうした、何か欲しいものでもあるのか？何でも言ってくれ！」
「海燕や、他のやつらは、どう、なってますか……」

その瞬間、浮竹隊長の顔が曇った。俺にとって、良い知らせではないのは確かだ。

「…海燕は、死んだよ。奥さんも。君が昏睡に陥ってから3ヶ月後の事だ」

思わず絶句した。あれだけ生き生きとしていた奴が。妻の都さんまでもが。十三番隊で、まるで太陽みたいなやつだったはずだ。

俺が昏睡してそう時間が経っていない。思い込みかも知れないが、悪意というか、誰かが裏で糸を引いているようにも感じた。

まあ所詮、直感の域を出ないのだが。

「虚に殺された。俺も信じられないが、朽木がそう言っていた。真面目なやつだ。信憑性は高い」

「……………そう、ですか」

別段ショックかと言われれば、それは最初だけだ。

この眼を手に入れてしまったからだろうか。「死」に対する価値観が、大きくズレた気がする。人にしろ何にしろ、形あるものはいずれ終わりが来る。多分、海燕にとってその時だったというだけの話。

そうでなくても、俺たちは死神などと言う、死と隣り合わせの仕事をやっているのだ。死んで行く奴などごまんという。そいつらに

一々悲しんでいたらキリがない。言い方は悪いかも知れないが、死ぬ時は死ぬ。無理矢理生き永らえようとしても、無駄なんだ。

「浮竹隊長、多分、明日明後日には退院出来るらしいので」

「おおーそれは良かったー！祝いの準備をしておこうー！」

随分と楽しそうだ。だが、何か言っていないことがあるのは、何故だかわかった。

それが一体何なのか、今の俺には理解しようがない。

別段、知りたいとも思わなかったから。

退院の時。

心の中は結局、伽藍のままだった。もう、埋まることはないだろう。山田清之介四番隊副隊長から、俺の斬魄刀を受け取った。2年間見ても触れてもいないが、埃の1つも無い。抜いた刀身も、頭上の太陽を受けて、綺麗に反射している。手入れまでしてくれて、本当に言葉もない。

「…お世話に、なりました」

「怪我人の治療は私たちの役割です。お気になさらず」

「ありがとうございます、卯ノ花隊長。さて、私たちはこれで失礼するよ。ほら穂積、行くぞ」

「はあ」

フツと、浮竹隊長の姿が消えた。…瞬歩か。使えないこともないが…、今の俺は一応、2年ぶりに外に出た病み上がりなんだが。正直、身体が動かない。かなり衰弱していたみたいだ。

「……」

「大丈夫ですか？」

相変わらずおっとりとした笑みを浮かべて、卯ノ花隊長は尋ねた。

「2年前と道が変わってなければ…、辿り着けるでしょう。多分」

もう一度頭を下げて、俺は2年ぶりに、暑苦しい太陽の下を歩き出した。

…ふらつとするぞ。ヤバい。これ、辿り着けるか…？

「すまない！久々に君が戻って来るものだから、すこしはしゃい

じやってたみたいだ！本当にすまない！」

「いや、別に、気にして、無いですよ。はあ、はあ」

その後、生まれたての子鹿のように覚束ない足取りで、何とか十三番隊の隊舎まで辿り着いた。日もかなり傾いている。リハビリ必須…か。

それにしても。

「やはり、重苦しいなあ」

「はは、まあそれも仕方のない事だ。あの時から副隊長が空席だからな」

思わず零した独り言に、浮竹隊長が反応した。

欲求が小さくなりすぎているのか、どうにも敬意を払う必要性を感じなくなった。敬語を使わなければと分かっているのに、無意識下で取っ払ってしまう。

「君も、随分と変わったな。2年前は海燕君への対抗心で燃えていたのにな」

「その海燕がいなくなっただんですから、対抗心なんてくだらないものは掻き消えますよ」

「それに、どこか浮世離れしているようだ」

「……」

それに関しては、何も言えない。

俺自身でも、少なからず驚いている。価値観の変化が著しい。

それに、この眼のことはまだ、誰にも話していない。どうにかして折り合いをつけなければならぬ。

「さて、付いてきてくれ。パーティーの用意はできているんだ」

「何もそんな事まで…」

「大事な事だ。ここずっと、うちの隊は沈んでいたからね。君は十席とは言え、海燕君との付き合いから、君を慕う人も少なくないんだ」
「まさか。冗談はやめときましよう隊長」

なるほど、このパーティーを利用して、今の雰囲気を利用してしまうおうという事だろうか。利用されている、という事だが、イヤな感じではない。相手が浮竹隊長だからなのと、俺自身が、この雰囲気を利用

嫌っているからか。

まあいい。イヤなものが無くなってくれるなら、過程はどうであれそっちの方がいい。流石の俺でも、いや、この「眼」でも、雰囲気は殺せないだろうから。

付いて行つた先は、この隊舎でも一番広い部屋だつた。行儀よく並べられた机には、これでもかと言うほど大量の料理が、待ちわびたかのように俺たちを誘っている。

そしてここにいる面子も、ほとんどが俺の顔見知りだ。朽木のやつもいる。…無理してるのがわかる。海燕はお前のそんな顔を望んでなどいないだろうに。

それはそれとして、京楽隊長。なんでアンタまでいるんだよ。

「ん〜。暇だつたからねえ。浮竹も誘つて来たし、何より折角の宴でしよ。楽しまなきやあ」

「まあ、誘つたのは俺だ。気にしないでくれ」

「そう言うのなら」

俺は適当な席に座つた。オードブル形式に置かれた目の前の料理をつまみ、酒をちびちびと飲んでいく。

周りを見ると、既にできあがっているヤツもチラホラと見える。浮竹隊長たちも、昔話に花を咲かせている。

俺は、ふと目に付いた朽木のとなりに移動した。

…苦痛だろうが、話さなければ、溜め込むだけだ。そしてそれは、何よりの毒であり、心を裂くような痛みだろう。

「まだ、引き摺ってるのか」

「穂積殿…。はい、私は、まだあの瞬間が忘れられない」

浮竹隊長から話を聞いた。虚に取り憑かれた海燕は、朽木に殺される事を選んだのだと。ならば、朽木が悔やむことなどないはずなのに。

…いや、これも価値観の違いか。海燕を「殺した」という事そのものが、朽木を縛っている。なにせアイツ、慕われてたからな。自責の念を感じるのもまあ、仕方のないことか。

正直な話、俺からアドバイスできることは無い。価値観は人によつ

て千差万別。講釈たれるのは、押し付けと同じ。

そうでなくても、今の俺は、2年前とは別人みたいなものだ。態度や雰囲気はともかく、「死」に対する考えはまるで違う。

ここで何もしないのは、人でなし、とでも言うのだろうか。

慰めの言葉は口に来ない。

でも、親友だった俺よりも悲しんでくれてるのなら。

「なあ朽木」

「なんでしよう」

「海燕のヤツ、何か言ってたか？死ぬ間際にさ」

「…………『ありがとう』と。たった一言だけ」

「アイツらしいな。でも、それは紛れも無い本心だ。他ならないアイツのな。だから、お前が責められる謂れは無いし、自分で責める事もないんだ」

「…どう言う事でしょうか」

「アイツ、満足したんだよ。虚に喰われて、そりや悔しかったかもしれないけど、自分が自分である内に終われたことに。だから、その言葉は純粋な感謝だ」

「ですが、やはり私がしっかりしていればと…、そう、思ってしまうのです」

「たればの話はしても無駄だ。終わったことを悔やんでも、何も始まらない。なら、進め。過去は過去。それは己が糧として受け入れ、訣別するものだ。なに、輪廻転生が当たり前の世界だ。いずれ似たようなヤツが産まれてくる。そういう意味でも、アイツはお前を見てるんだ。情けない姿、見せられないだろ？」

「己が糧…………。なるほど。——決めました。私は立ち止まらない。海燕殿に胸を張って、『強くなった』と、言えるまでは」

「ああ、いい顔だ——」

眩しかった。思わず目を細めてしまった。この子の伽藍は埋まったのだろうか。現在進行形でがらんどうの俺が、埋める手助けなんて笑えないが。俺のは埋まらない。ピースは既に、どこかへ消えた。

気にしないようにしていた「線」が、妙にくつきり見えた。

それから宴は夜通し続いた。十三番隊はここまで宴好きという訳ではなかったのだろうが、恐らく、今までの雰囲気を変えたいという、無意識の考えで、必要以上に盛り上がったのだろう。

海燕と一番親しかった俺が、ここまで冷めてるのに、周りだけ盛り上がっていて。

「ふう……」

一歩歩き出すのも億劫な足を引きずって、一人部屋を出て、縁側に座り込んだ。

見上げれば、太陽はとつくに沈みきり、霞みがかった月が、辺りを優しく包んでいた。

このまま消えることができたなら、どれほど楽だろうか。そんな事ばかりが頭を過る。

俺という存在が、どこかズレたせいなのか。第三者から見たら分からないが、主観的に見て、あの時俺は、文字通り「異物」だった。

全知でも全能でもない。一般的な人間のはずなのに。あの場では何よりの異物。理由は、分かりきっていた。

「涼しいなあ……」

夜風が撫でて行く。酒が回って、少し火照った頬を冷やしてくれる。

結局当事者を放ったらかして、なし崩し的にお開きになったパーティー。やつぱり皆、はしやいで忘れたかったんだなど、俯瞰した眼で思った。最後まで蚊帳の外だった訳だが、料理だけは頂いた。

とりあえず今は、以前の勘を取り戻すのが先だ。

あるいは、新しい感覚に慣れるべきか。

以前も思ったが、2年前の俺と今の俺は、別人のように様変わりしているらしい。見た目は変わらずに、雰囲気や性格が。けれど俺としては、何より変わったのは記憶。

2年前の記憶が、記憶としてではなく、「記録」として残されているかのように感じている。

だから、今の俺は再現だ。記録という情報を基に今の俺が再現した、かつての俺。しかしそれは、かつての俺とは乖離した、俺。それは生まれて間もないし、何も知らない。あるのは、人と隔絶した思考と価値観。そして、この「眼」のみ。

「2年……か。大分変わったよなあ」

誰もいない空へ、そう語った。



彼は、あそこまで冷めた人間だっただろうか。

俺が2年ぶりに目を覚ました穂積を見て、最初に思ったのはそれだった。

その日の正午過ぎ、たまたま身体の調子も良く、少し外を出歩こうと思っていた時分に、穂積が目を覚ましたという報告を受けた。虎徹四番隊第三席が、わざわざ来てくれた。

海燕副隊長が亡くなってから1年以上経つが、未だ隊の雰囲気は重苦しい。だからだろうか。普段外に出ない俺がこの時ばかりは、丁度いい口実を得て、逃げ出す様にその場を離れたのだった。

何を話そうかと考えているうちに、四番隊の隊舎に辿り着いてしまった。隊の番号上、そこそこ離れた所にあるはずだが、考え事をしていたせいかな、そこまで歩いた気はしなかった。

「やあ、失礼するよ」

「浮竹隊長……」

2年ぶりに見た彼は、一目でわかるほどやつれていた。いやまあ、それは当然のこととして。何より変わったのは、その眼だろうか。

虚無とでも例えるしかないほどの、空^{から}。

眼はこちらを捉えているのに、どこか焦点がズレているような、そんな感じだ。

今すぐにもここから消え去ってしまいそうな、そんな儚さを内包

した雰囲気を纏っていた。

俺は穂積に、心配していたなど、他愛もないことを伝えた。だが彼が聞き返したのは、やはりというか。

「海燕や、他のやつらは、どう、なってますか…」

思わず眉を寄せた。それは今の俺や、十三番隊の人間にとって、一番触れてほしくないところだったから。

しかし、彼は俺たちと同じ十三番隊の人間なわけだし、何より海燕副隊長の親友だ。生憎、伝えないという選択肢は無かった。

「海燕は、死んだよ…。奥さんも。君が昏睡に陥ってから3カ月後の事だ」

その瞬間の穂積の顔は、確かに驚きを表すものだった。だけど奇妙だったのは、その感情が一瞬で消えてなくなった事だった。海燕に対する対抗心を密かに燃やしていた彼なら、動揺したり、食って掛かったりするだろうとは思っていた。

何より、「海燕が死んだ」という事実を、当たり前のように受け入れたことが、俺には異常に感じられた。

親友だった。好敵手だった。それでいて、この反応。

「浮竹隊長、多分、明日明後日には退院できるらしいので」

「おお！それは良かった！祝いの準備をしておこう！」

彼との間に降りた沈黙を振り払いたくて、俺はかなり大げさにそう言っって、足早にこの場を去っていった。

「海燕君…。君の親友はどうやら、俺にも分からない何かが、変わってしまっているようだ……」

周りに誰もいない、夕闇のような帳が降りる中、何処へとなく、ボソリと、口から溢れた。



翌日は案の定、全員二日酔い。

辛うじて生き残っているのは、俺と浮竹隊長くらいなものだった。京楽隊長は、朝から伊勢副隊長に襟を引きずられて連れてかれた。自業自得だな、うん。朽木はどうやら、場の雰囲気酔ってしまっただけ、酒はコップになみなみ残ったままだった。

とは言え、俺もギリギリだから、辛くないわけじゃない。

さて、この辛さ。「殺す」ことは出来ないだろうか。

見れば、胃と、肝臓に線が入っていた。殺せば一体、どうなるのか。僅かに好奇心が湧いた。

ふと、机の引き出しに、かつて流魂街の刃物屋で買った、そこそこの張るナイフがあるのを思い出した。革の鞘までついた、わりかし立派なもの。だけど、今の俺は動くのも億劫で、結局その試みがなされることは無かった。

昨日は帰ってくるなり、パーティーに巻き込まれた為に戻れなかったが、ここは2年前まで過ごしていた、俺の自室だ。

流石に埃被ってる。仕方がない。畳を綺麗にしてくれているだけでも感謝だ。

ふうと、息を吐いて、寝転んだ。そういう風に俺が動いて、舞い上がった埃が、立て付けの悪い襖から漏れる光に照らされ、道を作り上げた。

それと同時に、走馬燈じみた記録が流れる。第三者の眼で俯瞰するような感覚に、雁字搦めにされた。元々の気持ち悪さも相まって、一寸たりとも動けない。

それなのに、差し込む光は、俺に起き上がれと急かしてくる。光の角度を見るに、もう正午近い時間だろうか。

勘弁してくれ。お天道様には、思わずそう言わずにはいられなかった。

隊の皆の二日酔いも、漸く回復の兆しを見せてきた。なだらかな勾配を登るようにゆつくりと。そしてそれは、昨日の朽木と同様にこの隊が抱えている、暗く、重い過去からの脱却でもある。

副隊長の席は未だ空席のまま。いつのまにか、副隊長の仕事になっていた浮竹隊長の看病は、物好きの2人が率先して……というよりも、我先にと競い合ってやっていた。

そんな中、あの俺は、ほんの少し酔っているらしい身体を動かして、ソウル・ソサエティ尸魂界の外れに立つ、とある場所にやって来た。

「元氣そうじゃないか……」

強い風が吹いた。溢れた言葉への返答だろうか。

眼前に立つのは、黒い墓石。それには、「志波家代々之墓」と、随分丁寧に刻まれている。当然、ここには宗教など無いから、法名塔のようなものはない。

しかし、志波家というのは古くからの一族で、数えるのも面倒な程の人が納められているから、墓の少し離れたところに、納められた人の名前が刻まれた石があった。まだ、「志波海燕」とは書いてなかったが。

それにこの墓自体は、志波家の敷地内ではあるが、その中でも一般開放しているところにある。というか、ここが自分らの土地だって忘れてるかも知れない。だから、こうして入って来ても文句は言われない。と言っても、場所が場所だからか、一般の人は誰も踏み入れないが。

ここに来る前に適当に見繕った花を、近くの花瓶に挿して、持ってきた線香を焚く。

立ち上る紫煙は、重い空気の中を羽のように登る。

あんな風に縛られなければ、俺は今頃何をしていただろうか。

言葉の1つも出てこない。下世話な話も、笑い話も思い出も、抱えていたのは前の俺だから。今の俺は、抱えていた全てを失くしている。だから、抱えているフリをしていて。それが、ひどく惨めに見える。

てきた。

腰に挿した斬魄刀を下ろして、どさつと地べたに座り込む。この辺りは案外きちんと掃除されているから、汚れるだとかは、別段気にしなかった。

十三番隊の自室から、適当な湯呑みを3つ選んで持つてきた。それを墓前に2つ、手に1つ持つて、酒を並々と注ぐ。これはそこまで強くないから、今の俺でもいけるはずだ。

ぐい、と湯呑みを傾け、忘れるように流し込んだ。強くないはずの酒で、胃の底が熱くなった。けれど今は、それが心地よかった。

「海燕、俺は一体、どうしたらいいんだろうな……。都さんと2人仲良く逝っちまってさ。ホントにな……」

酒を飲んだからか、ろくに考えもせず、思ったことがつらつらと出てきた。だが、自制は効かない。俺は、何かが乖離した感覚を覚えた。

「この『眼』も、この思考も、何もかもが皆とズレててさ。俺だけ取り残されたんじゃないかって、ふと思つた」

それは、根底に残つたかつての自分。現在に塗りつぶされんとする過去の、最後の吐露。

今、俺は「2人」いる。

「誰か、助けてくれって、今にも叫びたい。でも、手を差し伸べてくれる奴は、果たしているのか？ 考えるのが……。怖くてさ」

俯瞰した俺の視点だと、オレは肩を震わせていた。それは多分、悲哀。友を失い、ともすると自分までも失いかねない男の、固く閉ざされた内側。

オレは答えを得れば消える。そういう運命だと知ってしまったから。

オレは、1つ大きな息を吐いていた。それはまるで、何かを追い出すかのように、深かった。

「海燕……。お前は俺に、その手を……。差し伸べてくれるか——？」

墓ではなく、いつの間にかすり替わっていた曇天を見上げて、そう言った。

そしてその時、俺の視界は元の世界に戻った。

俺は何も考えることなく立ち上がり、手に持っていた、酒を飲み干した自分の湯呑みをそのまま、2つの湯呑みの隣に置いて、その場から踵を返した。

アニキが死んでから、もう2年近くになる。

朽木とか言うちっさい死神が、だらんと力を失ったアニキを背負って訪ねてきたとき、俺は頭が真っ白になっちまった。

そんなオレに、その死神は抱えていたアニキを優しく手渡してきた。

てつきり酔いつぶれているものだと思って受け取ったら、予想以上にズッシリしていて、冷たかった。なのに、何かが欠落してるかみてえに、なんとなく軽く感じた。

オレは思わず、目の前の死神の目を見た。だけど、俯いていて、顔は見えなかった。抱えていたアニキを見て、また目の前を見た。死覇装の黒が、周りの闇と絡まっていた。そのせいかな、オレは、いつの間にかアイツが居なくなってた事には気づかなかった。

『おい、アニキ。一体何が…。——アニキ?』

よく見れば、いつも血色の良かったはずの肌は、色を失っていた。息をしていない。ピクリとも動かない。

まさか——と、思わず疑ってしまった。いや、そもそも疑うべきだったんだ。例え酔っ払っちまって、介抱されてたのだとしても、アニキは死神だから、瀟霊廷内の屋敷に寝かされるはずだ。

なのに、ここに来た。

ならば、自ずと理由は導かれた。知りたくもなかった。

頭で理解した。だけど当然、心は理解しようとしねえ。心の支配下にある感情が、涙を流した。

「——よっと。ありがとよ、ボニーちゃん」

その日から2年近く経った、西流魂街の外れ。オレたちの家とはかなり離れた所。志波家自体は、この土地を所有している自覚がねえから、半ば空き地と化していやがる。けれど、その一角だけは。不自然なくらい綺麗に掃除されている。

オレは愛猪のボニーちゃんを降りて、ここで待つように言った。今日は月一の、——アニキの墓参りの日だった。

アニキの好物のおはぎを手に、姉貴の様子なんかを報告しようと、いつものように向かっていた。

あの日以来、オレは根っからの死神嫌いとして有名だ。目にするのさえ嫌で、見つける度に突っかかりしていた。

そんなオレにとって、滅多に人が立ち寄らないこの場所は、唯一心が安らぐ場所だ。

——なのに。

「なんで死神ゴときがこんなトコに居やがんだよー」

「……誰だよ、オマエ」

こんな時に限って、一番嫌いなヤツ死神が居やがった。

その後、俺は海燕の墓参り——というよりもあそこは志波家全員の墓だけ——を済ませて、そこを離れようと踵を返した。

さつきも言ったが、ここは西流魂街の外れで、滅多に人は立ち寄らない。と言うわけで、誰もいない内に戻ろうとしたのだけれど。

「なんで死神ごとときがこんなトコに居やがんだよー」

「……誰だよ、オマエ」

唐突に絡まれた。

見た目が、いかにも不良ですって奴がやってきた。いや、それだけなら良いんだが、どうにもそいつの目的が、俺とダブってるらしい。手にしていたおはぎを見て、ああ、アイツ海の好物だつけ、と気づいたから。何でもかんでも、食べるのが大好きな奴だったらしいから。

「あゝあゝ! テメエから名乗りやがれゴラ」

「…はあ。オマエ、面倒くさいな。まあいいや。俺は穂積織。で、オマエは？」

「オレあ志波岩鷲、西流魂街一の死神嫌いたあオレの事よ! って聞けえ!!!」

うるさい。こういう犬みたいに吠える奴は、ほつたらかすのが一番つてよく言うが、極論殺した方が早い。そうしないのは、ただそいつを殺す理由がないだけで。

(あれ? 「絡まれた」だけで殺す理由になるか?)

思わず背中ナイフに手を伸ばしかけたが、それを辛うじて押し留めた。押し留めたのは、志波家と事を構えるのが面倒だということ、海燕の墓参りが出来なくなることへの危惧のみという、人間として有り得ない認識だったが、俺は特に何も違和感を感じなかった。

と言うかそれよりも気になった事がある。

今こいつ、「志波」って言ったか?

『志波』…? ああ、オマエ海燕の親戚か何かか?」

「! テメエ、アニキを知ってたんのか」

「そりゃあ、霊術院の同期だしな。酒も飲んでた」

アニキって…。弟いたのか。似てなさすぎるだろ、コレ。一周回って面白いな。そう思っていると、対面の男は、思い出したかの様に言った。

「ん？『穂積』つったか？オイ」

「は？何言ったかと思えば…。馬鹿なのか？……ああそうだよ」

「反射で罵倒すんじゃないやねえ！チツ、じゃあ、テメエがアニキの親友だったっていう…」

「…もし海燕が言ってたなら、多分俺なのかもな」

確信はない。なぜなら、海燕との記憶は全て、記録としてしか認識できないから。第三者としてそれを、映画の様に見るわけだから、実質他人事だ。

目の前で何やら唸っている男が、正直ウザく感じてきた。芯の強さがあるのは分かるが、今の俺にとっては、毛ほどの価値もない。下を向いて唸ってるなら、帰ってしまおう。

「オイ、オマエ面倒くさいから帰るぞ」

一応一言残して行く。どうやら俺もコイツもそこそこの頻度でここに来るらしいから、また会うかも分からない。その時に絡まれたら面倒だ。

俺はそのまま、僅かに回復したなけなしの筋肉を動かして、瞬歩を使う。元々敏捷特化だから、それだけで十分に移動できる。

シュツ、という瞬歩特有の足を蹴る音すら残さず、俺はその場を去った。

「んあ!?アイツどこ行きやがった!!?」

その一瞬後、お間抜けな男の喚き声だけが、山びこのように俺の耳に届いた。

その後、無事瀨霊廷内の隊舎に戻って来た。西流魂街は、元五大貴族の志波家のテリトリーだからだろうけど、死神に対する風当たりが

強い。元々アイツらも死神のはずだが、多分海燕が死んだからだろう。

人の感情は複雑怪奇だ。分かっているけど、止まらない。理性ではなく、本能の領域下だ。故に、制御が効かない。仮に感情を制御できるのなら、ソイツは恐らく、俺以上に空っぽなんだろう。

「ああ、穂積殿。帰って来たのですか」

「朽木か。どうしたんだよ」

建物の縁側で日向ぼっこをしていた俺を見つけた朽木は、すこし言いつらそんな事を言いたいのか、口籠ってしまった。

遠慮されるのは嫌いだ。だけど、親友が死んだショックを引きずっているとわかってはいるらしく、十三番隊の隊士達は皆、話しかけるのを遠慮してる節がある。それに関しては、一々訂正するのも面倒なので、諦めた。

しかし。

実際、当の俺がその事に対し、ショックをほとんど受けていないと知ったら、コイツらはどう思うのだろうか。軽蔑か、畏怖か。どちらにしる悪感情を抱くのは間違いないだろう。しかしそれは、俺にとつては、別にどうでもいい事だ。今の俺は、コイツらとは根本でズレている。だから、いつまでも同じ所には居られないだろう。

まあ、今は余計なことは考えなくていい。波風は立たないに越したことはない。

「それで、何の用だよ」

「はい。…私に、修行をつけて貰えないでしょうか」

「修行？オマエ確か、海燕につけて貰ってたんじゃないか？」

「その通りです。しかし、海燕殿が居なくなると、私はまた、道を見失いそうです…」

「それで、俺を？」

こくこく、朽木は首を縦に振った。コイツの斬魄刀は確か、氷雪系だったか？一回始解を見たけど、普通に刀だったはず。槍使いのアイツは、コイツに何を教えたんだ？

でも、俺もリハビリしなくちゃいけないから、丁度良いのかもしれない

ない。

「浮竹隊長、この事に何か言ってたか？」

「『アイツのリハビリがてら、一緒にやって来い』との事です」

お見通しか。たしかに分かりやすいけれども。人に考えを読まれるのは、苛立たしい。だけど、それが的を射てるのも事実。気は乗れないが、やった方がいいのだろう。

俺は、嫌そうな顔をしながら、腰を上げた。

朽木と修行の約束を交わしてから1週間が経った。隊の雰囲気も、俺が知っているかつてのものに戻りつつある。

そんな中俺は、偶に遊びに来る京楽隊長を伊勢副隊長に引き渡したり、退院後の検診に四番隊に行つて、そこで話しかけて来る三席の人と適当に会話して過ごしたりと、そこそこ怠惰で、そこそこ快適な生活を送っていた。まあ、筋トレくらいはして、腕力や脚力なんかを回復させたりするくらいの事はしていたが。明らかに、側から見ればサボリと言われても仕方ないだろう。

ところで、最近思ったが、書類仕事が多い。はて、一体何故？

「浮竹隊長。ここハンコ」

「ああ。…よいしょ。これでいいか？」

「んー、まあいいか」

ハンコさえ押されてりやどうとでもなる。押し方とか決められてないからな。不文律とか暗黙の了解とか、仮にそういうのがあったとしても、ソレは知らぬ存ぜぬで押し通せる。書いてないからな。

で、俺は思っていた疑問を、浮竹隊長に話してみた。

「なんで俺に書類仕事が回つて来るんです？隊長は兎も角、現在の副隊長は確か、小椿と虎徹妹なんじゃないんですか？」

「ん？ああ、その件か」

コホンと態とらしい咳払いで、重大発表をするような雰囲気を整えてきた。急に隊長の威厳を出して来るな。使い所間違えてるぞ。

「実はな、穂積。お前を、十三番隊の副隊長に推薦しようと思ってるんだ」

「……………重大発表だった。」

「副隊長…ですか」

「ああ。いつまでも空席にするわけにもいかない。それに何より、空席であることがダメなんだ。海燕君のことを思い出してしまうからね」

一理ある。あの2人はあくまでも代行であって、正式なソレではない。実際、腕章は付けていない。しかしまあ、白羽の矢が俺に立つのか。そこは朽木とか、あの2人のどちらかだと思っただが。

「既に隊の皆は賛成しているし、この件は京楽と朽木隊長にも話して、賛同を得ているんだが…」

「ええ…。それもう事後承諾みたいなモンじゃないですか…」

思わず両手を地面に落とした。現世で言う所のorzだ。あるいはOTLでも可。個人的には後者が好み。

まあそんな事は置いて。そこには1つ重大な問題がある。

「というか、1つ、問題が有るんですけど」

「ん？なんだ？」

「今の俺、始解の能力がほとんど使えないんですが」

「……………ほう」

たっぷり停止したな。偶に見るこの人の呆けた顔は、なかなか面白い。

でも、これは事実だ。俺は昨日、久々に斬魄刀を解放した。別に目立つような能力も何もないから、自室でやったのだが、その時に気づいた。

俺の斬魄刀には大まかに言って2つの能力がある。その内の1つが使えなかった。そもそも、大まかに2つと言っても、一方は残滓みたいなモンだ。だから、始解の能力の大半は使えない事になっている。というか、最悪の場合、この「眼」で切ればどうにかなるから、別に危惧してもいない。それに、何となくではあるが原因も察している。

「しかし、君は鬼道が得意だったはずだが…」

「縛道オンリーですが。破道は詠唱破棄で五十番台がいいトコですかね」

「なら問題ない。うん。やってくれるか？」

問題だらけです浮竹隊長。両方とも伊勢副隊長レベルで使えるならまだしも、俺の場合は縛道オンリー。なんなら、鎖条鎖縛でDSPレイ出来るまではある。そんな事はしないけど。破道は詠唱ありで

も七十番台。記録曰く、格好よかったり、オシヤレだった破道は習得してみたいだが。

まあ、結論は。俺に副隊長は向いてないという事を言いたかったんだが。

「いや、だから…」

「やってくれるか？」

「俺の話聞いてました？病気で耳イカれました？」

「やってくれるよな？」

なんだコレ？ガキ以下の茶番じゃないか？いやそれよりも気になるのは。

（なんか段々圧が強くなってないか？まるで別人レベルで…）

そう、さつきまで「隊長の威厳」だった威圧感が、最早物理的な圧力を持ちかけている。正直な話、洒落にならない。というか、この人、こんなヤバい人だったのか？

そんな浮竹隊長にわずかに戦慄しながらも、そろそろ鬱陶しくなってきたので、最終手段を使う事にした。

俺は、浮竹隊長と正座する形で向かい合っていた。その体勢のまま、顔だけ上を向ける。背中に挿したナイフを抜いて、そのまま横一文字に切り払った。

その途端、加速していた重力は霧散し、元の世界が戻ってきた。

「そんなにプレッシャーかけないで下さい。正直、ウザいです」

「ほう。アレをかわすのか。すごいな」

「いやいや。何ですかアレ。病人が出していいレベルの圧じゃないですよ」

あまりに強い圧だから、「殺せた」。物理的な圧力を持ったという事は、すなわち、この世界に形を成したということ。故に、そこに死の線が生まれる。

俺はこの「眼」の事を隠すために、上を向いて悟られないようにした。

とは言え、やってることは明らかに異常だから、誤魔化せたかどうかは分からないけれども。

「まあ、このまま空席だと、いろいろ都合が悪いのは確かですし。本っ当に気乗りしないんですが…、仕方ない。受けます」

「そうか！いやあ、良かった！」

「あんだだけプレッシャー放っておいて何言っつてやがるんですか。あ、でも隊長の看病なんてご免ですからね」

ケロツとそう話す浮竹隊長に、心底嫌そうな顔をして見せてから、承諾の意を示した。

「そういえば、朽木との修行はどうするんだ？」

「はい？いつそ白哉に押し付けたいくらいには面倒だなと」

「彼女にも色々悩みがあるんだ。そう嫌そうな顔をするな」

「誰のせいだと思っつてやがる」

思わず素が出てしまった。いや今更訂正なんてしないけれども。

「というか、この人の狸？狐？ばりの変わり様、ちよつと凄すぎないか？」

南流魂街78地区「戌吊」。ここは確か、朽木や阿散井の出身だったはずだ。「更木」程ではないが、かなり治安が悪い。そこから死神にのし上がるのは、かなり苦労したんだろうなあと、さして興味もないことを考えていた。

俺はそんな所に、朽木との修行ということまで足を運んでいた。折角なので、途中で甘味なんかを買って、ぶらぶら散策も。来週から正式に副隊長となる事になるので、よっぽどの事がないと、外を出歩けなくなるから。

戌吊に近づくと、絡まれる回数も増える。流魂街の地区は、数字が大きいほど治安が悪いようになっていく。自然と出来た区引きだが。しかし、コイツらは所詮、街のゴロツキ程度でしかなく、詠唱破棄の初級縛道で30分は縛れる。そしてそれだけあれば、歩いて逃げるのにも十分だ。

そんなこんなで、みたらし団子を口に含みながら、指定された場所に辿り着いた。

「来てくれましたか、穂積殿」

「そりゃ、約束したからな。団子、食べるか？」

「(ゴ)く：(っ) いえ、今は結構です」

つばを飲み込む音が聞こえた気がしたが、朽木に限ってそんな事は無いだろう。：無いだろう。

さて、じゃあ始めるか。

朽木は斬魄刀を抜き、解号を唱える。

俺は、背中からナイフを抜いた。

穂積殿、いや、もう来週から副隊長になられるから、穂積副隊長か。

あの人は、海燕殿の無二の親友だった方だ。浮竹隊長も兄様も、穂積副隊長は強いという。

私は、穂積副隊長が斬魄刀を抜いた所を、退院してから一回も見た事がない。何度か流魂街に現れた虚を倒す際に同行したが、全て、縛道で縛って、破道で倒していた。それだけで、とてつもない方である事を理解した。一瞬、死神かどうかさえも疑ってしまいうほど、隔絶していた。

私は、そんな穂積副隊長に、修行をつけてくれないかと提案した。心底嫌そうな顔をされたものの、浮竹隊長の言葉のせいもあってか、なんとか了承してくれた。私は、少し安心した。

海燕殿をこの手で殺してから、既に2年近く経っている。にも関わらず、私の手から、赤が消えない。気味が悪くなって、水で何度擦り落としても、気づいた時には染まっている。離れてくれない。それが恐ろしくて、穂積副隊長が戻って来るその日まで、私は空虚な日々を過ごしていた。

しかし、穂積副隊長が私に言った一言で、私の心は救われた。

『だから、その言葉は純粹な感謝だ』

『アイツに情けない姿、見せられないだろ?』

そうか。私は、罪悪感など感じる必要は無かったのだ。この罪悪感
は、ただの自己満足。私はただ、海燕殿の感謝を、受け入れるだけで
良かったのだ——と。

それ以来、私は穂積副隊長に、海燕殿に並ぶほどの敬意を持つよう
になった。死神としての実力も、その心構えも、全てが人と違うのだ
という、畏敬も含めて。

だからこそ、今回の修行は全力だ。浮竹隊長にも、上位席官クラス
と言われた私の力を、試す。

「舞え——『袖白雪』」

私の斬魄刀、『袖白雪』は、氷雪系の斬魄刀。ソウル・ソサエティ尸魂界において最
も美しい斬魄刀と言われているが、それは戦闘において、何の役にも
立たない。私が使いこなせなければ、美しさなどに価値はない。

対面の穂積副隊長は、背中から、ナイフを抜いた。どうやらそれで

戦われるらしく、私は思わず眉を寄せた。しかし、そんな疑問はこの場に不要。それで充分だと言うことか。

私は瞬歩で近づいて斬りかかった。見えているのか、私を視界に捉えてから、余裕で対処された。その後も何か打ち合ったものの、その結果は変わらず。得物ではこちらに有利で、さらにかなり筋力が落ちていないはずなのに、涼しい顔を崩さない。ならばと、私は距離を取り、手を前に突き出す。

「破道の三十三『蒼火墜』！」

蒼炎が放たれる。『蒼火墜』は、三十番台でも特に高い威力を持っている。無防備で受ければ、いくらあの方でも、ただでは済まないはず。そうして、次の動きをじっくり観察していた次の瞬間。

「!？」

「よっ」

いきなり背後に現れた穂積副隊長が、軽い声と共にナイフを振り下ろしていた。咄嗟に瞬歩で、その場を離れる。

見えなかった。瞬きをした次の瞬間には、その姿はかき消えていたのだ。

やはり、強い。

そして私は、海燕殿と編み出した技を使うことを決めた。

斬魄刀を、地面に対して垂直に構える。柄の頭についた純白の布が、円を描いて翻る。

「初の舞——『月白』！」

「！」

穂積副隊長の周囲5メートルほどが、突然凍りついた。それに驚いたように、穂積副隊長は上へと逃れた。

しかし。

「それで逃げたつもりですか！」

『月白』は、指定した領域を凍結した技だ。確かに地面は凍りついた。だが。領域とは、即ち天地だ。

地面から上空へと、円柱状に凍りついていく。

この規模は、あのナイフではどうしようもないはずだ。

「げっ。マジかよ。…【縛道の六十三『鎖条鎖縛』】
「む」

飛来する金の鎖。遠心力により、直進ではなく、大きく回って飛んでくる。あれは、慣れればある程度自由に操作できるらしい。私はギリギリまで引きつけて、それを横つ飛びに避けた。地面に突き刺さった鎖は、かなり深くまで刺さったようだ。そして、その鎖が撓たわんだ。ふと見上げると、鎖を巻き取るかのように、こちらへ突っ込んでくる穂積副隊長の姿。再び距離を取るべく、後方に飛ぶ。近距離では明らかに不利。ならば、固定して、一番の攻撃を叩き込む！

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此れを六つに別つ 【縛道の六十一『六杖光牢』】

「うわ」

気の抜けた声が聞こえてきた。しかし、容赦はしない。眼前の地面四箇所から霊圧を吸収。切っ先を穂積副隊長へ向けた『袖白雪』へと収束する。

「次の舞——『白漣』！」

全てを凍てつかせる、雪崩にも似た霊圧の波が、放たれる。いつそ暴力的とも言えるそれは、まるで全てを飲み込まんとする津波。

私は、勝ったと思った。

だが。穂積副隊長は。

一瞬、目の前を覆う白の中に、恐怖にも似た青を見た。

「甘いぜ、オマエ」

ドオオオン！と。無理矢理に何かを壊したような、ひどい音が響いた。既に青は見えぬ、そこには無傷の穂積副隊長が立っていた。

「な……」

「ま、悪くなかったぜ。動きを止めて大技ってのは、確かに効果的だもんな」

それにしてもだ。白漣を真正面から受けたはずなのに、なぜ無傷なのか。ただのナイフでどうやったのか。畏敬の念が強まり、それと共に、私の中に、この方に対する恐怖が芽生えたのを感じた。

朽木との修行は、その後は特に何かイベントが起きるなんてなく進んだ。そもそも俺とコイツの接点は、海燕だけだ。

それにしても、思った以上に海燕のやつ、しっかり教えてたんだな。『初の舞』と『次の舞』。海燕と共に編み出した、朽木の斬魄刀『袖白雪』の技。

天地を凍らせるとは驚いた。狭い場所でもなかなか有効な攻撃だ。とつさに逃げに入ったが、かなりの勢いで上まで凍って来るものだから、死の線の認識が間に合わなかった。降りてきたところで、縛道で捕まったんだけど。次の舞による雪崩のような質量攻撃は、まあ、真つ二つに断ち切ったわけだが。線が縦に大きく入ってたのは、まあ偶然だろう。

そんな訳で、その日の修行は終わり、その後も定期的に、週に二回ほどのペースで、主に鬼道を主軸にした修行をしている。生憎、俺は縛道を主軸にして使うから、破道はあまり教えられないが。『袖白雪』の技は軒並み大技で、構えからのタメが長い。そこを補う為の鬼道だ。

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空
槍打つ音色が虚城に満ちる 【破道の六十三『雷吼炮』！』
「おお。【縛道の八十一『断空』】」

高位破道もかなり使いこなせるようになったな。後はコレを詠唱破棄で使えれば問題はない。そも、戦闘で詠唱する余裕があるはずが無い。偶々なんか当てにはできない。

「また…。やはり鬼道の才が無いのでしょうか…」
「いやいや。何言ってるんだ」

朽木との修行。その間およそ1ヶ月ほどだが、かなり上達した。流石に、五番隊の雛森とか言う奴には及ばないみたいだが、それは技能面だ。威力の面で言えば、明らかにこちらに軍配があがる。

そもそも、七十番台を詠唱破棄できるのに、なにを謙遜している。既に俺と同じくらいには出来ている。

朽木の鬼道で特に秀でている点は、鬼道の多重起動だ。もともと二重詠唱を得意としていたらしいが、高位鬼道の詠唱破棄を修得した事で、詠唱に回していた集中力を、別の鬼道の発動に回せるようになった形だろう。

「そもそも『断空』は八十九番以下の鬼道を防ぐものだから。通らなくて当然だと思っただけだ」

「はあ」

「というか、縛道は最悪『断空』だけ修得すればいいと思ってるからな俺」

『断空』は込める霊圧を強めれば、物理的干渉も弾く特性を持つ。ただ、その辺りの調整を失敗すると、今度は逆に鬼道を弾けなくなる為、そのコントロールは感覚で覚えるしかないが。兎に角、かなり便利な鬼道なのは確かだ。

あと、個人的には『鎖条鎖縛』も有るといい。習熟すると、鎖の部分を操れるようになる。それを鎖鎌の要領で飛ばしたり、ぶつけたりと、かなり使い勝手が良くなる。

「それじゃ、今日はここまでで良いか。しっかり治しとけよ」

「はい、ありがとうございます。穂積殿」

時間超過に良いことはない。それは瀟靈廷にいたところで変わらない。事務作業は定時まで。残業代が出るはずもない。そしてそれは、おそらく現世でも変わらぬ理だろう。だから俺は、始める時間はルーズだが、終わる時間にはシビアだ。

俺はいつものようにナイフを腰にしまい、残った事務整理に辟易としながらも、仕方なく、隊舎へ足を向けた。

「さて、さっさと片付けなきゃな」

最近、足腰のリハビリ中に偶然会得した歩法を使って移動する。

昔、死神がまだ組織として存在しなかった頃に、こんな事をする奴らがいたらしい。それは、武の達人とか、仙人とか、そういう人外の領域に足を踏み入れた者が使っていたと、歴史の本に書いてあった。それを、霊圧を使って、誰でも出来るようにしたものを、『瞬歩』という。

俺が今使っているのは、その源流。

一部の者には、『縮地』と呼ばれる、神速の歩法だ。

「今日も待ってるんですか？初々しいですね」

「そつ、そんなんじゃないですつて！」

「ええ。じゃあその手に持つてるのは何ですか？」

「これは…。その、喉乾かしてるだろう…つて…」

「それも完全に奥さんのソレですつて副隊長」

「お、奥さん…!!?!」

な、何を言ってるんですか!?!わ、私は彼と…そんな関係じゃ…。

火照ってる顔をパタパタと仰いで、私は隊舎の正門前でブーツと突っ立っていた。夕日も沈みかけて、瀟々たる白が、ほんのり赤く染まる。もしかして、私の顔もあんな感じなのかな…と思うと、また赤くなりそうになった。

「はあ…」

腕に巻いた『四』の腕章を動かして、良い感じのところに戻す。その動作をする自分を見て、ふと、思い出すものがあった。

この『四』の腕章は、山田清之介元副隊長殿から頂いたものだ。実家のご都合で、退職を余儀なくされたあの方の代わりに白羽の矢が立ったのは、私。正直、私では荷が重い。だって、隊首会とかの時の他の副隊長の目が怖い。たしかに、頼りなさそうなのはわかるけど…。けど、そんな私と同じタイミングで副隊長に就いたはずなのに、その場の雰囲気はまるで気にしない人もいた。

——十三番隊副隊長、穂積織。

もともと、2年間ほど昏睡に陥っていて、目覚めた二週間後くらい

に突然副隊長に名を連ねていた。

副隊長になる為にはいくつか方法があるけど、大体は隊長のソレと同じ。

試験に合格する。

隊長格3名以上からの推薦。

十一番隊のみは例外らしいが、基本はこれだ。私は前者のパターン。座学はともかく、実戦はいっぱい。解放して辛うじて勝てたくらいだ。

一方で彼は、後者。八番隊の京楽春水隊長と、六番隊の朽木白哉隊長。そして、十三番隊の浮竹十四郎隊長。隊長の中でも特に強いとされる実力者だ。そんな人たちに推薦されるって…と、雲の上の感じだったけれども、話してみると案外良い人だったから、殊の外安心した。特にあの状況だったからか、思わず抱きつきかけたほどだが、すんでのところ踏みとどまれた。

そしてその後、無事試験終了を告げられ、その場で合格を言い渡された。

私と織さん（好きに呼んで良いと言われた）は、それぞれの隊長から、副隊長の証の腕章を受け取った。それは、ずっしりと重くて。清之介さんたちの思いが込められてるのが分かって、思わず肩が縮こまってしまった。

そこで、チラッと織さんの方を見ると。

まるで別人のような眼差しで、その腕章を、懐かしいものを見るような眼で見っていたのが、ひどく儂げで、印象的だった。

第1章 尸魂界編 『進退対極』 ” The oppo
site side”

10

十三番隊の縁側。浮竹隊長お気に入り、日がよく当たる場所。朽木は昨日、現世に出た。初の駐在任務だからか、少しばかり緊張をしていたようだが、今のアイツならば、何の問題も無い。

たとえ死神の力が使えなくなろうとも、鬼道だけで十分対処できる。破道を八十番台まで扱えるのだから、並の虚ならばイチコロだ。…さて、うるさいのが来そうだから、ここはお暇してしまおう。

俺は縁側の柔らかい日の光を名残惜しむ。一步外に出れば、この光は、暑さしかもたらさないものになってしまうが、うん。それも仕方ない事だろう。

そしてその後、風に揺られた葉だけを残して、その場を離れた。

「隊長ー！薬の時間ですよー！」

「隊長！『俺が』持ってきた薬です！ぜひ飲んでください！」

「あんたねえ！それは『私が』持ってきた薬でしょ！」

「ははは！まあどっちでも良いじゃないか！」

「隊長は黙っててください!!」

「あ……ああ」

屋根を飛び越え、瀨霊廷内を隈なく走り抜ける道に、足をつける。目を覚まして、自分を自覚して。それからおよそ50年は経つただろうか。その間、一回も始解をしていない。そのせい、少々拗ねてしまっ、何故か現世のアイスをねだってくる。が、そもそも精神世界に物質を持って行くのはかなり無理があるから、それについては我慢

してもらってる次第だ。

浦原喜助の『転心体』があれば良いのだが、三年前に現世に行った時は、その事を忘れてしまっていた。

俺と浦原は、顔見知り程度の知り合いだ。もつとも、互いに踏み込んだ関係になろうとはしなかった。あの時の俺もアイツも、最終的には自分の心に境界を引いて、踏み込ませない人間だったから。

そんな関係だったからか、101年前に四楓院夜一や、当時の大鬼道長の握菱鉄裁が、浦原喜助とともに現世に亡命した時も、いまと同じで、大した感慨は無かった。かなり驚きはしたけれども、周り比べればかなり冷静だったはずだ。

思えば、俺がズレているのは、元からだったのかも知れない。

他人には分からない。それが自分にも分からない。そういう状況が、俺が「死」を認識したことで、変わり始めた。

自覚があつてこういう振る舞いをするのなら、それはなおさら重症なのかも知れない。けれど、俺がここにいるためには、以前の俺のあり方に、則るしかなかった。

虚無。空。

それは、俺という存在の代名詞であり、俺の中の空洞そのもの。俺という存在の根底を成す起源。

ここにいながら、ここにいない。さながら、回遊魚のような。

尤も、それを知ったところで、俺が変わる事はない。

だから、今日もいつもの様に、瀟靈廷の外へ向かう。その先は、南流魂街78地区「戌吊」。つまるところ、いつもの修行場だ。

南へつながる門は「朱匣門しゅわいもん」と言うが、そこは案外死神なら簡単に出来る事が出来る。俺の場合、すっかり顔見知りになったのと、腕の腕章の存在が大きいのか。取り敢えず、その門番に手を上げて挨拶をする。見た目のデカさに似合わず、割と気がいいやつだから、笑顔で返してくる。比鉦入道ひしにゅうどうと言う名の死神だ。

門を出れば、かなり大きい道が遠くまで続いている。目を凝らせば、その果ては僅かに丸みを帯びている。俺はその道を、瞬歩と縮地を織り交せて、飛び出した。

「おおーい穂積さん。土産物の礼だあ…って、あれえ。居なくなっちゃまったよ。迅いなあ」

現世に来たのは…初めてか。

それにしても、随分とごちゃごちゃしている。色もたくさんで、目が痛い。

私は今、周りより少し高い柱の一つに立っている。雲のない月明かりのお陰で、暗くはあるがよく見渡せる。今のところ、虚の気配は無いが、油断は出来ない。斬魄刀に手をかける。いつでも抜けるように。

ふと、少し離れた所に現れる気配があった。

跳ぶ。途端、弾けるように身体が動く。瞬歩というのは、使えるとかなり便利なものだ。目的地まで早く着くことができる。

降り立ったそこには、目測で5メートル程の虚がいた。

誰の目にも留まらないから、光による影はあっても、それは認識出来ない。現世の法則に縛られない。ある意味の自由。しかし、秩序なき自由は、いずれ破綻する。故に、そこに秩序を与える。それこそが、私たち死神の意義。

尤も、そんな堅苦しい束縛には、海燕殿も、穂積殿も、縛られはしないのだろう。隊長たちも含めて、彼らは自分で定めたルールに従う。一見、奔放に振舞っているようで、それは彼らの秩序の枠の中だ。私は、そういう風に在りたいと願った。他人から与えられるルールでなく、自身の心に従ったルールを立てたい。

その為にも、まずは強くなる。穂積殿からは、「何か違う」と言われたが、それが私が思う最適解だった。

しゅるりと、斬魄刀を抜く。

「はああああー！」

縦に真っ二つ。それは竹を割るように。剣術は、霊術院で習ったも

のから変わらない。非力な私は、剣だけで戦うには不向き。しかし、この程度の虚ならば、何も問題は無い。

ピントがボケるように、虚の存在は希薄になり、消える。

刀を鞘に納め、また高いところへ登った。再びの監視。空座町というこの町は、かなり土地に溜まっている霊力が大きい。重霊地と言うものか。

昼間に見た、橙の髪の毛の男など、妙に霊力の高い人間が多い。潜在的に霊力が高い人間がちらほらと見受けられる。

「あの男……。かなり似ていた……」

思い出すのは、先ほどの橙の頭髪。それに連鎖して、黒色が被る。

50年経っても、あの記憶だけは朧げにはならない。

「海燕殿……」

そう呟くと、今の私の根底にある記憶に、触れた気がした。

相変わらず、朽木の周りは賑やかになる。

現世で何かやらかしたらしい朽木は、途轍もなく不満そうな赤髪の男と、クールぶってるが内心申し訳なきでいっばいだろう朽木隊長の手で連行されてきた。引きずられる朽木も、その目その身体に力は無く、諦観漂う感じだ。

見たところ、死神の力の譲渡だろうか。感じられる朽木の霊圧が大きく減衰している。しかしまあ、それほど危機に陥る状況が、今の朽木にあるのか？たしかに、剣術は強くないし、俺も鬼道しか教えないが、それでも並みの副隊長格くらいの実力はあると見てもいい。やむを得ない事情と言うのがあったのか。

どちらにしろ、俺が考えたところで何かが分かるわけでは無い。人は決して分かり合えないのだから。

「なあ朽木。何があったんだ？」

「……穂積…殿」

「あー、こりや無理か。しかし、見事に持つてかれてるな」

「兄もそう思うか」

「ああ。つてか、そんな怖い顔するなよ」

「生まれつきだ。しかし、ルキアが能力譲渡を決断する男…か」

ふむ、と顎に手を当てて考える白哉。どうやら、白哉は既に接触済みらしい。今のところ、さして興味が湧いたわけでは無いが、聞いていていいと思った。

「どんな奴だったんだ？」

「ああ、まだ力に振り回されているだけの男だ。気にすることはないだろう」

「ふーん、まだ、ね」

仮にも朽木の力と意志を、一部とはいえ受け取った男。ならば、追いかけてくる可能性は高い。一介の死神が穿界門を開けるとは思えないが。

と、そこで思い出した。浦原喜助という、ジョーカーの存在。

至上の頭脳を持って産まれた変人。闘いも強いことから、その性格以外には非の打ち所はない。性格以外には。

大事な事だから二度言ったが、世の中の人間はそんなもの。「天才と狂人は紙一重」とはよく言ったものだ。だが実際、紙一重なのでは無く、同一存在なのは浦原を見ていればよく分かる。表裏一体。天才の中には狂人が住むという事だ。

隔絶した才能がもたらす孤独。浦原が、それとどう付き合っているのかには、全く興味は湧かない。だけど、ある事は確かだ。そしてそれは、恐らく俺の持つソレと似たものだろう。

「ソイツは、来ると思うか？」

「来なければ、それまでの男だったという事だ」

「はは、まるで来るのを期待してるみたいだな」

照れ隠しなのか、朽木隊長：いや、白哉は何も言わない。なんやかんやで真性のシスコンであるコイツの事だ。法を守るべき朽木家の立場と、自身の心情を天秤にかけて結果の行動のはず。だから、俺がそこにとやかく言うような事はないし、第一、権利なんてものも無かった。

「恋次、牢に繋いでおけ」

「は、はい！」

隣の阿散井六番隊副隊長は、少々緊張した声で、にしては悲しげな顔でそう答え、何故かまた気絶した朽木を連れてどこかへ消えた。

『ルキ、アッ』

くそ、また思い出しちゃった。肩をバツサリ切り裂かれて、辺りに赤が広がる。雨に打たれて、命が流れて冷えていく俺の身体が、さらに冷やされる。心地良ささえ抱くその感覚に、思わず身を委ねそうになる。

「ただ、それは許されねえ。目の前で、俺が護りたいと思ったものを奪われた。俺のもので訳でもねえし、大して親しくもなかったが、それでも、俺に力を与えてくれた恩人だ。これで助けなきや、俺は親から貰ったこの名前に嘘をつく事になる。」

「たえあの結果が必然だったとしても、俺は全力で抗ってみせる。」

「黒崎サーン、準備はいいッスか？」

「ああ、いつでもいいぜ」

俺は眼を開けて、眼前の敵に集中する。手に持つ斬魄刀の重みを握りしめ、改めて目標を確認する。むき出しの刃に、俺の意志が乗り、そしてそれは、全てを斬り裂くものとなる。

「引けば老いるぞ、臆せば死ぬぞ！」

「叫べ！我が名は——」

『斬月!!』

あの日手にした俺の斬魄刀。それは、俺の意志と俺の魂の発露。浦原さん曰く、斬魄刀とはそういうものを写し取ったものらしい。詳しいことは知らないが、つまり、このデカイ出刃包丁みたいな刀が、俺の魂の具現という事だ。

ギチギチと、俺の霊圧を喰らわせる。まだ拙いが、これが俺にできる唯一の技。

「まずは、上段に構えて。」

「月牙——」

「そして、振り下ろす——！」

「——天衝!!」

三日月にも似た青い斬撃が、猛スピードで飛んでいく。そしてそれは、目の前の浦原さんへと。

「大したモンですよ黒崎サーン。ここまでは」

「バギィと、軋み、壊れるような音が聞こえた気がした。」

「ですが、まだ甘いッスね」

それは、杖の一振り、俺の月牙が掻き消された音だった。しかし、そんな事で驚いてたら始まらないのは、ここ数日の特訓で理解した事だ。紛れも無い変人なのは確かだが、それ以上に、この人は強い。

油断はしない。俺は気を引き締めて、教わった歩法で斬りかかる。

「もう使いこなしてるツスね。いや、流石ツス♪」

「飄々としてんじゃ、ねえ！」

くっそ、ムカつく。強いのは分かるが、この性格はどうにかなんねーのかゲタ帽子。

ギインという音は、俺の斬月と浦原さんの杖が斬りむすんでいることを意味する。今更だが、見た目的に杖の方が折れないのか？いや、アレが変な杖だって事は分かかってんだが…。

「余計な事、考えない方がいいツスよ！」

「ぬおっ!!」

くそっ、油断しねえってさつき決めたじゃねえか！

俺はそのまま、このわけ分かんねえ空間に点在する大岩に激突した。しかし、その痛みなんざ、慣れちまえはどうという事はない。

まだまだ。もっと強く。もっと。じゃなけりや、護りたいモンも護れねえ！

再び、斬月が俺の霊圧を求める。望むがままに、明け渡す。

「――月牙天衝!!」

空間を、青い光が染めた。

ドゴオオン。

たった一発の、大きな花火。その打ち上げ音が、耳を叩いた。

俺は今、十三番隊隊舎の執務室で、書類整理をしていた。門とも離れているし、なにより、そんな花火を打ち上げるような装置も無い。聞こえた気がした。それだけだった。

首をひねるが、当然何も無いわけだから、俺はまた目の前の書類に目を通す。浮竹隊長が体調を崩し気味なので、かなりたまっている。さっさと処理しないと、比喻抜きで潰されてしまいそうだった。

そういう訳で、黙々と。部屋には、ペラ、ペラと紙をめくる音だけが残っていた。

その数瞬後。再び轟音が鳴った。思わず俺は外を見た。

それは、文字通りなにかがぶつかった音。かなり大きな規模の何か、巨大なエネルギーを持って激突したものだっただけ。

外に出て探せば、西の方が光っていた。屋根に登ると、確かに。何かがあるのが視認できた。

瀨霊廷の空には、一見何もない。開けっぴろげの大空が広がっている。しかし実のところ、そこには一つ、不可視の膜がある。遮魂膜と呼ばれるそれは、外敵の侵入を防ぐ役割を持つ。もちろん、所詮は「膜」だから、そんなに頑丈な訳ではないが、それでも少なからず、瀨霊廷に安寧をもたらしてきたものでもある。

それが今、俺の目の前で、破られようとしていた。

轟音はしばらく続き、そしてその後。弾けるような音とともに、飛来した弾丸は四散した。

あら。膜の方が強かったみたいだな。

「ちよ、あれ見ました!?!穂積副隊長!」

「見てる見てる」

「今まで遮魂膜があんななつたの見たことないですって!」

「ちよつと落ち着けよ。虎徹、お前案外ああいうの好きなのか?」

隣で煩く喚く虎徹清音をなんとか鎮め、どうせこの後やって来るだ

ろう地獄蝶の連絡を待つ事になる。

「花鶴射法・継の口上！」

俺の目の前で、岩鷲が巻物を広げる。人が入れるくらいの大砲の弾に詰め込まれ、ヘンテコな鬼道で打ち上げられてる最中なんだが、この弾、透明なんだよ。そのおかげで吹っ飛んでく景色が目刺さるんだよ。

岩鷲がなんか唱えてるが、こっちも心の準備ってやつがあるんだ。つてオイ、チャド！分かってるから静かにしろつて！井上はくつついて来るな！ちよつ、助けてくれ石田！

「なんだ黒崎、随分慌てるじゃないか」

「そういうお前が一番ブルってんじゃないか!?そこでクールぶるなよ!?!」

頼りになる石田の像は儂くも崩れ去った。上っ面は冷静だが、実際は冷や汗がダラダラと流れてるのが遠目でもわかるぞコイツ。いかにも滅却師って格好で来てるのに、その様子だと色々と台無しじゃねーか？

「ぬお!?!」

「どうした!?!」

「ああくそ！遮魂膜だ！」

「遮魂膜?」

んだそりゃ? 瀧霊廷にはそんな膜があるのか? 膜なら突っ込めるだろ?

「こいつあ霊体の侵入を遮断するんだよ! 今の状態じゃあぶち壊すのはかなり無理がある!」

「じゃあどうするってんだ!?!」

「その為に口上唱えてたんじゃねえか! 手前らちつとは静かにできねえのか! スピードが乗らねえから突っ込めなかつたじゃねえか!」

「岩鷲、一護。2人とも落ち着け」

「そうだよ黒崎くん！落ち着いて！」

いや、なんでお前らに言われてんだ？むしろお前らも嬉々として騒いでた側だろう？

ピシ！

ん？ピシ？

「オイ岩鷲。…もしかして」

「…そのもしかしてかもしれねえ」

何…だと…。まさか割れたりしねえだろうな!?そうなたらお終いだぞ！

「岩鷲！」

「無理だ！この装置には修復機能はない！」

ピシピシ！……あ。ちよ。

「チャド。井上。石田」

「どうした一護」

「どうしたの？」

「な…なんだ黒崎」

石田…酔ったか…。いやそういうのじゃなくてだな！

「絶対に、ルキアを助け出すぞ！」

空気を無理やり引き締めようと思って。改めて、俺たちのやるべき事をはっきりさせる。

「ああ」

「もちろんだよ！」

「分かってる、さ…」

そしてその瞬間、俺たちは四散した。俺たちが乗ってきたカプセル——もとい大砲の弾は完全にぶっ壊れ、目の前は真っ白になった。

……石田、大丈夫か…？

「おー、見事に粉々だな」

「花火みたいですね」

「虎徹、呑気過ぎないか？」

「少なくとも見積もつてもあれは旅禍の類なのは間違いない。何が目的かは知らないが、招集はかかるだろう。隊長に。」

「まあ、それまで待つてればいいのか。」

「そう思つて、近くのソファアに寝っ転がる。なかなかスプリングが効いていて寝心地が良いのは、つい最近気づいたことだった。」

「果たしてこの騒動。俺の伽藍を埋めてくれるのだろうか。」

「穂積くん！済まないが隊首会に行つてくる！留守を頼むよ！」

「あ、隊長！私も行きます！」

「へいへい」

「病気の身体に鞭打つてるのだろうか。どうでもいいけど、慌ててそう言った浮竹隊長に、俺は横になったまま手だけを振つて、返事をする。失礼かもしれないが、俺にとってはこの程度で十分だった。」

「虎徹清音は相変わらず、地の果てまでもついていきそうな具合だが、鬱陶しいのがいなくなるなら、喜んで押し付けよう。罪悪感などは、初めからない。あるいは、この眼を持つ者として、それすらも殺してやろう。」

「一度、目を閉じる。身体に、刃物を突き立てる感覚だ。」

「そして、その虚言の痛覚と共に、視界が切り替わる。」

「そうして、目の前に広がる世界。それは、万物の終焉を記す世界。」

「俺は、俯瞰する事で、辛うじて折り合いをつけている。紅い線がそこから中に走つていて、なんとも言えない気持ち悪さが込み上げる。」

「頭の中で、剣をねじ込む感覚。あるいは、過熱する感覚が、はつきりと分かる。そしてそれと共に、さらに多くの線が走る。その線は、モノだけでなく、空中にまで顕れる。空の線は、一体何を殺せるのか。多分俺は、以前にも、似たような好奇心を持った記憶がある。」

「く……」

「視界から紅が消え去る。脳髓を焦がしていた熱は、初めから無かつたように消え去り、現実がそこに座り込む。気付けば、あちらこちら」

で騒ぎの音が聞こえた。旅禍が散らばった事で、そこらの隊士がパニックになったらしい。

ふと、窓の縁に、黒い蝶が止まった。

俺は、何かが始まる気がして。いつもなら、すげなくあしらう上の命令に、従うことにした。

地獄蝶を介して伝えられた命令は単純。そして予想通りでもあった。

『旅禍を見つけ次第、捕縛あるいは打倒せよ』

それもそうだ。旅禍に対して情など不要。彼らは災いをもたらすものだから。しかし、俺にとっては少し違う。

災いは、非日常。そしてそれは、平穩に打たれる終止符。マイナスのイメージが付いて回る。しかしそれは、転ずれば新たな何かが始まるのだ。

俺は、腰のナイフを引き抜いて、手の中で弄んだ。

斬魄刀を腰に挿す。そのまま、隊舎の外へとでた。

蜂の巣を突いたような大騒ぎが、鼓膜を叩く。鬱陶しいとさえ思えるそれをBGMに、呑気に瀰霊廷内を歩き回る。暫くは書類から解放されるだろうという腹積もりだ。こういう面でも、旅禍の来襲はいい文明だ。

ふと、思い至る。旅禍の目的とやらに。このタイミングでやって来たという事は、目的は朽木の救出なのではないか。少なくとも、旅禍と白哉は、面識があつてもいい筈だ。ならば、朽木から力を受け取った男がいる。

興味が湧いた。ただ、それだけ。殺そうとは、まだ思っていない。むしろ、朽木のためを思うなら生かすべきなのだろう。自身の霊圧を、死神として存在しうる限界以上に明け渡したのだ。

しかし、それでも。俺にとって万象は、究極的には殺せるか殺せないかでしかない。そして、少なくとも今まで、殺せない存在と出会った事はない。万物に、終わりだけは共通しているから。

「面白ければ、良いんだけどな」

スツと、腰にナイフを戻した。視界にはいつもの色が浮かぶ。そこには終わりが映らない。みんなは、今という時間にしがみ付いて、生きていくのだ。

「あ」

「ああ？なんだ穂積じゃねえか」

そうしているうちに会ったのは、暇そうに歩き回る坊主頭とおかっぱ頭。

「テメエ今失礼な事考えたろ」

「何言ってるんだ」

「…チツ。いけ好かねえやつだぜ。相変わらず」

「…か、お前ら何してるわけ？」

暇だから。こうして歩いていて、旅禍に出会えば儲けもの。そのくらいだろう。——特に、十一番隊の人間は。

『戦闘専門部隊』とは、こいつらの事だ。

護廷十三隊は十三の隊に分かれているわけだが、それぞれが担う役割というのがある。

例えば、一番隊は全隊統括。

例えば、二番隊は隠密機動の統括を兼任する。

例えば、四番隊は回復・後方支援。

そんな感じで、十一番隊は、先陣を切る役を負う。

まあ、それと言うのも、コイツらの隊長が『剣八』とか言う名を代々名乗っているからだ。今更な話ではあるが。だから必然的に、目の前のハゲを筆頭に、荒くれ者が揃うわけだ。

今代の剣八は、過去に類を見ないほどの力を持つとされる。始解も、卍解も持たずに、その領域に立つのだから、戦闘専門部隊の脳筋ぶりが伺える。隊花に鋸草を掲げるのは、彼らのアイデンティティだ。

「ん？」

なんやかんやで、3人で動くことになっていた。思考の海に潜っていたからか、経緯が記憶にない。そんな事を気にするようなやつでは無いだろうが、個人的に気持ち悪い。モヤモヤする。

「どうした弓親。何か見えるのか？」

「ああ。一角。どうやら向こうからお出ました」

「…へえ。そいつは——」

ツイてるぜ。そう口にした。悪運だけは高い。それが、髪を失った代償か。そんなどうでもいい冗談を、斑目の喧嘩売ってくるような視線と共に流し、綾瀬川の言う方向に目を向ける。

「へえ。随分と面白そうだな」

思わずニヤリと、口角が上がった。無意識に、背中のナイフに手が伸びる。虚との戦いは飽きていた。作業のようなそれは、望むような殺しではない。突き詰めても作業と同じ。人相手にするのは、一味も二味も違う筈だ。

自身が外道でないとは、決して否定しない。そこまで聖人君子じゃないし、そう偽るつもりも無い。

殺気。思わず、「殺したい」と。そんな欲望が滲んだ。

「オイ」

そしてそれは、もう一つの殺気によって、潰された。

正確には、その殺気のせいで、興が削がれた。もう、眼前に立つ旅禍は、「殺す」対象から外された。

だけど。

「ちつ。そろそろウンザリだ。アンタらも邪魔すんのかよ」

「手え出すなよ弓親。穂積もだ。——コイツは俺の獲物だ」

「分かってるよ一角」

俺の返答は無言を以って代えられた。沈黙は是なり。意識したわけでは無いが、相互理解は成立していた。

俺の無言は、驚きに端を発していた。

髪の色こそ違い。声も違い。斬魄刀も違う。だけど。

そいつは、まるで。

(海燕……)

生き写しのような。そんな面影を持つ、橙の髪の死神。出刃包丁と、悪そうな目つきが印象的な、ガキだった。

またかよクソツ！足止めくらいすぎると、処刑の時間に間に合わねえ！

「悪いが時間はかけられねえ。ソツコーで終わらせる！」

「やれるもんならやってみる！」

どうやらこのハゲは一対一タイマンがお望みらしい。ありがた迷惑だ。そいつはつまり、コイツを倒しても後の2人が邪魔するって事だろ。

つーか、斬魄刀と鞘で二刀流の真似事かよ！しかも強えーし！

「へえ。旅禍の割にはやるじゃねえか。テメエ、名前は？」

「人に名乗るなら、まず自分からだろ」

「ふん。俺は斑目一角。あとコイツはハゲじゃねえ。刺ってんだよ！」

「さりげに心読んでんじゃねえ！ったく。…黒崎一護だ」

「一護…か。覚えてたぜ」

「さつさと、忘れる！」

再び拮抗する。斬月とコイツの斬魄刀が切り結び、火花を散らす。

「いいぜえ…お前！楽しくなってきたじゃねえか！」

「くっそ、時間がねえのに！」

「慌てんなよ。急ぐと事を仕損じるぜ？それに、こっからが本番だろ！」

そう言うとき一角は、刀の頭と、鞘の尾を打ち合わせた。そして、霊圧が上昇したのを感じた。

「伸びろ、『鬼灯丸』!!」

クソツタレ！やっぱここからかよ！ああもう！

仕方ねえ。こうなりや——。

「行くぜ。こっからは、手加減なしだ」

「余裕こいてんじゃねえぞ！」

今度は互いに本気で、そこらが抉れるほどの霊圧の渦の中。

俺たちは、再び激突した。

目の前で続けられていた戦闘は、案外呆気なく終わった。オレンジの髪の死神が勝った。斑目は、死んではいけない。しかし、四番隊の詰所で、治療を受けるべき怪我は負っている。途中で綾瀬川はフラくと何処かへ行ったまま。つまり、ここに居るのは俺一人ということになる。

「はあ」

「はあつ、はあつ。…っ、次は、テメエかよ…」

月並みに言っていると、諦めない意思。そんなものが込められた、強い目を見た。種類は違うと思うが、紛れもなくそれは、記録の中の海燕が湛えていたそれに、よく似ていた気がした。

この死神、いや、正式には恐らく『死神代行』と言うべきだろうか。黒崎一護を名乗るこの男は、斬魄刀と言う名の出刃包丁の切っ先を、俺へと向けた。

拙いが、そこそこ形になっている戦闘技術。あえて言うならば、時間が足りなかったと言うところだろう。

俺は、斬魄刀では無く、やはりナイフを向けた。怪訝な目を向けたが、疲弊故か、疑問に抱くこともないようだった。

「なあ」

「……」

「オマエ、何のためにここに来たんだ？」

「…ルキアを、助けるため」

「なぜ」

「俺の大切な、仲間だから」

ラグも無く答えた。少なくともこの男は、ルキアの事を仲間だと思っている。本心から。

荒く動いていた肩は静止し、息も整っている。戦うつもりだが、既にこちらには、戦闘の意思がない。そもそも、殺す気が失せた時点で、コイツは殺さない。

しかし、それを差っ引いても、聞いておきたい事があった。

「どうやって」

「は？」

「だから、方法だよ。既に朽木は極刑——つまるところの死刑が決まっている。死神の力の譲渡は、確かに重罪らしい。わざわざ双極まで持ち出して執行するんだとき。そしてそれは、多分2〜3週間後という予定になってる。すぐに刑が執行されることは無いから、オマエらの存在も含めたイレギュラーが無ければ、この調子で進んでたはずだった」

「それが、どうしたってんだよ」

「分かるだろう？ 刑の執行が早まってるんだ。気持ち悪いくらいにな。俺たちは、中央四十六室を最高意思決定機関として置いている。ま、コイツらの命令に従って、俺たちは任務やら何やらを全部やってる訳だ」

とどのつまり、時間が無い。元々黒崎一護が懸念していたことではあるが、実際はそれに輪をかけて時間が無い。

何故かは知らないが、四十六室は執行する日をどんどん早めている。一刻も早く刑を執行したがつているようにも見えるその行動は、俺から見ればかなりおかしい。尤も、脳筋を含み、この護廷十三隊は四十六室の決定に従うしかないから、疑問は抱いても反抗出来ない。

——だからどうした。そんなもの、俺には何の枷にすらならない。

「それだけじゃない。まずもって、オマエに力が無い。隊士を蹴散らしたくらいで、障害物が無くなったなんて考えられるほど、馬鹿じゃないだろ。力を手にしない限り、オマエは何も出来ない。幽閉されている朽木の下に、辿り着くことも叶わない」

「それでも、俺は行くぜ。何度も言わせんなよ。ルキアは俺の仲間なんだ」

青白い霊圧が、黒崎一護の全身にまとわりつく。へえ、かなりの霊圧だ。それこそ、俺や他の隊長たちとタメ張ることが出来るくらいには。

それが斬魄刀に流れ込み、その密度が上昇して行く。黒崎は不意に、上段に構えた。

「月牙天衝！」

放たれる爆発的な霊圧。斬撃を放ったようで、地面を抉りながら、猛スピードでやって来る。しかし、こういうものは。

——案外、殺し易い。

「直死——」

脳が少しの熱を持った。同時に、視界に、ある概念が顕現する。

俺はナイフを順手で握り、何の構えもなく、線をなぞって横に一閃した。

ナイフの切っ先が、「死」を捉える。

「——!?!」

黒崎の目が驚愕の念に染まる。確かに、さぞ驚く事だろう。さっきの技、かなりの密度で霊圧が固められていた。高い攻撃力を持つのは、一目して明らかだ。

しかし。形を持つ事とは、世界とより強固な繋がりを持つことに等しい。そしてそれは、確固とした存在基盤を築く。故にこそ、そこに死が生まれる。世界に存在すること。形を持つこと。——全ては死につながる。俺の眼は、終わりを手繰り寄せ、それを殺す。

俺は俺以外にこの眼を知っているやつを知らない。俺が誰にも教えていないのだから、当然だろう。だが、もし知っているやつがいたら。『何故、俺はこの眼を持っているのか』と。そう、問いかけてみよう。

「何…だよ…。それ…」

「はあ。ま、今の俺は、オマエを殺したりなんてしないさ。殺す気も失せたしな」

それと同時に、瞬歩で距離を潰し、どてっ腹に蹴りを打ち込む。線の隙間を縫うように放ったから、死にはしない。

「ぐあぁっー！」

黒崎は、身体をくの字に曲げて、背中から壁に突っ込んだ。割と厚めに作られている壁に大穴が開きそうな具合だ。俺は視界を閉じ、

現実を見る
眼を開く。ナイフを腰にしまつて、未だぐつたりしている斑目を肩に

担ぐ。本人が倒れたせいで、自然と封印された斬魄刀を拾い上げた。

「が…っ、逃げ、るのか…？」

「なんだ、戦いたいのか？俺は一向に構わないぜ？ま、オマエじゃ俺には勝てねーけどな」

「んなこと、やって、みなきや、分からないだろ」

「……、あまり調子に乗るなよ。本気で殺すぞ。俺に、殺人をさせてくれるな。自分の目的を履き違えるな。今オマエがやるべきことを、見誤るんじゃない。時間がないとか言つてたのはオマエだろ。得意げに鼻を伸ばすな。イライラするんだよ」

「——っ」

「イライラついでに、もう一つだ。オマエ、今のままじゃ死ぬぞ」

放つのは、殺気では無く、それとよく似た怒気。同じ相手に2度も殺気を抱くなら、そいつは本心から是が非でも殺したい相手になるだろう。だから、オマエを殺したいだなんて、思わせないでほしい。

死神代行・黒崎一護。どこぞのおはぎ好きによく似た、人間の小僧……か。

俺は、去り際に忠告を残し、斑目を四番隊へと運ぶために去った。綾瀬川は霊圧知覚ができるはずだから、勝手しても問題ないはずだ。

「——勿体ないこと、したなあ」

出来れば、1回目。初接触で。1度目の殺気で。

——殺してやりたかった。

瞬歩で四番隊の隊舎へ出向き、出てきた隊士に抱えていたハゲを引き渡した。その隊士は俺の顔を見て、何故か名前を確認してきた。

偽名なんて当然、持ち合わせているはずもなく。未来予知なんて事も出来ないから、この後何が起るかは誰にも分からない。

だが、俺個人に備わった第六感という奴が反応しないあたり、どうとでもなる事なのだろうと、なんとなくアタリをつけた。

遠回しに婉曲した考えが頭をよぎったが、それも数瞬の間。結局俺は名前を名乗った。ただ淡々と。格好つける意味などないわけだから。

「え!?あなたがあの穂積さんですか!」

「ああ。少なくとも、今の瀧霊廷に穂積なんて名乗る奴は、俺しかいないと思うぜ」

「ちよ、ちよつと待っててください!」

「は?おい、ちよつと待てよ」

なぜか噂になっていっているらしい。俺は全く存在しない心当たりを、無駄と分かっているながらも探してしまった。

その隊士はパタパタと、まるでスリツパのような音を立てて、建物の奥に消えた。よく分からないが、このまま待ってればいいのか?ハゲも引き渡したし、俺はやる事もないので、白い壁に寄りかかって空を見る事にした。

「……………空は平和だなあ…………」

流れる雲、飛び回る雀。そして、あらゆる物に光を与える太陽。

それらは、この大騒ぎにあつて、何も変わっていない。あちらこちらから聞こえる悲鳴やら怒声やらが目の中の空を覆っていても、それらはやはりその在り方を損なわない。

果たして俺も、そんな風に居られるのだろうか。どこかの剣豪風に言うならば。

——今という時間を全力で、他ならぬ俺として生きているのか。

所詮俺の観点であるから、誰からの理解も望まない。だけど、この問いを投げかけて、肯定されたら。あるいは、否定されたら。

「織さん」

「ん、虎徹さんか」

そういう風に深く考えていたら、横合いから声を掛けられた。そこまで近づかれても気づかないほど、考え込んでしまっていたらしい。我ながら、らしくないと思う。

しかし。このらしくないとは、どっちの俺のことを指して言っているのか。

「で、何か用か？」

「あ、いや…。少し話でも、と思ひまして…」

「いいぜ。別に。暇してたしな」

そうして、なぜか俺と話をしたいらしい虎徹さんと共に、少し歩く事にした。思いつめ過ぎていて、すこし気分転換でもと思ったから。そういう訳で、のらりくらりと、どこへとなく歩きながら会話していて、ふと、呼び方の話になった。

「織さん、私のこと、まださん付けで呼んでるんですか？」

「なんだよ、じゃあどう呼べばいいんだ？」

「う…。ほ、ほら、名前…：…とか」

「ふーん、名前…：…ねえ」

虎徹さんの下の名前…。確か虎徹清音の姉な訳だし、…：…ってあれ？

「俺、虎徹さんの名前知らないな」

「そ、そんなあ。私の名前は『虎徹勇音』です！い・き・ねですよ！」

「分かったから、押し付けてくるな」

妙なところを強調されて、そして迫ってくるものだから、若干暑苦しい。虎徹さんの身長は何故か俺よりも高いから、上から迫られているわけで。妙な必死さというか、そういうのが感じられた。

「で、俺は結局、なんて呼べばいいんだ？」

「もう…。察してください！」

「さつきからよく叫ぶな…。ま、下の名前で呼べってことだろ」

そう言った瞬間、俯いていた虎徹さんの顔が、ガバツと上がり、まっすぐこつちを向いた。その瞳は、真っ直ぐ俺を射抜いていて。俺は、何か奥底まで見られたような嫌な感じがした。

「さて、と。どうする勇音。戻るか、戻らないか」

「っ、そんなサラツと……。呼び捨てでなんて……。もうちよつと照れて欲しいというか」

「なんだよ、オマエは俺に何をさせたいんだよ」

迫られたと思ったら、急にしおらしくなって。なんというか、忙しい人というのが印象的な態度だ。四番隊の副隊長という、それなりの肩書と責任を背負っているわけだから、やっぱり重たく感じることもあるのだろうか。人は、殺すより救う方が難しい。だから四番隊というのは一番の下っ端のようで、実は一番大変なところだ。

「つまるところ、もう話すこと無いんだろ」

「……………」

「凶星か……。ならば、今度は俺の話に付き合ってもらおうかな」

「織さんの話……ですか」

俺は、俺が内心ですつと考えてきた事を、今打ち明けた。

彼——織さんが話し始めた事は、私にとってはちんぷんかんぷんだった。だけど、織さんがその事について、本気で悩んでいるのが分かったから、簡単に頷くことも、首を振ることも出来なくて。彼が話している間、私はただ相槌を打つだけの人形のようにだった。

「俺は、2年の眠りを経て、目を覚ました時には、自分に違和感を覚えただんだ」

「違和感を……ですか？」

「ああ。自己の二重性とでも言うのか、兎に角、自分が2人いるらしい

んだ」

こう、織さんにしては珍しい、確信を持っていないような曖昧な言い方は、私の興味を引いた。

「俺は、欠けてるんだよ」

眼に諦観を滲ませて、織さんはそう言った。多分それは、私たち四番隊に治せるような、所謂『欠損』ではないはずだ。自分が2人いて、その内側は欠けている。言うまでもなくそれは、精神的な問題である故に、回道ではどうすることもできない。

もし私が、それを埋めるための支えになれたらと、ふと、そんな事を思った。

「俺は、生きてていいのか？過去の俺を見捨てて、今を謳歌しても。それで、みんなは良いのか？俺の事を慕ってくれたり、尊敬したり。でもその対象は、俺であって、俺じゃない。だから、分からないんだよ。俺は、そう振る舞えばいいのか、我を通すのがいいのか。いい加減、騙すのに疲れたのか知らないけど、そう思ったんだよ」

「……」

口を突いて、流れる水のように飛び出してくる言葉は、軽々しく答えられるような内容ではなかった。これは、彼の根底にあるものだ。本来なら誰にも見せられないものだろうに、何がきっかけになったのか、その鍵が、今は開いている。

「だけど、私は答えなくちやいけない。肯定するも、否定するも、私の一存。」

言葉を選ぶなんてなくていい。私は、私の思った事を、徒然に伝えればいいだけだから。

そうして私は、自分の答えを、自分の言葉で、口にした。

「わ…私は、とてもそんな鳥澁がましいことは言えないですけど…」

弱々しい前置き。聞く人によつては、もしかしたら鬱陶しいとさえ感じてしまうこともあるかもしれない。でも、あまりに重たすぎる内容に押し潰されないためには、必要な事だった。

「私は、自分のために生きるべきだと思います」

その一言を言うと、後に続く言葉は、案外スラスラと出てきた。

「織さんは織さんですよ。たとえその中に2人が内包されていたとしても、私にとっての織さんは、今日の前にいるあなた以外の、何者でもありません」

本心。包み隠すことなどない。いや、そうしてはならないのだ。私は無意識下で、そう悟っていた。理性と本心。その二者が、段々と乖離していく感覚を、私はまるで他人事のような視点で感じていた。

「他ならぬあなたの意思で、そう振る舞うと決めたのなら、たとえ行動や言動は違っていても、その意思は織さんです。だから、なんとか…。らしくないですよ。織さん」

そんなに長くないけど、これは私の、ありのままだ。言葉を紡ぐ才能があつたら、もう少しうまい言葉を使えたのだろうか。でも、そんなに婉曲に伝える必要なんてない。私のこの言葉は、ただストレートに、伝わればいいのだから。

「俺が、俺の意思で…」

そして、そんな私の言葉を噛み砕いていた織さんは。一瞬だけだけ、笑っている気がした。

ほとんど戯れだった。俺が尋ねたことは、到底俺以外に起こり得る

事でなく。故に、答えが返ってくるとは、あまり思ってなかった。

「織さんは織さんですよ。私にとつての織さんは、今日の前にいるあなた以外の何者でもありません」

だから、少なからず驚いた。返ってきた答えが、決して曖昧でなかった事に。そしてそれが、肯定である事に。

俺を知る人は皆、俺の事をかつての俺のように扱い、そう接してくれる。もちろん、そうでない人もいるが、ほとんど誤差の範囲だ。だから、俺はそうあるべきだと、無意識下で思い込んでいた。無意識の認識は、理解する事より重い。無意識は魂と直結しているから。

そして、その事を理解していたから、俺はなんの疑問も抱く事はなかった。

それが瓦解したのは、俺が本気で、斬魄刀を理解しようとした時だった。つまり、卍解の会得が切欠だ。

卍解の会得条件は、斬魄刀本体の具象化と屈服。その手段は大抵、向こう側に委ねられているが、俺の場合は少し特別だろう。具象化は兎も角、屈服の方が。屈服とは、則ち打ち負かすこと。戦って勝てという事だ。

俺は数年前に、屈服の条件を、自身の斬魄刀から言い渡された。大層面倒な風であったが、俺は気にしなかった。

『オマエ自身は、「否定」を司る存在だ。生の否定、完全の否定。あらゆる事を否定して、オマエは成り立ってる。だけど、それはやっぱり今のオマエなんだよ。薄々分かっているとと思うが、オマエは2人いる。それは二重人格というよりも、表裏。横で繋がるんじゃない、元々は一つだったものの表と裏だ。だけどそれは、今のオレみたいに、片方で代替が利いちまう。まあ、オレとオマエじゃ、結構違うんだけどな。そこら辺は』

長くて、よく分からない前置き。それを噛み砕いて、理解する間も与えず。目の前の少女は、赤い革ジャンを翻して、コツコツと、俺の方に近づいてくる。

特に緊張はしない。いや、緊張出来なかった。まるで、それが許されないかのように。その概念が、この世界から殺されてしまったかの

ように。

『だから』

その距離は、およそ拳一つ分。元々低い俺の、その肩くらいの身長しかないコイツは、真っ直ぐ俺の目を見て、言った。

『もしオマエが、オレの力を手に入れたらというなら、オレが出す条件は一つだ』

そうして、俺を見上げる瞳が、蒼眼へと、移ろった。その瞬間、俺の中全てに、驚愕と共に、「死」が走った。自分に走る線を軽く、なぞられたように。悪寒など比ではない。それは確実に、俺を蝕んでいた。舌の根も動かずに、まるで人形の様だった。

『訣別しろ。オマエ、言っただろ。「過去は訣別するもの」だって。なら、今度はオマエが訣別してみせろ。——いや、オマエが、過去のオマエを、——殺せ』

目の前の少女は、蒼眼——直死の魔眼を俺に向けて、そう言った。何も手に持っていないはずなのに、目の前にナイフを突きつけられた感覚。臓腑を抉るように放たれる殺気。

しかし俺は、それらに晒されながらも、折れはしなかった。

否定。虚無を埋めるための方法。万物を否定し、それにより生に触れて。果たして俺は満たされるのか。

兎にも角にも、俺に明確に示された、否定対象^{殺人}。全くの他人でなく、むしろそれは、もっとも親しい人で。

でも、その時の俺は多分。

笑ってたんだと思う。

——それが何を意味するのかを、全く理解することなく。

「なーんだ、やっぱ、良いんだな」

俺は、気づかれない程度の殺意を乗せて、言葉と共に空気に乗せた。

「何がですか?」

「いや、何でもない。…ありがとな勇音。全くわかんなかっただろうに、本気で答えるなんてな」

「…ッ!?も、もう!そんな事を急に言わないで下さい!」

勇音は、不意に顔を赤くして目を背けた。まあ、色々あるんだろう

な。

気づけば、かなり時間が経っていた。真昼間だった日は、傾き始めていて。四番隊という事でほとんど出番の無い勇音と、十三番隊という影の薄い部隊である俺は、特に焦るなんて事もなく、またのんびんだらりと、戻っていくことにした。

勇音との会話という、予期しないイベントの後、何日かが過ぎた。特に前線に出る事のない俺は、書類処理もないわけだから、やはり暇を持って余すわけで。

朽木の処刑も、その期日が縮められる事があつた。四十六室は何を考えているのか。まあ、頭が硬いやツラだから、朽木が考えもしないことを考えているのだろう。大方、見せしめだとか、その程度なんだろうけど。

阿散井がやられただとか、更木十一番隊隊長がやられたとか、そういう事が飛び交っている。面白そうだ。

と、例によつて隊舎のソファで寝転がっていると、慌てたように地獄蝶が飛んできた。

「へえ……」

なるほどと。俺は笑つた。この護廷十三隊で、最も腹黒なやつが、殺されたらしい。

藍染惣右介。護廷十三隊五番隊隊長。ぱつと見温厚そうなメガネ。妙に気に入くないやつだ。というか、ぶっちゃけ嫌いだ。胡散臭い。いつも笑つてやがる。

何より不思議なのは、どこにいたかが分からない点だ。声も匂いも姿も、俺の五感は、藍染がそこにいと確かに認識してるのに、それに本来あるべき「線」がない。たまに見かける程度だが、何回やつても同じだった。

一瞬、殺せないのかと思つた。だけど、そんな事はあり得ない。例え最強の死神であっても、虚であっても、その両方であっても。遍く万物には綻びがある。故に、殺せない物はない。

恐らく、俺以外には気づけない。アイツは、別の場所にいる。直死の魔眼は、あらゆる万物の終わりを見る。空間に映るそれは、文字通り空間を殺す。それを知つたのは、昨日の話だったけど。そう言えばその時、くぐもつた声みたいなの、痛みをこらえるような声が聞こえたような気がした。あまりにも小さい声だから、空耳だと思つたが。

さて、件の藍染惣右介は、悠々と、別の場所を歩いていった。俺には見えない。だけど、そこにいる事はわかった。他の空間よりも、線の密度がはるかに濃い故に。人型に集った、線の塊。それが俺の目に映る、藍染惣右介だった。何故それが藍染惣右介だと分かったのか、確固とした理由なんて無い。だけど、そんなもの、今の俺には必要のないものだ。

存在のズレ。認識のズレ。ここまで来ると、これは意図的だ。アイツはわかってて、そう動いている。不穏な気配を感じる。…が、それもまた一興なのかも知れない。

身の回りに起こるイレギュラーは、面白い。この先何が起ころうと、それが俺を満たしてくれるのなら。

バンツと、勢いよく扉が開いた。

「聞いたか、穂積くん」

「藍染隊長が殺されたって話ですか？聞きましたよ」

開口一番、冷や汗を垂らして浮竹隊長はそう口にした。その一件に、周りはないそう驚いている。外面は良かったらしい。浮竹隊長は人を信じやすいから、あまりアテにはならないけども。

「で、それがどうかしたんですか？」

「随分とドライだな…」

「まあ、俺、嫌いなんですよね。藍染隊長のこと」

そうなのか？と、意外そうな目で見てくる。人当たりのいい八方美人な性格だったからか、「藍染が嫌われる」という事が考えられないらしい。

「そういえば、藍染隊長って、どんなにして戦うんです？」

「ん？ああ、彼の斬魄刀の名は確か、『鏡花水月』。流水系の斬魄刀で、水の乱反射で敵を惑わせて、同士討ちをさせるらしい。対象の指定ができないから、味方まで巻き込むかもと言って、実演までして懇切丁寧に説明してくれたよ」

「ふーん……」

鏡花水月。その意は確か、「目に見えていながら、手に取る事ができないもの」。有り体に言えば、精巧な幻。斬魄刀の名前と、斬魄刀の能

力は、必ずとは言えないまでも、少なからず関連がある。そう考えると、水で幻惑するという力は、決して強い違和感を覚えない。ただ、俺の直感が、そうでないと訴える。

元々、理論より感覚派な俺は、その直感の方を信じた。

則ち、藍染は黒。あまりにも精巧な幻が作れるのなら、それは現実と変わりない。全ては偽装だろう。

そしてその結果が、俺の目に映る2人の藍染惣右介なのだ。

いつからかは分からないが、護廷十三隊の全てが、あの男の掌の上という訳だ。

「ま、そのうちひよっこり出てくるかもしれないな」

「ハハ、そんなタチの悪いジョークはよしてくれ」

笑って流すが、案外現実味があるのだ。俺には、笑えない。

「で、五番隊はどうなるんです?」

「藍染隊長の訃報には、彼らが一番動揺している。特に副隊長の雛森君がね。だから、しばらくは静観だろう」

「…ま、妥当かな」

そう言うと、俺は立ち上がった。

「どこへ行くんだい?」

「散歩」

「この状況でか?」

「別にいいだろ。そう簡単にやられはしないさ」

浮竹隊長は、疲れたような顔でため息を吐いた。その顔には、諦めにも似た感情が流れていて。額に手を当てていた。

「まあ、君の放浪癖は今更だし、俺からは何も言わない。ただ…。無事に帰ってくるんだ」

「……………、善処しますよ」

俺は、いつものように、南へ向かった。例え警戒態勢下だろうと、門が閉じられていようと関係なく、その習慣は変わらなかった。

日は傾き、あたりは暗くなっていた。時間も時間だから、とりあえ

ず浮竹隊長の所に一旦戻ろうと、俺は瀨靈廷の近くまで来ていた。そこまで来れば、外を照らすのは、壁に掛けられた松明のみ。だけど、そんなことは気にせず、普通に歩いて、ちよつとした広場に出た。

「見てるんだろ。誰だか知らないけど」

周りを見渡しても、誰もいない。気配も何もない。直感にも引つかからない。だけど、いる。まるで、空気に溶け込むような。一体となったかの様な。

俺の斬魄刀を解放した場合、そういう、「空間に作用する能力」が断ち切られてしまう。だから、もしそうだった場合は、ぶつちやけ関係ないけど、色々とめんどくさい。だからこうして、確認するわけだが。ぐにやあと。空間が歪んだ。

「ほう。私に気づいていたのか」

現れたのは、優男。貴族然とした、長髪の男。一切の見覚えのない男。

「気づいてた訳じゃない。ただ、おかしいと思ってただけだよ。というか、なんで出て来たんだ？戯言と思つて、無視すると思つてたんだけど」

「ヤツがお前の事を五月蠅く言うものだから、こうして顔を見にきただけだ。それにしても、…ふむ」

「なんだよ。気持ち悪い。言つとくが、俺は男だぜ？」

「そう言うものではない。中々、不可思議な力を持っているものだ」

「へえ。分かるのか？それとも、当てずっぽうか？」

「私はハツタリは言わん。嘘なぞ、つくだけ無駄だ」

「オマエ、面白いな。空気に溶け込んだり、この空間だけ隔離してるのも、オマエの能力か？」

「ほう。やはり、惜しいな。貴様ならば、なんの情もなく、ただただ虚を廃絶できるだろうに」

目の前の男は、顎に手を当てて、残念そうな目を向けて来た。

「で、オマエ誰だよ」

「名前を名乗る必要はない。…と言いたいところだが、お前とはまた会うだろう。その為には、名がいるな。…私は痣城双也。8代目剣八

だ」

「!...8代目剣八か。確か、投獄されてたんだっけ? まあいいや、一応俺も名乗つとくが、要るか?」

「一応、受け取っておこう」

「俺は穂積織。十三番隊副隊長だ」

「ふ、貴様が副隊長とは。笑い話だな。今の護廷十三隊は、随分甘くなったらしい」

「そう言ってやんなよ。ここうも平和だと、鈍っちゃうのは仕方ない」

「関係ない。死神は機械的に、何も思う事なく、その役割を果たすべきなのだ。...それと、お前の能力^{チカラ}、使うのは構わん。その時だけ、能力を止めよう。下手な小細工は、切って捨てられてしまう様だからな」

そう言った男は再び、解け、溶けるように消えた。無駄を嫌う性分のようなが、そんな無駄を、捨てきれはいないようだった。

そして、その男の横に、変な顔の女がいた。一瞬だけこっち見て、笑っていた。甲高い笑い声が、幻のように響いて来て。顔をしかめることになった。

8代目剣八との出会いからまた数日。俺の知らないところでかなり事態は進行している様だった。浮竹隊長は京楽隊長と組んで何やらやってるみたいだし、黒崎一護を助けに、あの四楓院夜一がやって来たとか、そういう事件ばかりで、瀨霊廷は混沌としていた。

そんな中、俺はかねてから浮竹隊長や京楽隊長らに、中央四十六室の判断について、相談を持ちかけていた。俺は兎も角、浮竹隊長や、ましてや白哉に言うとは、必ず朽木への情が鎌首もたげてくるから、あくまで参考程度にし、京楽隊長や、メガネをかけたその副官——少し頭が固かった——の意見などを聞いて、俺は俺なりに動くことにした。

浮竹隊長が前に言っていた通り、現在五番隊は、陰鬱な雰囲気に覆われていた。あらゆる言動、行動に、「理想の」などという、下らない枕詞がつくような隊長。藍染惣右介の死亡は、それほどまでもにも重くのかかっていた。副隊長も使い物にならず、席官クラスのものも殆どが生气を失ったような、殺し甲斐のない目をしていた。——仮に殺すのなら、だが。

この藍染惣右介の死亡が偽装だった場合、ヤツは何の目的でそれをしたのか。または、自分が死んだと思わせる事で、何が出来るのか。仮に俺がそういう立場だった場合どうするか。

第一に、行動制限の解除。隊長、あるいは死神という肩書から開放される事で、バレルまでは何やっても見つからない。好き放題だ。

というか、これに全てが収束する筈だ。今の事態が全て藍染の壮大な計画の一部でしか無いのならば、ヤツはどこへ隠れるだろうか。

「ん——？」

現状に少なくない違和感を覚えているらしい浮竹・京楽両隊長は、色々入り用らしく、最近かなり忙しいようだ。今の隊舎にいたところで何もやる事がないから、俺は、夜はこうしてあちこち出歩いているのだが。

さて、そんな中、今日は目的地を決めて足を運んだ。

「…見張りがいないって。どういふ事だよコレ」

誰かが入って行った跡がある。

中央四十六室・中央地下議事堂。

いわゆる立ち入り禁止。現世で言うところの裁判所。もちろん、三権分立なんて立派なものはない訳だから、ここが一番権力を持っている。ただ、あのメガネをかけた副官を10乗したくらいにお固い頭をお持ちの野郎どもで構成されているから、俺としては全員殺したい。意味のない殺戮は嫌いだ、人じゃないと思えば、その限りではないだろう。

俺は門をくぐった。階段を降り、見渡す。鼻に付くのは、わずかな腐臭。そして、ここに沈着した、血の匂いだった。

「あんた、穂積じゃない!？」

「ん? ああ、松本副隊長ですか。何してるんです?」

『何してる?』じゃないわよ。ここ立ち入り禁止よ?」

「それ、今の自分見て言えるのか?」

特大のブーメランを見事に弾いた。まあ、今この場においては特に関係などない訳で。

「で、コレはもしかしなくても皆殺しってパターンか?」

「ああ。死んでかなり経ってやがる」

「!...:日番谷隊長ですか」

現れたのは、背中に剣と、「十」を背負った子供。だが、その実力は紛れもなく本物。稀代の天才とまで呼ばれる少年。そいつは氷雪系最強と謳われる斬魄刀『氷輪丸』を背負い、引き締まった口調でそう言った。

「と言うことは、朽木の処刑に関する命令全ては、この伽藍の四十六室から出てたってことか...」

笑えない。

下された命令に従うだけなら、猿でもできる。ならば、いまの護廷は、全員猿か、それ以下か。どっちにしろ、俺の中では、殺す価値すらないって事なのか。

「!」

その時、入り口に誰かが来た。丁度月の差す方に入口が有ったか

ら、他の奴には影という形で、存在が認識された。

その男は、やはり見覚えがある顔で。

「吉良……」

日番谷隊長が溢した。俺はそれを聞いて、彼の名を思い出した。地味で真面目で、影の薄い、まさしく陰キャラの代表みたいな奴だった記憶がある。

吉良は何も言わずに、俺たちを見下ろして。まるでついて来いと言うような目線を残して去った。

「待ちやがれ吉良!」

「待ってください。落ち着いて下さい日番谷隊長」

「っ!なんだ!」

苛立たしげにこつちを向いた。拙くて、か弱い殺気。ハエも殺せないようなそれで、俺を威圧しているつもりなのか。吉良にしても同じ事だが、まだコイツらは「死」を理解していない。虚を殺すのと人を殺すのでは、その重みが圧倒的に違う。まあ、俺がそう考えているだけでもあるが。

「アイツは俺が追います」

「何だど? どういうつもりだ?」

「多分、勘だけど、ここに誰かが来ます。その相手を任せようかと。ま、オマエなら大丈夫だろ。隊長」

「っ、:分かった。なら任せた。後、口の利き方には気をつけろよ」

最後の台詞には何も答えず、俺は瞬歩で吉良を追った。そろそろ何かが瓦解する。そんな直感。別にそうなって欲しい訳じゃない。俺は戦闘狂とは違う。俺が望むのは、俺が本気で殺したいと思った人間を、本気で殺すこと。殺戮では無く、殺人。人は1人しか背負えない。物理的にでなく、その精神的に。大量虐殺なんかは、文字通り虐殺であり、あんなのは殺人じゃない。まともな死に方が出来なければ、人は人として終われないから。殺人を哲学的に捉える訳でもない。そこに快樂が存在する余地はない。

ああ、俺がそれを望むのは。それが虚無を埋めるからか。人としての「生」を、感じさせてくれるからか。

前に行く吉良は、どこかの屋根の上で立ち止まった。俺も同時に立ち止まる。その間合いは8メートル程度。刀の間合いには遠いくらい。それは、俺のナイフならば尚更。しかし、豹の様な俊敏さでもあれば、俺にとってゼロコンマ以下の世界で潰される距離。

「驚いた。てつきり日番谷隊長達がついてくると思っただけどね」

「なんだ。がっかりしたか？安心しろよ。さっさと捕まえて、終わらせてやる。洗いざらい吐かせてやるからな」

「面白い冗談だ。何なら、今ここで教えてもいい」

吉良はそう言うのと、これまた拙い殺気を向けた。斬魄刀を抜く。月光が刀身に映り込み、刃紋が煌く。

「でも、これから死ぬ人に、何も答える必要はないんですよ」

月の夜、どことも知れない場所で密かに。俺は、背中からナイフを抜いた。

「面を上げろ、『侘助』」

それは、解号。死神が個々で待ち合わせる、いわば解放の呪文。幕は切つて落とされた。ナイフを握る手に力がこもる。自信がない訳じゃない。倒す技術はコイツらが上でも、殺す技術は俺の方が上だ。そもそも俺には、殺すことしかできないのだから。

「チツ、その目。マジで戦うつもりか？このご時世に内乱とか…」

ますます面白い。想像以上の混乱ぶりだ。藍染の掌の上である事を思うと、素直に喜べないものではあるが。

「ハッー」

「！」

二度曲がった刀。その形状は、狩ることに適している様に感じられた。そして、その直感が間違つてなかつた事を知るのは、それから少しの後だった。

キンキンと、ナイフと刀が斬り結ぶ。間合いは向こうが有利ではあるが、至近距離ならば取り回しが容易いナイフが有利。

故に、接近しながら、攻撃を払い、懐へ潜り込むのが適。

あと三步。手を伸ばしても届かない距離。俺は吉良の刀を大きく払つて、一気に踏み込もうとした。

「!?……重……っ」

「元が軽いから、効果が現れるまでに少し時間がかかったね」

「効果……だと？」

吉良はその細い目を俺に向ける。俺は、急に重くなったナイフを、かろうじて持っている様な、隙だらけの状態だった。

その重さ、体感で1.5キロくらいか。子どもを1人抱えてる程の重みに近い。

「僕の『侘助』は、斬りつけた物の重さを倍にする。二度斬れば更に倍、三度斬ればそのまた倍」

「へ……え、そういう、ことか……」

「そして、斬られた相手は重みに耐えかね必ず、地に這いつくばり、詫

びるかの様に頭を差し出す」

勘でなく、頭で理解した。なんとも暗鬱な能力だ。だが、それが現実有効である事は、今日の前で証明されている。

「故に、『侘助』」

その理論で行けば、5回斬り結んだ俺のナイフは、2の5乗倍、即ち32倍の重さを持つことになる。

膂力では吉良に勝るとも劣らない。むしろ俺の方が下なまではある。だから、この状態は非常に不利なわけで。

能力を殺すにしても、能力自体の線が、ナイフの線と見分けがつかない状態だ。

『良い機会なんじゃないのか?』

内側から響く声。機会だって?

『そのナイフ。お前たちを物的にも、心的にも結びつけるたった1つのものだけ?』

その一言で、俺は言わんとする事を理解した。

機会とはすなわち、訣別。

だけれども。ここで手放せば、俺は彼女の力を手にすることができ。それでも、俺にはまだ、躊躇いが残っているらしい。

「……………」

沈黙。俺と吉良でなく、俺とコイツに。

『捨てなきや、今のお前に俺は使えない。どうするかはお前次第だ。俺は何も言わないぜ?』

ふと、脳裏に、勇音の言葉が流れ込む。

——織さんは織さんですよ。

俺も勇音も。互いのことは全く知らない。その付き合いだって、そんなに親しくもないし、知り合い程度のものでしかないはずだ。それでも、そう言ってくれる人がいる。穂積織を見てくれる人がいる。

「ハハ、なんだよ。やっぱり、優しいよな、式」

「いきなり笑うなんて、どうしたんです?イカれましたか?」

「口を閉じる猿。命令に従うだけの人形が。一丁前に敵ぶってるんじゃない」

踏ん切りが——いや、元々そうあるべきだったんだ。だから、これは当然で、必然の帰結。

『ああ、待ちくたびれたぜ。優柔不断なやつだよ、全く』
全くだ。情けなくて涙が出る。笑いがこみ上げる。

俺は両手でナイフを構えた。そしてそれを——。

「最後だ。オレらしく、散ってきやがれ」

全力で投擲した。ブウンという鈍く風を切る音が鳴り、その刃はあつさりと、叩き落とされた。

それでも記録は消えない。それが、本当に他人のものになっただけで。いつでも鑑賞可能なフィルムになっただけで。

俺は月を見上げて、顔に手を当てて。

「ああ、感謝するぜ吉良。オマエが、わざわざ機会を与えたんだからな」

「何のことだ」

「いや、気にすることはない。ああ、——これから死ぬ人には、何も答える必要はないってことだよ」

その瞬間、吉良は構えて、流れる様に突進する。

だが、見える。俺は、斬魄刀を抜き、改めて、実に40年ぶりに、その解号を口にした。

「開境しろ——『唯式』」

瞬間、あたりからうざったい視線が消え失せ、重たい圧がのし掛かる。同時に、ギギギ、と何かを削り刻む様な音が聞こえた。

形状に変化はない。解放しても、封印時と同じ様な形状。

一振り。それで、吉良の突進を弾いた。同時に感じた、ナイフとは違う、懐かしく、心地良い重み。それすらも実に40年ぶり。何もかもが、違つて見える。月明かりに関係なく、死はあちこちに忙しなく現れる。いつも通りで、そして違つていて。心が軽い。

「…それが貴方の斬魄刀ですか」

「ああ。解放するのは、40年ぶりだけだな」

「へえ。でも関係ないですよ。斬り合えば必ず、あなたは頭を垂れる」
「そいつは、どうかな——」

ボウ。わずかに淡い光を纏う。月明かりに紛れて、吉良は気づかない。微細過ぎて、誰にも分からない変化。そしてそれこそが、俺の斬魄刀『唯式』の真骨頂。

5合、7合、10合。いくら切り結んでも、変化は現れない。

「なぜだ！すでに君の斬魄刀は、振れるような重さじゃあ無いはずだ！」

「知るかよ。そんなもの、てめえの頭でハッキリさせてみる」

15合目。埒があかない。まだ俺は調子が掴めないから、本調子でない。しかし、今はあまり時間がない。

「悪いが、終わらせるぜ」

「!!そうはさせない」

「いいや。まかり通るさ。——【潰式四相・現行】」

「!?これは——!」

意識が前方へ閉じる。脳が熱を持ち、世界が崩れる。現れたのは、子供が引いたような乱雑な線たち。しかし、俺は意にも介さない。俺は、吉良の身体に走るソレを、ただ撫でるように斬っただけ。

「っ!?!:身体に、力が、入ら、ない:っ!——何も、感じない!?!」

「オマエの身体、一時的だけど殺させてもらった。安心しろよ、すぐ戻る。元々殺す気なんてなかったしな。あ、でも追っかけてくるなよ。

: 【縛道の六十一・六杖光牢】

光の板が、六枚で吉良をそこに縫い付ける。あらゆる感覚が閉じられた吉良は、絶叫を絞り出していた。それを見届けて、俺は再び日番谷隊長のところに戻った。

その途中、初めから縛道で縫い付ければよかったという思いと、目的やらを聞きそびれたことを思い出すが、どっちしろアイツは知らないだろうと思ひ直し、俺はその路を急いだ。

可能な限り急いで、四十六室へ戻る。そこには、やはり賢者の死体が転がっていた。何かある度に口うるさい奴等ではあるが、死んで何も言わなくなると、いつそ厳かにも見えるから不思議だ。

普段あったはずのものが無いというのは、かなりの違和感をもたらす。腰のナイフは鞘だけを残して消えた。——俺が、殺した。

ふと気付けば、空虚だった俺の内^{なか}が、いつにも増して、伽藍としていた。

ああ、これが。これが、俺が今まで抱えていたモノの重さなんだ。そう、知ってしまった。

後悔なんて無い。あれは俺の自由意志なのだから。何かを手に入れるのに、何かを捨てなければいけない。そう分かっている。やはり、空っぽというのは、どこか御し難い虚しさがあった。

「…松本副隊長。日番谷隊長は？」

「隊長なら、雛森を追いかけていったわ」

「……そうか」

雛森が現れたという。どこかで牢に放り込まれたらしいが、どうやら抜け出したようだ。そのくらいは造作もないことなのだろう。

「——!!」

「!…隊長……!?!」

「…なんつーか、隊長がこんな沸点低くていいのかよ。やっぱ、まだ子供ってことか」

「アンタねえ…」

「で、どうする?…ここからそう離れていないみたいだし、追っかけるか?」

「今の私達が行っても、足手まといよ」

「…。仕方ない。オマエが行きたくないってなら、俺が行くか」

「アンタ、私の言ったこと聞いてたの?足手まといなのよ」

「オマエはな。俺なら問題ない。人の心配なんて、するもんじやないぜ?」

警戒体制下にしても圧倒的な霊圧の高まり。空には、煌々と輝く月。三日月のように弧を描いた姿は、どこか不気味で。

だけど俺は、そんなものに興味は無い。更なる高まりを見せる霊圧の方へと駆け出した。

背中 of 斬魄刀に手をかける。

三の文字が刻まれた隊長羽織。夜風に煽られ、はためいている。不気味なくらい気味が悪い。今の俺にとつて、市丸ギンという男はそういう存在だ。常に細く閉じられた眼は、俺が未熟な事と相まって、考えを全く読み取れない。人は、考えが理解できなければ、そこに不気味さや恐怖を覚える。だから、現に俺は奴を嫌っている。

藍染が殺されたあの時。こいつは確実に雛森を殺そうとしやがった。あの時から、俺はこいつを警戒し続けていた。

霊圧で威嚇する。相変わらず飄々としてやがるが、内心では打算のオンパレード。狐のようにずる賢いことを考えてるはずだ。

吉良は穂積が追った。あいつも、藍染に対する雛森のように、市丸の事を尊敬していたからな。

「そんな怖い顔せんください。みーんな寝静まっとるんやから、静かにせえへんと」

「テメエの目的は何だ、市丸」

「…はて、なんの事でっしゃろ」

「とぼけんじゃねえ。旅禍が現れてから、テメエの行動は怪しかったんだよ」

能面に、裂けたような笑みが浮かんだ。それは丁度、先ほど見た三日月のよう。

「あら、ボク、そないに怪しかったん？」

「白々しいぞ市丸。さっさと吐け」

「…もう終わったんですか？——藍染隊長」

「！」

これは…!? 雛森の霊圧が、小さく!?…まさか!

「やあ、久しぶりだね。日番谷隊長」

「藍染……」

殺されたはずの男が、スッと現れた。その身体に傷の一切はなく、まるで、すべてが嘘だったかのように、何事もなく、藍染は立っていた。

だが待て。雛森を誘導した市丸の目的は、もしかしなくても雛森と藍染を引き合わせる事じゃないのか? 市丸は初めから目の前にいた。なら、今霊圧が小さくなっている雛森は、誰にやられた…?

「お前、雛森はどうした」

「雛森君かい? 彼女なら向こうだ。ああ、君ならすぐに見つけてしま
うね。——切り刻んでおけば良かったかな」

「藍染——！」

まさか、これが奴の本性。寒空よりもはるかに荒涼とした、乾いた
ゾツとした。

いやに冷たい、気持ち悪い汗が吹き出し、粘っこい唾が口の中に張
り付く。

「藍染、市丸。てめえら、いつからグルだった」

「勿論、初めからだ。僕は今までに、彼以外を副隊長だと思った事はな
い」

「それじゃあ、今までてめえは雛森も、俺も、他の死神も…。騙してや
がったのか!」

「ああ、騙すつもりなんてなかったさ。ただ、君たちが誰一人として理
解しようとしなかっただけさ。——僕の本当の姿をね」

「理解してない…。何でだ…。雛森は…。あいつはお前に憧れていた。
だから霊術院に入り、そこでもてめえの役に立ちたいと…。それこそ
死に物狂いで努力して、やっとの思いで副隊長になったんだ…」

「ああ。知っているわ」

「！」

さも、どうでも良さそうに。その声に一切の感情はなく。不気味なくらい、平坦だった。

「自分に憧れを抱く人間ほど、御し易い物はない。だから僕が、彼女を僕の部下にと推したんだ」

「な…」

「ふつ、良い機会だ。一つ憶えておくと良い、日番谷くん」

いつものように、穏やかそうな顔で。藍染は言った。

「憧れは、理解から最も遠い感情だよ」

「———!!」

その瞬間、俺の中で、何かがキレた。

パキインと、辺りに氷が張った。俺は、恐ろしいまでに冷えている。霊圧を、怒りゆえの爆発を以って開放する。ここは清浄塔居林だ。だけど、そんなもの、四十六室がないのなら、禁止事項もクソも無い。

今の俺には、何の躊躇いも無かった。

「卍解——」

辺りが氷に覆われる。俺は、今までに抱いたことのないほどの殺意を纏う。

『大紅蓮氷輪丸』!!』

そして纏いしは氷の龍。俺の霊圧と、空気中の水分によって形作られる。そこかしこにある水は、すべて俺の支配下だ。

故に、流水系の斬魄刀である藍染の『鏡花水月』とは、相性がいい。

「藍染…、俺はてめえを殺す…」

藍染は、全く動じない。眼鏡の奥のその瞳には、何も映らない。

そして、すべてを見下すように、藍染は言った。

「あまり強い言葉を使うなよ。——弱く見えるぞ」

冷静さは捨てた。その言葉は、俺を更なる激情へと誘った。

全力で駆ける。その心臓に、刃を突き立てんが為に。

やはり藍染は、その薄ら笑いを、消す事はなかった。

駆け付けてみれば、そこは氷で覆われていた。当然、自然に発生することは無いから、それが日番谷冬獅郎の斬魄刀『氷輪丸』の力である事に気付くまでは、一瞬だった。

氷に覆われた小さな体躯。まさしく、龍と呼ぶべきその姿は、紛れも無く、卍解のソレだった。

沸点が低すぎる。まあ、ここが清浄塔居林だからと言っても、ここに住む阿呆共はもうとつとくに息絶えてしまっているわけで。咎められる筈もなかった。

それでも、藍染惣右介相手には、荷が重すぎる。その実力云々より、斬魄刀自体の相性故に。考えて動いてくれ。これだから子供のお守りは嫌いだ。

俺は目の前にいた二人を飛び越え、再び斬魄刀を手に取る。

「開境しろ、『唯式』」

刹那の間。三メートルにまで縮まった藍染と日番谷の間合いに割り込み、ボウと鈍く微かに光る刀を振り下ろした。

藍染は兎も角、日番谷には認識出来なかったはずだ。

なにせコイツは、怒りで我を忘れているから。

藍染に到達しようとした氷点の刃は、その目前で何かに触れた。

端から見れば、何も無いのに遮られているように見えるはずだった。そこに壁があるような感覚だろう。そしてそれは、文字通り正しい。

俺はそこに、斬魄刀を手に持ったまま降り立った。

「だからさ、落ち着けて言ってるだろ？日番谷冬獅郎」

「穂積…、てめえ」

「何だよソレ、殺気向けてるつもりか？脅してるつもりか？…まあ、とりあえず落ち着けよ。怪我したくないだろ？ああ、あと藍染、オマエもそこを動くなよ」

「ほう…」

やはり拙い殺気を向けてくる日番谷は無視し、幸運にもそこに存在

している藍染惣右介に対して、そう忠告した。

「どけ、穂積。俺はコイツを殺さなきゃならねえ」

「何言ってるかサツパリだけど、とりあえずオマエじゃ勝てないよ。藍染にはな」

俺はそう言って、唐突な回し蹴りで日番谷を蹴っ飛ばした。さつきも言ったが、斬られて怪我するよりは、万倍もマシだろう。そのままの勢いで、反対側の凍った壁に激突した。そして、近づいてくる誰かに、俺は言った。

「そう思うだろう？卯ノ花隊長」

「…そうですね。今の彼では負けるでしょう」

すると、虎徹勇音を連れて、四番隊隊長の卯ノ花烈が現れた。随分と落ち着いている風だが、果たしてその内心はどうなのか。これもまた直感だが、少なくともコイツはマトモじゃない筈だ。

「ふむ、これが君の斬魄刀の能力かい？」

「まあ、そんなとこだ。答えは言わないぜ？自己採点しといてくれ」
「これは手厳しいな」

やはり、その人当たりは温和で。もし俺が普通だったなら、いい人だと思っただろう。だけど、普通じゃない故に、俺はコイツが嫌いなんだ。眼鏡を外したって、それは変わらない。

「だが、そろそろ来る頃だとは思っていたよ。卯ノ花隊長、それに、穂積副隊長。すぐにここだと分かったのかな？」

「…誰も立ち入ることを許されない禁踏区域は、瀨霊廷内にはここ、清浄塔居林を置いて他にありません。あれほどまでに精巧な死体の人形を用意したあなたが身を隠すなら、ここしかありません」

「惜しいな。読みは当たっているが、間違いが2つある。…穂積副隊長。キミは、どう思うかな」

「知るかよ。ただ、その死体の人形ってやつは多分、人形じゃないんだろ」

「素晴らしい。その通りだ。卯ノ花隊長の2つの間違いは、僕が身を隠そうとしてここに居たこと。そして…」

藍染は徐に手を虚空に伸ばした。そして。

「これは人形などでは無い」

何も持っていないなかった筈のその手には、いつのまにか、藍染自身の人形があった。正確には恐らく、人形という幻影。俺たちからしてみれば、人形とすら思えない、実体を持ったナニカだ。

「!?……いつの間に……」

「最初から持っていたさ。ただ、僕が見せようとしなかったただけの事」
「線」の入っていない人形^{幻覚}。俺は、階段の途中に立つ藍染から少し離れたところで、それを見ていた。

「そら、解くよ。——砕けろ、『鏡花水月』」

ガラスが砕けるような、軽い音。それと同時に、藍染の手には、人形では無く、斬魄刀が握られていた。空に伸ばされた藍染の手から、滑るように落ちた刀は、その鋭さを示すようにサククリと、地面に突き刺さった。緑色の柄が、妙に目に焼き付いた。

「僕の斬魄刀『鏡花水月』。有する能力は『完全催眠』だ」

「そ、そんな……。だって藍染隊長、仰つてたじゃないですか……! 『鏡花水月』は流水系の斬魄刀で、水の乱反射で敵を同士討ちさせるって……」
「完全催眠ねえ……。なるほど、そういうことか」

「やはり、君は気づいていたようだね。穂積副隊長」

そう言つて、興味の対象……いや、実験対象を見るような目でこつちを見てくる藍染に対し、俺は殺したい衝動を抑え込んだ。俺自身でも、まともにやりあつて勝てる筈がないから。少なくとも今の俺では、返り討ちにされるのがオチだろう。直感が無くたつて、力の差くらいはわかる。

卯ノ花隊長も勇音も、たいそう驚いたようにしているが、何より最も驚いているのは、隣の市丸だったように思えた。細い目がわずかに開き、浮かべていた薄ら笑いが消えている。

「まあ、な。つっても、そんな大したことじゃないだろ。完全催眠。即ち、——五感の支配。それに気づいたのは俺の場合、ほとんど気まぐれみたいなものだからな」

「穂積副隊長、それは一体どういうことです。あなたもそちら側だつ

たのですか」

「馬鹿言うなよ卯ノ花隊長。俺が死ぬほど嫌いなコイツについて行くかよ。目の前に在るだけでも、思わず殺したくなっちまうのにさ」

「ならば何故」

「焦るなよ。そういうのはここで明かすようなものじゃ無いだろ」

「ならば、無理やりにも見せてもらうしか無いようだね」

「っー」

途端、ほとんど無意識に刀を横に構えた。魔眼も、そのスイッチが入る。俺の目に映る藍染は動いてない。なのに、その線だけが、ゆっくりと向かってくる。

音も、光も、感覚も。五感はアイツの掌の上。全くもって腹立たしい。頼りになるのは、俺自身の直感と、この『直死の魔眼』のみ。

「織…さん？一体なにを…。卯ノ花隊長、織さんは一体…」

「黙って見ていなさい。彼の言葉が正しければ、アレが、現実です」

そう。俺たちが立っているのは、現実^{テクスチャ}に張り巡らされた織物の上。現実を覆う虚構。あまりにも精巧で、ただ過ぎす分には全く違和感が無い。故に、アイツらは気づいたんだろう。

あまりにも現実^{テクスチャ}に似せ過ぎると、そこに現実との乖離が生まれるから。

線が象る人の像。腕と思われるモノから伸びる細いナニカが、振り下ろされる。それを受けて、俺は後ろへ飛ばされた。足元が凍っていたから、踏ん張ることも叶わない。そのまま吹っ飛ばされて、壁に激突した。

「ぐあ…っー」

「さて、悪いが僕も忙しくてね。もう会うことはないだろう。さようならだ」

人の姿に収まった藍染は、勇音の制止の声など無かったかのように無視し、市丸が広げたなんらかの道具で、ここから立ち去った。

穂積織という男は、非常に不可思議だった。

今でこそ十三番隊の副隊長という地位に就き、それなりの実力があ
ることは皆が知っている。だが、私を知る限りでは、決して副隊長な
どの器でも、実力でもないはずだった。

彼が今の地位に至ったのは、およそ50年前。志波海燕が私の作っ
た虚に喰われ、絶命して数年後の事だ。その頃、彼もまた私を実験と
して放し飼いにしていた虚に襲われ、昏睡していたという。二桁とは
言え席官であった彼は、その虚に対抗したものの倒された…という訳
だ。

そのまま2年。彼は2年間も眠っていた。私にとってはどうでも
良い事だったが、彼が目覚めた時は浮竹隊長が嬉しそうだったのを覚
えている。

私は、彼のことを名前しか知らない。だから、見に行こうと思っ
た。

席官ならば、私の『鏡花水月』の支配下だ。草の根、というほどで
はないが、丁寧かつ確実な下準備は、計画の遂行にあたって必ず必要
になる。

そこで私は、彼の姿を初めて見た。そして、初めて心からの畏怖を
覚えた。

虚ろでもなく、かと言って真を写すわけでもない。なのにどこか別
の十二力を見ている。深蒼の眼は、本能からそれと呼び起こした。私
はまるで罪人のように、雁字搦めにされた。

しかし私は、意志を以って、それを押し潰した。より細心の注意を
払って行動した。『鏡花水月』があるならば、これ程までに気を張る必
要は無かった。なのに私は、いや私の魂は、緩めることを許さなかつ
た。

私は何を彼から感じたのかは分からない。私が脅威に感じたわけ
でもないはずだ。

山本元流斎重國。

更木剣八。

浦原喜助。

いずれも、何らかの分野で私を上回る強者。

穂積織は、彼らと同格なのだろうか。私より、どこが上回っているのか。

こちら側で、もう私に残された時間は少ない。双極で朽木ルキアを処刑し、その後、浦原喜助によってその魂魄内に埋め込まれた崩玉を回収する。仮に上手くいかなくとも、その時は直接手を下せばいい。それでも、底知れず、計り知れないなにかを秘める彼の事は、念頭に置かねばならないだろう。

ああ。愉快だ。気づいているのだろうか？穂積織。

この世界は、あんな下らないものの下にあつて。ただ足掻く様に生きていくのだと。

ああ。君に、私と同じ景色が見えているのなら。

私のこの気持ちは、分かってももらえるのだろうか。

散々俺を打ち据えた藍染は、満足したのか、市丸とともに何処かへ消えた。大体行く所は分かるが、今は動けない。頭が熱を持っているからか、思考がまとまらない。動くにしてももう数分必要だろう。

「織さんっ！」

「…、なんだよ」

勇音が、大層心配した様な顔で走り寄ってくる。その後ろから、ゆったりと卯ノ花隊長も歩み寄る。

「大丈夫なんですか!？」

「傷は受けてない…はずだから、まあ、問題はないだろ。でも、俺はあんたらの質問には答えられないぜ？」

「どうしてですか、穂積副隊長」

卯ノ花隊長は、その笑顔に、余す事なく「全て吐け」と貼り付けて迫ってきた。

いや、別に言えないわけじゃない。

「簡単だ。理由がないからだ。言っただろ？『気まぐれだ』ってさ。強いて言うなら、理由はそれだ」

「藍染惣右介の斬魄刀の能力については、説明してくれますか？」

「言ったまんまだぞ。五感の支配。霊圧知覚まで含めると六感になるのか？どうでも良いけど、つまりは、人の感覚すべてを支配し、誤認させるんだよ、アイツ」

「ならば、あなたには先程、なにが見えていたのですか」

俺は、口ごもった。それは、答えられないのでは無く、言ったところで、信じる様な奴は居ないだろうから。

——『死の線』を人型に認識して戦闘をしていた。どう取り繕ったって、これだけは変わらない。

俺だけに見える、光以外の視覚情報。それは、『鏡花水月』の手も届かない、唯一の事実。変えようの無い、終末の風景。

一体、誰が信じると言うのだろうか。こんな突飛な話を。

「さあな。少なくとも、俺には見えてたつてだけの話だ」

「…そうですね。少なくとも、私たちには見えないということですね？」

「まあ、そういうことだよ。…さて、そろそろかな」

「織さん？」

脳の熱は粗方引いた。先の問答で冷静さも取り戻した。

——ふと、そんな頭で、俺と藍染を比べてみた。

人は社会的な生き物だと言われる。人間は、何かのグループに属していなければ、生きてはいられない。爪弾きにされた人間がどうなるかは、容易に想像がつく。孤独というのは、人が抱えるには重すぎる。現に、俺も藍染も、『護廷十三隊』という、一個の社会に属している。そんな中であって、やはり俺らは、一歩引いていた。

規格外の力を持ち、その才覚は並ぶものなく。故に、自らを孤独に落とし込んだ藍染惣右介と、理解の及ばぬ力を持ち、誰も見ることの

叶わない景色を見るが故に、必然と孤立した穂積織^オ。

こうして並べると、どこか似ている気がした。だからか、この嫌悪感を、同族嫌悪の1つなのかと俺は思った。

だけど、どうやらそれは違うらしい。

式曰く。

『は？お前と藍染？決定的に違ってるぞ。アイツのは先を行く故の孤独だ。その「鏡花水月」とかなんとかの力も、頭も霊圧も規格外。まるで全く別の存在。言ってみれば、他人よりも強烈に先んじた力を持つてる。だけどお前は違うだろ。藍染の存在を「進化」というなら、お前は「退化」だ。もっと言えば、「原点回帰」ってところだ。だから、結果的にお前らは孤立してる様に見えるんだよ』

何気にグサツと来たが、ストンと腑に落ちた気がした。

人の進化とは、余計な機能の排除に他ならない。現代で異能として扱われる力は、もしかしたら太古の昔ではよくみられていたのかもされない。

ただ、式の言葉を信じるならば、昔の人間は『直死の魔眼』を持つてる奴がそこら中にいたことになるが。

つまるところ、俺の『直死の魔眼』は、人が生きる上で必要ないために排除されたものであり。それを手にした俺は、たしかに退化したことになるわけだ。

式の言葉には、言外の意味があるようにも聞こえたが。

——— 原点回帰。

今の俺には、その言葉の意味を理解できるはずも無かった。

一護が双極をぶち壊してルキアを助け出した。斬魄刀100万本の破壊力を持つはずなんだが、なにがどうなってるんだが、訳がわからねえ。

だが兎に角、今はルキアを連れて逃げるのが大事だ。殺気石の牢屋に閉じ込められていたルキアには、当然ながら霊圧なんて残されていない。走ったところで、子供にだって捕まっちゃう。

「はっ、はっ」

そうして、かなり離れた所まで来た。

この辺りまで来れば、もう追っ手も来ないだろう。俺は、そう思っていた。

その時、目の前に誰かが現れた。

褐色の肌、ゴーグル。羽織を脱いではいるが、違える事はない。

「東仙隊長…!?なんでここに…」

「悪いな阿散井」

そう言って、手元から長い布を取り出した。

それは、瞬く間に俺たちを覆って、逃げ場を封じた。俺は焦燥に駆られるが、どうすることもできない。立ち尽くすしか無かった。

真白な布が、俺たちを囲んで黒い影を作る。視界を塞がれた僅か数瞬。気づくとそこは、見覚えのある景色に変わっていた。

「ここは…、双極の丘…!?!」

逃げ出したはずの場所。くそっ、振り出しに戻ったってのか。

そうしていると、後ろから聞き覚えのある声があった。

「やあ、阿散井副隊長」

「藍染、隊長…?」

殺されたはずの藍染隊長が、変わらぬ微笑みを湛えて立っていた。市丸と共にいる事に違和感を覚える。しかし、それ以外変わっていないはずなのに。何故か、身の毛のよだつような不気味さを感じている。

ルキアを支える手に、力がこもる。それを感じたルキアが、どこか

不安そうに俺を見上げてきた。

「阿散井副隊長、朽木ルキアを置いて下がりたまえ」

「な…!!?それはどういう…」

「やれやれ、聞こえなかつたのか?」

どうやら、言外の意味を含んでいるわけではないらしい。言葉のまま。ならば、藍染隊長は一体、何をするつもりでルキアに手を出すのか。

そんなの、一つしかねえだろうが!

「咆えろ、『蛇尾丸』!」

解号を唱え、斬魄刀を解放する。幅広で、いくつもの節を持つ蛇腹剣。それが、俺の斬魄刀『蛇尾丸』だ。

それを振るい、藍染隊長へと飛ばす。この距離なら、まだ射程圏内だ。

「はあああ!」

「ふう、全く、不要な事はしたくないんだがね」

「なっ…!!?」

片手で軽く払われ、再び攻撃しようとした瞬間。

「が……っ…!!?」

「やはり、こんなものかな」

手がブレたと、そう思った時には既に、俺の身体は切り刻まれていた。

規格外。そんな言葉が俺の中によぎった。思考と身体は切り離され、俺の身体は機械的に蛇尾丸を振るい続けている。

斬魄刀から伝わってくる衝撃が、蛇尾丸に多大なダメージを与えていることを物語っていた。

そして間も無く。俺の斬魄刀『蛇尾丸』は、バラバラに砕かれた。

「くっ……」

「さよならだ。阿散井副隊長」

死の寸前には、走馬灯が流れるという。時間が引き伸ばされ、まるで映画のフィルムのように移ろい、流れていく。

「戌吊」にて過ぎた幼い頃。霊術院にて過ぎた青年期。

そして、今に至るまでの、何よりも濃密な時間。

一瞬でありながら、全てが実寸の時間で流れていく。

そうして、俺に刻まれた最後の記憶が再生し終わる。次の瞬間、俺の視界は、黒く閉ざされた。

足を回す。瞬歩と違い、純粋な肉体技能である縮地は、その分負担が大きい。しかし、瞬歩を上回る速度を叩き出す。本家本元なのだから、劣るはずもない。

清浄塔居林から、双極の丘。その道のりは長い。殺気石のせいでも、瀨霊廷内では空中に足場を作るのが難しい。殺気石の力を殺しながら進むのは、どう考えても非合理的だから、こうして地を駆けて行くしかないわけで。

ふと耳に、勇音の声飛び込んできた。がらんどうの脳内に響く感覚には、少し覚えがあった。

縛道の七十七・天挺空羅。

任意の対象へ同時に情報を伝達する鬼道。俺にとってあまり使う機会はないが、知識として知ってはいる。

伝えられた事実は、藍染の離反。こういう結果は、おそらく奴の思い通りのものだろう。今この瞬間に形になったのだ。いくら俺でも、形のないものは殺せない。手の届かないものには、触れない。

そうこうするうちに、丘の麓まであと少しとなった。瞬歩で飛ばしているにも、まだ中頃にいただろう。

途中、黒い箱が現れたのを見た。それもまた鬼道であることを理解したのは、数秒後。黒棺と呼ばれるそれは、武器に関するそれと同じで、とても人に使えるような威力じゃない。あまりの強力さ故に。

ついに丘の麓。あとは坂を登っていくだけ。縮地のためだけに上がってしまったスタミナに物を言わせ、全速で駆け上がる。阿散井恋次六番隊副隊長と思しき霊圧を感じていたが、今はそれが非常に弱

まっている。

時間にして数秒。少し息を切らして登りきった時、藍染惣右介と目があつた。

「随分早いご登場だ。なにを急いでいたのかな」

「うるさい。今殺してやるから、そこ動くな」

そう言つて、斬魄刀を抜く。同時に構えたのは、藍染惣右介ではなく、横にいた東仙要だった。肌が黒かったためか、名前と顔は鮮明に覚えていた。

「穂積、副隊長……」

遠目に、阿散井の姿が見えた。よく見れば、藍染惣右介の陰に隠れて、見覚えのあるオレンジ色が目についた。

一丁前に心配そうな顔をする阿散井はボロボロ。さらにその近くには、七の羽織を着た犬頭。

ああ、あの笠の中はこうなっていたのかと。一人で勝手に納得して、刹那の思考を切り捨てる。経過時間は数瞬未満。風景は先ほどと全然ら変わりなく。背後にある荒れ果てた木が、風に唄つて掠れた音を出す。

その間隙に、足を踏み入れる。縮地の技量を以つて、俺は藍染の懐に入る。東仙の目には、いや、その感覚全てから、俺という存在は消えた。しかし藍染の目は、俺を捉えていた。

「さつきは一方的だったからね。君の技量は分らなかったが、こうしてみるとよく分かる」

笑みを消さないままに、藍染は俺と刃を合わせる。その音を聴いた東仙は驚きが顔に貼り付き、何の反応も示さなかつた市丸はやはり、少し目を見開くだけで。

「膂力は大したことはない。だが、その速さは今の私を明らかに超えている。素晴らしいものだ」

「そいつはうれしいな。だがまあ、易々と捉えられたわけなんだが」

「あまり言いたくはないが、偶々というやつだよ」

「ああ、なんつーか。——ホント、殺してやりたいよ。お前」

唐突にそう思つてしまった。式に諭された通りではあるが、やはり

俺はコイツが嫌いだ。だから、ふとした隙に、抑えていた殺気が溢れてしまう。

ギリギリと鏢迫り合う斬魄刀。しかし、俺は臂力で勝てないと知っているし、藍染も全く余裕でしかない。これは文字通り、見た目だけの闘いなのだ。

一步。されどそれは、神域の距離にして。刀の間合いより遙か遠くに。俺は離れて一息を入れた。

次に藍染を見たとき、奴は二人の人間に斬魄刀を突きつけられていた。

「動くなよ、藍染」

そうやって四楓院夜一は、全てを砕く刃の如き手刀を、藍染惣右介の首筋に突きつけた。

同様に、二番隊隊長の碎蜂もまた、解放した自身の斬魄刀を突きつけていた。

それから数秒遅れて。荒廃した丘に、各隊の隊長らが集まってきた。

息を整えた刹那の出来事。しかし、それが何であるのかは分かった。

天挺空羅で真実を知った奴らが、こうしてその落とし前をつけに現れた。ただそれだけ。俺にとっては、そんなことはどうでも良い。ただ、コイツらの面子の問題でしかないのだから。

刀を握る手に力が入る。臙脂色の柄の内側から、僅かな殺意が迸っていた。

「全員のご登場か。こうして見ると、壮観だね」

「藍染惣右介。お主が何をしたかは、全て聞いた」

「ほう。それで、私をどうするつもりかな」

ここまでできても、藍染はその余裕を崩さない。小綺麗なそのすまし顔を、その魂ごと殺してやりたい。そう、自分でも驚くほどの殺意が、沸々と奥底から湧き上がっていた。

市丸も、東仙も。同じように拘束されているはずなのに、微動だにせず、感情一つとて、揺らいでいない。

「私としては、もう少し彼を観察したかったんだが…」

「口を閉じろ、藍染惣右介！」

全く、意に介さない。それはまるで、藍染惣右介という男が主役のミュージカルのような。世界は、自分こそが中心であるという、そんな自負。それを纏って、藍染はニヤリと、その口角を上げた。

「——時間だ」

「——っ！離れろ碎蜂!!」

途端、がらりと変わった雰囲気に触発されたのか、四楓院夜一が離れるように言い放った。それと同時に、碎蜂もまた、その警告を脊髄反射で受け取る。二人はほとんど間隙もなく、藍染から離れた。

「これは――」

神々しさを秘めた光の柱が、空からピンポイントで降ってくる。

魔眼を開いてみれば、空に一際大きな線が、まるで裂傷のように走っていた。降りてきた光にも、何本もの線が走っていた。

「ははっ」

思わず笑いが溢れた。恐らく藍染は、あの中こそが安全だと、経験と実験から知っている。そう思っている。であるならば、おあつらえ向きだ。

恐らく、奴を殺すまではいけないだろう。しかし、藍染の間の抜けた顔が見られるはずだ。

「逃げる気かア！」

「止めい」

勇ましく藍染に向けて刃を向けようとした男を、信頼と威厳を持った声が縫い止めた。その目は、全てが無駄であると知っている顔だった。

「あれは『反膜』^{ネガシオン}と言うてな。大虚^{メソス}が同族を助ける為に出す光じゃ。あの光に包まれたが最後。光の内と外は完全に隔絶した空間になる」
「その通りだ」

その「反膜」とやらは、どうやら音は届くらしい。藍染惣右介は、全てを見下ろすような目で、傲慢さを含む口ぶりで言った。

「この光の外から、君たちは私に触れることは叶わない。身を以て知っているはずだ」

「馬鹿野郎。オマエは何にも分かっちゃいない」

斬魄刀を掲げて、その蒼眼は、神のような御柱を睨めつける。されど、その言はしつかりと、藍染惣右介へと向けられていた。

全知にして無知。矛盾した螺旋は、遺伝子の鎖のように続く。現実を、過去を、未来を、その全てを知っていれば、全知と呼ばれるだろう。だが、終末を知らなければ、全ては無知に終わる。

「万物には綻びがある。人間は言うに及ばず、大気にも、意志にも、虚にも。時間にだってだ」

誰に言うでもなく、しかし俺は、この『眼』で死を見つめたまま、ここにいる皆に言い聞かせるように。俺はただ、俺にとって当たり前の事実のみを口にする。万人の無知こそは、俺にとつてそこにある単純な事実だ。誰もが目をそらすソレを、俺は常に直視し続けなければならぬが故に。

「だから——」

縮地で飛び出し、刃を構えて。袈裟を狙つて。死の蒼は、さらに克明に輝く。

「——生きているのなら、神様だって殺してみせる——」

白銀の刃は、かくてその牙を剥く——。

「な——」

「これは驚いた……」

俺と京楽は、目の前で起きた現象に、目を見開くしかなかった。

「反膜^{ネガシオン}」とは、それほどまでに絶対的なものであった故に。あれは先生の「流刃若火」を以つてしても貫通できない。最早、その存在は道理と言つてもいい。

しかし。穂積の斬魄刀は、その壁を超えて、理すらも斬り裂いた。いや。彼の言葉を借りるならば。それを殺したと言ふべきだろうか。彼と過ごしていると、ふと、どこか遠くを見ているように感じられる。穂積が時折口にする、「死」という言葉。俺にとつてそれは、長い時間の中で幾多もすれ違つてきた、最も避けたいもの。だけど、彼の言葉に乗る感情は、それを忌み、焦がれているような、そんな矛盾。

しかし、自身の矛盾にはその刃を突き立てず、先ほどの彼の言葉になぞらえると、存在の綻びに刃を突き立てる。それで、全ては終わる。

いつからか、彼の立つ場所は、俺たちとはまた別の場所になっていた。それは必然なのだと、そう思うしかなかった。

常識が壊された衝撃から、不意に現実へ戻った。見上げると、『反膜』は、再び藍染へ降ろされようとしていた。さながら、蜘蛛の糸のようだ。劣勢のはずの藍染は、やはり余裕を崩さない。だが、次に起こった光景は、藍染すらも目を剥いた。

「これは……」

『反膜』が……降りてこない……?」

光が、何かに遮られて、その場で停止した。時が止まったかのように、微動だにしない。

「何が……」

「俺の斬魄刀は——」

藍染が上を見上げて、訳がわからないような表情を晒す。それに被せるように、穂積が言葉を紡いだ。

「俺の斬魄刀の名は、『唯式』。能力はまあ、あまり言いたくないんだが、どうせバレるのも時間の問題だろうしな」

めんどくさそうなの、いつもの顔でそう言った。やはりこの場において、彼だけが、見ているものが違った。

「能力は、振るった刃の軌道と少しの範囲に、見えない壁を創る力だよ。まあ、攻撃には役に立たない、つまらない力さ」

その行動が、言動が。被り物のように薄っぺらい。

吐き捨てた穂積の表情からは、何も分らない。不思議なくらいに不気味で、異質で。情けないことに、思わず目を逸らしてしまった。向き合うべきだと、分かっているのに。

「で、藍染。どうだ？天から地へと堕ちた気分は」

反膜ネガシオンを一振りで殺しきり、藍染惣右介へと俺は問いかけた。逆らって登る重力は消え、岩盤は元の鞘に収まった。

『唯式』の能力で切り口を塞ぎ、反膜のそれ以上の干渉を不可能としたことにも、周りは驚いている様子だった。

だが。当の藍染惣右介は、余裕ゆえの笑みを薄く貼り付けたままにこちらを向いていた。

やっぱり、あの全てを分かっているような眼が。気に障って、腹が立って。自分でもどうしようもない。

「ああ、クソツ」

「これはまた、凄まじい殺意だ。闘気だとか、気合だとか、そんな物じゃないね。比べるのも烏滸がましいくらいだ。なるほど、日番谷隊長を子どものように見えていた理由が分かったよ」

「オマエ、いつから上に立った気でいやがる」

「いつから？決まっているだろう。私は君たちと同じだと思っではないよ。初めからね」

余裕を崩さず、劇を演じるように。道化のように、用意された台詞をつらつらと述べる。それは本心で。そしてそれ故に、俺の神経を逆撫でるのだ。

互いに刀を構える。とは言っても、堂に入ったような構えではなく、ただ自然体で腕を下ろしただけ。藍染の死の線は、器の中に納まっている。今の藍染は、本物。

「だが、君だけは違う。私と同じところに立てるのは、君だけだ」

「……何が言いたい」

「私と共に来ないか？私がこう思うならば、君も同じ筈だ。『理解してもらいたい』とね」

「……………」

理解。なんだ、ただそれが欲しいだけか。

ならば、藍染惣右介と穂積織は。

「くくくつ、ああ、オマエと俺が一緒だって？俺がこう思うなら君も同じだろうって？」

「なら、君はどう思っているのかな？」

「俺とオマエが『同じ』だなんて、世界がどうなろうとありえないね。俺が見ているものとオマエが見ているものは違う。向いている方も違う。孤独を感じるのは同じでも、違うんだよ」

それに、と俺は最大の理由を口にする。

「俺はな藍染。——オマエの事が大嫌いなんだよ。そう、殺してやりたいくらいにな。だから、俺とオマエを、一緒にするんじゃない」
言い終わる前に突っ込む。縮地によるそれは、先と同じことの再現。だから当然、藍染の斬魄刀とかち合うことになる。

その速度に、四楓院夜一や碎蜂が目を見開き、誰もが目を剥いた。

「そうか、…残念だよ」

その顔はらしくなく、本心からの言葉のようだった。目尻を下げた、そんな表情が垣間見えた。しかし今更、そんな事に心を動かされるような可愛い性格はしていない。俺にとっての藍染は今、ただの殺害対象だ。

「あまり、君は殺したくないんだがね」

「そうかよ」

一瞬で、十数回の剣戟。目で追うことすらも叶わない、神速の領域。

「【破道の九十・黒棺】

「っ！」

俺を囲むのは、闇の箱。黒塗りの漆器よりももっと深い、光も呑み込む黒。詠唱破棄ですら殺人的威力を持つそれを、躊躇いなく放ってきた。

横目に見えた周囲の目は、すでに終わろうとする戦いから目を逸らし、既に藍染惣右介に相對そうとしていた。

だが。

「直死——」

蒼眼を開き、終末の風景を認識する。そこにある線に沿った一振り。それだけで、箱は容易に砕け散る。光を閉ざそうとも、死は常に

佇んでいる。それが視えるのなら、殺すのは簡単だ。

再び数メートルの距離を取る。これからやるのは、ただの負けん気だ。

『雲散らす月輪つきのわ 天上の陽炎かげろう 樹海に横切る光華こうかの足跡そくせき 金色を斬り祓う光覇こうはの孤月こげつ 聖の法典は七 精の霊槍は四 否定し数え下ろして零に至れ』

俺は開いた手を突き出した。その射線には、俺の殺害対象。あとはただ、唱えるだけ。

『破道の五十三・光輪華こうりんか』

手から放たれる光。まるで輝く杭。機関銃のように放たれたそれは、咎人を縫い止める幾多もの刃のように牙を剥く。

『縛道の八十一・断空』

藍染がそう口にした。すると向けられた牙は、虚しく壁に突き刺さった。だか、そんな事は分かっていた。どうであれ、この攻撃には意味がないことくらいは。

『破道の三十三・蒼火墜』

即座に背後を取り、急襲。スピードで勝るのなら、そこを土俵にするしかない。単純な攪乱が、俺に取りうる手段だった。

腹立たしいけども、地力で圧倒されている。今の俺には、正面きつて戦えるほど、拮抗した戦力はない。

「やはり君は面白い。いやはや、興味が尽きないよ」

「もうちよつとダメージ受けた素振り見せろよ。ホント、化け物かよ」
「君に言われたくないね。完全催眠を潜り抜ける君の方も、充分化け物だ」

「だからさ……一緒にするなって言ってるだろ」

再び拮抗。同じように見えて、俺が押されているのは明白だ。それでも、今はまだ藍染が本気を出していないだけなのだから、つくづく化け物であると思う。

直死の魔眼を併用しながらだと、それなりの負担がかかる。一々認識して判別するにも大変で。仮に俺が卍解出来たならば、ひっくり返ったりしないだろうか。

死は隣に。死は背後に。されど、その境界は一步ずつ近づき、遠退く。手を伸ばしても、わずかに届かない。もどかしい。その境界が、近ければ。

幻想しながら、腕を動かす。空の大虚は、俺たちを見下ろして止まったまま。同じく黒衣の死神たちも、眼前の戦いを見て静止したまま。

時間が止まったように、永遠に。

忙しなく足を動かし、互いに動き回る。切り結び、飛びのき、鬼道を放ち、ふたたびかち合う。熱機関のように回るサイクルは、脳を過熱に追い込み。そして、不意に途絶の時を迎える。

「存外楽しめたよ。だが私も忙しい。悪いが、時間だ」

突然の激動。完全に不意だった。俺は構えるだけで精一杯で、かろうじて受けきったものの、左腕に激痛が走った。千切れてはいないが、完全に折れた。この程度では死なないが、この脆弱な身体には、充分過ぎるダメージではある。

「ぐう、ッ」

その轟音で、目が覚めたように皆が顔を見合わせる。

再び、御柱の光が、後光のように差し込む。差し詰め、雲間から差し込む光といったところか。身体を起こして過熱した頭を振り、その足を引きずって藍染を呑む光の下へと歩み進める。

「遂に…大虚とまで手を組んだのか」

藍染に対し、憤りと落胆を隠すことなくぶつけるのは、意外にも浮竹隊長だった。しかし、藍染の口は開かない。声が届くのかも分からない。

「何のために」

「…高みを目指して」

「…地に堕ちたか、藍染」

全てを見下ろす、神のような振る舞いが、いつにも増して感に障る。

「驕りが過ぎるぞ、浮竹」

そして、まるで教えを授けるように言う。

「最初から誰も天に立ってなどいない。君も、私も。穂積君も。神す

「らも」

「……………」

「だが、その耐え難い天の座の空白も、今日で終わる。これからは——」

メガネを外し、それを潰した。髪をかきあげて見えたその目は、最早その面影を残しはしなかった。

「これからは、私が天に立つ」

それは言うなれば、神すらも超越するという宣言。

だけど、それでも奴は生きている。

大虚の手に乗り、闇の奥へと消えていく藍染惣右介へ、俺は最後に言葉を手向けた。

「——やっぱりオマエ、何にも分かってないよ」

「……………」

くくく、と喉の奥で笑いを転がした。たとえ聞いていなくとも、俺はその台詞の先を続ける。

「神を超越し、天に立つて。…だからどうした」

「なに？」

藍染は問い返した。しかし、それを聞く耳など、俺は持たない。

「死んで天に立つわけでもなし、なんにしろ神を超えたところで、『オマエが生きている』というその事実だけは変わらないんだろ？」

その事実一つさえあれば、俺は——。

「だったら、俺はオマエを殺してみせる」

背を向け、藍染のその姿は遙か彼方。しかし俺は声を大にすることなく、ただこの「直死の魔眼」を開いて。

やがて藍染は、迎えられるように闇に消えた。その口に、わずかな笑みを浮かべて。

俺はそれを、太陽、或いは月を見るように目を細めて見た。口にしまった言葉は、残響も無く、溶けるように消えた。

ぽっかり空いた孔は、何事もなかったように閉じた。

底抜けの青空は、やっぱり脆くて。どうしようもなくいつも通りだった。それが俺には、不快で仕方なかった。それは春を抜け、夏を

思わせるような、ある晴れた日の事だった。

閉じた穴は、その後何の異常も見せなかった。いつもと変わらない空が、底なしの蒼をこっちに向けて、真顔で居座っていた。

結局、残された爪痕は大きいけども、俺にとつてどうでもいいものだった。四十六室なんかは、正直無くてもいい。隊長の空席も、しばらくそのままだろう。

だからと言って、隊長に推薦しようとするのはやめて欲しいのだが。

「浮竹隊長。俺は隊長になんてならないと言ったはずんだけど」

「いやいや、そう言うな。気が変わるかもしれないだろう?」

「…はあ」

三、五、九の隊長の席は空白のまま。にも関わらず、隊首会というものは普通に開かれるらしい。そんなわけで、俺は浮竹隊長に連れられて、それが開かれる一番隊隊舎に足を運ばせられた。

木の板が張られた、普通の廊下。ただ、「一」を冠するだけで、その意味は重くのしかかる。それを示すように、空気までもが重い。形を成さない以上、殺すことは出来ないが。

腰の後ろは、まだ空っぽのまま。かつて抱えていたものは、虚無の中に落ちた。あの時は色々と極限状態であったからか、今になってふと、思い返すことが多くなった。大切だったわけでもないのに。

それとも、そう思っているのは俺だけなのか。

そうしているうちに、一際重厚で、重い扉の前に来た。

「さ、みんなが待っている」

浮竹隊長が、何でもないように扉を開く。

見慣れた顔と、見慣れない顔。明文化されているはずの規律が、普段はまるで暗黙の了解のように振る舞う護廷十三隊の中でここだけは。それが、本来の意味を成していたように見えた。

所々、包帯をしていたり、怪我の跡を残す奴もいたが、そこにはきちんとして十人が並んでいた。よく見れば、白哉の陰には阿散井がいた。

更木や涅は興味がないように。碎蜂は不思議そうな目で。日番谷

は複雑そうな目を。他はどうでも良さそうに。同じ組織でありながら、既に分離していた。

「総隊長、十三番隊副隊長穂積織を連れてきました」

「うむ。では、隊首会を始めるかの」

たった十人の会。人数がどうなろうと、各隊がほとんど独立したよ
うなものだから、互いのことは無関係を決め込む。どちらにしろ、厄
介ごとには巻き込まれたくない。そしてそれは、コイツらだけじゃ無
く、俺だって同じだ。

「さて、まずは、穂積副隊長」

「……」

老成の翁などと、そんな可愛いものではない。老いてますます健
在、いやそれ以上の存在感を放つ男に、名を呼ばれる。無意識で、そ
の存在感を威圧と認識する。腰のナイフが無いことに、手を伸ばして
から気づいた。

「ほう、儂の前で構えるか」

「……チツ」

「ホツホツ、よい。お主にはやつてもらいたい事があるでな」

好々爺然とした笑いで、場を和ませる。しかし、歴戦の中で研ぎ澄
まされた殺気が、俺にだけ向けられていた。首筋に突きつけられた刃
を、俺の眼は捉えていた。

「新たな五番隊隊長に、お主を任ずる。受けてくれぬか」

「イヤだね」

「穂積……」

案の定、言い渡された就任命令。四十六室の権限をその身に背負う
ならば、命令する事など容易なはずなのに、態々こういう形で言うな
らば、拒否権はあるはずだ。

「ほう、何故か」

「…向かねーよ。俺にはな」

「ならば、これが命令であるならば。お主はどうする気じゃ」

「…アンタを殺してでも、その席を蹴り飛ばす」

殺気には、殺気で応える。ぶつけ合った殺気は、常人のものではな

い。一方は歴戦の殺気を。一方は真に死を含む殺気を。互いが、互いに規格外。

まわりは、それに気付かない。俺と爺さんの間でだけ、交わされたのだから。コイツらなら、精々が言葉だけのやり取りでは起こり得ない剣呑な雰囲気、少し首をかしげるくらいだろう。

「どうあっても、拒否するか」

「ああ。アイツの後釜なんて、死んでも御免だ。そうでなくても、人の心が分からない人間が、人の上に立ったところで、崩れ落ちるのは目に見えてる。組織つてのはそんなもんだろ。何よりも厚く、何よりも脆い。責任なんて真っ平だ。副隊長も渋々だったんだぜ？」

「……仕方なからうて。ならば、代わりに命令を下す。…阿散井副隊長。お主に、現世への先遣隊の人選を任せる。誰を連れて行こうと構わん。此奴を除いて六人、選んでおけ」

阿散井は、唐突な指名に驚いていた。だが、現世で一番馴染めるとしたら、たしかにコイツなのは間違いない。

しかし。

「俺が行く理由は？」

「僕の命令を払いのけたのなら、せめてこれくらいはやってもらわんとの」

「チツ、初めからこのつもりだったんじゃないか。狸じじいが」

「貴様…！総隊長に向けて不敬な…！！」

碎蜂が怒りを露わにして、顔を向ける。端正な顔は、大きく歪んでいた。

不敬だと？上からの命令に従うだけの奴らに、そんなものを払えというのか？コイツは。かろうじて払えるとしたら、浮竹隊長と京楽隊長、卯ノ花隊長くらいだ。

「…俺が本気で敬意を表する相手が、この場にはいないだけだよ」

「貴様…、死にたいのか！」

「なら、殺してみろよ。何も分かってないヤツが、一丁前に口を利くな。鬱陶しいんだよ、オマエ」

「なっ…!!」

「やめんか！碎蜂隊長。穂積副隊長、お主もじゃ。貴様の実力が飛び抜けて異質なのは承知しておる。だからこそ、貴様を先遣隊に加えたのじゃ。藍染惣右介は必ず現世を狙う」

「現世を？なんでまた」

藍染の狙いというものには一切合切興味が無いが、何となく聞き返した。

曰く、藍染の目的は『王鍵』の創成。それには、重霊地と呼ばれる土地と多くの魂魄が必要らしい。今現在、その重霊地とやらは空座町らしく、藍染はいずれそこへ赴くのだと言う。

それは俺にとつて、期せずとも向こうから殺したい相手がやってくるのと同じで。そう理解した途端、口角が上がったのが分かった。

「まあいい。その先遣隊とやらに加わればいいんだな？」

返り事は聞かず。俺はそう言いながら隊舎を勝手に出た。

「ふむ…。浮竹よ、彼奴はあのような性格じゃったかの」

「それは…。俺にも分かりません。ですが、少なくともあいつが『穂積織』である事は確かです」

俺は、長く伸びた自慢の白髭を撫でながら、ある男について思案を巡らせた。

穂積織。十三番隊副隊長。その地位に就いて少なくとも50年は経っておろう。じゃが、俺から見ればまだ小僧であると。数刻前に言葉をお交すまでは、そう思っておった。

言葉と共に交わした殺気は、俺のと比べても何ら遜色がなかった。たかが50年足らずの経験で得られるものでは無い。もつと濃い、或いは死そのものを経験したとでも言うのか。どちらにしろ、計り知れん童であることよ。

ああいった死神がおるのは、なかなか愉快なことじゃ。生真面目で、規律正しく。見ていて気持ちがいいのも良いが、自分から棒を外

れ、己が道を歩む者が、時代を引つ張る事になるのは多々あることじゃ。

尤も、彼奴の場合は、背負った者すべてを殺す勢いではあるがの。「ホツホツ、中々面白い童がおるでな。浮竹よ、手綱はしつかり握っておく事じゃ。アレは何れ、全てを超越しかねん男じゃ。情けない話じゃが、この尸魂界が危機に晒された時、儂でなく、彼奴が光になるじやろうて」

「先生…」

藍染惣右介の斬魄刀『鏡花水月』。五感を支配する能力からは、この儂すらも逃れることが叶わず。五感を封じられた以上、儂は彼奴藍染に手も足も出せん。強者となると、戦闘の比重が視覚に依る故。かつての平子真子の斬魄刀がそれじゃったかの。

じゃが、数日前に儂の目の前で繰り広げられた戦闘は、仮にそうではなくても凄まじい。

並みの死神では目が追いつかないじやろう。しかも、彼奴總積が使つておった歩法は、紛れも無い『縮地』じゃった。まさか、命あるうちにその使い手に出会えるとは、露ほども思わなんだ。

五感を支配された恐怖を背に、時間が止まったようにすら感じる高速戦闘。

「果たして、彼奴の存在が、吉と出るか凶と出るか…」

浸つておつた思考から、意識を起こす。飽きやすい此奴らが文句を言わずここにいる辺り、儂が逡巡しておつた時間は長くはなかったようじゃの。

「…さて、では。今後とも藍染惣右介、及びその一派には万全の警戒を払いつつ。いずれ奴とは決着をつけねばなるまいて」

その一言で、目に力が入る者がおる。笑みを溢す者もおる。さも興味ないというような奴もおる。

儂は、喝を入れんと、斬魄刀でもある杖を叩きつける。重く、荘厳に。余計な空間が重たさを与える、僅か十人の空間に、その音が響く。

「各自、決戦の日まで、力を蓄えよ!!」

それを以つて、隊首会は終わりを迎えた。

その後、儂は誰もいない空間で、これからの事を考えておった。

「穂積織……。穂積の名は確か、東流魂街の……」

無意識の思考で放たれた声は、誰かに聞かれるはずもなく。

一人でいるには広辺無大な空間に、僅かな響きを残して消えた。

「織さんっ！」

「ん？ああ、勇音か」

私は、見知った姿を見かけて、子どものように弾んだ声を掛けた。少し恥ずかしくなったけど、今は心配の方が上回っていた。

見れば、その出で立ちは。いくつか傷跡は残るものの、外傷は殆ど負っていないようで。左腕を骨折していたらしいが、卯ノ花隊長が数日でくつつけたらしい。なんでも、綺麗に折れていたのが功を奏したとか。

「で、どうしたんだ？」

「…織さん、あの後藍染とは、どうなったんですか」

みんなの前で藍染が何をしたのかは、既に聞いていた。四番隊には、これといった余波が訪れるわけではなかったが、三、五、九の各隊では、信頼していた隊長が突如裏切り、あまつさえ虚の側についてのだ。その傷跡は、どうしようもなく深く、大きい。

心の傷は、回道で治せるものではない。それは、時間が治すことを信じるほかない。割と仲が良かった雛森さんも、気丈に振る舞ってはいるけど、その痛みは、私の想像をはるかに超えるものはずだ。

そして、あの場にいた人たちが言うには。

織さんは、あの藍染隊長と互角に渡り合い。その上、互いに刃を突きつけあったのだという。地力で向こうが上回るために、最終的には敗れる形になったというが。織さんと藍染隊長に、どんな繋がりがあったのかは、少し気になるところだった。

この、内に燻るモヤモヤが何なのか。私には計りかねる。嫉妬か、好奇心か、怒りか。どちらにしても、プラスの感情では無いはずだっ

た。

「…アイツはもう隊長じゃないぞ？…まあ、何があったのかって言われてもな」

「さり気無く心を読まないでください！」

「ははは、まあ怒るなって。そうだな…。…ただ俺が、アイツを殺そうとしただけかもな」

織さんは、笑ってそう言った。その笑みはいつものように、空虚さを湛えていた。そのはずなのに、私にはもう、何も無いように見えて。

だからなのか、ふと、口をついたのは。

「私には、回道しか取り柄がありません」

「は？何だよいきなり」

「治せるものは何でも治します。だけど、あなたの傷空だけは、私には治直せない」

「……」

言外の意味は、あつさりと伝わったらしく。気恥ずかしくもあるけど、その言の葉は、成長をやめなかった。きっと、今の私の顔は熟れた林檎のように赤いのだろう。

「もうあなたには、傷ついてほしくないんです」

「…傷なんか無いさ。オマエに治せないものはな。空っぽの心に、傷なんかつかない。だってそうだろう？中身が無いんだから。伽藍の心を抱える虚しさは、誰だって分かるはずがない。そう分かってて、俺を止めたいなら、俺の隣か、俺の前に立ってから言え」

手に力が入る。自分の袖を、自分の手でぎゅっと握りしめる。シワができるくらいに。

私の心に、種火のようだけど、たしかに火が灯った。

焚べるような薪は幾らでもある。切欠が無かっただけで。

私には、人を殺せるような強さはない。むしろ、それを思うだけで発狂するかも知れない。だけど織さんは、そんな道を歩く人だ。

ならば私は。あなたの隣に、あなたの前に立つくらいに、強くなるう。灯ったのは、そんな覚悟の炎だった。

そう思った時、腰に挿した斬魄刀が、少し震えた気がした。

第2章 破面編 『殺人衝動』 “Paradox murderers”

27

ある晴れた日。俺は、その地に降り立った。

草履では慣れないアスファルトの感覚。昨晚降っただろう雨が、まだ小さな水たまりを残していた。

日の光は、肉体の無い霊体にも影を与える。だから光は、俺の目にも、容赦なく突き刺さる。生の感覚が、痛い。死に慣れきった眼が、痛みを訴えるのだ。

「群れるとウザいから、1人先に来てはみたけどな…」

やはりと言うべきか、やる事がない。

たまに見る地縛霊以外には、俺を見る奴がないのをいい事に、わりと自由に歩き回っていた。空座町の中心は完全に住宅街で、かなり密集していた。

町の外れには、いくつか廃ビルがあつた。中に何かがあつたりするみたいだが、見ようと思うほど興味も湧かなかつた。

俺はそんなだったが、式は。どこか懐かしむ目で、それらを眺めていた。

「見た事があるのか？式」

『……そうだな。オレは見た事ないけど、見たことはあるのかも知れない。思い出せないというか、そこは空っぽだからな」

「ふーん…」

斬魄刀は、持ち主の魂の写し身だと言う。ならば、『唯式』は俺の魂の写し身である。斬魄刀の方に見覚えがあつて、その持ち主に無いというのは、かなり変なことである気がするけども、これを気にし続けるのは、多分マッドな研究者くらいだ。

俺はそう思うことにし、流石に深くなってきた夜を見て、そろそろ知己の所へ足を運ぼうと決めた。

俺の、ではなく、オレの。切り捨てたオレの繋がりを利用する。気

に食わなくはあるが、これに関しては俺の問題だから、割り切るのに
そう時間はかからなかった。

考えながら歩いていたら、時間の経過はあまり気にならなかった。
懐かしい空き地じみた土地に、ポツンと立っている古めかしい建
物。時代がズレていると感じるのは、気のせいでは無いだろう。た
だ、纏っている胡散臭さは、あの廃ビルと大差なかったように見えた。
俺にとっては慣れた、でも現代ではそうそうお目にかかれないだろ
う、扉を開き、中へ足を入れる。

「浦原、居ないのか？」

中も、外見を裏切らない古めかしい木造作り。駄菓子屋を謳う『浦
原商店』は、側から見たらそうであつても、その実態はマッドサイエ
ンティストの研究室のようなものだ。ふと、浦原が愛用している下駄
以外の、茶色の革靴が目についた。間が悪い事に、客を迎えてたん
だろうか。

「ハイハイ、どちらサンでしょう？」

そんな考えなど露も知らないというように、ソイツはやってきた。
緑と白のストライプが入った帽子に、緑色の甚平。片時も手放さない
杖。見たところは間違いなく、あの浦原喜助だ。

「おや、穂積サンじゃないっスか」

「久しぶり…、いや、俺としては初めましてになるのかな？浦原」

「さあ？どういふことかは知らないっスガ、まあ上がってください。
まさかアナタがこのタイミングで来るとは思わなかったっスから、丁
度いい」

「は？丁度いいってどういう事だよ」

「まあまあ。今、アナタに会わせたい人が来てたんスよ」

手を引かれるままに、奥の居間へと連れて行かれた。それは恐ら
く、あの靴の持ち主の事だろう。だが、俺とどのような接点があるの
か。俺の記憶にも、記録にも。現世における知り合いはいなかったは
ずだった。

つまりそれは、浦原の知り合いという事だろう。マトモであるな
ら、いいんだけどな。

俺はそんな、浦原に抱くには筋違いとも取れる願望を胸に、妙に長く感じる廊下を歩いていた。

「さあ、こつちつス」

襖をスーツと開く。以前現世に来た時に顔を見せた時にいた、握菱鉄裁や、黒猫の他に、この場にそぐわない、真つ赤な色が咲いていた。「あら、君がそうなの？可愛い顔してるわね。本当に男の子？」

「……」

眼鏡をかけた、赤髪赤目の女。といっても、阿散井のような真紅では無い。その色は、少し霞んだ、赤。こげ茶のコートを側において、座布団の上にラフに座り込んでいた。

女は、蒼崎橙子と名乗った。

「初めまして。私は蒼崎橙子。好きに呼んでいいわよ。この人たちとは少々長い付き合いになるわ。よろしくね、織くん」

「…ああ」

「素っ気ないわね。私のこと嫌い？」

「いや。ただ、オマエとは、初めて会った気がしないってだけだ」

「へえ。喜助から聞いていた通り、面白い子ね」

随分と馴れ馴れしい。まるで、俺を知っていたかのように。元々はオレの知己であった浦原たちとは違う。これは、今の俺を知っているのだ。

「で、アンタらは何者なんだよ」

「んー、普通は言わないんだけどねえ。喜助たちも知ってるし、何より貴方、死神というよりこつち寄りみたいだし」

常人とはまた別の人種であることは見て取れる。それが何であるかは分からないが、少なくともコイツには、常識が通用しない。

死神や、人間、虚とも、その境界を異と為す存在。今の世界における第四勢力と言えるのだろう。そう言えるのかは定かでは無いが。

「私たちはね、『魔術師』と呼ばれる存在よ。ウィザード、キャスターなんて呼ばれてもいるわ。貴方たちで言えば、『鬼道』を使う人に近いのかしらね」

魔術師と。女はこう言った。女——橙子は、死神の存在も知ってい

るようだった。

「私は、喜助に見せてもらうまでは、死神の存在は知らなかったのだけどね。彼とは、この建物を建てた時からの付き合いよ。現世の建築を見てみたいとか言ってる。いくつかの魔術的要素を含んだ構造にしちやったわ。だって喜助なら、私の手なんて借りなくても、一人で建てられたはずだもの。なら、彼に出来ないことをやってやろうってね」

「ホント、最初に言われた時はびっくりしたんスよ。いくら調べてもそんな跡は見つからないんスから」

「当たり前じゃない。存在を悟らせないのが上手い使い方なのよ。それに、私が仕込んだのは条件発動式のルーンだから、別に心配は要らないわ」

「まあ、橙子サンがそう言うならいいんスけど…」

かなり気の置けない関係らしい。嫉妬も何も無いが、あの浦原とこういう関係にある人間というのに、少々驚きを隠せないのだ。

「穂積サン、もしかしたら寢床を探してるんスか？」

「ん？ああ。野宿じゃないならどこでもいいぜ？」

「なら、橙子サンのところはどうです？スペースなら幾らでもあるでしょう」

「あそこは人が住むにはキツイわよ。でもそうね…。ああ、私が前使っていたアパートの部屋があるわ。完全に引き払っちゃってるから何もないけど、多分冷蔵庫くらいならあると思うわよ」

「いいの？」

「構わないわよ。鍵はここにあるし、部屋の契約は私名義のままだから、好きに使ってもらっていいわ」

本題に入ったかと思えば、あれよあれよと流されるように住処が決まった。まあ、折角だから乗っかろうか。

俺は、投げ渡された鍵を受け取った。

「浦原、服、あるか？」

「服ですか？ワタシと同じのでもいいなら…」

「馬鹿、そんなんじゃない。普通のだよ」

「そんなんって…。割と傷つくんスけど」

「そんな可愛い玉じゃないだろ、オマエ。じゃあ義骸よこせ」

「ハイハイ。少し待ってて下さい」

軽く浦原を押搦って義骸を貰った後、俺は早速橙子に教えてもらった場所へ、足を運んだのだ。

闇は深い。炎よりも無機的な光が照らす夜は、明るい代わりに、その境界は明確だ。器子が形作る肉体は、霊体よりも明確に世界と結びつく。その分、線は多く走るが、俺はその事実で、俺が世界に在ることを実感できる気がして。闇に紛れる低い雲に蓋をされても、俺は陽気に鼻唄を歌ったのだった。

目を開けると、見慣れない闇。線という線は呑み込まれ、しばらくの間、自分が眼を開けていることにすら気が付かなかった。

これが、俺の精神世界。そう気づくまでに、今日はかなりの時間を要した。ここに来るたびに這いずり回る感覚が、背筋を強張らせる。いつもと変わらない、ともすれば宇宙に見える混沌の中で、俺はいつもの奴に対面したはずだった。

『あらあら、そんなに警戒しなくてもいいのに』

「……誰だ、オマエ」

無い。見えない。薄くすらも無い。

その事に、俺は恐怖した。コイツは生きているのかと。

『失礼ね。私はちゃんと生きているわ。ただ、貴方達とは根幹が違うだけ』

死を突きつけられながらも、それを気にせず。女は呆れるように笑っていった。

そのふわりと舞う鮮やかな金色の襲には、幾つもの花があしらわれていた。たおやかな女性の顔は、見慣れた式の顔の面影を残していた。

だからか、ふと口をついて、こんな言葉が出てきた。

「式……、なのか?」

『そう、私は「式」。同じ名を持ちながら、貴方とも彼女とも違う存在よ』

『式』はあっさり認め、そう言った。

長く伸びた髪は綺麗に下ろされていて、まるで絹のような見た目だ。普段の式とはまるで違う。俺はそう思った。

「どういう事だ。いまさら女らしくなって」

『いいえ、言っただはずよ。私は貴方とも、彼女とも違う。強いて言うなら、貴方達のルーツとでも言うべきかしら』

「ルーツ根源だつて?じゃあ何だ、オマエは俺の母親つてことか?」

言ってることに理解が及ばず、思考と同時に口が無意識に疑問を呈

す。そんな無作法にも、彼女は笑って言った。

『そうかも知れないわね。あら、もう時間みたいね。残念だけど、楽しかったわ。他愛の無い話に興じるのも、案外心踊るものね』

「…そうかよ」

心から笑っている彼女に、殺意など感じるはずもなく。いや、もともと殺せないなら、殺意を抱くことなど有り得ない。

『さて、楽しませてくれたお礼に、1つアドバイスしてあげるわ』

達観しながらも、それを感じさせない無邪気な笑顔。それを向けられて、思わず顔を逸らした。

『踏み込みなさい。私の下にたどり着くには、まだ足りないわ。…ふふっ、じゃあ、また会うのを楽しみにしているわ。願わくば、それが夢で終わらないことを…』

耳に入る言葉を反芻する間も無く、俺の意識は落ちていく。足りない。足りない。手を伸ばしても届かない。

アレが俺の根源^{ルーツ}ならば、俺は辿り着いてみせる。そしてそれこそが、回帰することの真なる意味なのだ、俺は理解した。

超えろ。越えろ。その境界は見えず、壊れず。されど形を持つが故に其は死を内包する。汝の眼が、殺すためにあるのであれば。

超えろ。越えろ。殺してでも、そこに足を踏み入れろ。そこは未開にして未踏。あらゆる起源にして結果たるもの。そこに立つならば。俺は――。

目を開けると、見慣れない白。暗青のカーテンは光を通さなかったが、もう一つ、カーテンがついていなかった窓から入る僅かな光に、部屋の色を知覚させられた。

碌にアドレスも入っていない固定電話に、小さな音を立てて稼働する冷蔵庫。俺は床に寝ても良かったが、予想に反してベッドがあったから、そこに横になっていた。

殺風景な部屋は、妙に現実を感じさせる。義骸に入っているからか、少し重たく感じる身体をよそに、冷蔵庫から適当に水の入ったペットボトルを取り出した。

パキツ、というプラスチックが千切れる音が、夢と現実を切り離れた。喉を落ちる冷水が、微睡んだ身体を無理矢理叩き起こしていく。ぎしり、と音を立てて、ベッドに座り込む。スプリングが沈み込み、その感覚が服越しに皮膚を叩いた。

「もうすぐしたら、アイツらが来るって言ってたっけか」

そもそも俺は先遣隊の一隊員だ。この役目は、いわば現世の警備と情報収集ということになる。

物思いに耽っていると、ふと電話が鳴り出す。この番号を知るのは、今のところ浦原と、蒼崎橙子の2人。液晶には非通知とカタカナで表示されたから、どっちかは分からない。

「…もしもし」

『ああ、起きてたんスね。良かった良かった。で、早速なんスが』
敵サンのお出ましっス、と。変わらない口調ながらも、僅かに重たい雰囲気を感じさせた。

霊圧知覚を走らせると、遠く離れた丘の上に2人。かなり強大な霊圧を秘めた敵のようだった。

「で、行けばいいの？」

『ハイ。アタシらが行くまでの時間稼ぎっス。倒す必要はありません』

「そうか。ま、やれるだけやってみるさ」

俺はそう言っ、電話の横に無造作に放られていたものを手に取った。下手くそなデザインの兎を頭からかぶったそれは、義魂丸と呼ばれるものだ。兎のほうはチャッピーと言うらしいが、全くもって興味が湧かなかった。

飲み込むにはすこし大きく見えるが、よく分からない技術のせいで、つつかえることなく滑るように飲み込めるらしい。

そうして義骸から解放された俺は、窓から飛び出し、瞬歩でその場所へと急いだ。

強大な霊圧同士が戦っているのを感じた。どちらも僅かに似たような霊圧をしていた。

たどり着く頃には、その霊圧の揺らぎも、凧のように静まっていた。また、見覚えのある橙が倒れていた。

その横に、ふわりと降り立つ。

「久しぶりだな、黒崎。つか、なんてザマだよ」

「う、るせ……え」

「へえ。言い返す気力くらいしか残ってないのか。随分と派手にやられたみたいだ」

そう言つて、目の前に立ちはだかる男を見た。3メートルはあろうかという色黒で筋骨隆々の巨漢と、対照的に真白で、細身の男。頭部には、仮面と思しき名残が見える。

「で、オマエらは誰だ？^{アランカル}破面^{アランカル}つてヤツか？」

「おう。オレは破面^{アランカル}№^{アランカル}10、ヤミー・リヤルゴだ」

見た目通りに、粗暴な口ぶり。言うまでもなく、俺を含めて自分以外は、等しく雑魚扱いという風に。

そう思っていると、隣の細身の破面からの視線が、妙に鋭くなっている事に気付いた。値踏みするような、そんな視線だった。

「おい。さつきからジロジロ見るんじゃない。鬱陶しいぞ」

「ふん。お前がどう思おうと知ったことではない。それはそうと、貴様が穂積織で間違いないな」

「どうでも良いけど、俺のこと知ってるのか？ ストーカーかよ」

「藍染様の御命令だ。穂積織という男についての情報は、委細漏らさずに伝えるようにとな」

「そういうのストーカー^{アランカル}つて言うと思うんだが」

「知らん。ヤミー、この男とは戦つて構わん」

「へえ！ 良いじゃねえか！ んじゃあ、ちつとは楽しませてみるやア!!」
知らぬ間に、戦いの幕が上がっていた。

ああ、殺す気もしない相手を殺すのは、ただ骨が折れる作業でしかないのに。余計な事は増やさないで欲しい。

それよりも、俺は。

細いやつ。お前の方を、殺してやりたいんだよ。

開幕ベルは、敵の拳が地面を砕く音だった。

その膂力は、死神が持ち得るものでは無く。だからこそ、コイツが本質的に虚である事を嫌でも認識させられた。別にこんな怪力が死神の中にいない訳ではないだろうが、少なくとも俺は見たことがなかった。

「チヨロチヨロ逃げんじゃねえ！雑魚があ！」

「はあ。うるさいぞオマエ。もう少し静かに出来ないのか？」

瞬歩のみで細かく動きながら避けていく。浦原たちが来るまでの間の時間稼ぎではあるが、ぶつちやけ殺せないこともない。向こうが油断している間に、死を押し付けてやればいい。

斬魄刀は挿したまま。俺は手をかざした。

「【破道の三十三・蒼火墜】」

「ぬおっ!？」

破面は咄嗟に、その太い腕を重ねて即席の盾を構えた。間合いに滑り込むようにして現れたソレに、俺の放った鬼道はぶつかった。

もくもくと上がる煙。浦原曰く『鋼皮』^{イェロ}と呼ばれる、霊圧により強度を増す破面特有の力なら、三十番台の鬼道程度、訳ないらしい。硬化が進むと刃も通さなくなるらしいが、それは俺にとって、なんの障碍にもならなかった。

死ぬ事に、強度は関係ない。線をなぞれば、それは死ぬ。

俺の本来の得物はこの斬魄刀だが、基本的にはナイフくらいが丁度いい。それが手元がないのを、今は残念に思うばかりだ。不思議と、そう思った。

「ま、傷なんざ付かないよなあ」

「ふう。今のはヒヤツとしちまった。雑魚は雑魚なりに頑張ったってところかあ？」

「うるさいな。俺はオマエになんて興味ないんだよ」

俺はそう言って、斬魄刀を九度振るう。

『九戀雲耀』
くれんうんよう

瞬間、不可視の刃が敵を襲う。実体のない真空刃では、コイツの鋼皮を切り裂くのは無理だろうが、吹き飛ばすには十分な勢いだ。

「ぬおっ!？」

敵はその勢いのまま木々に突っ込み、煙の中に消えた。

大した時間稼ぎにもならないが、標的を変えるには十分。

俺は切っ先を、もう1人の破面に向ける。ソイツは全くの無表情で、その殺気を受け止めた。

「別に戦闘狂って訳じゃないけどさ、どうにもオマエとは戦ってみた
いんだよ」

「ほう。俺に向けた殺気はそういう意味か」

その表情は、例えようのない能面。喜怒哀樂のあらゆる表情が無い、真白な仮面。無と言っても差し支えないだろう。

俺は感情表現が得意では無い。というか、その波がほとんどない。いつか白哉に、『兄はもう少し感情を出したらどうだ』と言われたことがある。そっくりそのまま投げ返したが。

この男の能面っぷりは、白哉以上だ。

「全力でないとは言え、ヤミーをこころも簡単にあしらうとはな。やはり貴様は危険だ」

そう言つて、一步を踏み出した次の瞬間。

「ここで殺しておくべきか」

絶対の刃が、背後から振り下ろされた。

俺は藍染様から、黒崎一護の観察を命じられた。そして、それと同じ時に注意すべき事を言い渡された。

『ああ、ウルキオラ。もし、穂積織という男が現れたら、十分に気をつける事だ』

単純で、俺にはその真意が問えなかったが、特に疑問を抱かずにそ

の命を受け入れた。

そして今、その意味をようやく理解した。

いずれ藍染様の脅威になる。そういう意味では、黒崎一護よりも危険だと思った。故に排除する。感じた霊圧は並の死神程度だったから、俺は響転ソニードで接近し、手刀で首を落とそうとした。

「…っ」

「これには反応するのか」

その手刀は、斬魄刀の腹で止められた。刃に手を添えて受け止めるところから、どうやら膂力では俺の方が上回っているようだが、スピードは大差ないだろう。

未だ、互いに全力ではない。底が見えない。藍染様とはまた別の、なんとも言えない違和感。いや、これは…？

僅かに意識が思考に逸れる。その刹那、視界の縁に蒼が見えた気がした。

感じたことのない恐怖。そう形容するしかない感覚が、全身を巡った。

恐怖という感情を知らないはずの俺が、それを抱いた。

「っ!」

「あ。避けやがった。本能か？」

「…なんだ今のは」

「どういう意味だよ」

「お前は俺に何を見た」

「…やつぱり、本能的なものなのか」

互いに会話が噛み合わない。しかし、何処かで俺は確信していた。
——奴は俺を見ていない。

その眼は、俺に内包された、俺にも分からないナニカを捉えている。

「俺の質問に答えろ。穂積織」

「答える義務はないぜ。破面アラシカル」

乾いた風が、真緑の葉を運ぶ。数枚の葉が俺と奴の間に躍り出た。

そしてそれらは、横合いからやって来た攻撃により、塵と化した。

「ふん。虚弾バラか」

俺と奴の方へ、無差別に放たれた弾丸。俺は拳でそれをはたき落とし、奴は鬼道を張ってそれを防いだ。

にも関わらず、延々とそれは打たれ続ける。

不意に、虚弾の嵐が止んだ。

「クソがあ……。オイ死神…、テメエ今からブチ殺す！」

純然な怒気を、煙のように立ち昇らせながら、ヤミーが立ちはだかった。

「筋肉ダルマか…。オマエに用はないぞ？ 確かにオマエ強いけどさ、強いだけなら興味ないんだ」

それに、と穂積織は付け加える。

「もう俺の役目も終わりだからな」

苛立ちを隠さずに、ヤミーが放った虚閃^{セロ}が、穂積織を呑み込む。

そう思われた刹那。

虚閃よりも真つ赤な、まるで血のような色の盾が現れ、虚閃を弾いた。

「相変わらず便利だよな。オマエの斬魄刀。万能すぎてさ」

「買い被り過ぎっスよ。ただ、出来ることが多いだけっス」

「それを万能っていうんだよ」

藍染様が最警戒する頭脳。あの方を上回る知能。

浦原喜助が、その顔に余裕の笑みを浮かべて現れた。

「遅かったな」

「まあ、準備に手間取ったんスよ」

「あ、そう」

相変わらず、胡散臭い言動だ。

浦原の斬魄刀『紅姫』は、いつそ羨ましいくらいの万能性を持つ斬魄刀。その鋭い刃は何者をも斬り裂き、顕現する真紅の盾は全てを弾く。

誇張ではなく、事実、放たれた虚閃セロを難なく弾いている。

俺の『唯式』は、そこまで万能ではない。

まあ、関係ない。俺に出来るのは、ただ殺すだけだ。

「で、破面アランカル。浦原に夜一まで来たんだ。オマエらに勝ちの目はほとんど残ってない。俺としてはこのまま戦ってもいいけど、オマエらはそう考えないだろ？」

「ふん。俺たちの役目はあくまでも調査だ。まあ、その必要も無かった様だな」

そう言って破面は、背後で治療を受ける黒崎一護を見た。いや、正確には、その治療を行なっている女を。視線を辿れば分かったことだ。

しかし、確かにこの女の能力には驚くべきものがある。時間回帰とでも言うべき、摩訶不思議な現象だった。確かに、狙われるかも知れないな。

不意に、破面が虚空に手を伸ばす。畳まれた指が、軽く擦れて音を鳴らした。

同時に、空間が裂ける。それは、藍染惣右介が消えていったあの穴と同じものだった。

「藍染様に報告しておこう。『黒崎一護は、殺す価値もない屑でした』とな」

黒崎一護は、悔しいのか、恨めしいのか。そんなごちゃごちゃした感情を目に映して破面を睨む。その目に意志はあるが、力がない。

破面からすれば、もはや興味の対象ですら無いのだろう。

「穂積織」

破面がその穴に足を踏み入れた時、不意に、俺の名を口にした。俺はゆっくりと目を向けた。

「貴様は俺が手ずから始末しよう。その力、並大抵の破面では歯が立たないだろうからな」

「へえ、奇遇だな。俺もそう思っていたところだ。首を洗って待ってる、破面」

「ふん、貴様が生きていればの話だがな。行くぞヤミー」

「あ？わーったよ。おいカス共！テメエらいつかぶっ殺してやるからな！」

その言葉を最後に、裂けた口は勢いよく閉じた。

「あらら、敵サン帰っちゃいましたね。折角この携帯義骸準備したのに」

「良かったじゃないか。使わずに済んで。ただの身代わりだろ？」

「遊んでみたかったんすけどねえ。ま、何も無いならそれで良いっす」

戯けるように肩をすくませ、黒崎たちのほうへ歩いていく。相変わらず胡散臭い甚平が、風に乗って翻った。

俺はさつきまで口が裂けていた虚空を見つめていた。真一文字に走る線を、俺の眼は捉えていた。

「いやあ、流石穂積サンっすねえ」

「全くじゃ。あのヤミーとかいう破面^{アラシカル}。パワーで押しってくるタイプ

じゃったが、見た目以上にタフじゃった。正直、甘く見ておったと言わざるを得ん」

「夜一サンもそう言うんすか？というか、穂積サン、昔よりかなり強くなってませんか？」

「ああ。スピードでは、ともすれば儂をも超えかねんぞ」

辛うじて移動できる黒崎さん以外の、チャドサン達を抱えて、アタ

シ達は家へと向かった。

幸いにも、一般の人間にはこれといった被害がなかったから、抉れた地形の隠蔽だけ施してその場を離れた。

しかし、穂積サンも破面も、恐ろしいっスねえ。

「あの人達、互いに本気出してなかったっスね」

「そうじゃな。して喜助。お主の切り札、どこまで進んどんじゃ？」

「アレは奥の手っスよ。まあ、そう遠くないうちに出番は来るでしょう。黒崎サンの力も、彼らに強化してもらいます。あと未知数なのは…」

「藍染側の戦力と、穂積織…か。そういえば、穂積はどうしたんじゃ」
「彼にはそのまま帰ってもらいました。明日、ウチに来るように言っています」

現在、霊体であるアタシ達は、常人には見えない。時折佇む地縛霊達も、ただアタシ達を認識するだけで、干渉はしてこない。

「さ、着いたっス。全員、部屋に寝かしといて下さい。井上サンの治療で、怪我自体は殆ど回復してますから、あとは目を覚ますのを待つだけっス」

「分かった」

卓袱台のある居間から、さらに襖を隔てた奥に、布団を敷いて寝かせる。あまり広くはないから、少々窮屈になるけども、まあ問題はなっスね。

夜一サンは猫になって寝てるし、鉄裁サンはジン太や雨と下でしよう。

じゃあアタシも、自分のやる事をやることにしましょう。

そう思って、アタシは襖を閉じた。

その日、あっさり戦闘は終わった。案外味気ないファーストコンタクトだった。俺にとっては、非常に興味深いものだったが。

細っこい方の破面は、何となく俺と似てると思った。

人並み外れたという意味ではなく。それは、伽藍堂という意味。まるで感情の浮かばない能面は、多分そういう意味だ。

家に帰り、義骸に入った。霊体が本体のはずだが、元の鞘に収まったと感じたことに、少しため息を漏らした。

その日の昼も半ばを過ぎていて、現世でいうおやつ時間に近い頃合いだった。

橙子から幾ばくかの金を受け取っていた俺は、取り敢えず昼食を適当に見繕うことにした。家にいてもただ暇を持って余すだけだから、こうして外に出るのは、丁度いい暇つぶしだったと言える。

近くのコンビニで、目に入った弁当を手に取り、それを買った。ついでに水を何本か。

流石に外で食べるのは憚られたから、家に帰ろうとしたところで、ふと思いつ出した。

「そういえば橙子のヤツ、この辺りにいるって…」

住所を貰ったが、尸魂界住まいの俺に、現世の住所など分かるわけもなく。ただ、あの廃ビル群の中に居を構えているという話だったから、適当な廃ビルに足を踏み入れた。

底抜けの青空とは真反対の、どんよりとした廃ビル。暗く、重い霧囲気は、そのビルをより朽ちた物に見せていた。

二階、三階と階段を登り、丁度人の気配がしたところで、その扉を開いた。薄っすらと錆が浮いていたが、それほどボロくはなっていないらしく、思ったよりスムーズに蝶番は回った。

「ん？あら、織じゃない。なに、寂しくなったの？」

「いや。ただ近くに来たからな。暇だったから来ただけだ。飯、食っていいか？」

「別にいいわよ。なーんだ、私の分も買ってきてくれれば良かったのに」

「何で俺がそんなことしなくちゃいけないんだよ。買うなら自分で買ってくれ」

「つれないわね」

書類や本が山のように積まれた中、人一人が通れるくらいの動線は

確保されていた。黒革張りのソファア―に身を委ね、応接出来るくらいの体を成している机に、温めてもらった弁当を置いた。

「そういえば橙子。オマエ、何の仕事してるんだっけ？」

「あら、言っただけじゃなかったかしら」

俺がふと思った疑問を口にすると、態とらしく一息入れて、橙子は言った。

「ここは『伽藍の堂』。建築デザインなら何でもござれ。そんな所よ」

「へえ。そういえば浦原商店設計したって言っただけか。つーかオマエ魔術師なんじゃなかったのか？」

「人前じゃ名乗らないわよ。普通の魔術師なら、こんな事もしないだろうけどね」

へえ、と唸った。奥の台所……の体を繕った水道で沸かしたコーヒ―が、妙な現実味を誘った。

まだ日が沈むには早い時間。大きな窓から射し込む光は、電気が無くてもその部屋の様子を、ありありと映し出す。

それは別に幻想的でも何でもなく、ただ俺に、現実を認識させるだけ。

目の前のコーヒーは、立ち上らせていた湯気が無くなり、如何にも冷たいものだど主張するようだった。遅めの昼食を食べ終わり、そこからはただただ時間が過ぎるだけ。ここに来てむしろ、暇を持て余す事になってしまっていた。

「織」

「ん？」

不意に、何か書類と睨めっこしていた蒼崎橙子が声をあげた。

「最近、ここらで飛び降り自殺が起きてるのを知っているか？もう7人目なんだが」

「飛び降り自殺？いや、知らない。てか、その話し方なんだよ」

「知らないか。ああ、この話し方は、ただ変えただけだよ。スイツチつてやつだ」

「オマエの素…な訳でもないのか」

「ああ。どっちも私だ。人格じゃなく性格を切り替えてるんだよ、コレは」

眼鏡を取った橙子の目つきは、それは筆舌に尽くしがたいほどに悪い。しかし、粗暴さが混じりながらも、やはりコイツは蒼崎橙子なのだと思える話し方だったし、なにより俺にとっては、こちらの話しの方が好みだった。

「へえ。で、なにを言いかけたんだ？」

「最近巷でも、この自殺の件で持ちきりでね。この前、知り合いの奴から相談されたんだ」

「自殺…ねえ。こつちじゃ、死因に関してはあまり無頓着だからな。過程じゃなくて、死んだという事実だけがクローズアップされるんだよ。なにせ死者の世界だからな。しかし、自殺ってことは未練がある

んじゃないのか？そうになると、魂がそれに囚われて、いわゆる地縛霊になっちまうんだが」

「いや、遺書なんかは残されていないようだ。あつたら警察が公表してるはずだからな。きつと彼らに、未練なんてないんだろう。むしろ、彼ら自身の願いで飛んだんじゃないか？まあそれはともかく、お前の世界では霊魂はそういう認識なのか。いやむしろ、そっちの方が正しい認識か。魂というのは霊感が無ければ見えないんだろう？生憎、今の私には霊感が無くてね。彼女らが死んだという事実しか分かかっていない」

「なんだそりゃ。俺に見に行つてこいって言いたいのか？」

「別にそうは言っていない。ただ、もし見る必要があるなら、その感想を教えてほしくね」

「通らなきや、そんなもんは見えないよ」

「ここからはそう離れてはいない。全員同じところで死んでいるからな。巫条ビルと言ってな。今はもう使われていない本物の廃ビルだ」俺はそれを聞きながら、弁当の入ったコンビニの薄茶色のビニール袋をゴミ箱に投げ込んだ。

夕方に近い。もう数日で、先遣隊が総出でやって来るだろう。阿散井が選んだ面子は、朽木ルキア、斑目一角、綾瀬川弓親、松本乱菊。一番最後の奴が心配だと、何故か日番谷冬獅郎。それに阿散井自身と、俺。隊長一人と副隊長三人、朽木も斑目達も実力は高いから、この面子はかなり豪勢だと言える。

名付けて日番谷先遣隊。俺は人に従うのは好きではないが、これも仕方ないだろう。矢面に立つと、なにかと厄介なことが多い。

そういうわけでもないが、この魔術師との邂逅もまた、俺にとっての厄介事かもしれない。

俺は、狭つ苦しい部屋の扉に手をかけた。

「なんだ、今日は帰るのか？」

「ああ。ここにいてもやる事がないしな。ついでにその巫条ビルとやらでも見て来る」

「案外乗り気じゃないか。興味が湧いたのか？」

「そうかもな。というかその事件、嫌な予感がするんだよ。多分、^{魔術師}オマエらの側の、そんなオカルトじみた事件じゃない。間違はなく俺たちの側のものだ。浦原に言えば分かるかもしれないが、アイツは別の案件で忙しそうだしな。今回は俺がやるしかないだろう」

「私から見れば、お前たちの方がオカルトじみている。だがまあうまく行けば、世間も少しは静かになるかもな」

橙子はそんな、世捨て人のような台詞を吐いた。

実質、俺にとってなんの益も無い話だ。気まぐれに興味湧いただけの、死神としての日常に紛れそうな何気ない話だ。

ただ、もしソイツが殺しがいのある相手だったら。少しは面白くなるのだろうか。

ガチャリと閉まった扉から、机上の書類へと目を移す。珍しい仕事の書類だったから、割とやる気を出していた。

織が淹れてくれたコーヒーは、すっかり冷めてしまっていたが、その苦味はしっかりと私の奥へ流れ込んだ。

「靈魂…か」

魔術師から見て霊というのは、存在次元が違う。どこぞで起こったらしい願望器を争う儀式にもあるようなサーヴァントに代表される、高位存在とも言える。

だが、そうとは言えやはり、魔術師にとって霊は利用対象なのだ。降霊魔術や、^{ネクロマンサー}死霊魔術がそれだ。

故に、その存在を認知はしても、知ろうとはしなかった訳だ。私も、浦原喜助に会うまではそうだったのだから。

霊には霊の世界がある。そう知った時の衝撃といたら、もう笑うしか出来ないくらいのものであった。

そんな私が出会った、間違いなく我々魔術師寄りの存在。直死の魔眼は、確実に魔術の側の魔眼だ。

「さて、一体どうなるんだろうね。喜助も、織も、私も。まずまともな

出来事は起きなさそうだ」

くくつ、と自嘲気味に喉を鳴らす。

再びコーヒーを飲んで、その苦味を噛み締めながら、件の事件に思考を巡らせた。

飛び降り自殺。警察はそう断定しているし、おそらく間違いでは無い。ただ、そこに当人の意思が介在しないのが問題だ。世の中に自殺志願者が多いのは分かるが、みんながみんなこんな短期間に同じ所で自殺を図るとは思えない。

「自殺……では無く飛行か……。彼女らは多分、死ぬ気なんてさらさら無かったんだろう。遺書が無いのはその為だ。気分的には、買い物途中で車に撥ねられた、ぐらいなものだろう」

飛び降りには、その結果そのものが遺書めいたものになる。ぐしゃりと潰れた死体は、流れ出す鮮血と、血色が引き、陶器もかくやというほどの白い肢体が描く百合のようなコントラストを残すだろう。

それすらも意味がないのなら、やはり彼女たちに死ぬ気は無かった事になるのだ。

彼女たちは、ただ飛んだだけ。自分は飛べると、そう思って、空に墮ちた。飛ぶ事と落ちる事は、背反しているが故に連結した事象だ。そう認識しているから、人は飛ばないし、飛べない。しかし恐らく、彼女たちにはその認識が欠落していたのだろう。

しかし、共通して持っていた認識はある。

——俯瞰風景。

高所から見た景色は、地に足付けて生きるべき人間にとって、その地との隔たりを認識させる。自分もその風景の一部だと言うのに、まるで自分以外のあらゆる存在を俯瞰しているように感じる。そういう意味で空という異界は、ある種の魔境だ。理性と実感が摩擦し、意識が混乱し、やがて正常な認識が出来なくなり、理性が麻痺する。不意に、高所から飛び降りたらどうなるのだろうかと考えてしまうのは、そのいい例だし、何よりその例に、この事件の全てが収束するのかも知れない。

人間は出来ない事を想像内で行う。タブーを夢想し、幻想する。自

殺者たちはおそらく、あの場所でしかそれが出来なかつたんだろう。いや、あの場所で禁忌を幻想できてしまったのだ。

「おかしな話だ。人は飛びたいと度々想像しては、実験を繰り返し、そして人力では飛べないという現実を突きつけられる。なのに、それでも人は飛ぼうとする。まるで神にでもなりたがっているようにな。」

しかし、人は神にはなれないし、なつてはいけない。幻視ヒュプノスが現死タナトスになつた時、人は人でなくなってしまう。人は人の境界の内になきやいけないんだ」

背後の大窓に見える景色は、ここと変わらない廃ビルだらけ。しかし、地に足付けてふと見下ろせば、小さな猫が走っていくのが見えた。「死神というのも、得てして妙だな。あれは人でありながら、人を監視するものだ。死を回収しながら、自身もそれを孕んでいるのだから」

矛盾。しかし、あの眼を持つ者ならば。それすらも殺してしまうのだろうか。

僅かに夕焼け色に染まった西空。黒い鴉が煩く喚く。ふと横目で見たその姿に、一体私は何を幻視したのだろうか。

不気味なくらいに光る月。真暗な夜空に、まるで穴が空いたかのよう
に存在する。それは、病的なまでに青い。

昼間はかなり蒸し暑かった気がしたが、今はひんやりしていて、す
こし寒いまでであった。

巫条ビルとは言われても、土地勘が無い俺にとっては迷路も同じ。
だから、俺が歩いているのは、ただの気まぐれだった。

時折なびく風が、気味が悪いくらいの寒気をもたらす。

路地裏を1つ入れば、街灯の届かない闇が出迎える。現世の死神と
やらは、こんな闇を纏っている者だと認識されているのだろうか。大
鎌を持った者は見当たらないが、ここなら別に、忙しく走り回ってい
ても違和感は無いだらう。

ふと見上げた空にはやはり、真っ白で真っ青な月。
だけど。

「ああ、そこにいたのか」

うなじが、針シときしむ。

月にもたれかかるように浮かぶナニカ。俺はそれを視て、蒼い月の
眩しさに目を細めた。それでも、それらが纏っていた色は鮮明に網膜
に焼き付いた。

一点の曇りの無い白。それは、純白ではなく、真白なのだ。

ふわりと浮かぶ6つの影と、それを慈しむように手を伸ばす1つの
白。距離と光が世界を塗り潰し、俺の眼には朧げにしか映らないが、
それは多分――。

――ただ、俺にとって都合がいいという、それだけの話だった。

空という天板に掲げられていた月は墮ち、取って代わるようにして
鬱陶しく輝く太陽が昇る。

この時期、太陽というやつは夏を必要以上に暑く誇張するから、それでまた気分が悪くなる。

だから俺は、自己主張じみた陽光に対して耳を閉ざしながら、それが鬱陶しくなる前に浦原商店に駆け込んだ。

「おい。来たぞ」

「あらら、随分とお早いっすね」

「暑いのは嫌いだからな。どうせすぐには終わらないんだろ。ゆっくりさせてもらおうぞ」

「ハイハイ。まあ、適当に寛いでて下さい。こっちの準備もあるんで」「ああ」

そう言っつて、俺は以前来た時の間取りを思い出しながら、居間へと足を運ぶ。こちらではほとんど見かけない和の雰囲気は、やはり気分を落ち着かせるものがあつた。

ガタツという音と共に、襖を開く。ちやぶ台とテレビという、いかにもな部屋だが、何も無いというのが一番落ち着く俺にとっては、丁度いい部屋でもあつた。

ちやぶ台の上の煎餅とみかんを口にしながら、握菱が出したお茶でそれを流し込んで過ごすこと30分。気が長くない俺が、そろそろ待ちくたびれてきたところに、浦原が立ち入ってきた。

「それじゃあ穂積サン、準備できたんで付いてきて下さい」「分かった」

それからその後を付いて行くと、畳の下にあつた異常に長い梯子を降りる羽目になった。何処に行くのかも分からず少し悪態をついたが、相変わらず考えが読めず、俺の追求はのらりくらりと躲されてしまった。仕方なしにとりあえず梯子を降りきり、荒れた地面に足を下ろした。

「ここは…」

「アタシらは『勉強部屋』と呼んでいます。無限とはいきませんが、それなりに広く作つてあるつもりっす」

「勉強つて…。ああ、そういうことか」

頭に詰め込むのではなく、体に覚えこませる勉強。ともすれば命懸

けでもあるだろう。何処にでもありそうな青空だが、荒野と青空という組み合わせは俺に既視感を覚えさせた。

「オマエ、似たようなの作ってたよな？」

「思い出しました？確かにここは、双 \square の丘の地下に作ったのとほとんど同じものっすよ。まあ、大した違いはないっす」

「まあ、そんな事はどうでもいいよ」

俺は、浦原に向き直った。

「オマエは俺に、何をさせたいんだ？」

単刀直入。まどろっこしいのは好きではない。計略というのは遠回りで、かつ気づかれない様にするのが当然ではあるけども、こここの場においては何の意味もない。視たところ、ここには俺と浦原以外の何も無い。俺はまだ義骸に入ったままだが、浦原はすでに霊体——戦闘態勢だ。傍らに携えた杖は、コイツの斬魄刀以外の何物でも無い。

なら既に。やる事は定まっているように見えた。

「穂積サン。先の破面との戦いでわかった事があります。破面の情報もそうですが何よりも思ったのが、アナタの戦闘能力の未知数さっス」

「俺の情報も集めてたのか？俺が裏切るとでも？」

「いえいえ。そんな事は考えてないっす。ただ、不確定要素は排しておきたかった。アタシの計画に、狂いは許されないものですから」

「それは、オマエのプライドとかじゃないみたいだな」

「相手は藍染惣右介っすよ？全てが噛み合って初めて、彼に対抗する手段となる。アタシの立てた計画は、そんな余裕なんてこれっぽっちもない、計略と呼ぶにも拙いような代物っす。彼と戦うのに、正面上きつての戦闘は命がいくらあっても足りないんすよ。だから、アナタの話は寝耳に水ってやつでした」

話というのは、言うまでもなく俺と藍染の戦闘のことだろう。戦闘と呼ぶにも一方的だった気がするけれども、側から見れば戦いとして成立していたらしい。

藍染の強みは、鏡花水月だけではない。その霊圧や戦闘能力すら、

並とは隔絶している。藍染惣右介とは、俺が知る限り最も万能と言える死神なのだ。

唯一知能で上回る浦原は、それを自身の土俵に引つ張りださなければいけないかった。故に立てた、綱渡りのような計画。

「正面きつて藍染サンと戦える人がいるのなら、計画にも余裕が出ます。だから、知っておきたいんですよ。アナタの力を」

「なら、どうするんだ？ 戦闘力でも測るのか？ お得意のマジックアイテムで」

「それも考えたんすけどねえ。やっぱりきちんと理解するには、データ化ももちろんの事ですが、経験する事も大事だと思っスよ。というわけで」

浦原は一度言葉を区切った。仕込み杖が、斬魄刀の姿を顕す。つまりは、そういうことだ。

「穂積サン。少し手合わせしましょう」

「へえ…。珍しくギラついた目してるじゃん。…いいぜ、やろうか」

俺は義骸を脱ぎ捨て、斬魄刀を抜き、だらりと構えた。構えに見えないだろうが、十分。構えなど不要。ただ、斬るだけ。

「起きろ『紅姫』」

「開境しろ『唯式』」

口にした言霊が、力をもたらす。姿形に変化はない。場は整った。静かな殺気が、空間に反響する。起こるはずのない風が、土煙を巻き上げた。

耳なりがしそうな沈黙が、その帳を下ろして待ち構えている。

それを知ってか知らずか、いや、見えたなんて事はなかっただろう。しかし、俺たちは。示し合わせたように、その帳を斬り裂いて。互いが衝突した。

斬り結ぶ。刃を降ろす。――斬る。

互いの実力の端は見えず、まだ様子見の段階だ。

だけど、辺りの景色は様変わりしていた。鋭い刃で斬り裂かれたような滑らかな断面を空に向けて、大小様々な岩が座している。

『かみそりべにひめ剃刀紅姫』

『うんよう雲耀』

斬撃が飛ぶ。空の切っ先と血霞の切っ先が向かい合い、音を立てて消えていく。

開いた距離は刀の間合いには程遠いが、互いの射程は満たしていた。千日手。膠着というにも緊張が抜けているように感じ、埒があかないとついに飛び出したのは俺だった。

縮地で懐に踏み込み、胴を真一文字に斬り裂かんと刃を振るう。浦原はそれを刀の腹で受けながらも、勢いに逆らう事なく横に飛び、難なく着地した。

一息つきたげだが、俺が許さない。返す刀を振るいながら再び距離を詰める。予備動作が読まれやすいのか、浦原は再び軌道に刀を滑り込ませてきた。

「チツ」

「ふう、危ない危ない」

どの口が言ってるやがる。ギリギリで防いでいるように見えて、アイツにはおそらく全て見えているのだろう。あれでも元隊長だからな。

しかし、別に俺とてまだ全開にしたわけじゃない。

「そろそろいきいますか」

「はあ。ウォーミングアップってことか？随分派手だったな」

「アナタの実力が想定以上だったんすよ。ま、嬉しい誤算とでもしときましよう」

「そうかよ」

俺は肩を回すように、自分の前で刀を振るった。

『かみそりべにひめ剃刀紅姫』！

血の色のような刃が飛ぶ。目前に迫っても、俺は動かない。

「やられ過ぎて慣れたよ、ソレ」

「あら。バレちゃいました？しかし、どうやらソレがアナタの力のようっスね」

「ああ、そうだとも」

首を飛ばすように振るわれた刃を、同じく刀を振るって受け止める。赤い斬撃は、まるで見えない壁にぶち当たったように止められていた。これは、斬撃を放つと同時に背後に回った浦原の急襲。ソレを止めるのは、俺じゃなければ苦労したかもしれない。

しかし、唯式の力がそれを容易にする。

「壁を作る…ように見えますが、穂積サンの事ですから、少し違う気がするっスね」

「勘がいいな。答え合わせは、終わった後でいいな！」

そう言って、かみ付き合う刃を力を込めて勢いよく振り払う。

追撃。やり返すように背後に回って、袈裟斬り。それが振るわれる直前に、浦原は足を半歩引いて半身になる事で避け、流れた俺の身体へと刃を突き立てる。俺は無理矢理身体を捻ってそれをかろうじて躲し、倒れる前に受け身をとって立ち上がった。それを読んでいたかのような浦原の追撃は、それをかき消すように斬魄刀を払うことで消した。

刀が弧を描いて降ろされる。銀の切っ先が幾度となく弧を描き続け、相手を襲う。

これ自体はただの手合わせだ。俺の力を量るという名目の。しかし、底を知るためには俺の場合、殺し合わなければならない。殺せないという時点で、俺の力に蓋がされるのだ。自惚れではなく、これは俺の力が、直死の魔眼ありきであるから。

開いた間合いを見て、ふうと息を吐く。全身の筋肉を弛緩させ、感覚を緊張させる。

不意に浦原が、言の葉を紡いだ。

【破道の四・白雷】

「っ…！」

貫通力と射速を兼ねた牽制攻撃。白哉が好んで使う鬼道の1つだ。間合いを一瞬で飛び越えた光を、俺は体を傾けて避けた。

同時に、意識も逸れた。しまったと思った時には、浦原の掌の上だった。

「破道の七十三・双蓮蒼火墜！」

放たれた鬼道は、七十番台の強力な代物だった。それだけでも脅威だが、なにより不味いのは俺が避けられない体勢だったことだ。

不意打ちの白雷に体を大きく傾けてしまいバランスを崩したために反応が遅れ、刀を滑り込ませるにも間に合わないタイミングだった。

刹那の思考が永遠に延びる。その中で、1つの考えが雲のように浮かんだ。理性の範疇である事を理解した上で、それを現実に反映した。

浦原は俺を殺す気で戦っている。実力を見るとはそういう事だ。

ならばこちらも。殺さない程度に殺してやればいい。死から逃避できる程度に押し付けてやればいい。

もう隠すことなど出来はしない。何より、アイツが本気を見たいというのなら。もう躊躇う理由などどこにもなかった。

眼を見開く。世界は反転し、生溢れる世界に死が氾濫する。万象に死を。泰然と死を主張する線が、囁き、叫び、殺せという。

そんな中、迫る青白の大砲に走る禍々しい線を、俺は手刀でなぞった。

「コレは…、予想以上つスね…」

藍染と渡り合った、という情報は耳にしていました。しかし、実際自分の目で見えるまで、その事が信じられなかった。かくいう今も、まだ半信半疑です。なにせ、『反膜』^{ネガシオン}を斬ったという話ですからね。そしてそれは今、事実なのだと確信しました。

まさか、鬼道を素手で断ち切るなんて。

藍染が本気で戦ったという事実はどこにもない。しかし、反膜を斬り裂いたというただそれだけで、彼の興味の琴線には触れたはず。最大限の警戒と、最大級の興味。藍染は恐らく、穂積サンに対しこの2つを同時に抱いている。だから、彼には利用価値があります。

アタシが彼に求めているのは、戦闘能力も勿論のこと、さらにもう一つ。それは、鏡花水月の能力下においても戦えるという、一種異質な継戦能力。少なくとも護廷十三隊の殆どは完全催眠の支配下だろうから、穂積織というジョーカーは必要不可欠。

しかしこうは言いますが。厳しくなるっすけど、戦闘能力はやはり必要なんすよ。

アタシはこれでも元護廷十三隊隊長っすから、それなりには戦えるつもりではあります。

紅姫の斬撃に耐える障壁と、アタシと渡り合えるだけの戦闘能力なら、一先ずは及第点と言えます。しかし、そこから先も知っておきたい。

「穂積サン。アナタ、卍解は使えないんすか？」

「…使えないよ。今の所はな。なんだ、使えた方がいいか？」

彼は、さも興味が無いように言い捨てた。力を求めるのは人の性だと思ふんすが…、どうにも彼には、『力』に対する執着が薄いらしい。それはそれで構わないんすけど、アタシにとっちゃマズいことです。何故なら彼には、力を手に入れてもらわなければならないから。少なくとも今の彼では、崩玉を手に入れた藍染惣右介には遠く及ばないだろう。卍解を会得していないということはつまり、まだまだ成長の余地があるということでもあります。

——転心体でも使いますかね。黒崎サンはあれで上手くいきましたから、まあ穂積サンでも何とかなるでしょう。

「もちろんす。さて、今の力も粗方分かりました。鉄裁サーン、データ取れましたか？」

岩陰から、バッチリです店長と合図を返され、ほっと胸を撫で下ろした。

「で、これだけのために俺は呼ばれたのか？」

「まあ、初めはそのつもりだったんすけどね…。卍解の話で、少し気が変わりました」

「コホンと、間を置いた。態とらしいかもしれないなかったが、些細な事でしょう。」

「穂積サン。卍解、会得してみますか？」

吹くはずのない風が、疲れの溜まった身体を撫でたように感じた。何のことはない。彼が変わった雰囲気、少し呑まれただけ。

「卍解…か。殺す過程と殺した結果は見るんだけど、方法はいつでもいいんだよなあ。でも…」

——それで、藍染は殺せるか？

——もちろんス。

言葉のない会話。それが会話と呼べるかはさておき、どうやら彼の決心はいい方向に傾いたみたいですね。

「ああ、いいぜ。その卍解ってやつ、俺に教えろ」

思わずニヤリと、笑みが浮かんだ。

夏のある日。いつものように地面を焦がす太陽が、青空に空いた穴のように存在感を主張する頃合。うざったらしく、俺にとつてなかなか慣れない感覚だ。尸魂界にも季節の概念があるが、ここまで極端に暑かったり、あるいは寒かったりすることはそうそうない。尤も、俺は瀨霊廷からそこまで離れて動かないのだが。尸魂界の端の方は、もつと荒涼としているだろう。

こんな中、つい昨日、日番谷冬獅郎率いる日番谷先遣隊が現世にやってきた。色々と手続きが立て込んだらしく、思ったより遅れているようだが、敵が攻めてきてないなら問題はないだろう。俺たちは今のところ後手に回らざるを得ないからな。破面側には、おそらくこちらの情報は筒抜けだ。スパイがいるとか、監視されてるとか、そういう類のものではなく、ただ藍染惣右介がいるというそれだけで、向こうにこちらの動きは予測されてるはずだ。

で、その藍染惣右介に対する対策やら対応やら、今後の動きを話し合うために一旦どこかに集まることになったのだが。

「……なんで黒崎の家なんだ？たどり着けたからいいけど、普通に迷いかけたぞ」

「穂積さん、アンタは常識人だった！コイツら、なんで窓から天井から押し入れから出てくんだよ!？」

「いや、俺に言われてもな……。まあ、コイツらならやらかすとは思ったが。悪いな黒崎、飲み物くらいしか渡せるものが無え」

俺は何となく買ったペットボトルのお茶を黒崎へ放った。放物線を描いて綺麗に手元に収まったが、黒崎は俺のことをどう思っているのだろうか？一応俺も常識死を視ることのできるから外れた人間だぞ。

ちなみに当の黒崎は、手に収まった飲み物、もといお詫びの品になぜか感激しているみたいだが。なんでだろう、なんか申し訳ないな。

「サンキュー。で、なんで俺の家なんだよ。浦原さんのところでもいいだろ」

「まあそう言うなよ一護。浦原さんのところは後で行くし、まだ一角

さんたちも知らないからよ。俺とルキアが馴染み深いのはここだったんだよ」

「つーかテメエ、俺ん家来たことないだろ!？」

「堅いことは気にするな一護。兎に角今は、日番谷隊長の話を聞け馬鹿者」

朽木はそう言ってゲシゲシと足の裏で黒崎の頭を踏んだ。コイツらにとっていつもの光景なのだろう。流れるようなコンビネーションだった。黒崎は蹴られた頭をさすりながら、なんやかんやで話を聞いていた。結局、ここから先の中心になるのはコイツなのだ、俺は改めて思った。

その後、色々と日番谷隊長らからの説明を受けた後、先遣隊の面子だけが部屋に残った。

「一応確認だが、穂積。『限定霊印』は打ってるよな」

「『限定霊印』?……ああ、花の形したやつか?」

「お前のとこの隊花だぞ……。まあいい、打ってるなら問題はない。で、俺たちはこれからどうするかだが……」

「オマエら全員学生生活するんだろ?全員制服着てるし」

そう、なぜかコイツらは皆揃って学生に扮していた。体格はほとんど出来上がってくる高校生だから、少々の違和感は無視するとして、キャラが濃すぎる。特に斑目と阿散井は、授業中じっとしてられるのか。問題起こしそうで不安になる。ふと、なぜ俺がこんな心配をする必要があるのかと思ひ至り、結局その思考は那由多の彼方へ投げ捨てた。

「そうだ。まあ、文句は言えないな。そういうお前はどうか?」

「俺か?俺は日がな一日、暇を持て余してるよ。オマエらが学校行ってる間、出てきた虚は俺がやることになるな。これじゃ」

「そうか、ならいい。阿散井、俺らの住む所はどうなるんだ?」

「浦原さんに聞いてみますけど……、穂積さんは?」

「俺は家があるからな。心配するな」

「家って……、どうやって……」

「知り合いの紹介だ」

あの部屋を貰えたのは僥倖だった。蒼崎橙子との出会いも含めて、俺は運がいいのかもしれない。

とは言え、虚案件とも魔術案件とも取れない何かに巻き込まれることは、蒼崎橙子といれば必至だろう。あいつは嬉々として俺を巻き込むし、あるいは厄介事から転がり込んでくるから。それは、まだ俺には殺せない。曖昧なものには形は無く、故に生死の概念そのものが無いから。確定してたのなら、あるいは殺せるかもしれないのに。

「まあとにかく、破面どもが来るまでに時間はあるだろう？それまで各自でやってればいい。ここで決めようとするだけでも無いだろ」

「…現世についてはお前が幾らか詳しそうだな。なら、昼はお前に任せた。最悪破面が出てきたら時間稼ぎしておけ」

「あ、そう。まあいいけど。別に殺してもいいんだろう？」
「できるならな」

日番谷はそう言っただけを睨んだ。仕方ない。少なくとも俺は、破面側の破面としての最高戦力は、この前現世で遭遇した二体クラスだと思っっている。もしあのレベルの戦力が平均的なのだとしたら、この戦いに初めから勝ち目は無い。

虚には位階が存在する。低い順に最下級大虚^{ギリアン}、中級大虚^{アジューカス}、最上級大虚^{ヴァストローデ}と呼ばれるが、この位階が高いほど破面化した時に綺麗な成体——人間に近い姿形——になるとされる。そして当然、破面になると戦闘力に跳ね上がる。倍数的に跳ね上がるその値は、元となる値が大きいほど驚異的に上昇するわけだ。ところで、ヴァストローデ級の戦力は、隊長格を上回るとさえ言われる。成体になりやすいのもヴァストローデなら、この前遭遇した二体の破面は、ほぼ確実にヴァストローデ級の虚が破面化したものだ。

ということは、近々やって来る奴らは破面としては中堅クラスか、最悪ヴァストローデ級に近い奴がいるかいないかになる。浦原に卍解の修行をつけてもらってはいるが、なにせ俺の斬魄刀は気まぐれな

猫みたいな奴だからな。——いや、むしろ兎か？物騒な凶器を手に跳ぶように斬りかかってくるあたりが。じーつとしていればお嬢様に見えたりするんだが。

「日番谷隊長」

「なんだ」

「連絡用のアイテムとかないのか？戦闘中はともかく、昼間や何もない時のやり取りは、そういうの無いと不便じゃ無いか？まさか、鬼道を使えとは言わないだろう？」

「いらん。やる事は決まってる。昼間の虚はお前が引き受けるんだろう？なら、俺たちは破面が真つ昼間に出てきた時に動く。一々連絡取るの、お前だつて面倒だろ。それに、お前に限って言えば、俺は自由に動かした方がいいと思ってる。霊圧感知ができないわけじゃあるまいし、お前の自由にしろ。不測の事態にでも出くわさなければ、お前ならなんとか出来るはずだ」

「へえ。随分と高く買いますね、日番谷隊長」

「別に。ただ、お前も知ってるはずだ綾瀬川。あの時、藍染と戦えたのはコイツだけだつてこと。悔しいが、俺たちは既に奴の術中にある。それに左右されない穂積や黒崎は、騙されてるかもしれない俺たちが動かすよりも、自由にさせた方がいいつてだけだ」

「なるほど」

「……………、分かったよ。俺はオマエが命令すれば動く。隊長はあくまでもお前だからな。だが、原則としてオマエは俺に干渉して事だな」

「そういうことだ」

コイツらはそう思っているようなので俺は敢えて言わないが、俺も鏡花水月の術中にある。ただ、ソレよりも奥の、ただ一つの真実が視えるというそれだけだ。死という、単純にして唯一の真実。

しかしまあ、それだけで俺が戦えているのも事実なわけで。俺はそれ以上何も言わず、突然にどかっとな腰を下ろした沈黙を振り払うために、幾らかの情報を持ち出した。

「破面といえはだが、ついこの前、そいつらが現世に出てきた」

「な…、お前、交戦したのか!？」

「まあ、な。互いに様子見だが。浦原のここは行ってから話すぞ。浦原がなにか情報を得たかもしれないからな。じゃあ阿散井、コイツら案内してやってくれ」

「は、はあ。穂積副隊長は…?」

「買い物してから行くさ。時間はあるからな」

額に汗を滲ませながら、飲み物を買おうと思いついた俺は、そう言っ先遣隊の集団から離れた。汗を拭いながらふと見上げた頭上の太陽は、本来瞬くべき星の光を掻き消して輝く。それは、何者も寄せ付けない魔性。しかし、あの日の月は。墜落を魅せる魔性だ。

俺は、月にもたれかかるような白い百合に、静かな殺意を滲ませた。死神と魔術師の境界。誰にも分からぬ曖昧さ。ならば俺はそこに、線を引きこう。それこそが、俺の斬魄刀の力だから。

それは、浦原との修行がいち段落ついて、俺が蒼崎橙子の下へ足を運んでいた時だった。

俺はなぜか目の前にあつた三日前くらいの新聞を広げてコーヒーを飲んでいた。橙子は、この部屋の唯一の採光手段である大窓を背に、ひたすら机に向かってニヤニヤと過ごしていたのだが。

不意に、橙子がこんなことを口にした。

「織、お前魔術に興味ないか？」

「……………は？」

その時橙子は眼鏡をかけていなかったから、粗雑な口調の問いではあつたが、問題はそこではない。

「聞こえなかったのか？魔術、ちよつとやってみないか？」

「…あのな橙子。俺は魔術のまの字も知らないんだが。それにオカルトじみたことなら間に合つてるよ」

実際この世界のオカルトに近いのは死神だろう。この部屋にある本——おそらく魔術関連も混じっている——を見てみると、死神の鬼道の方が理論がすつ飛んでいてそれっぽく見えるはずだ。

「強制はしないがね。でも、お前だつて持てる手段は増やしておいていいはずだ。なに、回路さえ開ければあとはどうとでもなる」

「回路…？」

曰く、魔術とは魔術回路を開くことで初めて行使する条件が整うのだという。いわゆる生命力というのは無色透明で何もできないエネルギーの形であるが、魔術回路に通すことで魔力となつて、制御が出来るようになるらしい。魔力を電気に例えるなら、その魔術回路は発電機あるいは電線。生成し、それを巡らせるパイプライン。

基本的に生者には大概備わっているが、才能が無いと開いても意味がないのだという。

「おい。一応断っておくが、死神つて死んでるからな。いや、斬られたら血出すし、何故か死ぬけどさ」

「おいおい、『何故』とはなんだ。お前には死が視えるんだろ。ならばそ

れは、『生きているから当たり前』なんじゃないのか？」

「くそ、嫌な揚げ足を取りやがって。つーかそれより、まず俺にその魔術回路とやらはあるのか？」

「あるさ。恐らくな。確信はないが、なにせ『直死の魔眼』を開眼したんだ。私の前で死神の常識はあてにしない方がいい。なによりお前自身、分かっているだろう？——自分が普通ではないとな」

「……チツ」

凶星とでも言うべきか。言い返せる言葉が無かった。しかし、仮に俺に魔術の適性があったとしても。結局鬼道の方が使えることに変わりはない。そう考えると、修得する意味はあるとは思えない。

「ああ、別にそんな小難しいことを教えようなんて思わない。本来魔術とは、年単位で体得していくものだからな。それに、自ら戦いに出ようとする魔術師などいない。だから、今から私がお前に教える魔術は1つだ。時間があれば、あといくつか試してみたかったんだがね。手っ取り早く強くなるとか、そういうのに向いてる飛びきりのやつさ」

そう言つて橙子は、たいそう趣味の悪い笑みをうかべて笑った。

橙子のやることにしては珍しく——といつても知り合つて数日の間柄でしかないが——、面白そうなことになりそうな気がした。ともすれば、正解よりも面白そうな、そんな何かがある。直感がそう言つた気がした。コーヒーの水面は、虚無を映すように真暗なままだつた。

「ご苦労だった、ウルキオラ」

「失礼します」

そう言つて、目の前の白色瘦躯の男を下がらせる。先ほど私は、彼の目で見えた現世を見た。穂積織との戦闘も含めたその映像は、私の心を潤すに足るもので、かつ私の関心を引くことでもあった。

ウルキオラ・シファア。先ほど下がった破面の名だが、彼は破面の中でも破格の力を持っている。その驚異的な再生能力や戦闘能力は、

彼を4番の座に留め置くに惜しいほどだ。

しかし、私は彼をそこに置いた。そもそも、私にとって十刃エスパーダの序列など意味はない。私の力を以ってすれば、彼らとの戦いは見戯に等しい。虚ウエキョムンド圈の王を名乗っていた老爺の力など、それを上回る圧倒的な霊圧で押し潰せば良い。他は、少なからず私に忠誠を誓っている身だ。ウルキオラも例外ではない。例外ではないが、私は彼に特別興味があつた。その理由は分からないが、恐らくは。

——虚無と呼ばれる伽藍堂こそが、その正体かもしれない。

崩玉も、王鍵の創生も。それらは元来の私の目的ではあるが、急ぐわけでもない。遠回りは好みではないが、彼のことに關してはその限りではない。本来の私に他者への関心など無い。穂積織という男は、それほどのものだ。

『反膜』を破壊されたあの瞬間。垣間見た彼の眼は、死に触れて蒼く澄んでいた。根源を見透かし、万物に死を。彼は私が逃避するものを引き連れていた。

「ああ、1ついいかな」

「なんでしよう」

扉を開き、半歩踏み出してかけていた足を止めて、ウルキオラは私を正面に捉えた。何も流さない瞳が、私を映し捉えた。

底の見えない、深い闇。何も無いが故の、無垢なる深淵。

「君から見て、穂積織という男はどう映ったかな？」

「……………奴は」

少しの間とともに、ウルキオラは言の葉を紡いだ。

「奴は、何かを見ていました。それは私でも、ヤミーでも、ましてや仲間でも無い。未来を、現実を、過去を。その全てを見ていません。しかし、それは逃避しているわけではなかった。あの男は、ただ知っているというだけです。我々がどれほど戦いを繰り返そうと、その結果誰が生き残ったとしても。その先にただ一つの真実がある事を」

「ほう……………」

その答えは抽象化が過ぎたものではあつたが、私はその言葉を聞くと同時に笑みを浮かべた。彼を表現するのに、具体的な言葉は無い。

私も未だに奴が何なのか分からない故に。

しかし仮に、奴が真に『死神』と言える存在なのならば。ふと、そう思った。

鏡花水月の世界も。反膜も。概念である前者と、そう定義されているはずの後者は、どちらも死とはかけ離れたもの。それを殺した奴からしてみれば、死から眼を背けることは出来ないということだろうか。いやはや、興味は尽きないね。

さあ、穂積織。舞台は整った。私の掌で踊ってくれたまえ。それともあるいは――。

「何をしておる、喜助」

「夜一サン。ああ、これはちよつとした資料つスよ」

「資料？何の資料じゃ？」

艶やかな肢体を持つ旧来の友人の声、張り詰めた糸を切った。そろそろ限界も来かけていたので、ちよつとよかった。

手元の紙を覗き込もうとする夜一サンへ、アタシはその束を手渡した。

「ふむ……、これは穂積の身の上の調査書か？」

「その通りつス。穂積サンの力の由来について調べてたんスよ。元々穂積というのは、東流魂街に居を構える中流貴族で、商いで財を成した特異な一族なんスけど、精神性は普通、多少の霊力を持ちこそすれ、その先祖まで遡っても織サンほどの力を持つ人が生まれるような要素がない。突然変異というしかないかもしれないつスけど、そう言うにもかなり異質です」

夜一サンはうんうんと頷いていた。藍染と戦ったというその戦闘能力だけならばまだしも、鬼道を手刀で真つ二つにするような力やその精神性は到底常人とは思えず。故にアタシはこうした調査をしているわけなんスけど。

「なるほどのお……」ネカシオン『反膜』「さえも斬ったというしの……」

「斬魄刀の能力という訳でもないみたいつスから、彼自身に備わった、というよりも備わってしまった力みたいつスね」

「…備わってしまった、じゃと？」

「ええ。本質は分かりませんが、ああいう能力は意図して身につくようなものではないはずつス。鬼道を斬るならともかく、反膜を斬るとなると、それはもう常識の外にあります。もしかしたら彼は、ある意味崩玉と似た存在かもしれません」

「そこまで言うかの……」

「言いますとも。だから彼は、この戦いにおいて黒崎サン以上の切り札足り得るんス。これで卍解を会得したら、最強なんて言われるかも

しれないっスね。アハハ」

「ふうむ……、儂瞬神とか言われとるんじやが、穂積と比べると大差なくない？むしろコイツの方が早くないかの？いや、負ける気は毛頭ないけども！」

「否定はしないっスけど、上手いのは夜一サンっすよ。彼の場合、速すぎて直線的な動きになるみたいっス」

「あー、なんかそこで勝っても嬉しくないんじやが……」

「負けず嫌いつスねえ、夜一サンも。……と、じゃあそろそろ行つてくるっス」

「ああ。どこに行くんじや？喜助」

そう聞かれたアタシは、頭の中にある人物の顔と住所を思い描きながら、あの『勉強部屋』に降りる道を開いた。

「ちよつとした依頼を、と思ひましてね」

「尸魂界にか？お主が行くのも珍しいの。誰に会うんじや？」

「こういう探し物や調べ物の依頼なら、少なくともアタシは、この人以上の人材は知りませんよ。ちようど彼も、東流魂街に住んでますしね」

「おったかの……、そんな奴」

「知らないのも無理はないっス。彼、自分からそんな事言いませんし、看板も何も掲げてないんスから」

荒れた大地に足をつけ、ある場所につけてある穿界門発生装置に近づき、そのスイッチを入れた。ヴウウンという機械音を立てて、見慣れた景色が作り出される。

「東流魂街第5地区『観布』^{みふね}の黒桐サン。ちよつと遠いつスけど、行つてくるっス」

蒼い満月が、真つ黒な空に病的なまでに映えている。月以外の光源は無く、無機的な白い床が、優しく包まれるように光を受けていた。

いくつも床に走る罅が、使われなくなった廃ビルであるこの巫条ビルの年季を感じさせるが、ことこの場においては何の意味もないもの。黒い空にも白い床にも、等しく死は奔っていた。

ふと、俺の霊圧知覚に遠く離れた霊圧が引っかかった。

「ひい、ふう、みい……、なるほど、一人一体なわけか。偶々だろうけど」

未だ空虚に感じられる腰の後ろには、飾り気の無い刃が収まっていた。別に見つけたわけでは無く。別に橙子からだとか、浦原からだとかいうわけじゃない。アイツ——式からの貰い物だった。

浦原のひみつ道具——もとい転心体は、無事に俺の斬魄刀本体を具現させた。初めは反応しなかったが、後から式に聞いたら『つい殺してしまった』と言うから苦笑したものだ。ストロベリー味の高級アイスを目の前にぶら下げたら、まるで猫のように気が変わって——顔をしかめてはいたが——その姿を現した。

そのまま戦闘に突入する——かと思ったが、式は戦闘に興味がないらしかった。そもそも、卍解の条件とやらは以前に突きつけられていた。だというなら俺はまだ訣別出来ていないのだろう。だから、まだ未練を抱くように、そこに虚しさを感じているのだ。無い物を感じることは出来ない。有ることを知っているからこそ、無いことの虚無が生まれるのだから。故に、俺は忘れられないのだろう。

そんな中、無為に過ぎていく時間にほうとため息を零した式は、赤い革のジャンパーを翻して、ブーツの音をカツカツと鳴らしながら歩み寄ってきた。まるであの日の再現のようだと、どこか心の中で思ったが、その距離は縮まらず、手を伸ばしても届かない空間が残った。『卍解のために、とか言って断ち切るの面白くないし、見たくもない。お前が言い出したことだろう。だから、お前自身の手で、意志で。それを成し遂げるんだよ。尤も、価値判断の基準は全部俺の主観だけだな。でも、関係ない。俺の主観はお前の主観だ。視える世界が同じなんだから。——視せてみろよ。虚無の中の、お前の意志を』

そう言つて、式はあるものを放ってきた。鞘に包まれたナイフと、式と同じような赤い革ジャン。まるで虚空から現れるようにして姿

を見せたそれを、式はなんの疑問も抱かずに掴み取り、俺に寄越したのだ。

『やるよ、ソレ。刃物ならいくらでも有るし、その革ジャンだって、拘ってるわけじゃない。なんとなく、気にくわないけど着てるだけだしな』

『はっ、なんだよそりや。でも、有り難く受け取つとくさ』

式の言葉に笑いをこぼしながら、そのナイフをいつもの場所に突っ込んだ。既視感を感じさせる重みが、視界を広げた。

転心体自体に効果期限があるということは無く、ただ斬魄刀の意思によつてのみそいつが顕現できるらしく、それからしばらく式は飽きるまで夜道を散歩していたらしい。なるほど確かに、猫みたいなやつだった。

『……あなたは』

「なんだ、喋れたのか？まあ喋れたところで何かあるわけでもないが。物言わぬ亡霊を殺すよりは楽しめそうだ」

目の前に浮かんでいるのは、白よりも真つ白な肌と絹のように艶やかで、長い黒髪の幽霊。ぱつと見ただけでは、それが破面なのか、地縛霊なのかは分からない。だけど、生きている。それだけで十分だ。

高いビル特有の、冷たい風が身体を打つ。廃ビルだからか、より強く、より冷たかった。

するりと、滑るようにナイフを抜いた。貰ったはずのそれは、まるで俺のために誂えたかのように手に馴染んだ。月光が、ナイフの刃に沿つて反射する。斬魄^式刀は、微動だにせず、見守るように腰を据えていた。

『——フフッ』

亡霊の顔に、欠けた月のような笑みが刻まれた。そして同時に、一際強い風が吹いた。その方向に持つて行かれた亡霊の女の髪が、ふわりと弧を描いた。そして見えたのは、明らかにソレとわかる刀の柄。

「ああ——、やっぱり、そういうことなんだな」

風に吹かれ、カーテンのドレープのような軌跡を描く真白な服の裾は、病院着をイメージさせた。そんな清潔さと連結した目の前の破面

からは、強いとか弱いとか、そんな戦いと結びつく要素が感じられなかった。

はるか向こうから感じる霊圧は、すでに大きな波となって知覚を揺らしていた。

一つも欠けていない満月が、破面の後ろに回り込んだ。それと同時に、俺は駆け出した。着ていた赤い革ジャンは前を留めていないから、簡単に翻る。そのまま、重たそうに振り抜いた敵の斬魄刀と俺のナイフは、キーンという金属らしい音を立ててぶつかった。相変わらず貧弱な俺の膂力では、こんな細腕の破面の刀さえも押し返せないらしい。

『あなたも、堕ちてみる?』

「悪いが、もう堕ちる奴はいないぜ。オマエの墜落劇は、これで閉幕だ」

重たい腰を上げて、月にもたれかかっていた亡霊は動き出した。あの日の三日月は、今宵の満月。すでに、座る席はない。ならば、今日この日に、全ての幕は下りる。——大した事はない。ただ、どちらかが死ぬだけ。そんな戦いを、ビルとしての生を終えた廃ビルと、素知らぬ顔で俯瞰している月だけが見ていた。

「おい阿散井、穂積はどうした」

「穂積副隊長ですか？……この辺りには居ないみたいっすね」

「チツ、あいつどこで油売ってやがる」

目の前に開いた黒腔ガルガンタから、背後の漆黒とは対照的な白を纏った奴らが姿を現した。なるほど、これが『成体』ってやつか……。もどきとは文字通り桁が違うな。しっかりした理性と知性、佇まいからも、その戦闘力の高さが伺える。

現状では数的に有利も不利も無い状況だが、だからこそ、今この場にはいないあいつの力が欲しい。斑目たちならともかく、俺はギリギリの戦いをしようなんて思っただけから。有利に戦うことが出来るのならそっちを選ぶ。当然のことだ。

だが、無い物ねだりだというなら仕方がない。あとで事情を聞くとして、今はやるべきことをやるだけだ。

「はあ。まあいい、全員気を引き締めてかかれ」

「……了解！……」

朽木、阿散井、松本、斑目、綾瀬川が、揃って返事を返した。

虚空に足音が響き、俺たちはそれぞれの敵と対峙した。どうやら俺の相手は、このスカした野郎らしい。だが、その落ち着き払った振る舞いは、決して虚構ではないはずだ。確実に、こいつは強い。他の奴も同様に油断が許されるような相手ではない。

そう考えながら、背中からしゅるりと斬魄刀を抜く。穂積のヤツを除いて、恐らく死神では初めての破面との戦闘になる。斬魄刀を握る手が少し心許無く感じられた。

「私は破面アラカルウンデシーモ No. 11、シャウロンと申します」

「……十番隊隊長、日番谷冬獅郎だ」

ピンと伸びた背筋そのままに、ゆっくりと歩み寄ってくる。小柄な俺と比較しても、結構大きいように思える。靴底が擦れる音が、真夜中の静寂を伝わって鼓膜を叩いた。

見れば、阿散井も朽木も。皆すでに戦闘を始めていた。どうやら他

の奴らは、ただ純然に俺たちを敵として認識しているらしい。剣戟の音が響き、戦闘の激しさを物語っている。

俺も、初めから加減抜きで挑むつもりだ。

「霜天に坐せ、『氷輪丸』!!」

解号を唱え、手に持つ刀から冷気が漏れ出す。

その時不意に、奴が口を開いた。

「ふむ、穂積織…とやらは、いないのか?」

「なに…?」

なぜその名が出てきたのかは、皆目見当もつかなかった。

「なに、聞くとところによれば、その男は我ら破面アランカルの最高戦力、十刃エスパーダと対等に渡り合えるとのこと。一目見たいと思うのは当然のことです」

「その十刃エスパーダつてのが、お前らの中で最も強いのか?」

十刃。それが何を意味するのかは、こいつの言からして明らかなのだった。

「その通りです。彼らはほとんどがヴァストローデ級から破面化した方ですので。しかし、我々がそうではないとは言え、悔んでもらっては困ります」

「悔るつもりなんざねえ。…一つ聞かせろ」

「なんでしよう」

「穂積はお前らの中でどういう存在だ?」

そう問いかけると、破面は少し考え込むそぶりを見せた。剣戟の音を背景に、奇妙な沈黙が耳を叩く。冷たい汗が、すーっと頬を流れる。「興味の対象…でしょうか。少なくともグリムジョーは興味を抱いてます。戦うことが至上である我々にとって、強さとは絶対。故に、彼のような強者とは一戦交えてみたくなるのです。命の危険などは度外視して」

つまり穂積は、その名前だけが破面の間で広がってることになる。ウエコムンダ虚圏に行ったら、さぞかし人気者になれることだろう。俺は少し同情した。

「さて、無駄話もここまでにして。そろそろ始めましょう」

「そうだな…」

一転して走る緊張。わずかな温度を持っていた汗が、一気に冷えたものへと転じた。通じたように、互いに同時に空を蹴る。

キーンと、甲高い音が響いた。

「では、あなたの力を見せて貰いましょうか」

「勝手にしろ。こっちはただ、ためえを叩つ斬るだけだ」

その言葉に、破面は僅かに口角を上げた。

「ちっ」

漏れる舌打ちは、苛立ちを表していた。未だ斬魄刀は抜いていない。式から渡されたナイフで応戦している。破面も、ただ霊圧をばら撒くだけで、もはや戦闘にすらなっていないように感じた。

「さつきから『堕ちろ、堕ちろ』って、オマエの頭にはそれしか入っていないのか?」

『……堕ちろ』

さつきから、空中に立っている俺に対して、こいつは浮遊している。いや、飛行というべきか。どちらにしろ、空中ではこいつの方が上みたいだ。だからと言って、俺に対空攻撃の手段があるかと言われたら、それこそ真つ直ぐに飛ぶ分かりやすい鬼道しかないわけで。

『貴方、堕ちたくないの?…空を飛びたくないの?』

「あいにく、飛びたいとも堕ちたいとも思わないな。なにせ、結局堕ちるわけだからな」

落ちれば落ちる。飛べば落ちる。当たり前の話だ。結果が同じだから、飛ぶことと落ちることは十把一絡げに出来るのだ。俺たちに限って言えばその限りではないが、少なくとも自分から落ちたいとは思わない。

『堕ちたくない?…なら、堕としてあげなくちや……』

そう言つて、奴は初めて刀を構えた。霊圧が噴き出て、足下まで伸びた髪の毛が舞う。横たわる空気が、慄いて震えた。

『墮ちろ…、《天墮巫女》』

「っ!？」

嵐と見紛うばかりの圧力が突き刺さり、咄嗟に大きく飛びずさった。ここから先は、流石にナイフ一本ではキツイかもしれない。しかし、まだ俺の琴線に触れていないのもあってか、抜く気にはなれなかった。『ヴィスタリア』とやらがどういう能力かは知らないが、それが何であれ、生きているのなら殺せる。

ああ、死を贈りつけてやるぞ。

『ふふ…、あなたには、墮ちて貰わなきゃ…、ふふ』

「ちつ、こりや橙子の言う通りか…。コイツ、空に在すぎたな」

嵐が止んだ時、そこにいたのは案の定、姿が変わった破面の姿。髪の毛は引き続き下ろされたままに、頭にティアラのような仮面の名残が乗っかっていた。結果的に大して変わったようには見えないが、これが浦原のいう『刀剣解放』やら『帰刃』レスレクシオンとかいうやつのような。俺たち死神でいうところの卍解。残念ながら俺はまだその境地に至ってはないが。なるほどこんなものかと、ざつくばらんに理解した。

『ああ、貴方はまだ知らないだけ…。空を飛ぶ墮ちることを…。だから、知って貰いましょう?…』セツテ・プリンセツサ《七人の天姫》』

言うやいなや、俺と破面の間を塞ぐように浮遊する、これまた破面とよく似た格好をした亡霊が顕現する。無表情で、虚ろで。諦めも、絶望も、生気すらも感じられない。正しく霊としての在り方を体現したような手本に見える。まるで、何かに囚われたように。

しかし、7人…ね。だとするなら、コイツらは先の自殺事件の被害者じゃないか?つまり、事の元凶はこの破面だったと。どうでもいい事実だな、全く。

「さつきも言っただろ。んなもの、知りたくもない。むしろ、俺の方が教えてやりたいくらいだ。特にオマエが俺の何かを奪ったわけでもないが、死んでもなお生きてるオマエに、事実を知って貰わなきゃなあ。ああ、飛べば落ちるなんて、そんな当たり前のことよりもっと当たり

前のことをさ」

相変わらず、俺の眼はよく視える。死人が生きているという、常人なら発狂ものの事実だ。落とす事しか、飛ぶ事しか頭のない亡霊をナイフで殺していく。斬って、刺して、貫いて。ビルの端へと駆け出していく。

瞬間、破面が数メートル退いたため、舞台はそのまま空中戦へともつれ込む。

「オマエはこつちの世界で死んだ。死人なんだよ。生と死は背反し、互いに手を取り合わない。二元論の最奥だ。だから、オマエらがこつちに手を出すなぎ、本当はやっちゃいけない事なんだよ。だから、オマエはここで終わらせる。飛びたいなら、勝手にやってる」

そう言つて、切っ先が破面の首に触れようとした瞬間。

「や、止めてっ!!」

「なっ……!?!」

突然の声に思わず振り向いた俺の土手っ腹に、破面の刃が食い込んだ。

「っ…、クソ…っっ」

腹部を貫通する純白の刃に、真つ赤な生命が垂れ流される。肩越しに、俺を止めやがった声の主を見れば。

「おいおい、っ、コイツはなんだよ…。…全く、同じ顔に、同じ霊圧つて…」

目の前の破面と、全く同じ顔の地縛霊。整ではあるし、破面と違い意思疎通も可能みたいだが。それでもおかしい。

「魂が、2つに、別れた…？それはおかしいだろ。片方が虚で、片方が整、って…、コフツ、ああくそ、離れろ、よっ！」

舐め回すようにジロジロと俺を見つけていた破面を蹴り飛ばし、深く刺さった斬魄刀を乱雑に抜いた。激痛が走るが、無視した。とは言え、意識では無視できても身体は正直なもので。激痛故か、或いは血を流しすぎたのか。意思の制御を離れて覚束ない足が、酔っ払いの千鳥足にも似た軌跡を描く。

「オマエ、誰だよ」

「……」

「私…ですか？」

「このコミュ障に話しかけたって無駄なことくらいわかるだろ。知ってるなら、コイツのことを話せ」

痛みの周期が一定になり慣れたからか、途切れ途切れだった俺の口調が元の調子を取り戻し出した。そうになると、今起こった訳のわからないなにかについて考え出すのは当然だろう。直感で察するにも突拍子が無さすぎて、推理するにも情報が足りない。案外脆弱だった破面がダウンしている今のうちにはつきりさせておきたい。

「私は、巫条。巫条霧絵」

「巫条って、このビルの持ち主か？」

「昔の、です。父も兄も死に、そして私が死んだことで、巫条の血は途絶えました。元々固執してもいないのですけど」

「そんなのはどうでもいい。さっさと話せ」

興味のない身の上話をばつさりと切り、その先を促した。巫条とやらは、一瞬言葉につまりながらも、思い出すようにして口を開いた。「あれは…私です。数年前に、余命数日の日々を送っていました。そこに、誰とも分らない、男の人が現れました」

曰く。表情のない、黒衣の男性。闇の底から響くような、心を震わせる声はよく覚えていられるらしい。そうして、あれよあれよと流され、気づけばこうなっていた。

……分かってないのかよ。

「でも、あれが私なのだという事は分かります。そしてあの日以来、何が欠け落ちたような感覚があった事も覚えていきます。」

「欠けた感覚…か。オマエはオマエで、アイツはアイツってなら、どういうことなんだよ」

「……………」

「見た目が同じなら、双子なのかってことでかたがつく。だけど、感じる霊圧までほとんど同じなのはおかしいだろ。別人格とも違う。同一の別人だよアレは。だったら俺みたいに……………」

俺みたいに…。俺、みたいに……………？

「オマエ、まさか…」

『フフフ…。まだ、まだまだまだ…。宙へ連れ出してあげて…』

1つ、思い当たることがあった。だが、それについて思考を走らせる前に襲いかかる7人の亡霊。カタチある死人。

なんだ。殺せるじゃないか。

「死神的には、今度こそ成仏させてやらなきゃな」

尤も、俺に出来るのは救うことではなく殺すことのみではあるが。それでも、死ねば輪廻の枠に組み込まれる。くだらないものに縛られて、喘ぎ苦しむよりもマシだ。そういう意味では、文字通り死神とも言える訳だ。笑えるなこりゃ。

「さ、こつちもキツイからな。その他大勢にはさつきといなくなつてもらおうか」

眼を、開いた。

死を視る蒼眼。直死。終末の風景が、レンズ越しに重なる。歪むこ

とすら許されない真実。本来、死から逃避するために生きる人間にとつて、死が視えることほど苦痛に感じることはないだろう。

それでも、俺は慣れてしまった。

浮遊して向かってくる亡霊どもを斬って、突いて、捻り切る。驚くほどに感覚が無く、亡霊は霧散するように消える。その顔はよく見れば、さつき無造作に斬った亡霊だった。斬魄刀でもない刃で殺せるはずもないからか、元に戻っていたらしい。

それでも終末の風景の中ならば。そう思っていたのだが。

「…どうなつてやがる。たしかに殺したはずだぞ」

霧散した霊子が再び収束し、人の形を成していく。そうして7人の姫はまた虚空に現れた。

些か視え難いけども、その身体に死は走っている。

死ぬるけど、死にくいのか？死の線なぞつても確率死つてことなのか？それとも、そもそも死の線自体、なぞれば死ぬなんて代物じゃなかったのか？疑問は尽きないが、考えたところでどうしようもないだろう。俺の眼は、死を捉える。ただそれだけがあればいい。

「仕方ない。俺は貧弱だけど、このくらいで音をあげちゃいけないしな。本気で殺すか」

腰にナイフを戻し、抜刀の構えを取る。腰を落とし、背中を見せるほどに半身の体勢。鯉口を切った刀の柄に手を添える。

——その瞬間に、自己が作り変えられる。

思考が、身体が。なにもかもが、1つの目的に収束して、統合される。それは、『殺す』というただそれだけ。唱えることも必要ない。

「直死——」

『ひっ——』

一瞬怯えたような素振りを見せた破面を他所に、全身の筋肉を制御して、最低限の膂力で最高の速度を叩き出す。身体に感じる違和感を堪えて。

この居合で驚くべきは、それが無意識で行われること。

これこそが、橙子が俺に教えてきた魔術『自己暗示』。スイッチを入れると同時に思考と肉体を作り変え、その目的のためだけに動かす。

ヒトの世界において、殊更魂魄の世界ならば、思い込みの力は凄まじいものがある。その延長線上にある魔術らしいが、詳しいことはどうでもいいから聞き流した。

身体に走る違和感。それは、傷からくる痛み故ではない。魔術回路を起動したために感じるものだ。イメージはやはり死。線をなぞるようなイメージで、回路の撃鉄を起こす。

視界はただ一つに焦点を合わせながらも、視野は広く見えている。背後からアイツが来ても問題はない。

自己暗示は身体能力だけでなく治癒能力にも影響があるらしく、先ほどまで熱を持っていた腹部の傷から、潮が引くようにして痛みが失せた。

「雲耀——」

瞬間、手がブれる。

7人の姫のうち、5人が腰から両断されていた。

しかしやはり、下半身と上半身はまるで逆再生のように繋がった。死は不可逆的現象のはずなのに、それが元に戻るということは、斬られたはずのコイツらは死んでないということなのか？

：理由を考えても、キリがないか。そういうのは終わってから考える。斬っただけで死なないのなら、もっと深くまで視るだけ。ただ視るだけじゃ足りない。蒼が、深海に降りたような深みを帯びる。脳が過熱する感覚が、なぜか遠ざかる。感じる事ができないほどになったのか、それとも…。

さて、まずは一体。

縮地で飛び出して、肩から腰にかけて袈裟のように走る線をなぞる。赤かった線は黒みがかっていたが、大して気にならない。両断された亡霊は、やはり霧散した。そして。

「戻らない…か。上手くいったらしいな」

『なんで…!?!なんでなんで?!?』

「うるさい。喚くんじやない。殺したんだから、死ぬのは当たり前だ。いい加減に現実にも目を向けてみる。……つつても、それが出来ないからそうなってんだらうけどな」

『なんで………?!?なんで?!?』

「…ま、そうなるわな」

狂ったように。壊れたラジオのように。破面は同じ言葉を繰り返す。耳障りではあるが、そこに憐れみも含んでしまう。謂れない憐憫は大罪なのに。

『もう、いい。貴方は堕とす。堕ちて。堕ちて…』

「さつきから同じことしか言っていないぞオマエ…。まあいい、とりあえず殺してやるよ」

内面が変質する。深く深く落ちる自己に、未だ幽谷を覗き見るにとどまる魔眼。相贖いて沈みゆく俺は、刀の柄に再び手をかける。その時、目の前の破面と目があった。

『……堕ちて!!』

「っ……?!?」

怪しく破面の目が光る。深淵の蒼に対比するように紅く染まった眼が、俺の網膜に墜落を投影した。身体が、揺れる。

『ふふっ、さあ、堕ちなさい…』

「くそ…っ」

制御の手綱を手放された身体は、そのイメージを現実にするために動き出す。…こいつは…、墜落…か？

気付いた時には、自分で自分を俯瞰していた。幽鬼のように足取りが覚束ない身体が、ビルの縁へと歩みを進める。正直、このまま落ちたところで、死ぬことはない。死神の身体は頑丈だ。叩きつけられたくらいじゃ、せいぜい意識が吹っ飛ぶ程度のもんだろう。

だけど、直感が『落ちてはならない』と囁く。破面の能力によるものか、あの眼によるものか。俺は何らかの力に支配されている。まずはこれを殺さなければならぬ。ならないのに。

(見えない…か。俺が魂で、実体でないからか?となると困ったなあ……)

俺を構成する要素の大半が、あっち側にある。ああ、つくづく俺は無力だな。

浮遊し、曖昧になりつつある思考が行き着いた時、俺は反転して、墜

落した。

「久しぶりっスね、黒桐サン」

「お久しぶりです、浦原さん。で、今日はどうしたんですか？」

コトリと音を立てて置かれた湯呑みからは、もくもくと湯気が上がっていた。いやあ、今日びの流魂街は冷え込んでますから丁度いいっスね。

「ありがとう鮮花」

「どういたしまして。じゃあ、ごゆっくり」

確か黒桐サンには妹がいたらしいんスけど、似てるのか似てないのか分からないっスね。その振る舞いはまさに良妻賢母とも言えますが……、妹っスよね？

「妹ですよ。鮮花は紛れもなく、ね」

「その様子じゃ、何度も同じことを言われたんスカね？」

「ははは、まあそんな所です。で、用件はなんですか？」

後ろの方で大袈裟にため息を吐く妹サンの事は……、うん、考えないうようにしましょう。他人の恋路(?)を邪魔する人は犬とか何とかに蹴られるって言うっスからね！

…ある程度緩くなった空気を締めるように、黒桐サンは話を促しました。このくらいの緊張感が丁度いいっスね。コホンと咳払いして話を切り出すとしましょう。

「アタシの用件は1つ。この人物についての情報を可能な限り集めてほしいんスよ」

そう言って、穂積サンのことを記した紙を手渡す。

「穂積……ですか。この辺りじゃ少々名の知れた商家ですね。彼について、何か？」

「見ての通り、その人は死神っス。ですが、余りにも異端。普通は四大貴族とかその辺りが強いんスけど、彼はそんな人たちを差し置いて、現状最強クラスの力を持っています」

「へえ。で、そのことがおかしいんですか？ 凄まじい才能が開花した、というのでもなく？ 見れば、瀕死の重傷、昏睡から回復してからすこ

い力を得たように感じますが…」

「それにしたつて、元から持つていなければ開花しませんよ。黒桐サンには、彼の根源^{ルーツ}を調べて欲しいんす」

「ルーツ……ですか」

顎に手を当ててしばらく考え込んでから、黒桐サンは言った。

「分かりました。できる限りの事はしましょう。とは言え、流魂街は基本的に無法地帯ですからね。書類上のデータなんて無いでしょうから、少し時間がかかりますが、それでも?」

「構いません。早いに越した事はないっすけど、1ヶ月くらいで終わりますかね?」

「十分ですよ。ああ、報酬は情報を渡す時にお願ひします。無償で、というのはその情報に責任がないのと同じですからね」

「分かってますよ」

湯呑みのお茶を飲み干して、彼の家を出た。寒空が広がる割に、一切仕事をしない太陽に見下ろされている。これっぽっちも上がらない気温に身体を震わせながら、黒桐サンの家を離れて行く。

「穂積サン……。アナタは一体、何者なんすか……」

口からこぼれた問に答えられるような人は、誰もいなかった。

あの瞬間、確かに俺は落ちた。天から地へ、不可逆の現象へと足を踏み入れた。強かに打ち付けたのだと知覚したのに、堕ち続けた。た。

(……また、か)

記憶に無いが、記録に残る混沌。鬩ぎ合い、奪い合い。混沌ゆえに秩序が無い。境界が存在しない何処かに、俺は堕ちている。

掛かっていたはずの重力はどうに消え失せ、堕ちているという感覚にさえも疑念を催すほどに長い時間。そう感じるのは、ここが曖昧だ

から。飛行と墜落が連結である秩序は、ここには無い。そんな概念も無い。

在るのは、絶対的な1つの概念のみ。それは、俺の眼に映るものと同じもの。

(見えないほどの死が…、ひしめき合ってるのか…)

ありふれ過ぎた結果、死が見えない。そう断じた。そしてそれは逆説的に、俺の死を決定づけるものであることを理解した。

全てが終わる。俺は何も残さないままに。意志さえ希薄で、虚無を埋めることさえ叶わぬままに。そしてなにより、式に何も見せないままに。

(ふぎ、けるな…っ！)

認めない。認めない。そんなもの、俺が認めない。俺が赦さない。ああ、常日頃から死を見続けて、それが絶対だと識る俺が。それを否定する！

たとえ世界の理を塗りつぶしてでも、俺は否定する！

感覚さえない拳を握りしめて、あらん限りに叫ぶ。

(俺は、死ねないっ！なんとしてでも、生きてみせる！)

そうして、形さえない俺の意志が形を成し。虚無の中にて何かが生まれた。

『やつと見つけたのね。ええ、やつぱり貴方はそうでなくちや。いいわ、今回は特別よ。私の力を貸してあげるわ』

誰とも知らぬ声が、俺を引っ張り上げた。

『その意志で、世界を塗り替えてみせて？式も、織も。どちらとも隔たりなく私。なら、私の力は使えるはずよ？ふふっ、楽しみね』

ひどく楽しげで、夢のような儂さを携えた声が。身体の内に響きわたる。

だけど俺は、それについて考える事は無かった。生きようとする意志が、混沌を呑み込んで秩序を拡げる。織物の上にさらに織物を重ねるような、そんなイメージ。糸で縫ってしまえば1つの織物テクスチャだが、そのままならば2枚の織物。しかし、縫い付けるようなその力を持たない今の俺にはそんな事が出来ようはずがなかった。

そして、ついで俺は知ることはなかった。
その瞬間こそ、初めて俺が式の本^織当の力を使った時だったのだと。

『な……んで…!?!』

戻ってきた俺が最初に知覚したのは、破^{アランカル}面の声だった。死人でも見たような青ざめた顔で、恐ろしげに漏れ出た声はしつかり聞こえた。失礼な奴だ。光をやつと知覚した目で周りを見れば、はるか真上で見下ろす破面の姿。

「生き、てるよ…。複雑骨折かよ、痛い訳だ…」

実際激痛な訳だが。骨折程度で済むのかは分からないが。即死クラスのダメージだったかも知れない。だけど、少しずつ痛みは引いている。慣れているのか治っているのかは知らないけれども。

「だけど、お陰で分かったぞ。オマエ、文字通り落とすんだろ。死神はよつぼどの馬鹿じゃない限り、空中じゃ霊子の足場を作つて移動する。で、仮に足場が作れなくて落ちたとしても、この高さからの自由落下じゃ死神はそうそうダメージを受けない」

つらつらと口にするのは、俺の所感を含めたアイツの能力。

「けど、実際落ちたらこのザマだ。まるで普通^{普通}の人間が落ちたみたいじゃないか。…つまり、これがオマエの能力。発動条件は知らないけど、少なくとも俺はオマエの眼を見たな。オマエは、そんな奴らの肉体を現世の人間と同じくらいの強度に落とし込んで、魂までまるつと落とす。飛びたいなんていう欲求を意識の底に刷り込んでな」

『……………』

「はっ、凶星か？いや、分からねえか。オマエに普通な感性なんて無いもんな」

自分を柵に上げて言う。破面は目を見開いて猛スピードで突撃してきた。煽りが効くのか。それとも、恐怖から突つかかってくるのか。どっちにしろ、向こうから飛び込んでくれるのなら歓迎だった。慣れてきたとは言え、身体が思うように動かない。刀を動かすのさえ面倒な。そんな塩梅だ。

『足りないのね。もっと堕ちたいんでしょ!?!だから、堕としてあげるわ!』

狂乱に落ちたような喚きを伴って、うるさく落ちてくる。もう俺は落ちたのに、まだ落ちれる場所があるのか？

なにせよもう俺は動けない。：殺すしか無い。元々それ以外の選択肢は無いのに。まるで有るかのような考えに、自嘲の笑いがせりあがった。

「直死——」

眼を開けた。赤黒い、血を体现したような線は。僅かに青みがかって神秘性を纏っていた。それが何を意味するのかは知らないし、興味ないけども。まるで深いところに来たような感覚を覚えた。

ふと、心の端に引つかかるような何かが見えた。

(まだいたのか…。いや、俺が抱え込んでただけか)

必死にしがみつこうようにぶら下がるそれには、微塵の興味も抱かなかった。意識を割く余裕がないのも有るが、純粹にどうでもよかつたのだ。

見上げれば、いつのまにか大の字で落下してくる破面。自分も堕ちながら、堕ちろ、堕ちろと連呼して、迷惑な響きが鼓膜を叩く。切り裂こうとして構えていた斬魄刀を持ちかえた。斬って死にくいのなら、確実に殺す方法をとる。湧き出る殺意がそう訴えたから。

屋上にいるだろう女はどうなるだろうか。引き伸ばされた意識の中でふと思った。あれこれ考えて、結局どうでもいいに落ち着いた。殺してしまえば、尸魂界に招かれるだろう。最早目の前の破面と女は別存在だ。片方を殺せば、つながりは断ち切られるはずだ。

そう考えた時、俺の中に刷り込まれた衝動が立ち上がった。

……飛べる。自分は飛べる。昨日より高く。昨日より自由に。昨

「っ！」

不意に襲ってきた感覚。滑らかに、鋭く。心の臓に突き刺された刃。人の胸をたやすく突き刺すなんて…と思っただけで、あの眼をみているとそれも当然かと思っただけ。

それに、あの刃は不思議な感じがした。殺そうとする意志があった。だけど、それを恐ろしいとは思わなかった。狂暴な力じゃなかった。きっとそれは、純粹な殺意しかなかったから。己のためであれ、他人のためであれ、なにかの為だけに一本化された想念は、綺麗なものである。

貫いたのは、寸分の狂いもなく私の心臓。無駄がなく、骨の間隙を、肉の間隙を。身体の間隙を当たり前のように貫通した。恐ろしいまでの一体感を感じさせるあの人。男とも女ともとれる顔立ち体つき。だけど口だけはどうしようもなく悪くて。

「……………」

思わず押さえた胸元を見る。全身を死に舐めまわされていく感覚は、ゾツとする感覚よりも痛みが勝っていて。でもそれでいて、感じたことのない悦楽すらも押し寄せる。気が狂うほどの悪寒に震えて。生への執着。長い時間の孤独と不安。それらは私にとって泣き出したいほどで。

一度死んだはずの身なのに、死の感覚を覚えていなくて。だから私は恍惚となったのだ。初めて感じた死と、初めて目にした死の深淵。きっと永久に追い立てられるだろう。逃げられはしないだろう。たとえ私が、この世界から逃れられたとしても。

「ああ…。私は…」

その身体に視えていたのは、線ではなく点。刀の幅程しかないような、そんな点。或いは渦巻く線でもあるかもしれない。感じたことは

至極単純。絶対でありながら、どこか儂い。所詮は俺の所感ではあるけども、それは間違っではないはずだ。

「痛っ…、こっ酷くやられたなチクシヨウ。暫くは動けないかも、しれないな…。…おい、全部終わったぞ」

何とか屋上に戻った俺は、隠れているだろう巫条霧絵を呼んだ。

「……………」

「おい、しつかりしろよ。ったく、胸を押さえてどうした？」

「いえ…、何か、雷に打たれたような衝撃が…」

巫条はどこか恍惚とした表情でそう言った。ふと視てみると、存在が希薄になりつつあるのとは反対に、死の線がより濃くなっていきつつあった。終わりが近づいている。

「オマエも繋がってたんだ。切り離されたとされても、な。元々同じ存在として世界の枠内にいたんだ。片方が消えて、2分の1で1人分を埋めるなんて不可能だ。釣り合いを取るには、消えてもらうのが一番早い」

「そう…。やっと、死ねるのね……」

「まあなんだ、俺がこういう事を言うのは変だけど…」

コホンと咳払いして、自分の中の僅かな緊張を取っ払って、僅かな死神としての義務感を。重箱の隅をつつくようにして引っ張りだした。

「遅れて悪かったな。死神はオマエらみたいなのを早く見つけて、成仏させてやらなきや行けないんだけどな」

「ふふ、似合わないですよ。そんな言葉」

「うるさい。なけなしの義務感を口に出したんだから、魂らしくしろ」

「魂らしくって、私分かりません」

「はあ…。ま、そりやそうだよな」

らしくない事をしたと自分でも思っている。なぜかこういう行動をとったのだ。多分、コイツ以外の奴ならやっていない事を。

それは多分、心の空だ。未だ佇む虚無。それを抱えているのだと直感で感じたからだろう。その正体は人それぞれであり、俺とコイツ

では欠けたものが違う。故に、埋まる条件もまた千差万別だ。思うことがあるとすれば、さつき俺の意識に刷り込まれようとしていたモノ。仮に、コイツの下にやって来た男が、その願いに即した器を用意したのだとしたら。魂は巫条霧絵そのものなだから、同じ霊圧を発するだろう。

それは飛行願望。巫条霧絵の根底に根を張っていたのは、ソレだ。俯瞰し、空を見ていただろう時からずっと眠っていたソレは、もはや本人にも、無意識ながら抑えようがないものに成り果てていた。

そして、ソレを利用して俺とぶつけた奴がいる。

だが今は、目の前のコイツに、僅かに気になったことがあった。

「それで」

「何ででしょうか？」

「埋まるのか？オマエの欠けたモノは」

「……………」

巫条は少し、考え込むような素振りを見せた。でも、そんな小難しい事を聞いた覚えはない。この問いには、ただ本心から答えてくれればいい。それが俺やコイツの奥底の回答になるから。

「多分、これでは埋まりません。彼女が置いていった虚しさ、私が抱え込む虚無は別物。彼女が虚ろみたいになったのは多分、私の虚無を少しだけ抱えてたから。でも、もう既に私と彼女は別存在です。だから、私は私の答えを探します。現世だけでなく、あの世にだって足を運びます。…………今から行くのですけどね」

「そうだな。…ほら、今から送ってやるよ」

そう言つて、刀の柄の方を向ける。これからやるのは、『魂葬』と呼ばれるものだ。整プラスにしか効果がないが、これをするとなんか何故か尸魂界に行けるらしい。仕組みはよく分からないけど。

「じゃあな。巫条霧絵」

「ええ。死神様」

額に柄を押し付ける。幻想的な青い光に包まれて、まるで地面に落ちるように。今度こそ本当に、巫条霧絵はこの世を去った。

「……………」

身体の傷は粗方治ってしまっていた。僅か十数分の出来事にもかかわらず、その程度の時間では治りそうもない傷は塞がってしまった。

まあ、これについて考察したところで無駄だというのは明らかだ。「なんだよ、まだ終わってないのか向こうは」

未だ激しく飛び交い続ける霊圧が、戦闘中である事を物語っている。だが、はつきり言ってその中に飛び込みたいとは思わなかった。今日はもう、何も殺せない。その気が無くなってしまった。なら、朽木たちのところに飛んだところで無駄で、足手まといにすらなりうる。単純な膂力では、細身の朽木と同じくらいでしかないのだから。「ま、行かなかつたら行かなかつたらで、日番谷隊長に怒られるんだらうけどな」

そういうところは真面目なヤツだ。アイツは。ちつこい体に無駄に厳格な性格を宿してる天才。嫌いじゃないが、好きでもない。もう少し冷静になれるようになってほしい。面倒みるのも楽じゃないから。

「はあ……、はあ……」
「成る程……」

互いに奥の手を晒した姿。具体的には、俺は卍解を使い、相手は^{レスレクシオン}刃を使っている。そのシルエツトは大きく変わってはいるが、さりとてそれが意思疎通に影響があるわけではない。

この劣勢は、単純に俺が『氷輪丸』の力を完全に使いこなせていないというだけの事だ。

「その背中……」
「あ？」

零れたような言霊を俺の耳が拾い上げた。今のところ戦況はかなり拮抗していて、というよりも、情けない話ではあるが劣勢を強いら

れているところだった。

「3つあったはずの氷の華が、今は1つに減っていますね」

「…それがどうした」

「いえ。ただ、時間とともに散っていくその華と、貴方の戦い方を見てみると、こう思ったんですよ」

いやに余裕ぶつた言い方をしやがって。おそらくコイツが言おうとしていることは正しいだろう。そしてそれはズバリ俺の弱点だ。どうせいつかはバレることではあったが、思った以上に早い。

『その華が全て散った時、貴方の卍解は消える』と、そう思ったので「す」

「……………」

「見たところ、貴方はまだ幼い。特に大量の霊力を必要とする卍解を維持しようとするなら、まだ貴方のそれは未完成。故にそう考えました」

「…だからどうした」

「私も例に漏れず戦いを好みます。特に貴方のような強者ならば尚更です。見れば花卉の残りは3枚。全力の貴方と戦えるのも残り少しくなると、少々残念に思います」

「ふん、好きなものは後回しに食べる、っていうタイプだなお前」

「さあ。我々は食事を必要としないので。戦う相手、という意味ならばその通りなのですが」

たしかに、元々俺は短期決戦でなければ勝ち目はない。ここまでもつれ込むのは予想してなかった。残り3枚……。刺し違える覚悟で行かねえと、こつちがやられちまう。

ふう、と息を吐いた。変な考えを吐き出すように。そんな息は、氷輪丸が発する冷気に中てられて白く曇る。斬魄刀の柄を握りしめ、全身に力を入れた。

「確かに、もう俺には時間が無え。悪いが、さっさと終わらせちまうぜ」

「強がり…というわけではなさそうですね。いいでしょう、貴方の奥の手とやらを見せてもらいましょう」

全く…、これでも全力なんだがな。藍染の野郎、とんでもない手駒を揃えやがって。俺は張りつめていた力を解き放った。

「なんだよ、まだ続けてたのか」

聞き覚えのある声が降ってきた。それは降ってきたというよりも、深海から湧き上がってきたかのような。そんな響きを内包していて。「オマエら、ずいぶんところ酷くやられたな。まあ、俺も他人のことは言えないけど。卍解まで出して勝てないとかマズいだろ」

「テメエ、今まで何してやがった!」

「悪かったって。こつちもいろいろあつたんだ」

「っ、穂積。その傷…」

「…ま、そういうことだよ」

腹部の傷と、わずかに青ざめていた肌を見て、穂積もまた戦っていたことを悟る。しかし一体、何と戦っていたのか。こいつほどの死神がこんな手傷を負うなんて、想像ができない。副隊長ながら、その實力は確実に隊長クラス。……いや、そんなことを考えても仕方ない。終わったら問い詰める。

「……分かった。後でキリキリ吐いてもらうぜ」

「はあ。オマエもしつこいな」

穂積がため息をつくが、ため息つきたいのはこつちだこの野郎。だがコイツの参戦はありがたい。一気にこつちが有利になる。

「貴方が、穂積織ですね」

突然、破面が口を開いた。なるほど確かに。さつき興味あるとか言っただけだったからな。ぶつちやけこの破面より穂積の方が強い。こいつほどの者なら、死ぬことが分からないはずがない。なのに挑む…。更木あたりと相性が良さげだが…。考えるのが怖いなコレ……。

「…なんだよ」

「私は貴方と戦ってみたい」

「パス」

「…ほう。なぜですか?」

鉄面皮をヒクつかせて、破面は問いかけた。

「オマエ、仮にも一度戦いだした相手が目の前にいるのにソレを放棄

するの？俺は別に戦闘狂ってわけじゃないけど、斑目あたりと喋ってるどイヤでも分かるさ。その手の輩は自分ルールに従うし、自分の矜持に誇りがある。ソレが無いオマエはただの獣だよ」

「…それは申し訳ないことをしました。いいでしょう。貴方に勝利して、穂積織。貴方に挑みましよう」

「まあ、オマエのそれはどうだっていい。本音はただ、俺にオマエを殺す気が起きないだけだよ」

思わずゾツとしてしまった。コイツの殺気は最早比較できる次元にない。目の前で中てられれば戦意喪失は免れない。味方だと分かっているながらも横で感じるだけでこのザマなのだから。

ああ。やっぱりコイツとは。徹底的に相いれない。藍染以上に悪いかも知らない。俺にとって穂積織とは多分。致命的なまでに天敵であるが故に。

手持ち無沙汰という言葉が、今の俺を表すのにはぴったり言葉だろう。アイツらが空中と建物の屋上で戦ってるためにほとんど被害が及ばない地上で、そいつらの戦いを見上げていた。

「帰ったほうがマシかもな…」

右手で弄んでいるナイフは、頭上の月の光を浴びて純白の光を返す。鏡のようではあるが、その実は革ジャンの色よりも濃い血に染まった刃。すでにこのナイフで殺された存在は血を流さなかつたけど、殺したことには変わりない。人を殺す方法としては、もっとも原初のもの。至近距離で、間近で、殺す瞬間を目の当たりにしながら。だけどそれは俺にとっては生命の重さを感じられるということでもあり。故に、俺はこの手で殺すことを望む。

命の重さが紙のように軽い。死神はそういう世界に生きる。自分も相手も、次の瞬間には死んでいる。そんなことだってある。

だから俺は、それを感じたい。

「ぐあっ！」

何かが砕けるような音と一緒に、聞き慣れた声が聞こえた。そのまま猛スピードで地面に墜落した。…痛かったな、あの時の墜落は。

「……っ、くそ…」

「時間切れ、か。まあ向こうが妙にやる気になってみたいだし、仕方ないんじゃないか？」

「…やっぱダメエ、あとでシメる…」

「そんなこと言ってる場合じゃないだろうに。ほら、アンタのこの副隊長、終わったみたいだぞ」

「隊長!？」

全く、2連戦になるのか？煽っておきながらなんだが、正直興味が無い。さっさと終わらせてしまおう。

命の重さを虚に求めるのは、間違ってるだろう。生きているとは言え、一度死んでるのだから。それに何より。コイツら自身が命を何とも思っていない。自覚がないのなら、俺にとってそれは殺害対象では

無い。その感覚さえも虚ろに消えたが故の「虚」なのだろうか、ふと思った。

まあ、そんなことはどうでもいい。ボロボロになりながらも日番谷に勝ったこの破面の相手をしなくちゃならないからな。

「驚いた。まさか本当に勝つなんてな」

「ふう……。ええ、彼は強かった。ただ、私の方が強かったのでしょう」

「ふーん、ま、そういうことにしておく。悪いがやる気が無くてな。さっさと終わらせるぞ」

「結構。貴方の力を見せてもらいます。十刃の方々が興味を抱くほどの力を」

弄んでいたナイフを逆手に握り、全身を脱力させる。帰刃したコイツらの姿はゴツゴツしていて、なるほど確かに虚だと思えた。だから余計に殺す気になれない。日番谷たちは倒すと言っているが、それは殺すことと同じだ。つまるところ、今の俺は戦う気がさらさら無い。

縛って殴って、虚圏に送り返すくらいが丁度いいんじゃないか？

「聞くところによると、貴方は接近戦を好むようですが、私の『五銕蟲』テイヘレダは遠距離でも戦えます」

「へえ。だからどうした。距離をとって戦うのか？ いいぜ。別に俺は、近づいて戦うしか能が無いわけじゃないからな」

右手にナイフを持ったまま、左手を破面に向けた。

「破道の三十三・蒼火墜」

蒼炎が放たれる。三十番台としては破格の威力を持つお手軽攻撃だ。大して霊力を持たない俺でも余裕で使えるから、意外と重宝する。

だが、距離が離れていたために見てから余裕で躲された。

「縛道の六十三・鎖条鎖縛」

打ち出されたように飛び出す鎖。弧を描いて破面を捕らえようとする。かなりの集中を要するがこの鎖は自在に操れる。逃げた先々へと追尾し、意地でも捕らえんとせんばかりに動き回っていた。

「逃げてたんじゃ捕まるぜ？」

「ならば鎖ごと断ち切りましょう」

長く白い爪から繰り出される斬撃。一撃で壊れる事はないが、同じ箇所にも何度も当てられれば流石に持たないみたいだった。そしてそのまま、俺に向けていくつも攻撃を放ってくる。威力よりも速度重視だが、距離があつたために避けるには十分だった。ただ、避ける方向を予測してか、いやらしいタイミングに攻撃が置かれていて厄介に感じた。

「…ふう。意外とやるじゃないか」

「光栄です。しかし、まだ貴方のやる気を引き出せないみたいですね」「初めからないものは引き出せない。当たり前だろ」

何度も言うが、俺にはオマエと戦うつもりはない。戦意がないというより、倒す——正確には殺す——気が起きないのだ。仕方なしなのだ。早く終わらせたいのなら殺せばいい。しかし殺す気が起きないから殺せない。面倒で、下らない意地と言われるかもしれない。相手は破面だ、何を躊躇う事があるのか。

——違う。俺にとってこれは、死神と破面という構図ではないから。命を奪い、奪われる。そういう戦いと認識しているからこそ、俺は殺す気が無ければ動かない。ただ殺すだけなら猿でも獣でもできる。そこに、明確な何かを持って相対することが、俺が殺すための条件だ。そうして、長いこと殺人衝動を制してきた。枷が外れるのは、多分藍染なんかと立ち合ったとき。逆にそれで無ければ、俺はコイツらを殺せない。まあ、殺さなければ何をしてもいいとも言うのだが。それでも、相対した敵が俺の琴線に触れたのなら。俺はソレを殺してしまうのだろうか。

「縛道の六十一・六杖光牢」

ちよつと力が強い程度の破面なら、十分な捕縛力。腕を振るって斬撃を飛ばすのなら、腕ごと動けなくするといいわけだ。

「っ……！」

「さ、終わりだ。仲間はやられたみたいだが、今のところ俺はオマエを殺す気は無い。だからもう帰れ」

「これで私を、捕らえたつもりですか…」

「死にたがりを殺すほど暇じゃない。それでも俺と戦いたいなら諦めろ」

「……………」

張り詰めていた何か切れたのか。破面は項垂れるようにして意識を失った。

「穂積、なんで殺さなかった」

「…言っただろう。俺は殺す気がしなかったっただけだ。オマエらの『殺す』と、俺の『殺す』は意味が違う。こればかりはオマエの命令を受け付けないからな」

俺はそう言い放った。殺気は込めずに、断固とした意志を以って。だから日番谷は、それ以上何も言わなかったのだろう。『殺す』ことに関してだけは、俺は頑固だと知っているから。

その後なんかかくかくしかじかで、破面どもは回収されていった。収穫は決して少くない。護廷十三隊では、情報の擦り合わせが行われることだろう。相手を知るのは大切だ。

それでも、俺のやることは変わらない。

「もう少しで、殺せそうだな。藍染惣右介」

気になる輩はいる。空っぽを抱え込んだ能面みたいな破面とか。

だけど、それも含めて、俺に出来るのは殺すことだけ。どこまで行っても俺は俺で、人で。そして――。

「どう頑張っても、俺は殺人鬼なんだろうな」

血に塗れた軌跡。血のような革ジャン。血に染まる刃。血を求める虚無。いつだって、伽藍洞を満たせるのはそれだけだから。

今日もまた、西へ陽が落ちていく。当たり前のように落ちていく。織さんは現世で何をしてるんだろうか。白塗りの瀟霊廷が、紅く染まってい。決して血のような色では無かったけれど、織さんを思い

出しているとそう見えてしまう。

藍染隊長と戦っていた時の姿を思い出すと、織さんもそういう人間なんだと分かってしまう。

それでも、好きになつたのなら仕方ないのかなあ。

「勇音。今日はここまでです。急拵えですが、いくらか力にはなるでしょう」

「はい、ありがとうございます」

「ではまた明日」

最近、私は卯ノ花隊長に頼み込み、剣を教えてもらっている。丁寧に教えてくれると思っていたけれど、何故か肉体言語だった。剣の腕もさることながら、最近は回道の腕も上がってきている。

隊首会議で分かったことを教えてくれたが、織さんは普通に破面アラシカルと戦闘しているらしい。しかも限定状態で。

卯ノ花隊長曰く、喧嘩殺法じみている洗練された殺人剣。型を知りながら型に囚われず。彼の斬魄刀の使い方はそれだったという。それに、あそこまで強いのなら、卍解にだって至っていてもおかしくない。

彼の斬魄刀『唯式』には、涅隊長も興味を惹く謎がある。あの反膜ネガシオンを斬り裂いたり塞いだりする鬼道系と推測されるが、やはり謎。涅隊長が狂気じみた目で「是非とも解剖したいものだヨ」と言っていたらしい。聞かなかつたことにした。

「痛っ……」

散々に打ち据えられた腕を、回道で癒していく。じんじんと熱を持っていた痛みは、ゆつくりと引いていく。

見れば、もう陽は沈んでいた。いつのまにか現れた一番星や二番星が、チカチカと瞬いていた。現世は夜も明るいと聞いたことがある。だけど、瀨靈廷だつて明るい。

その後私は夕食を済ませ、部屋で刃禪を組む。卍解を会得する前に、斬魄刀と会話するのだ。始解の時と同じ手順で。

眠るように、すーっと瞼が閉じられる。

「穂積サンのことはこっちでも色々調べて、この前結果を頂きました。黒桐サンは相変わらず仕事が早いっス」

「儂は其奴のことを知らんが、情報統括の無い流魂街で一個人の情報を調べ上げるとはの……」

「私は全く知らないがね。それよりも、私を呼んだ用件を聞かせてくれ。さつさと帰って、この前買ったヴィシヤ盤を弄りたいんだ」

「ああ、この前言つてたアンティークのやつっスか？魔術的価値が云々って。アタシにはよく分からないんすけどねえ。ホントただ古いだけじゃないスか」

「バツカお前、古くて、尚且つ曰く付きつてのは私^{魔術師}たちの興味関心を引くものなんだよ。それより、何もないなら本当に帰っていいか？」

「まあまあ。今から話しますよ。なんだったら軽食くらいなら少しは用意しますよ。鉄裁サン、お願いしていいっスか？」

「承りましたぞ店長」

「全く…。鉄裁が居ない今だから言うが、相変わらずあの趣味の悪い髪型はどうにかならんのか？」

「それをアタシに言われましてもねえ」

「そういえば鉄裁は現世に来てからずっとあの髪型ではないかの？」

「…言われてみればそうっスね」

「本気か？あの髪型で云百年も過ごしたって？冗談だろう？」

「まあいいじゃありませんか。橙子サンも早く帰りたいようっスから、本題に入りますよう」

「ああ、そうしてくれ」

「夜一サンも聞きます？」

「大事な話になるじやろう？聞いておくとするわ」

「別に面白くも何とも無いぞ夜一。ただ、織のことを少し話すだけだからな」

「何じゃ、穂積のことはその黒桐とやらに調べてもらったんじゃないのか？」

「それはこっち側の話っス。しばらく預けてみて、魔術的には何か無いかと思いましてね」

「あれを私の観点から語るのは難しいな。正直、魔術師としては大成しないよ」

「魔術教えてるって聞いたんスけど」

「あれは魔術というより催眠だ。無いよりマシ程度のものさ。織は獲物を持ち替えることがあるそうだから、それを起動スイッチにしてそうだがね」

「ちなみに何教えたんスか？」

「秘密だ秘密。こういうのは隠してた方が面白い」

「ま、そういうもんスカね」

「それでいいのかの喜助？」

「橙子サンがこう言ったのなら、これ以上問いただしたって無駄っスよ。夜一サンも分かってるはずっスよ」

「…まあ」

「それよりさっさと本題に切り込め。入ろうとしたら普通に逸れたぞ」

「ハイハイ。それじゃあ黒桐サンが得たデータを見てみましょうか。えーと、年齢と生年月日とかはどうでもいいっスね。出世は、と。穂積家の養子……っスか」

「養子じゃと？」

「そうみたいっスねえ。じゃあどこからかというのは……、東流魂街にあつた今はどうやら没落した中流貴族で詳細はまだ不明……と」

「東流魂街の没落貴族……か。思い当たる節はないのう」

「ま、その辺りは今後も黒桐サンが情報を上げてくれるでしょう」

「そっちの世界は知らないからさっぱりだ。おい喜助、分かりやすく説明しろ」

「そうっスねえ、穂積サンは生まれも育ちもちよつとした貴族の家系なんスけど、生家は没落してて不明、育ちは穂積家のようです。あ、穂積家は割と名の通った商家っスよ」

「商家？馬鹿言うな、あんなのが商家から生まれるはずがない。とな

ると怪しいのはやっぱり生家か」

『あんなの』とはまた酷いっスね」

「私からしても正直推し測れんぞあいつは。まさかあの眼を拝める日が来るとはな」

「あの眼……。眼になにかあるんスか？」

「ああ。お前ら、織があり得ないものぶった斬ったとか、そういうのは知ってるのか？」

「あり得ないもの？ええ、彼は今まで斬れないとされたものを斬つてますね。反膜ネカシオンやら鬼道やら」

「その反膜とやらは知らないが、やはりか。いつから開眼したのかは知らないが、相当長く触れ合ってきたと見える」

「やはり？橙子サンが思い当たる節は、どんなのなんスか？」

「儂も聞きたいのう。穂積のやつ、どんな手品をつかつたんじや？」

「織は手品も何も使っちゃいない。全部、織にとっては当たり前のこと。何が切欠になったのかは知らないが、あいつは元々あの眼を持つていた。そして何か切欠で開眼した。そうとう苦悩したと思うが……。多分あいつ、いつからか性格変わっただろ？」

「……一時期、といつてももう100年ほど前ですが、彼は2年間ほど昏睡していたことがあります。橙子サンが言う切欠にはなり得るんじゃないっスかね」

「100年だと？相変わらずお前たちの時間の尺度は理解できん。

……ああ、多分それだ。それで脳みそが死を理解してしまったんだろ。あいつの眼は『直死の魔眼』と言う。死を直視するんだ。無機、有機関係なく、『活きている』すべてのものの死の要因を読み取って、干渉可能な現象として視覚化する。私ら魔術師から見れば、魔眼とよばれるものの中でも最上位のものだ。効果も価値も、他の魔眼なんぞ目じゃない。噂の列車に出されればとんでもない値がつくぞ」

『死を直視する』じゃと？どういふことじゃ？」

「文字通りだ。直死の魔眼の持ち主には、ものの死が視える。線や点といった形でな。まあ、それは織から得た情報だから間違いない。つまり、織に見えてる世界は死が折り重なった脆すぎる景色。終末の風

景と言い換えてもいい。100年もよく日常生活を過ごせたな」

「なるほど…。それは真つ当な精神じゃ過ごせそうにない。アタシじゃ即発狂しますね」

「当然だ。織の場合は視点をズラして俯瞰してらんだろう。真つ当な、とは言えないが、なんとか折り合いを付けてるみたいだな。まあ、チャンネルのようなものかね」

「その眼は、あらゆるものを殺せるんスカ？」

「正確には、あらゆるものを殺せるようになる、だ。眼だけじゃ殺せん。あれには死にやすい線と殺せる点しか見えないから、実際に殺すには織がそれに触れなければならぬ。魔眼の大半はピントが合ったものに対して何らかの効果を発揮するものが多いんだがな。直死の魔眼は少し特別だ」

「あらゆるものを殺せるようになるのはホントっスね？」

「ほう？お前にとって大事なのはそこみたいだな。あの眼の前では再生したりする能力も意味がない。流星に不死身となると分かんが、その辺りは織次第といったところか。あれは命を殺すのではなく存在を殺すものだから、死の概念が無いとかそういうのじゃ無ければ殺せると思うんだがね」

「あー、なんかもう儂じゃ理解できんぞ喜助。お主と違って魔術を知つとるわけじゃないからの」

「んー、この辺りは魔術というより死の概念を掘り下げた話つすから、まあ難しいでしょう。アタシも頭を抱えそうっスよ」

「あれを深く理解しようとする必要はないし、まずもって理解できんだろう。さつきも言ったが、死が視えることに真つ当な人間は耐えられない。死は、生きている限りおよそヒトには理解できない代物だ。それを理解してしまった織は、常人と比べられない。比べることが出来ない。比較対象がいなければ、相違点も類似点も分からない。それ見ろ、理解できるはずがないだろう？」

「魔術的には、そういうもんスカねえ」

「魔術的にじゃなくても、だ。私にはあれを理解するつもりなどないよ」

「……まあ、またこんな話をする機会があるでしょう。さて、重たい話はここまでにしましょう。鉄裁サンの料理も出来上がる頃合っスから、テレビでも見て待ちましようか」

「ああ喜助、新聞あるか？私新聞派なんだ。今日びのバラエティは肌に合わん」

「今時は笑わせれば食っていけるんスよねえ。えーと確か…、あ、あつたあつた。今日付の朝刊っスよ」

「悪いね。…へえ、やっと止まったのかい」

「止まった…？ああ、最近噂になつた連続自殺っスか？」

「ああ。どうにもきな臭かつたんで、織に情報だけ渡してみたんだが、思いの外喰いつきが良くてね。終わってみれば少しばかり満足そうな顔してたから、多分当たりだつたんだろうね」

時間は割とあつという間に過ぎる。その間に、破面の襲撃や虚の襲撃があつたりしたが、特に俺が出張ることもなかった。黒崎が少し変わった連中と関わりを持ったというのは、浦原から聞いた。なんでも、黒崎に眠る力を制御するものらしい。まあ、特には興味を持たなかつたが。

こつちもこつちで、色々あつた。式から提示された卍解の条件は、修行すればクリア出来るようなものでもなく、しかしこの前の破面との戦いで僅かに認めた風な口ぶりを見せてくれた。

橙子の魔術指導もそれだ。戦闘に関わるものだから、浦原家の地下の部屋を使うわけだが、まだ長時間の維持と制御が上手くいかない。何かをスイッチにすれば上手くいきそうだが……。いつそ剣を握つた時だけにするかな…。あの時もそんな感じだつたから。

「あーあ、もうアタシじゃ敵わないっスねえ」

「馬鹿言うな。オマエまだ全然本気じゃないだろう。知ってるぞ、オマエ割とヤバイ能力持ってるだろ。頭キレるだけでも厄介なのに戦闘強いとかなんなんだオマエ」

「それ、藍染隊長にも同じことが言える気がするっすけどね」
「それはそれ、だ」

藍染惣右介という男は、俺にとって特別とも言える存在だ。好悪とかそういう次元じゃなくて、文字通り存在自体が。未来を考えるのは俺ではなくアイツ。後ろを振り返るのが俺。かつて式はそう言った。そう言われると、鏡花水月という力は確かに世界を支配できる能力だろう。それも、理想郷に等しい世界を。そこに紛れ込むだろう異物が俺。アイツにとっての俺は多分そういうものだろう。

——世界にとって、俺とは何なのか。

死神？異物？殺人鬼？愚者？死？

そんな言葉が泡沫のように浮かび、消えゆく。

そんな風が変わったのは、この景色を知ってから。終末を知り、およそあらゆるものに終わりを齎すことは、俺にどんな終わりを告げることになるのか。

直死の魔眼を持つ俺は、側から見れば理不尽な存在だ。なぞれば殺すし、突けば殺す。かと言って、俺自身は決して理不尽な存在だというものではない。俺だって人間だから、斬られれば死ぬ。突き殺される事だってある。

藍染惣右介にしたって、それは同じ事。たとえ崩玉を取り込み不死とか何かになっても。生きているのなら理はその身を縛る。

そう。俺にとっては何より。

——生きていることが全てだ。

溢れんばかりの虚無を満たすには、これがいい。俺は今まで一度も人を殺したことはない。藍染惣右介というのは極上に過ぎる獲物なのだ。

死が、俺の前に立ちはだかろうとしている。

薙ぎ払え。

斬り開け。

突き崩せ。

死が、俺の前に立つな。

カタリ、と震えた音がした。

「虚^{ウエコムンド}圈に乗り込んだ…って、敵のお膝元にか？」

「はい。元々その予定でしたし、少々早まっただけっス」

「というか、その…黒腔^{ガルガンタ}ってのは開けたのか？」

「アタシが開発しました。繋界儀という術式ですよ。何なら、今から行きますか？」

「…他にいるんだな？虚圈に乗り込む奴が」

「ええ。というか正直な話、穂積サンが卍解を会得したら送り込むつもりだったんすけど、黒崎サンの修行が思ったより早く進んでまして」

「俺の卍解会得が思ったより遅かったっつてか。まあ、自覚はしてるよ」
夏のある日に、浦原商店の居間でそんな話をしていた。黒崎一護を始めとした奴らが虚圈に行ったのは初めて聞いた。別にそれがどうしたという話だが。

「穂積サンの卍解が特殊というか何というか…。本来なら卍解は、具象化した斬魄刀本体を屈服、もとい倒してから会得に至ります」

「知ってる。その説明は聞いたぞ」

「まあまあ。ところが穂積サンの斬魄刀は、具象化したはいんすけど、卍解を教える条件を出すなんていう前代未聞なことをやってくれたんす」

「具象化の段階で転身体一回壊したんだがな」

「あれは驚きました」

引っ張り出される感覚を殺したとは、誰の弁だったか。

「まあとにかく、穂積サンはサクツと卍解を会得しちゃって下さい。そうしたら、穂積サンを虚圈に送り込みましょう」

「簡単に言ってくれるな。でもまあ、糸口は何となく掴めてる」

「おや穂積サン、うまく行きそうなんすか？」

軽い口調でそう問いかける。実は、会得自体は出来ている。ただ、使い熟せるかどうかは別問題。この卍解は、俺以外には使えない。そもそも卍解はそういうオンリーワンの能力ではあるが、その中でも飛

び抜けて変な能力だ。誰にも理解出来ないという意味でも。

そんな時、ふと脳裏に浮かんできたのは、空に消えゆく藍染の姿。そしてその後に浮かぶ黒腔の閉じる姿。

「…なあ浦原」

「どうしたんスか？」

「その繋界儀とやら、一回見せてくれないか？」

あの時、空に見えた深青の線は、今でも網膜に焼き付いて離れてくれなかった。

「あれが…『虚夜宮』…」
ラスノーチエス

僕の目の前に佇んでいるのは、全てが真白に塗りあげられた建築物。巨大であるが豪華ではなく。ましてや荘厳でもない。ただただ佇むだけ。ポツンと一人で、虚ろに在る。

これだけ大きいのに、その中身は恐ろしく空っぽ。ああ、つまるところは伽藍洞ということだ。

「で、これからどうするんだ黒崎」

「決まってるんだろ。突っ込むぞ」

「相変わらず考え無しか…。と言いたいところだが、今回はそうするしかないみたいだ。しかし、この壁はそうやすやすと破壊できないぞ？」

「だよな…。恋次、どうにか出来ねえか？」

「任せろ」

その後、ドゴオオオンツ!!という馬鹿でかい音を立てて壁を破壊した僕たちは、何とかこの虚夜宮へと乗り込むことに成功した。

見た目こそモノクロで、シンプルを具現化したようなこの建物はその実というか案の定というか、迷路のような構造になっていた。少し広いところに出れば敵に出くわす。まるで来ることが分かっていた

かのような。

『銀嶺弧雀』

この手に現れたのは、僕の新しい兵装。以前使っていたものとは少し異なり、全体が霊子で構成された弓だ。あのいけ好かない父親との特訓で何とかモノにした訳ではあるが、加減しても十二分に強い。

この『銀嶺弧雀』、『魂を切り裂くもの』、『アナログではあるが『銀筒』に、そして新たに会得した攻撃手段である『自在兵装』があれば、大抵の破面は倒せるはずだ。

そうこうしながら、目の前に現れた破面との戦闘が始まる。

告げられた名前を聞いた僕の気持ちは、悪魔と遭遇したかのような絶望感。

隣の阿散井は奮闘してくれている。僕も、やられてばかりではない。

「どうした死神に滅却師^{クインシー}。お前たちの力はそんなものなのか？僕を失望させないでくれたまえ。君たちは貴重な資料になり得るのだからね」

先程からこの男の口調と言ったら、どうにもあのマッドサイエントイストを思い出されてしまう。

背中を駆け巡る悪寒を堪えて、2対1という状況を効果的に用いる立ち回りを続けていた。阿散井の攻撃の間隙に体勢を崩すように仕向けた矢。重視するのは攻撃力よりも射程と弾速。意識を繕^よりあげていき、霊子を緻密にコントロールする。

「阿散井！」

「っ！」

軽い音を立てて矢が空を切り裂く。破面^{アランカル}には鋼皮^{イエロ}と呼ばれる天然の鎧が有るそうだが、この矢はそれに傷をつけるかどうかの威力。だが、同じ所に何度も矢をぶち当て続けられれば。

「くっ！僕の鋼皮に傷を…!?どうやら君は滅却師^{クインシー}としてはかなりの力を持っているらしいな」

「そいつはどうもー」

皮肉のような言葉に対して、矢を掃射して面制圧を試みた。簡単に

防がれはするだろうが、その場に留めておけるくらいの攻撃だ。

矢の密度は高く、今の奴にはおそらく目の前はおろか矢が降ってくる範囲全ては視界が塞がっているはずだ。そして、今の阿散井ならばその隙を突くことができる！

「っ、なに!?!」

「くらええええっ!!」

よし、ようやく奴にまともな攻撃を当てられた。

とは言えやはり、奴も十刃エスパーダの1人。それもNo.8オクタバだ。あの一撃で沈むほどヤワではないはずだ。

「…よくも、よくもやってくれたな…!!くっ、いいだろう。僕も少し本気を出す必要があるみたいだ……」

ザエルアポロは手に持つ斬魄刀を顔の高さまで掲げ、妖艶さと狂気を湛えた笑みを浮かべた。狂気のままに、刃を舌が這う。

「噁れ、『邪淫妃』」

刀剣解放。黒崎たち死神が使う卍解の破面バージョンだと言われる。その力は莫大であり、ひしひしと感じる霊圧も、先ほどまでのそれとは比にならなくなっていた。

霊圧の嵐が吹き荒び、止まった。目を向けると、まるでタコカイカのような触手と思わしきものを背負ったザエルアポロがいた。

振り返ると、肩で息をしていた阿散井が、斬魄刀を強く握りしめていた。よく見れば、それは霊圧を高めている動作だった。

不意に、カツと霊圧が荒ぶる。

「卍解!」

阿散井の本気か!たしかに隊長格すらも敵わないかもしれないこの破面を相手にするには必要だ。僕と阿散井の力を合わせて勝てるかは分からないが…、やるしかない。

「————『狒狒王蛇尾丸』」

文字通り狒狒を彷彿とさせる姿。骨龍のような姿に変化した斬魄刀。

ならば、僕も出し惜しんでいる余裕を捨てよう。鋼皮の前では、『魂を切り裂くもの』をあまり効果が高くないだろうし、仕込みに時間

のかかる『破芳陣』^{シユブレング}も見込みは無い。

要領自体はさつきと変わらない。パワー攻撃は阿散井に任せつつ、正確さと戦略は僕が担う。だが、全く同じではもう通じない。

1つ、切り札をきる。

『我が刃は彼方にて歪む——』^{マイネ・キリング・ファーゼルデイツヒ}

光の差さない闇。かろうじて光源となりうるのは、足元に作られた
霊子の足場だろうか。

繋界儀を視た後、浦原の提案で結局虚圏^{ウエコムンド}に足を運ぶ事になった。
繋界儀を視たことで、俺の中に1つ確信が生まれた。少なくとも今の
俺には出来ないが、卍解を完全に掌握し理解したのなら、きっと可能
になるはず。

ひたすら縮地で進み続ける。そうしているとやがて、出口と思わし
き光が生まれ、真つ白な砂と真つ黒な空の世界に放り出された。

「虚圏……ね」^{ウエコムンド}

こんなところに住んでるから空っぽなんじゃないかと、思わず考え
てしまうくらいには何も無い。

遠くに揺らめくのは、虚夜宮^{ラスノーチエス}だろう。かなりの距離があるのが分
かる。全速力で走っても、時間がかかることは間違いない。

ならば、と。

「視て、殺してみるか。なにせ、空間を殺すのは初めてだからな」

直死^俺。世界が歪まないのは、それ自体が理を内包しているから。
世界^俺にとつての当たり前。ヒトからしてみれば、あり得ないことなの
だろうか。

触れば水のように滑らかなのだろう白砂は、俺の足にかかる重さを
受けて沈み込む。その感覚が、お世辞にも厚いとは言えない草鞋を通
じて分かる。気にもならないはずの感覚がよぎるほどに鋭く、全てが
自分に向かって落ちてくる。

深く、深く。蒼い海に落ちるような。深海色の脆い世界。音もなく、腰のナイフを構えた。

遮る物のない世界で、血に塗れた純白のナイフが光を返し、その存在を示す。

右腕を払う。引つかかった感覚は無い。ただ殺したのだと分かった。

呆気ない。人を斬るよりも、無機的な感覚。

そして訪れる、引つ張られる感覚。

どこまでの空間を殺した事になるのか。思考する間も無く、目の前に巨大な建物が居座っていた。近くに大きな穴があるあたり、黒崎たちはここから入ったのだろう。いくつかの霊圧を感じられる。

道中の敵は倒され、いくつかの分岐点があつたが直感でチョイス。そのうち現れたのは。

「志波海燕…:か」

「穂積副隊長!？」

「ん…:? よお穂積、久しぶりだな」

100年前に死んだと聞かされていた男の姿だった。

「志波海燕…:か」

「穂積副隊長!？」

「ん…:？よお穂積、久しぶりだな」

目の前に現れたのは、かつての俺とそれなりに付き合いのあった男。海燕は、まるで当たり前のように立っている。

手にしている槍は、まさしく『掬花』。記録のままだ。

「朽木。これは…:」

「恐らく敵…:です。海燕殿が虚の側につくはずがない」

「…:そうか。そう思うなら、その手が震えるはずないと思うけど」
「つ…:…」

救われたように見えて、やっぱり引き摺る。俺も同じだ。過去の亡霊に取り憑かれ、未だに自分を定義できない。

それこそが、式に告げられたこと。

『自分を定義する方法を、再定義する』

自身の過去を以って定義するのではなく、俺自身の意志を以って定義する。虚無に浸る俺の意思とは、即ち『生死との接触』。

命ある何かを殺して。殺して。殺して殺して。そして初めて生を知る。自分が生きていると知る。自分が何なのかを理解する。

「なんだ穂積。お前も俺を敵だっているのか？」

「俺はオマエが死んだことを知ってはいる。だけどそれを確認したわけじゃない。まあ、でも——」

不自然な死が走る海燕の身体。それを視て、やはりと思った。

「オマエが皮被ってるのは分かるさ。いい加減、三文芝居はやめとけ。
破面^{アラシカル}」

「…:そりや当然だわな。こんな場所で、生き返っただなんて信じるわけねえか」

「穂積副隊長…:。あの海燕殿はやはり…:…」

「アレは志波海燕じゃない。それはオマエ自身がなにより分かっているんじゃないのか。そうでなくても、俺はアイツのことを知らない。そ

ういう意味でも、アレは志波海燕じゃない」

俺あが生まれるより前に、志波海燕という男は死んでいる。俺と志波海燕は初対面ともいえる。

あつちは俺のことを知っていた。穂積織かのことを、寝食を共にした仲間として知っていた。

俺はただ知識として。穂積織かとそういう関係にあったのかと。

「俺とオマエは赤の他人だ。なら、さっさと終わらせるぞ」

「穂積副隊長…、しかし…」

「まだ、躊躇うか？」

簡単に踏ん切りがつかないのも、仕方のない事かもしれない。そういう面では、俺の方が異常なのかもしれないのだから。

それでも、俺にとって他人で。虚で。生きているのなら。

それは俺にとっての殺戮対象だ。

「朽木。先に進め。オマエには悪いが、ここは俺が決着をつける。正直オマエには荷が重い」

「ですが…」

「別にオマエが弱いってわけじゃない。『袖白雪』とオマエの鬼道なら、十二分に渡り合えるかも知れない。けど、これは心情的な問題だ。その手の震えを見て、確実に倒せるって言えるか？」

「……………」

朽木は、何も答えなかった。

「それに、予想外の事が起きても俺の方が対処できる。——まあ、本音は少し違うがな」

「……………分かりました。穂積副隊長…、ご武運を」

軽い足音を立てて、闇の奥へと駆けて行った。それを見送って、俺は目の前の破面に向き直った。

「……………で、お前の本音は何なんだ？」

訝しげにそう問いかけられた。隠すほどのことでもない。実際に受けてもらうのだから、バレるのは遅いか早いかというだけだ。

「俺の『卍解』の実験だよ。暇だろ？付き合えよ」

「…ほう。お前が『卍解』を…ねえ？くく、面白いじゃねえか。お前の

『卍解』と俺の『振花』のどっちが強いかな、試してみようじゃねえか」
「……はあ。そういうんなら、オマエの本気をサクツと引き出してやるよ」

まずは、殺す。するりと抜いたのはナイフ。死神としてでなく、純粹な殺人鬼としての殺戮。赤の他人志波海燕は、そうやって殺す。

「舐めてんのか……」

「いや。オマエには十分だよ」

闇の中、よく目立つ白の服。そのままに、飛び出してきた。

「死にやがれええ!!」

「……………」

ギーン!と甲高い音が反響する。ナイフと槍の穂先がぶつかり、衝撃が刃を通って伝播した。

バックステップで一旦離れるが、斜に構えた槍が目に入る。

それを認識した瞬間、視界を切り替えて世界を視る。

縮地で離れた距離を潰す。破面の表情に、笑えるくらいに驚愕が浮かんでいたのが見えた。

それを無視して、槍に走る真一文字の深青の線に、刃を通した。

手応えは、思った以上に軽かった。

「なっ…………!?!」

「思ったより脆かったな。でもまあ、オマエなんてそんなもんだろ。死んでるわけだしな」

本来斬魄刀は、俺が殺せる対象ではない。魂そのものの具現である斬魄刀は、存在次元が遥かに高位だ。強固な存在である斬魄刀本体が、殺されることを拒否するのだ。今の俺よりもその存在が強い以上、殺せないはずなのだ。

殺せたからには、中身が空っぽだったんだろう。残滓を振り回して、斬魄刀の体裁を繕っていた。

「…………いいだろう。後悔しやがれ。俺に喰われることをなあ!」

破面は左手の手袋を徐に外した。手を覆っていたはずのソレの内側には、青黒い触手のようなものが蠢いていた。生理的な嫌悪感を呼び出すデザインだった。

「喰い尽くせ、『喰虚』!!」

途端、破面の足下が肥大化し、人の上半身と、化け物の下半身を持つ異形へと変わり果てた。

——これだけデカいと、最早殺し放題だな。

流石にナイフでは火力不足だろう。それに、こっちの方が分かりやすい。

「開境しろ、『唯式』」

ナイフを腰に戻し、解号を唱えた斬魄刀を構えた。

「俺の刀剣解放、『喰虚』は喰らった虚や霊体の力を俺のモノにする。

この手に捕らえられたら、もう逃げられねえぞ」

「しぶとそうだな。まあ、それくらいが丁度いい。くくつ、簡単に殺されてくれるなよ?」

霊圧を集中させる。

自己の定義に、もう悩む事はない。

俺は、俺。

——穂積織以外の、何者でもない。

死を視て、死に触れて。以って生を理解する。生きているんだと、心の底から歓喜する。

この感情と、この思いは、紛れも無く俺自身のモノ。

虚無に落ちたとしても変わらない、穂積織を構成するもの。

穂積織とは、穂積織^俺だ。

『そう。貴方は貴方。気づくのが随分遅かったけれど…ね。だから、本当の名前は少しお預けよ。でも、それが貴方よ。織』

そう繋がった瞬間、俺の中で何かが変わった。

「卍解——」

『我が刃は彼方にて歪む——』
マイネ・キリング・ファーゼルデイツヒ

それは、引き金の撃鉄を起こす文言。己が意志を刃に塗り替える。弓に構えた矢が、赤い光を帯びていく。血の色ともいえる。噛みつき、喰らい、殺し尽くすまで止まらない。

僕の手を離れても、満たされるまで止まらない猟犬のような。

『牙狼』!!
ハウンド

引きしぼられた弦の力で飛び出す牙。弓矢での攻撃ではあり得ない変態的軌道を描いて、寧猛に的を喰い殺さんとする。

これが、僕の新たな力の1つ。名を『自在兵装』
シユヴァルケガル

弓に番える時、矢として放てる限りであるなら、その形状を自在に変化させ、追尾、爆発、貫通のどれかを付与できるようになる。

試したところ、矢だけでなく、『靈子』で構成されたものならば適用できるらしいことも分かったが、主武装がこの弓矢である以上はほとんど日の目を見ないだろう。

『牙狼』は追尾弾。相手を殺しつくすか、己が壊れるまで永遠に追いつける。まさしく猟犬。

阿散井の攻撃の間隙を目敏く察知して喰らいにかかる牙。

ザエルアポロは鬱陶しそうにしながら、阿散井と僕の攻撃を受け、躲し続けている。

「石田！少し時間を稼いでくれ！」

「いいだろう。しくじるんじゃないぞー！」

自信に満ちた阿散井の表情に、何かの切り札があるのを理解した。

『銀嶺弧雀・全数展開』
アーレ・ベレイト

霊圧を細かく制御し、展開した全ての矢を『自在兵装』
シユヴァルケガルとする。

ザエルアポロに届く範囲の矢は『爆発』にセット。届かない部分は『追尾』にセットし、外れても追いつけるようにする。

「ここまで1秒と少し。もっと早くできるだろうか。」

「ここまでとは…。面白いじゃないか…!!」

どこまでもマッドなサイエンティストらしい。やはり、あの男に似ていて気に入らない。

追尾の半数を放つ。掠る程度の、奴からすれば蚊のように鬱陶しい。

それを盾に、阿散井の攻撃準備が完了した。

「行くぞ石田！」

そう叫んだ阿散井が、一際大きく斬魄刀を振り回す。刀としての面影は無く、骨のような生き物が唸り、大口を開ける。

その口に、膨大な赤い霊圧が収束する。

『狒骨大砲』！

それを尻目に、爆発の矢をザエルアポロに向けた。

「……さよならだ」

アリー・ヴェデルチ

不意に浮かんだイタリア語と共に告げる、別離の挨拶。

同時に、全ての矢弾が放たれた。

死にも匹敵する暴威に囲まれた科学者の顔は、どこまでも笑いに染まっていた。

「がっ、は……っ！」

「なんだ、あつさり終わったな」

卍解の本領を支配した俺は、目の前の破面を相手にその程度を測っていた。

あれほどまでに肥大化した怪物の下半身はボロボロになり、自重を支えきれなくなっていた。

『喰らう』こと以外には、物理的に攻撃するしか手段がないこの破面は、俺にとってはカモでしかなかった。

それに…。

(どうにも身体が『殺し』に動いちまう。俺の意思に関係なく、最適化してる…？俺の事を俺以外に知り得る奴は……。式…？)

松本乱菊の斬魄刀もそうらしいが、俺の斬魄刀である式もなかなかの気分屋。うさぎというよりも猫。でも本人はうさぎだと頑なに主張する。いつの日か式がどこからか取り出したうさぎ耳に関する記憶は、俺にとって笑える話だ。

そんな式にとって、もしかしたら『喰らう』という概念が忌避されるべきことだったのか。あるいは本能的にイヤだったのか。

「へっ…、まさかここまでスタボロにされるとは…：な」

「オマエ…、終ぞその姿のままだったな」

ズズ…ンという音が聞こえてきそうな巨体は、もはや生気を漂わせることを諦めたかのようにだった。

志波海燕の皮を被ったまま、コイツは俺と戦い続けた。それがコイツにとって利のある行為だったのかは、どうでもいい。

「何でだろうな…。剥ぎたくても剥げないというより、剥ぎたくなかった…って感じだな…」

「…何もかもを『喰らう』が故の、残滓の発露…：か」

今になって表に立つのは恐らく『志波海燕』なのだろう。斬魄刀と共に殺したかと思っただが、俺はこの男のことは、知識として識っている。だが、俺は初めてこの男と会う。

「なあ織」

「……なんだ」

「…変わったな、お前。前はもう少し感情豊かだったはずだが…」

「色々あったんだ。朽木は今でも、オマエを救えなかったのを後悔してるし、浮竹隊長たちも、オマエが居なくなつたことを嘆いてたよ。

……俺は…」

何も思わなかった。少なくとも俺は、オマエに最も親しい者の1人だったはずなのに。

虚ろで虚無で。それを実感した瞬間だった。

「言うんじゃない。……お前が言つても意味が無いことくらい分かつてる」

「…そうか」

「……俺は、弱い。守りたかつたものを守れなかつた。お前も含めて…」

命を漏らすように息を吐く。最期は近い。あと数歩踏み出せば終わりだというのは、視ずとも分かる。

「お前の力は聞いているぜ、織。俺の親友だつたお前だから、頼みたいことが…ある」

俺に重ねているのだろうか。その焦点はどこか別のところに結ばれて、幻像を投影している。

「俺を……、弱い俺を殺してくれ……」

「……………」

その願いは、その男にとって何よりも貴いものだった。

願いを抱き続けて歩いた道は、歩きたかつた道から逸れて久しい。間違えたのではなく、間違えさせられたのだ。その男に罪はない。

しかし、それを飲み込めるほど、その男は美しくなかつた。志波海燕

だから、歩き続けることに決めた。

いつか、足を止めさせてくれる者が現れると信じて。

「…代わりで悪いが、いいぜ。殺してやるよ。初めてをくれてやる」

「……くく」

視える世界は深青の死。万象綻ぶ直死の世界。

全身に走る綻びにあつて、ただそれだけを殺すものが視える。

「じゃあな。志波海燕。会えて嬉しかったぜ」

「おう、またな。穂積織」

その日、俺は初めて人を殺した。

「……」

「っ……！」

思わず立ち止まり、来た道を振り返った。

突如走った感覚は、馴染みなく、故にそうした。

（穂積副隊長……、海燕殿……）

仲間であり、上司でもある男と。

かつての師であり、いまでも尊敬を重ねる男と。

……何があつたのかなど、朽木ルキアに知るすべはない。

何より、知つたところで。彼女に出来得ることなど、何もないのだから。

「海燕殿……、私は……強くなれたのでしょうか……」

かつての宴で誓つた思い。だが、それを誓つた相手はもういない。

朽木ルキアは未だその思いに胸を張れない。自信がない。思わず背中が丸まりそうになる。

その思いが尾を引いたのだから、彼女はあの場で震えてしまった。

志波海燕の姿を前にして、己が誓いに背を向けようとしてしまった。

そして今、その事を自覚して奮起する。

「……っ」

こみ上げそうになる涙を堪え、力を込めて前を向く。

後ろを振り向くのは、然るべき時にのみ。

そうでなければ、前を向く。

軽快な草鞋の足音が、伽藍の空間に反響する。

朽木ルキアは、止まらない。

「……さよならだ」
アリー・ヴェデルチ

告げられた別離の挨拶は、誰に向けられたものなのか。
矢弾は放たれ、目標を焼失させんと殺到する。
狂気に満ちたトラウマを思い出させる科学者は、炎の中に埋まった。

「……やったか…?」

「バカ！阿散井！」

それを言うんじゃない！フラグ立つじゃないか!?

「くくつ、面白いじゃないか…!!たかが副隊長クラスの死神と野良滅却師程度と思っていたが…。存外に愉快じゃないか！フハハハ!!」
炎の中から聞こえてくる声は変わりなく。

狂いに狂った知性と理性が織りなす、狂声。

「僕も、君たちを少々過小評価していたようだ。ああ、さつきも同じようなことを言った気がするが…。まあいい。…次は、僕の番だね？」
ゾツとするような冷たさを感じ、共に歩法を駆使して後退した。
「おや？どうしたんだい？僕に直接的な戦闘能力はないんだがね。かつての僕ならまだしも、科学者たる僕が、君たちと剣を交えようなどと考えることはしないよ」

その気になれば殺すことも可能であるだろうに、大仰な仕草でそう言う。

破面であり、さらに十刃^{エスパーダ}でもあるのなら、僕たちを余裕を持って殺せるはずだ。

それをしないのは、偏に奴が『科学者』だから。あの涅マユリと同じくらいには、科学者であることに誇りを感じているから。

僕たちは『戦う者』であり、奴は『識る者』。

それでも、昨今の現世の科学者が、スポーツマンと融合したかのよ
うな体をもってるように、この科学者もまたそうなのだろうと思っ
て。

「まあそう身構えるな。僕は戦わない代わりに、『実験』をするんだか
らね」

「…どういう意味だ」

「察しが悪いね君も。僕の実験には助手が必要だね。…流石にここま
で言えば分かるかな？」

まさか…!?と思った時には、すでに術中だった。

いつの間にか近くまで迫っていた白い触手が、僕たちに絡み、喰ら
う。

喰われた身としては気持ち悪い事この上ないが、喰べるといより
分析する意が強かった気がする。

……事実、吐き出されたわけだから。

「っ、ゲホ、ガハッ!!」

「ゴホッ、っ、クソ…!」

圧倒的な不快感を振り払って、仕切り直すようにしてザエルアポロ
と対峙する。

その時、奴の手に何かがあることに気づいた。

「ふむ…、なかなかの霊圧強度だ…。考察のしがいがあるというもの
だよ」

まるで、僕たちの人形のような。…いや、ようなではなく、僕たち
の人形。

なぜそんなものが。そんなことは考えるまでもなかった。

なぜならそれは、僕たちそのものであるから。

「くく…！察しは悪いが頭はキレるみたいだね」

キュッ、ポン！というような音を立てて。まるでマトリョーシカの
人形みたいな形をしたそれは開いた。

中からつまんで取り出したのは、ビーンズのようなよく分からない
パーツ。

『君たちそのもの』から取り出したものなんだ。中に入っているもの

は…、当然、決まっているだろ？」

「っ、まさか…!？」

なまじ医学をかじっていたからなのか。あるいはそんな事関係なく、己のことである故に理解が及んだか。

それは、内臓。

(まずい……………!!!)

霊圧を回し、内臓の強化を図る。

ブルート・ヴェーネ

静血装なる技術が滅却師には伝わっているそうだが、その詳細は竜弦も知らなかった。曰く防御用の何かであることは聞いたことがあるらしい。

どちらにしろ、霊圧を体内で廻すしかない。外界からの干渉を可能な限り拒むように。

己が内に、別の世界を作るようにして拒む。

だが。弄ぶようにプチリと潰されたそれが、己自身の内臓であるからには。拒むことなど出来るはずもなかった。

「……………」

力を失い、ぐったりと横たわる破面^{アランカル}。志波海燕の姿のまま、死んでいる。

「……」

「ただ俺は、その場から離れることはしなかった。」

「っ！」

不意に、破面の左腕が動いた。その左腕はもはや腕としての体裁を捨て、ただただ喰らう為だけの器官として存在していた。

関節を捨てたから、自由に曲がって襲ってくる。

気づけば、破面は立ち上がり、両腕で襲いかかってきていた。

「クソっ、しつこい……ぞー！」

『シツコイノハ仕方ナイ』

『喰ラワナケレバ満タサレナイカラネ』

片言の言葉が、聞こえた。それも、2人分。

なるほど……、そういう事か。

「志波海燕の皮被ってたのは、オマエらか」

『ソウダヨ』

『キミタチヲ動揺サセルニハ、コレガ一番ダト思ツタカラネ』

心底意外そうな声でそんな事を言う。

そしてその破面は、遂に皮を剥いだ。その出で立ちはカプセルに閉じ込められた実験体のような。

涅マユリの実験室には、インテリアのように溶け込むんじゃないだろうか。

『朽木ルキアナラ上手クイツタカモシレナイケド』

『キミニハ通用シナカツタ』

「たしかに志波海燕という男は縁深い人物ではあるけどな。だけど、その縁は俺とは繋がってないんだ」

穂積織が俺でなければ、あの男を前に動揺しないなんてあり得なかったのだろう。それともあるいは、この場に居なかったかもしれない

い。

式の力を引き出し、様々な人間と関わりを持った。

変わったきっかけは、言うまでもなく。

『喰^{グロトネリア}虚』だったか。さっきのがオマエの本気だったとは思ってないけど、オマエ程度なら殺せる』

『確力ニ、我々ノ能力ハタダ喰^{グロトネリア}ラウダケ』

『ダケド、藍染様ニ頂イタコノ力^{ちから}ハ、ソノ殺ス力^{ちから}ニモ引ケヲトラナイ』

「藍染にもらった力…だと？」

その言葉に訝る。この破面に藍染が手を加えている。…いや、この破面にだけ、藍染は手を加えている。

ここにいる以上、この破面は十刃^{エスパーダ}なのだろう。ただ単純に強いはずの破面に、藍染が手ずから手を加えたのだ。

このパターンは、前にもあったような気がする。

全く同じではない。けど、破面として進化した存在に、手を加えるということ。

…：巫条ビルの上で殺しあった、あの月夜。

三日月だけが俯瞰していた、血に染まる夜。

「なにを…」

『僕タチハ、タダ喰^{グロトネリア}ベルダケ』

『藍染様ハ、ソコニ価値ヲ見出シテクレタ』

目の前の破面が紡ぐ言の葉を、耳の奥で噛み砕きながら。

俺の思考は、ある夏の日に橙子が話したことに繋がっていった。

相変わらず、部屋が暗い。

最低限の動線だけが浮かび上がるこの部屋は、どうにも陰気くさくて好きにはなれない。だけど、居心地が良いと思える空間だった。

採光する窓は、橙子の背中にどんと陣取る大きな1つだけ。電気はついているけども、陰鬱さは抜けなかった。

「お前もここに入り浸るようになったか？織」

「どこにしようと思手だろ。…まあ、入り浸ってるのは否定しないけど」

「構わないさ。話し相手がいるというのはそれだけでかなり違うらしいからな」

何かの紙と睨めっこしていたかと思えば、それを机の中にバサッと放り込み、近くにあつた段ボールからよく分からない何かを取り出した。

「それは？」

なんでか知らないけど、橙子の手にあるソレが不思議に見えた。

「これか？これはヴィシヤ盤と言つてな。ヴィシヤ盤自体は大したものではないんだが、これが纏う神秘に惹かれちゃったのさ。この前デカイ仕事で金が入ってきた時に見ちゃったもんだから、もう懐が素寒貧だよ」

「なんだそりゃ」

ソレを眺める橙子の目は、魔術師としての目だ。つまりソレは、魔術的な品物なのだ。

ふと、橙子がこんな事を言い出した。

「お前には暗示の魔術を教えていたか」

「そうだな。アレ、結構凄いな」

「だろうさ。特にお前たちは靈魂に近いからな。思念想念の影響を受けやすい。まあ、魔術師風に言えば『神秘に近い』のさ。お前たちはな」

「そんなもんなのか」

「尤も、その暗示魔術が高い効力を持つのはそれだけが理由じゃない

んだがね」

含むような言い方だが、俺はてんで興味がわかかった。とは言え時間を無為に過ごすのも、何かアレな気がして。

俺は、橙子の話を聞くことにしたのだった。

「魔術師には『起源』という概念がある。これはその者の方向性のある程度決定づけるものだ。これは万象が有する」

「俺たちにもか?」

「魂を持つものならば必ずだ。例えば喜助の起源は『知識』と『手段』だ。言うまでもなく、あいつは研究者だろ?」

「なるほどな」

浦原ならば納得ともいえる。

だとしたら、俺は。

「そうだな…。お前の起源も見てやろう。少し触るぞ?」

「ああ」

そう言っただけで橙子は、俺の魔術回路を走査する。体内の異物に異物が入り込む感覚は、どうにも名状しがたい不快感を催す。

背後から触れられているためよく見えないが、橙子は笑っているような気がした。それがどういう笑みかは、俺には分からない。

大窓に背を向けていた俺にとっつて、橙子の笑みは裂けた三日月のようなのかもしれない。見えないのだけれど。

「ほう…。なまじ繋がっているからか、なかなか面白い起源じゃないか」

「人の在り方を面白いだなんて言わないでくれ。俺だって難儀してるんだ」

半ば心にもない言葉を口にした。

人の一生は結果。過程よりも須らく重視される。よっほどの有名な人でもなければ、道程なんて知られるはずもない。

そんな奴らすらも、各々が成したことが評価されるのだ。

その結果とは、その人間の在り方とも言える。

俺にしてみれば、俺自身は殺すという結果しか残せないのだから、笑うなんて出来ないのだ。

虚無に浸る俺にとって、あらゆる在り方が眩しい。

橙子が手を離れた。人よりすこし冷えた手の感触が遠ざかり、いつもの感覚が目を覚ます。

「お前の起源は『虚無』だ、織」

「……『虚無』…か」

感じ入るように呟く。

つくづく思うことだが、運命というのはどうにも皮肉くさい。

伽藍であることが、俺の在り方そのものだったのだ。笑うしかないだろう。

後から得たのではなく、俺は生まれつき空っぽだった。俺は橙子に、そう宣言されたも同じだ。

「ふん、その様子だと自覚はしていたようだな」

「まあ、な」

「本来起源を自覚することはほとんどない。他者の起源を調べるなど、私でもなければすることはないだろうからな」

「そうなのか？」

ただ疑問に思い、橙子に問い返した。

ふん、と声を漏らし、橙子は口を開いた。

「当たり前だ。さつきも言ったが起源とはその者の在り方だ。在り方というのは無意識、あるいはそれよりも奥の魂にまで帰着する。お前たちでも、魂を見るなんてことはないだろう？」

確かにその通りではある。だが、ならば斬魄刀はどうなる。

魂を写しとり、それを力とする刀。それ自体が在り方ではないのか。

「ん？　そういえば斬魄刀というものがあつたな、お前らは。まあ確かに、それは起源の考えに近いかもしれない。だが、己の内ではなく、あくまで斬魄刀という存在として認識しているからには、それが各人の本質と感ずることはあつても、決して己の在り方だとは思わない。生まれを同じとする限りなく近い別存在。それが多分、魔術師私からみた斬魄刀というものだ」

そう持論を展開する橙子には悪いが、そんなものは俺に理解できる

はずがない。

講釈するなら浦原あたりにするといひ。橙子のいう通り、あいつの在り方が『知識』なら、その情報はきつと刻み込もうとするだろう。あいつの在り方が『手段』なら、その情報を枝葉のように広げて可能性を模索し、己の手段の一つにするだろう。

『虚無』。今までも抱え続けてきたソレは、決して間違いじゃないし、むしろ当たり前だった。

そしてそれが、俺の在り方なのだ。初めて他人に認められた。

伽藍の洞に響く。それはまるで、鐘のようだった。

「オマエに見出された価値が何なのかは知らないし、どうでもいいよ。珍しく式が殺気立ってるからな。…殺してやるよ」

『キミニハ出来ナイサ』

自信ありげに聞こえてくる破面の声。くぐもっているけれど、はっきりした声。

『ソウイエバ、君ニ僕ヲノ名前ヲ名乗ツテナカツタネ』

『破面N^{アラシカルヌ}0^ベ, 9, アーロニーロ ・アルルエリ』

「…そうかよ」

まだ卍解は切っていない。こうなると分かっていたから。

暗闇の中、殺気が満ちる。張り詰めて、のし掛かる。

まるで、あの日の夜のように。

せめて、月のような光だけでも。

死の線の仄かな光。瞼の裏に焼き付いていく。閉じた世界の中で

の理はただ一つ。

『君ノ力チカラハ、僕ラガ正シク使ツテアゲルカラ』

「…オマエには無理だよ。喰べるだけなら、オマエは真性の獣だ」

これから起こるのは、互いにただの殺戮。

「虚無」と「喰らう」が入り交じる。

伽藍の洞に、光が射す。雲間の太陽が如き優しきは、何処かへ捨て去っていた。

間隙に飛来する厄介な攻撃。俺はそれを躲し、殺し、いなす。ただひたすらに数が多く、物理的攻撃力しかもたないために余計に厄介だった。

『ホラホラ、逃ゲルダケカイ?』

「ちつ、【縛道の八十一・断空】」

霊圧を高め、高い物理耐性を持たせた断空は、触手による攻勢を耐え凌ぐ壁となる。微かな黄色を持つ薄壁。見た目には、変な光景に見えるのだろうか。

「硬すぎるだろ、その腕」

『君ガ言ウ通り、喰ベルコトニ使ウモノダカラネ』

さも当たり前のようにそう宣う破面。片言なのは生まれつきか、それともまた別の要因があるのか。

俺の言葉もだが、コイツの言葉は先程から『喰べる』ことを強調しているような気がしてならない。

口数が多いのは、吞まれないように必死だからなのかもしれない。少し前に橙子が語った、『起源』という考え。それはその者の在り方を示すものだが、決して表に現れる事はない。数少ない例外もいるぞうだが。

そしてコイツはどうやら、無理矢理表に出された形だ。

「——『起源覚醒の術』…か」

かつて橙子から聞き及んだ術。鬼道に通じるものがあるようで、知っていれば死神にも使えるやも知れないという。だが、これは被術者の起源を丸裸にするわけで。

——つまり、この施術者はこの破面が心を許している存在だと。

はは、そんなやつ、ここには1人くらいしかないだろうに。

そしてこの破面——『喰^{グロトネリア}虚』なるこの帰刃は文字通り、喰べに喰べる能力。そしてそれを成すこいつの起源こそが『喰虚』——『喰べる』なのだ。

もう背中に挿したナイフでは話にならない。

もう一度、斬魄刀を握った手に力を込めた。

「くくっ、簡単に死んでくれるなよう。」

『此方ノ台詞ダヨ』

『簡単ニ捕マラナイヨウニシテクレ』

刹那、先程と比にならない大量の触手が、視界いっぱいに襲ってきた。簡単に断空は破壊され、頬を、脇腹を、触手の刃が掠つて傷を作った。視える世界に映る、数多くの死。情報量の多さに顔をしかめ、払い落とすように刃が煌く。死の線に沿ってなぞるにも、攻撃が速いわ強いわで、いちいちそれを出来ることもなく。たまたまなぞれたのならそれでよし、そうでなければひたすらに打ち払っていく。

だが、数十にも及ぶ腕と、二本の人の腕——刀は一本なので実質一本だが——では、到底数で勝てるはずもない。

殺し損ねたいくつかの腕が俺を打ち据えた。

「っーくっ、」

『モウ終ワリカ?』

ただでさえ貧弱情弱な肉体があげそうになる悲鳴を無視して、再び刀を振り回す。しかしそれは明らかに、さつきよりもブレていて、痺れるように奔る痛みを噛み締めて。

故に、僅かずつ狂いが生まれる。一つ一つは微小で、目もくれないようなものでも。気付けば見上げるほどに大きくなっていた。

「はっ、はっ、……くそ……っ」

幾重も打ち付けられた傷は生々しく、ドロリと血が滴り落ちる様子からも、破面からしてみれば美しいものだった。

ドン、ドンと。大きく太く打ち込まれる攻撃は、まさしく紙装甲の俺には痛手以上のものだ。

「がふ……っ!?!」

どさりと倒れこみ、掠れるような息が溢れる。

志波海燕の残滓を取り込んだ影響からか、アール・ニール・アルエリという存在は、穂積織という男に対する妙な執着があったのだと、後に藍染が口にした。

手足を押さえつけられ、身動きが取れない。人が獣に圧倒され、組

み敷かれたようだった。

元々女顔で、身長体格声音と、その全てが女性寄りだと言われているのもあって、その様はどこか妖艶で。何故執着したのかも分からない破面は、ただただその姿に手を伸ばす。

膂力はまるで幼子のような、そんな俺に、その手に抗う術はない。

「……………」

『モウ動ケナイカイ?』

『喰ベテモ…イイ?』

手足は動かすことを許されず、言葉を紡ぐ程度の力が残る。

目を、眼を向け、見つめ続ける。

「……………ああ、」

『…アレアレ、オカシイナ? ソコマデ弱カッタノカイ?』

『イイヨ、モウ。名前シカ無カッタ僕ラニ、藍染様ガ力ちからヲクレタ。ソノキツカケニナツテクレタ死神ダ』

『…ソウダネ。ダカラ喰ベル。サア、穂積織。君ガ本気ヲ出サナイデモイイ。邪魔者ハイナイ』

大きな。大きな口が広がる。唾液に塗れた舌が、気持ち悪い感触を持って頬を這う。

「——『三十の四空 七十五の煌雷』」

『ナニ?』

不意に、言の葉が紡がれた。

『万雷は傾幕の面に注ぐ 節度に学び 高潔を抱き 雅を舞って
無心に抱く 四色の君子は伏して踊る』

掠れるようで、重く響く。ただ、紡ぐだけの葉。

『天寶てんさいは川に流れ 龍鱗の河にて終わりを待つ』

『今更ノアガキカ? 無駄ダヨ』

嘲笑い、その口を拡げる。

『界まじに動無し 面おもてに静無し 影に触れば証とならん 眼まなこは交わさ
ず 身からだは伏して佇む』

気づけば、俺の息は平坦になっていた。世界に視えるのは変わらず死だ。それでも、まるで深く沈むような冷たい思考が回っていた。

「——『時は接れて因り進め』」

その瞬間、破面の口は止まった。見られれば負け。目を合わせる間は動けない遊戯。

【縛道の九十二・静天達磨】——」

何にも縛られず、しかし互いを見るが故に全てが束縛される空間。

「——ああ、そういう捕縛だったな、コレ」

『ナ、ナンダ…コレハ…!?!』

『何モ、何処モ…、動力セナイ…!?!』

目が合うでもなく、ただ見ているだけ。それでも、束縛が緩む事は無い。

俺は抑え付けられたままに、それを語った。

『「だるまさんがころんだ」って、知ってるか？鬼に動いているところを見られたら負けっていうゲームだよ。プレイヤーは鬼に見られている間は身動き一つ出来ない。そんなありふれた遊びさ」

【縛道の九十二・静天達磨】は、そんな遊戯を概念化し、特定空間に適用する縛道。発動者を鬼、それ以外をプレイヤーと見做し、その遊びに沿う形でプレイヤーの動きを縛る。

つまり、『術者が目を向けている相手は一切動けない』のだ。

相手が目を逸らそうとも、術者が見ているのならば効力を発揮する、

そして俺は、もう一言。

【破道の二十五・断天】

手足を抑えつけていた触手が切り取られ、漸く自由になった。

「さあ、もう良いだろう。俺もかなりキツイんだ。終わらせてやるよ」
卍解したままの斬魄刀は、その姿形に何の変化も見せてはくれない。

『唯式』の卍解は、俺からしてみれば単純なものだ。

——ただ、あの日覚えたもどかしさを埋めてくれる。

『雲耀』

二の太刀要らずの一撃。ただの一太刀で断ち切る。

だが、その触手は切れてはくれない。弾力と頑丈さが両立されたも

のらしい。

日本刀は自重を以って叩き斬る刃。勇音より小さく、日番谷冬獅郎より大きいくらいでしかない俺では、いくら素早くとも膂力すら無いのだから、物理的に斬ることは難しいのかもしれない。

ならば、もう殺し尽くすしか無い。物理的強度が意味を成さない世界で、この刃を振るうほかない。

直視する死の世界。見慣れて、侵してくる。死ぬことのみが理として鎮座する。

奔る深青の線はてんでバラバラに。まさしく落書きのように。

奔る。奔る。交わる。曲がる。並ぶ。歪む。線に関するおよそあらゆる形が、その身を覆い尽くす。

そしてそれを、俺がこの眼この刀で、殺し尽くす。

そしてそれが、俺の卍解。

『唯識』

世界というものは、人の無意識が形作るもの。千差万別の無意識思考が、万象の形を定め、歪める。そしてその全てが。あらゆる物が一点で繋がる。始まりの渦。赤と青。陰陽のさらに奥。両儀すら超えた先の世界。

『———易景崩落』

それが式。男性口調の麗人であり、たお嫺やかな女性。

それが織。おれその力を与えられた殺人鬼死神。

『コ、コレハ……!?!』

全身に、空間に、視界全てに奔る死の線が一つの直線を成し、その上を刃が走る。疾はしる。

ああ。こんなにも簡単に死んでしまう。殺せてしまう。

強さも、大きさも。俺の視える世界には立ち入れない。

世界すら殺され、背後の壁も殺され、全てが滅多打ちにされた。殺し尽くした。実世界が、ガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

破面の命はここで途切れる。末端にまで奔るものすら、一つ残らず殺しきる。

「察しの通り…かもな。ああ、これが俺の卍解、『唯識』だよ」

そう、これが卍解。式がいうには『無意識世界の操作による境界干渉』を能力に持つ、鬼道系・直接攻撃系の卍解。

元来、『唯式』の持つ能力は見えない壁——すなわち境界を作る能力。そしてその卍解は、あの日感じたもどかしさを埋めてくれる力。

『ソナナ……莫迦……ナ……』

「いくら在り方に忠実でも、オマエはただの獣なんだ。殺すのは容易いさ」

殺すのは、殺人鬼の役割だ。

式に曖昧にされた、斬魄刀の名。いつかそれが聞けることを思つて、刀を振るつた。

その刹那、破面は一体何を見たのだろうか。

『——アア、君ハイイ……。最高ダ……。僕ヲヲ殺スニ足ル……。最高ノ……。完璧ナ殺人鬼ダ……。』

届かないその言葉は、何を込めて紡がれたのだろうか。

起源に呑まれ、それでもなお執着し、そしてそれに終着したものの。起源を自覚し、それを受け入れ、そしてそれを認められたもの。

がらんどうなら、いくらでも喰べられたらうに。その中はもう、ナニカで一杯になってたんだ。

いつか。——いつか、そんな風に。

——いつか、そんな風に満たされる時が来るのだろうか。

俺は、掻き懐くように、狂おしいまでの伽藍を抱き締めた。

「——っ!？」

「!っ、ガハっ、な、何だこいつは!？」

「喋るな阿散井!悔しいが…、正直勝ち目が薄い…」

「どうなつてんだコイツは!？」

理解してしまうと、余計に痛いな…っ。流石に阿散井では理解が及ばないのか…。動くダメージに成りかねないから動きたくないんだがな。

「よく聞け阿散井。『僕たちの命はあの男が握っている』」

「な!?!…って、まさかあの人形か!？」

「そうだ。あの中に入ってたのは骨、筋肉、内臓といった中身全てだろう。僕たちが動くより、奴が潰す方が早い。…どうしたものか」

悦に浸つたようなザエルアポロの笑みがかんに障る。…とはいえ現実問題、取れる手立てがないのだから、何をしようにもどうしようもないわけだ。

放つだけなら僕の『銀嶺弧雀』でも出来るが、…当たらない。火力重視にしようとしても、僕のこの『自在兵装』シュヴァルケガルは集中力が必要で、痛みに溺れかけている今の僕では矢が生成できない。

…ホント、どうすればいい…。

「……………」

「……………くそ、どうすりゃいい……………」

目に見えて浮かぶ焦燥。伝播して、僕にも焦りが湧き上がる。異論反論が飛び交い、結論が見出せない。不用意に動けば、確実に実験台奴の手に殺されるだろう。

以前の僕だったら、動かないよりマシだと思ってやたらめつたらに撃つのもかもしれないが。今はそう思わない。彼我の実力差がはつきりしていて、そして協力した結果がこれだ。

…最早、何かが起こることを期待するしかない。

「おや?もう品切れなのかい?ククク、それは残念。もう少し遊んでいたかったんだが…。これ以上は時間の無駄というやつかな」

その時、頭上から声が降り注いだ。

『おやおや？随分と面白いことをしてるじゃないか』

耳を叩き、背筋を震わせる。その声の持ち主は、モノトーンの顔と深い海のような色の頭飾りをつけていて。

「お前は……！」

「貴方は……!!？」

スツと乾いた大地に降り立つ男。狂気を纏い、狂気に浸り、狂喜に湧く。

以前より五割増しで目に悪いカラーリングは、どこを目指しているのだろうか。

「涅マユリ……！！！」

「涅隊長！」

「フン、手酷くやられたものだネ滅却師」

こちらを見るなりそう吐き捨てられた。大して興味もないだろうに。ぎよろりと光る目は不気味に、紡ぐ言葉は狂喜に揺れていた。頭その飾りのせいで一回り大きく見える涅マユリは、その狂気のせいで見合わない圧を感じさせる。

そして同時に思う。敵わない、と。

戦闘ではなく、その思考に。

酷く利己的であるために、冷たく、鋭い思考回路。

ああ、そうだ。

こいつらは『科学者』なんだ。

そう気づくのに、時間はかからなかった。見れば見るほどよく似た2人だった。

「フム、さっきの戯あそびで楽しむのも一興アランカルだがネ、生憎興味が無い。私が知りたいのはネ破アランカル画、君の名前だヨ」

「……………何故」

「何故だど？馬鹿かね君は？そんなもの決まっているヨ」

そうして浮かべた笑みは、まさしく『狂気マッド』を冠するに相応しい狂喜。

1人の科学者として、全ては研究対象なのだと、僕は気付かされた。

「君を瓶詰めにした時に、瓶に名前を書くためだよ」

「……………ハッ」

「科学者——『識る者』同士の戦い。血も、涙も、そこに介在する余地はない。」

「私には戦いを好むなんていう趣味はないからね。手早く終わらせて、君の研究資料を見ることにするヨ。いまだに黒腔ガルガンタを開けるのが浦原喜助だけというのは、癪だからネ」

「…僕が、そんな事を許すと思うのか？」

僅かな怒気が漏れ出る。

それだけだが、恐ろしい。鳥肌が引かない。

これが、エスパーダ十刃…。

「フン、何故許可などがいるのかネ。私は君を対等な立場だとした覚えは無いヨ。私に比べれば、誰もは等しく凡才なのだヨ」

「…ククツ、思い上がるなよ死神風情が。この世界に僕が解き明かせないことなどないのだからね」

「何を言うかと思えば…、君はまさか『全知』などというものを掲げるつもりかネ？」

「おや、お前も科学者なら目指すだろう？」

「違うネ。『全知』などに興味はない。そんなもの目指した所で何になるというのかネ。科学者というのは己の欲を満たすもの。『全知』など通過点に過ぎない。だが、…もし君がそれを目指すというのならば、1つお題を与えてみようじゃないカ」

愉悦の笑みというのがピツタリの、大きく歪んだ笑顔。

与えられる側のザエルアポロは、当惑しているのだろうか。

「なんだと…？」

「君は穂積織という男を知っているかネ？あの藍染惣右介が警戒している死神だヨ。『反膜』ネガシオンを斬ったことは驚いたが、研究の題にするにはピツタリの死神だよ彼は」

僕はその『反膜』ネガシオンというものをよく知らない。だが、この涅マユリマッドサイエンティストが言うからには、反膜を斬ることがどれだけの事かは、なんとなく分かる。

穂積織。黒崎から聞いたことがある。藍染惣右介と渡り合うことのできる人物だというのが…。

僕は、知らぬ間にこの2人の研究材料になっていたその穂積織という死神に、心の中で黙禱を捧げた。

ふと、勝手になにかに巻き込まれた気がした。途方も無い悪寒が走り、鳥肌が奮い立った。

「……気をつけなきゃならないか……？……ん？」

その時、誰かがやって来るのを感じた。その霊圧は明らかに虚のソレだ。

「アーロニーロ ・アルルエリ……。第一期『刃』^{エスパーダ}の生き残り……。最近藍染様と何かをやっていたようですが……。貴方の仇を取るとしましよう」

夜一よりも黒みがかった、筋肉質な肌。さっきの破面より遥かに大きいのが、…コイツは何も知らないのだろう。

きつと現世にいたら、黒人の僧侶のような存在なのかもしれない。

口ぶりからするに、コイツもまた十刃^{エスパーダ}か。

それに、こっちに近づいてくる霊圧は。

「白哉か」

「穂積織……。久しいな」

堅物口調は相変わらず。奇跡みたいなオールラウンダー。

「あそこの破面は、兄がやったのか」

「ああ。まあ、朽木には荷が重そうだったからな」

「…そうか。…この黒い破面はどうするつもりだ」

「好きにしろ。朽木を追いたければ行けばいいさ。コイツ程度なら、俺でも殺せる」

直感だが、この破面は大して強くはない。速さだけなら俺でも追いつけるだろうし、力が強いだけなら脅威じゃない。

それに、今は殺意が欠けている。これじゃあ、殺したって無駄だ。

もし今から俺が戦うことになったら、多分それは『狩り』に近いものになるだろう。

「ならば、久々に兄と共に戦いたいものだ。今の私と兄なら、かつてのような失敗は犯さないだろう」

「…なるほどな。珍しいな白哉。オマエが誰かと一緒に戦おうだなんて言い出すとは」

「兄だからこそだ。私の『千本桜』と兄の『唯式』の相性は悪くない」

「そうだったな、そういえば。だけど、正直俺の霊圧が足りない。だから俺が斬るぞ。オマエは千本桜で援護しろ」

「承知した。存分にやるといい」

「ああ…」

白哉と俺がどんな風に連携してたなんて、俺は憶えていない。けどど識っている。それをやるには、俺はかつてのオレの戦い方をしなければならぬ。

だから、俺はそれを柔らかく拒み、援護に回らせた。そして同時に、力を込めて瞬歩で飛び出す。黒人破面は余裕そうな表情でそれを見て、あっさりと躲してみせた。

「ほう、なかなかのスピードです。ですが、所詮はその程度。私には及びません」

「そうかよ。だったら、ギア上げてもいいな？」

内に意識を落とし込む。体内に走る異物の感覚。

そして拡がる、死の世界。

「っ!?なんと…!」

「どうした?この程度、なんだろう?」

「…あまり私を舐めないでください」

「…へえ」

3体。突如分身した。

見れば、気持ち悪いステップで動いているのが分かった。

だが、その程度。

「うるさい」

「なに!私の『双児響転』が…!」

「喚くなよ。うるさいって言ってるだろう。たかだか3体に分身したところで、生きているのは1つなんだから分かる」

互いにスピード重視の戦いをするためか、忙しなく動き回っている。だが、この破面はともかく俺は本気で動いてない。

高速の移動で、破面の背中は白哉に向けられた。

白哉が、斬魄刀を構えて。地面に向ける。

——この全ては、攻撃力で勝る朽木白哉に手向けるため。

「卍解——」

沈み込む斬魄刀。

そして顕れる、純白の刀身。

そこから生まれる、億にも勝る刃の乱流。光の差さないこの空間で、それだけが輝いて見えた。

『千』なんてものじゃない。これはやっぱり改名すべきだろう。

『千本桜景巖』

美しくも残酷な刃が、破面の身体を血みどろに侵していく。

「ぬおおおおおああ!!」

途絶えることなく響く絶叫。

なんだ。まだ死んでないのか。

「……許さん…っ!」

「なら、どうするんだよ?」

「……鎮まれ」

刀を水平に構え、現世でいうところのヨガのような構え。

——こいつ本当は僧侶だったんじゃないのか？それも仏教徒。

『呪眼僧伽』

例のごとく、霊圧が吹きすさぶ。

霊圧は、所詮こんなものか。なら、注意すべきは能力か。

「…全く、見れば見るほど気持ち悪い」

「全くだ。早々にケリをつける」

初見で嫌悪感を吐き出す。

ああ。もう嫌になる。

「全部終わったら有給溶かさなきゃな」

「そうか。私は簡単に休めんがな」

「難儀なことだよ。——卍解」

「！…そうか、兄もついに」

おかげさまで。そう無言で告げて、卍解した斬魄刀——『唯識』を握りしめる。

「さあ、我が愛を受けなさい！」

「ああ、…殺し尽くしてやるよ」

「貴様の愛など不要だ。疾く失せるがいい」

——それでも、斬りがいがあるのはいいことだよな。

異変に気付いたのは、破面が俺を見た瞬間だった。

「私がおか、攻撃をすすると思いましたが?…もう、手遅れです」
「?…動かない」

「どうしたのだ?」

「ちっ、白哉。アイツ、厄介な力を持つてるらしいぞ」

そう言つて見せた左手には、黒い紋様が浮かび上がっていた。肘と手首の間に大きく横たわる部分は、俺の意思を受け付けない。

『奪う』…。アイツ、見つめた部分を持ち主から奪い取るみたいだ」

「ほう…。それは厄介だ」

「なにが『愛』^{アモール}なんだか。これじゃ『盗賊』^{ラドゥロ}じゃないか」

それとも盗みたいほどに愛しているのか。

押し付けがましいのはお断りだ。とは言え返品は出来そうにないわけだ。

だからもう、殺すしかないのだ。

視れば案の定、紋様の中心に渦が浮かぶ。そこをめがけて、刃を突き刺した。

「兄は何を…!?!」

「ん?ああ、オマエは見るの初めてだったか。端的には言えば『殺した』んだよ。あの破面の『愛』は、文字通り『薄っぺらな嘘』ってわけだ」

「…兄は変わったな」

「そうかもな。でも違うぜ?これは元々あったんだよ。隠れてたのが表に出ただけ。穂積織という男の本質で、本物なんだ」

だから、言い表すとするなら『元に戻った』と言うべきなのかもしれない。

オレが死ぬことがきっかけで、俺が産まれた。

だったら、それまでのオレとは誰だったのだろう。

…もう、殺してしまっただけけれど。声を聞くことも、何も出来ない。

「ほう、藍染様から伺ってはいたが、それほどだったとはね」

「全くだヨ。私としたことが、常識に囚われてしまったようだネ」

な、なんで意気投合してるんだ…!?

いや、たしかにマッドサイエンティストで、キチガイで、なんか色々…というか見れば見るほどよく似ている気がするけども!

「では、そのお題の対価と言ってはなんだが、僕の研究…といっても少々古臭く未完の代物だが、見せてやろうじゃないか」

「いいネ、興味深いヨ」

…もう突っ込まないぞ、僕はもう突っ込まない。

大層愉しそうな表情で大きな扉の奥に消えていった2人。彼らは何というか、虚とか死神とかであるとか言う前に科学者だということか。

…もう、嫌な予感しかしないな…。

その後、僕と阿散井の傷はしっかりと改造…：…間違えた、治してもらいました。

「僕たち破面が、元は虚で、その虚は人間の魂から変じて生まれるのは分かってるね?」

「当たり前前のごことを聞くんじゃないヨ。そんな事は当然だ」

薄暗い廊下は、埃の1つもなく綺麗にされていた。そんな場所を、白を基調にした服装の2人が並んで歩く。

「僕たち破面には、ごく稀に生前の記憶を思い出すことがある。僕は比較的古参の破面だから、人間としてはかなり古い時代を生きていた」

「フム…、それで？」

「僕の生前は、やはり科学者——錬金術師というやつでね。とくに人体の研究なんかをしていたんだ。兄は軍人だったから、新鮮な実験台は容易に手に入った」

「どんな研究をしていたのかネ？」

「結論を急かさなくてくれたまえ。破面となつてからは、生体の研究なんてやらなくなつたんだからね。研究者仲間なんてものはいない。人間の身では、やはり1人だと限界がある。…そんな僕は、ある組織の名前を知った。異端の人間たちが集う穴倉。蓄積と計測の院。そこはそう呼ばれていた」

回想するように、僅かな懐かしみを抱いて語るザエルアポロ・グラントに、そんな話は微塵も興味がないと言いたげな涅マユリが先を急かす。

面倒な話だと思いつつも、こういう話をしたがるものだと分かる辺り、やはり同じ穴の貉ムジナというやつなのだろう。

「——『アトラス院』。未来を守り、研鑽する叡智の結晶。世界の理を明かさんとした、科学者の集合体さ」

そう言い切つて、一際大きな扉の前に立つた。古めかしく、そこだけが使われた痕跡がない。

手を伸ばしても無駄と言わんばかりに高く居座る天井と、それと同じ高さにまで作り上げられた扉は、その存在を高々と主張する。

「僕も一時期、そこに属していた。今思えば、かなりの満足感を得られた時期だった。未知へ挑むことをあれほど楽しんだことは、他にはなかった。…まあ、その所長が蒸発したせいで、なし崩し的にアトラス院を去つたんだがね」

「で、その中には何があるのかネ？その『アトラス院』とやらも興味を

惹くが…」

目先の興味に目がいくのは、涅マユリが生来から科学者であるからだろうか。

「アトラス院には、ある格言がある」

そうして、ザエルアポロの口から語られた言葉は、紛れもなくかのアトラス院の言葉。

「『自らが最強である必要はない。我々は最強であるものを創り出すのだ』というやつさ。心底共感したね。当たり前かもしれないが、いざ耳にすると素晴らしい格言だ」

「それならば、君は作り出したのかネ？その『最強であるもの』とやらを」

「言っただろう？『未完』だと。全くもって癪な話だが、コレは僕一人の手には負えなくなってしまうてね。そこでだ、死神。君にこれらの完成を目指してもらいたいんだ」

ガゴン、という音が重く広く響き渡る。ゴゴゴゴと擦れる音を鳴らし、威圧感を創り出す。

「オオ……!!」

「流石に『七大兵器』は無理だったが、アトラス院のものやそこで僕が作った『礼装』たち。…先も言ったが大半が未完成だ。興味があるものを持つていくといい」

そこにあるのは第二の天蓋ともいえる青空。底抜けの空。

そして、無造作に放られた謎の道具。

「僕にできたのは、『擬似靈子演算装置トライヘルメス』とやらを本物の靈子演算装置

『ホーエンハイム』に改造する程度だったよ」

「…素晴らしい！素晴らしいヨこれは！なんという事だ、未だこのよくな世界があるうとは！ハハハ！イイ！いいじゃないか!!」

「…僕も、側から見ればああ見えることがあるのかもしいね…」

その歡喜ぶりをみたザエルアポロは、感情表現に関しては自重を覚えようかと、彼にしては珍しい密かな決心をしたのだった。

「さて、俺はともかくオマエは無傷なわけで。これからどうするんだ？」

外に感じる霊圧は、護廷十三隊の隊長格のもの。そして刀剣解放をした破面のもも感じる。

朽木白哉。

更木剣八。

涅マユリ。

卯ノ花烈。

感じた霊圧を記憶と照らし合わせると見事に4文字で揃ったわけだが、この4人は隊長格。

特に更木剣八の戦闘力はズバ抜けている。その霊圧も感じられる。涅マユリに至っては何故か破面と行動を共にしている。

そしてそれは白哉も感じたらしく。

「ヤツめ…。裏切ったのか…」

「はあ…。多分違うぜ」

「その根拠は」

「勘。直感つてやつ。なんというか、意見があつたんじやないか？いわゆる『破^{アレンジ}面版涅マユリ』つてやつに会ったんだろうさ」

それを聞いた白哉は、心底心得がいったという表情をしてみせた。——というよりも呆れの成分が強かった気がするけども。

まあ、それは俺も同じようなものだ。

なるべく顔を合わせないようにしないと…な。見つければまず実験台への勧誘^道一直線なんだろうから。

「まあいいさ。白哉、オマエ先に行け。この先何があるか分からないからな。俺は休みたい」

「分かった。ならばそうさせてもらおう。怪我は治してもらおうとい

い」
そう言つて、白哉はここを離れていった。ここからどうなるかなんて、誰にも分からない。

未来は曖昧で、いくら分岐していようと、現在時制でどれか一つに確定することは無い。あやふやだから、未来っていうのは最強でいられる。

…もし確定できるやつが現れたら…。さて、どうしてくれるかな。
「……これもまた、あやふやに終わるわけだ。ところで、いつまで隠れてるんだ？」

「アハハ…、バレちゃいましたか」

柱の残骸から現れたのは勇音だった。2人居たはずだが、もう1人はすでに白哉を追っているようだ。

「久しぶりだな」

「ええ、久しぶりです。…変わりましたね、織さん」

「オマエがそう思うなら、そうなのかもな。でも、悪いことじゃないだろう」

「それはそうですけど…。なんだか織さんが、遠くに行っちゃいそうで…」

その顔は、少し悲しげで、悔しげで。

後ろ髪引かれる思いはあるけども、それでも立ち止まるなんてできない。

それに、まだ俺は――。

「っ、この霊圧は…」

「なんですか!?!これ、重いというか強いというか、いやそれより、霊圧ですか…これ!?!」

「霊圧だよ。ただ、かなりヤバイ霊圧っただけ」

本能的に霊圧であることを否定したくなるのは、何となく分かる。それでもこれは霊圧だ。それは事実。

そして、この霊圧の持ち主は…。

「…行くか」

「織さん、怪我を…!…って、あれ、血は止まって…?…?それに傷が無くなってる…?」

「…またか。気にするなよ」

「うう…。私役立たずですか…?」

「それは俺が決めることじゃない。何かオマエに出来ることが一つでもあるなら、オマエは役に立ってる。本当に役に立たない奴なんて、そうは居ないんだ。…それに」

「それに…?」

チラリと斬魄刀を見やり、そして霊圧を見て。

「少しは戦えるようになったんじゃないのか?…何のためにかは知らないけど」

そう言っつて、瞬歩で俺は立ち消えた。勇音を1人残すのは不安が残るが、そんなものは伽藍には響かない。

「織さん!」

一瞬にして消えてしまった。

折角追いつけたと思っつて。伸ばした手は虚空を攫う。残るのは虚しさ。

やっぱり、私じゃ追いつけませんか?その隣には、立てませんか?腰に挿した斬魄刀は、飾りじゃないのに。

貴方を想う気持ちは、空っぽじゃないのに。

『凍雲』^{いづくも}だつて、私の声に応えてくれた。私の想いを、支えてくれた。不意に、柱の影に霊圧を感じた。

「誰ですか。そこにいるのは」

「ふーん、アンタがああの男の想い人なわけ?」

「…破面…^{アラソカル}…」

目の前には、少し幼い雰囲気を残した、自尊心の強そうな子。

…スタイルは、勝ってる。

「アンタ、なんか失礼なこと考えたでしょ」

「何のことです。それに想い人じゃないです。一方的な、片想いですよ」

「ふーん。まあいいや。私はロリ・アイヴァーン。破面アランカルなんて可愛くない名前と呼ばないでちょうだい。アンタには悪いけど、あの穂積織とかいう男。私気に入ったのよ」

玩具として。

副音声はそう言っている。

言うまでもない。この破面は、私たちの邪魔だ。

「――奔れ、『凍雲』」

「へえ、それがアンタの斬魄刀ってやつ？」

刀が三叉に分かれ、雪の結晶のような形を得る。

氷雪系の斬魄刀『凍雲』は、日番谷隊長の『氷輪丸』や朽木さんの『袖白雪』ほど、強力なものではない。特に、戦闘においては。

だけど、戦わなければならない。

「まあ、アンタなんて私にかかれば雑魚よ、雑魚。だから、…大人しく殺されてしまいなさい！」

手に持っているのは、刃の短い刀。ともすれば、織さんのナイフにも似ている。

――関係ない。私は織さんの隣に立つために。戦う。

「風なんて吹いてない。ちょうど良さそうです」

「は？何言ってるのアンタ。遺言かなにか？まあ、私には関係ないけどね！」

ダンツと大きく踏み込んで突っ込んでくる破面。猛スピードだけど、余裕はある。

刃の腹をそつと撫でて。紡ぐ。

「――停れ、『凍雲』」

同時に、白い煙のようなものが滲み出る。みるみるうちにそれは広がり、破面を覆い尽くす。空間を覆い尽くす。

「ちっ、何よコレ！」

「どうですか？雲の中にいるって、なかなか味わえない経験ですよ。」

「ンだど!? そんなもんどうでもいいんだよ! くそ、気持ち悪いわね!」
雲は、お気に召さないようだった。
でも、逃げられない。

「もういい! こんな無視してアンタを殺してやる! 所詮ただの雲なんだからね!」

「さあ? あなたに出来るんですか?」

「今すぐに殺し…て…:…:…。アレ?なんで動けないんだよ…?まるで重石が乗っかってるみたいな…。重い…!?!」

「斬魄刀から出た雲が、ただの雲なわけがないじゃないですか。包んだものは、ゆつくりと『重くなる』。それが凍雲。それに、放っておくと、凍ってしまいますよ?」

「な!?!クソ、なんだこいつ!?!」

破面の足下から、ゆつくりと凍っていく。

『凍雲』は、雲で包んで重くした相手を、次第に凍らせていく。敵味方関係なく。無差別に。重くなったところから優先的に。

『重くして氷の世界へ沈みこませる』と言われたこともあったつけ。

やっぱり、氷雪系の斬魄刀なんだなって思った。

「ああもう! ムカついたわ! テメエ、ぶっ殺してやる!」

手に持つ剣を、高く掲げて。

「毒せ! 『百刺毒娼』!!!」

ブレる一人称は、焦りと怒りからだろうか。斬魄刀を構えて、解号が怒声を以って唱えられた。

私の戦いは、まだまだ折り返し。

負けられない。こんな奴に、織さんの手を汚させない。目を向けさせちゃいけない。

今更だけど私は、相手と戦う覚悟を決めた。

「毒せー! 『百刺毒娼』!!」

エスコロペンドラ

あつという間に上昇した霊圧。巻き上がる煙と砂塵。吹き上がる霊圧と怒気。

こんな風に敵と戦うこと自体が久しぶりで。少し震えてしまう。だけど、逃げられない。

逃げるわけにはいかない。

現れた姿は、ムカデとクモみたいなイメージのもの。別にそれらが苦手というわけではない。それに、生理的な嫌悪感が全くと言っていいほど感じられない。

白色がもたらす無機質なイメージが、それを成しているのだろうか。

「さっさと殺して、あの男も殺してやるわ!」

「させません!」

同時に斬魄刀を破面に向けて振るった。すると、発していた雲がまるで刃のように飛んでいく。

「ぐう、っ!」

物理的な重さは、斬魄刀に勝るとも劣らない。時間とともに進行する能力だから、振るった雲はただの刃でしかないけれど。

それでも、わずかに重くする事くらいはできる。

「大人しくっ、してろ!!」

「うわあっ!!」

そんな重さをまるで無視して、重量級の攻撃が襲いかかってくる。纏わり付いた雲の重さが、その攻撃力を増してしまう。

それでも、重さのせいでわずかに遅くなった初動のおかげでなんとか躲せるもの。

そして、その腕が砕いた床を見て戦慄する。

「これは…!?!」

エスコロペンドラ

「私の帰刃『百刺毒娼』は、あらゆるものを溶かし尽くすのよ。なんだって、ね!」

「くう、っ！」

目の前を掠めて通り過ぎる腕は、その余波だけで私を吹き飛ばした。

転がるように退がり、立ち上がりざまに鬼道を放つ。

【破道の三十三・蒼火墜】！」

「ぐっ……！」

合間を縫って放つ鬼道は、その分厚い装甲に阻まれる。

だが、腕は1つだけじゃない。他の3つの腕が、私を溶かし殺そうと襲う。

へたに斬魄刀で受ければ、刀身がどうなるか分からない。躲すしかなかった。溶けはしないだろうし折れもしないだろうけど、それにしただってそこまで近づかれれば毒に当たりかねない。

「奔れ！」

張り上げた声とともに、雲の刃が無数に形成され、滑るように相手を切り裂く。だが、その程度の痛痒をもともせず毒腕が振るわれる。

破片による怪我は回道で治せる。だが、毒はそう簡単にはいかない。

なんでも溶かすのならば、解毒なんて出来ないのかもしれない。解毒する前に殺されるのかもしれない。悲しいかな、『凍雲』には直接凍らせる能力はない。

「ちっ、厄介ね」

「それはどうも」

雲の刃はあの装甲を砕けない。かわりに、あの腕は私には当たらない。

「ただ、相手は触れなくてもいいって、気づくのが遅かった。」

「ヴェネーノ・エル・プレッソ毒媚毒腕！」

「なっ、【縛道の八十一・断空】！」

僅かな毒がついた物理攻撃が、毒を撒き散らす攻撃に変わる。ちよつとした揺れでばら撒かれた毒の雨は、彼女の言に違わず、あちらこちらを溶かしていく。

「流石に鬼道は溶かせないけどね。でも、私の腕はまだ3つあるわよ」
「っ、うああっ!?!」

辛うじて毒を防ぎ、受けたのは物理のみ。それでも、並外れた膂力から放たれるその攻撃は、やはり完全に防ぎきれものではないらしい。

余波でも人を殺し得る衝撃が身体中に叩きつけられる。
煽られて、身体が流れる。

その隙を逃すような敵ではない。

『娼水秘毒』

パール・デル・アクア

文字通り何もできない体勢で、ムカデの様な足から溢れる毒の水。その光景はまるで、プールに入る前に浴びるシャワーのようだ。

僅かに意識が飛んだ刹那に、少しだけそれがかかった。

「っ、マズい……!」

服が少し溶けた。何か特別に頑丈って訳でもないけれど、服の袖がなんの抵抗もなくあっさり消えてしまった光景に、目を剥いた。

撒き散らされた毒の雨。傘すら溶かす暴威。雨というより天災。肌を突き刺すような痛みは、霧化した毒のせいだろう。

この場はまだ凍雲の発した雲海が広がっている。そのせいで、霧になった毒がどこまで広がっているのかがさっぱり分からない。

気づけば、彼女が振り回していた腕の攻撃が止まっていた。

毒で溶かし殺すというのか。

いや、それは待ちの姿勢ではなく溜めの姿勢。つまり――

『百毒針』!!」

「なっ!?!うそお!?!」

必殺の技を放つとき。そしてそれは確かに、私にとって致命的に相性が悪いもの。

各腕はムカデのような節足動物じみた腕になっているが、そこについている足が全てミサイルのごとく飛んできたのだ。

凍雲の加重効果はすぐには発現しない。

「縛道の八十一・断空』!!」

咄嗟に口をついて出た言霊は、頑丈な壁となってくれる。だけど脇

からすり抜けるように飛んできた毒針を防ぐなんてことは出来なかった。

「ああ、ああああああ!!!」

「いい声じゃない！もつと叫んで！ねえ!？」

横腹に擦り、腕に擦り、腿を貫通した針。

まるで全身に熱いドロドロの鉛を被ったように熱い、痛い、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛いいたいいたいいたいイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイツ!!?

何も考えることなく、せめて傷だけは塞ごうと無意識で体が動き出す。

感覚のない体と、靄のかかる意識。

口から血を吐き出す。

これ以上は、何も考えられない。

あまりの痛みに逆に戻ってきた意識と、駆け巡る痛みを必死こいて耐え抜く。

そして自然と、刀を水平に構えた。

「もう、…なりふり、構っては、…いられないみたい…、ですね」

痛みを堪えて、霊圧を研ぐ。

それは氷のように。それは剣のように。

不意に襲ってきたのは、敵の弾幕だった。

「喰らえ！虚弾!!」

「っ、【破道の四十五・赭火鳳仙】！」

視界いっぱい張られた弾幕に対し、こつちも弾幕を張って対応。ほぼ同じ数、威力。結果から言って、全て撃ち落とす。

咄嗟に同じようなことができたのは奇跡だが、それを振り返るような余裕はない。

「ちっ、しごといいじゃない」

「こつちの、台詞です…、よ。もう、かなり…重くなってる、っはずなんですが」

「ふん、こんなものなんだってないわ。結局私は動かなくてもあんたを殺せるのよ」

その通りかもしれない。だけど。それでも。私はここで負けることはできない。

「忘れて、…ないですか？その雲、…あなたを凍ら、…せるんですよ？」

「そうなる前に殺せばいいのよ。『娼毒虚閃』！」

『虚閃』の破壊力は知っている。なのに、目の前で収束しているエネルギー塊には、なぜか悪寒しか感じない。

4つの腕をX字に翳し、その中心に収束する緑の霊圧。

何故か目を離せない。動かなきゃいけないのに。

そして、刹那の瞬間。

それは放たれる。

驚くことに、それは地面を溶かしながら、恐ろしい速度でこっちへ飛んでくる。

硬直していた身体に鞭を打ち、無理矢理飛んで回避する。しかし、腕に掠ってしまった。

「っ、あああああっ!!？」

それだけで、のたうち回り叫ぶ激痛が奔る。身体中の痛みという痛みがより強く脳に訴えかけ、更なるキヤパオーバーを果たす。最早痛いことが何なのか分からなくなる。

幸い欠損は起きなかったから、先ほどと似たような痛みを歯を食いしばって堪え、そこを形だけ治療する。

傷は塞がっても、痛みは全く引かない。

「…ふうう……………」

再び霊圧を研ぎ澄ます。収斂する刃のごとく。

手元にはいまだ雲を吐き出し続ける斬魄刀。密閉空間でないから、雲は外に漏れだすけれど、空間に満たされてはいる。

だから、またそつと。そつと紡ぐ。

「――卍解」

そして、雲はうねりだす。

まるでかの浮世絵のごとく。

雲なのに、重い。蓋をされたような閉塞感。呑まれるような圧迫感。まるで、海のような。そんなおかしな性質。私はそれを叩きつけ

る。

「っ、うわっ、なによコレ!!?」

「沈んで、ください。きつと、楽になりますよ」

雲の海。見たことはないけれど、きつとこんな光景なんだろうか。

「——『凍雲十景裏淵』」

荒れる海。これは正史の海ではない。外にあり裏にある異形。

私の何処にこんなものがあつたのだろうと、今でも不思議に思う。

でも、これが私だと、私は受け入れた。

「こ、の！んなもの……!」

「もう、お終い、です。——『第二景・凍雲海浪裏』」

そして、海は彼女を呑み込む。

激しくうねる雲海。重みを持つが故に、今この場は紛れも無い海と化す。

激浪。大時化。まるで津波。生きているのならば、否、そこにいる

ならば、もう抗う術はない。

「う、うわああああ!!?」

「さようなら、破面。もう、会うことはないでしょう」

もう二度と、浮かぶことはないのだから。

「この霊圧…、勇音か…?」

海のように拡がり、時化のようにうねる霊圧。かつての勇音からでは、とても考えられないような。そんな力が、さっきまでいた場所を覆い尽くしていた。

それに対して今の俺に、果たして勝ちの目はあるだろうか。ないと

も言えないが、あるとも言いきれない。

今の俺の卍解は、数に関係なく一息に殺すことができる。

…が、海を殺すことは、きつとできないだろう。根拠はない。ただの勘だ。

「まあ、そんなことはどうでもいい。さつきから上がやたらとうるさいが、そこか…?」

偽天。青空が広がるのに、まるで抑え込まれたような。だから、それは蓋なんだと気付いた。

形あるものなら、なんだって殺せる。だから、この偽天の上にまで行こうと決めるまで、そう時間はかからなかった。

「直死——」

蒼い線が、空を覆う。思わず目を凝らして、それと分かる線をなぞる。腰からナイフを引き抜いて。

手応えは、いつもの通り。切り裂く感覚もなく、ただ、殺した事だけが掌の上に残った。

「っ、誰だ?…この霊圧は…?」

知っているような知らないような。まるで呑み込まれたような霊圧。

少し視線をやるだけで、何かがいるのが分かった。

「…虚…?」

人型の虚なんてものは珍しくもなんともないが、黒い死覇装と黒い斬魄刀を持って暴れる虚は、見たことがなかった。

そしてそれが、見覚えのある破面の腕を引きちぎった瞬間。

「おい」

俺は何も考えずに、真っ白な破面に蹴りをぶち込んだ。

「っ！貴様…穂積織か」

「当たり前だ。オマエのその格好…。なんだ、隠してたのか？」

「フン、隠す意味などない。必要なかっただけだ」

「あ、そう。…で、アレはなんだよ」

目を向けた先には、立ち上がろうとする白面白体の虚。所々赤いラインが入ってはいるが、そんなものの気にする事でもない。

目につくのは、頭から伸びる大きな角と、腰まで伸びる橙の髪。どこかで見たことのあるものだった。

「黒崎一護…？」

「知らん。だがアレには言葉が通じないようだ」

「へえ。獣ってわけか。獣狩りはさつきもやってきたと思っただが、今度は理性も放棄した本物か」

「どうするつもりだ？」

そう言われて、はてどうすべきか。思案する。

殺すのは簡単だ。厄介だが。

しかし、少し離れたところにいる滅却師と女。これは確か、黒崎一護の仲間だったはず。

もしアレが黒崎一護の成れの果てなら、殺すのは悪手なのかもしれない。

殺すことしか能のない殺人鬼に、救うことを求めるのか。

「ああ、全く。もう殺す気なんて失せた。アレは簡単に殺すわけにはいかないみたいだし」

「なら、何をするといいんだ」

「コイツ、虚の癖に斬魄刀なんて使ってる。当たり前前みたいに。身体の一部みたいにな。だったら多分、コイツの中では虚と死神の力は不可分なんだろう。どうにかして、コイツを突き動かす何かを抑え込まなくちゃな」

「だが、そんなことは不可能だ」

分かってる。だからそのための方法を探す。

そう考えた時、視界の端に赤い光が射した。

「ちっ」

「セロ・オスキュラス
『黒虚閃』」

黒い虚閃が、赤黒いソレを飲み込んで掻き消した。生じた爆風に、身体が持つていかれそうになる。

「さて、どうしようかね」

「……………」

「なんだよ」

「剥いでみるのはどうだ」

「…………仮面を剥ぐのか？それでどうなる？」

「わからんが、止まる可能性はある」

「……く、いつの間にかオマエ、止めようとしてるじゃないか」

「…フン」

さて、獣を諫めるのもまた、俺たちの役目…か。

なら、刀を抜くこともない。

「ランサ・デル・レランバリーゴ
『雷霆の槍』」

「前はオマエに任せた。俺は懦弱な死神だからな。後ろで援護だ」

「どの口が言っている。せいぜい足を引っ張るな」

手に持つ槍は、全てを切り裂く雷霆。破面はそれを手に、前へと駆け出した。

己も知らぬ間に、僅かばかりの高揚を抱えて。

槍と剣。白と黒。

視覚的に、あるいは物理的に混ざり合わないコントラストは、俺の眼に、はつきりした境界を視せる。

空を飛び、空を踏み、もはや音を超えるほどの速度で交わり続ける。「全く…。あの速度に援護なんか出来るかっての」

「あ、あの…!」

横合いからかけられた女の声。ソプラノ…だったか? こういう高い声。橙子は音楽もテレビもあまり興味ないらしく、もっぱら紙かゲームか曰く付きの品物を手にしているのを思い出す。

「なんだよ?」

「黒崎くんは…、黒崎くんは助かりますか!?!」

「…やっぱり、アレが黒崎一護だったのか」

まあ、外見的特徴には共通点はある。オレンジの髪とか死覇装とか。何より、斬魄刀が同じだ。

胸の穴は虚の穴と同じで、もうアレが人間ではないことを示す。人間で、死神であったことはもう過去形だ。

「…知らない。正直、助けようだなんて思っただけ」

「そんな…!?!」

「大体、助かる可能性があるかどうかも分からないじゃないか」

「それでも…、きつと黒崎くんは戻ってきます!」

…眩しい目だった。

無条件でなんでも信じてしまいそうな、それが希望なら、掛け値無しに信じる目だった。

目を逸らすように、戦闘に意識を向ける。

あの戦闘で鬼道による援護は、むしろ邪魔になりかねない。

「…はあ。俺に誰かを助けるなんて無理な話だ。お前みたいに希望を持つこともない。俺には、死しか見えないからだ」

「……………」

それでも、と破面アランカルの方を見た。息は上がってるけれど、まだその目

から光は消えていない。抱えているがらんどくに、何も無いと思つていた空っぽに、底があると知った。埋められると知った。ソレは正しく、前を向いているヤツの目だった。

「殺す以外のことは、あの破面に任せた。今のアイツになら、何かが出るかもしれない」

正直、気に入らないけれど。ソレは新たな門出となりうる変化だから。後ろを向いて歩き続けるしかない俺にとって、輝かしくて、眩しくて。

刀を執る。空っぽの伽藍に響く重みは、俺がいつまでも虚無であることを悟らせる。そんなものは今更だ。感慨なんて、それこそが空っぽだ。

腰のナイフを、目の前の女に預けた。

「持つてろ。ソレ、大事なモノだから。取りに来るまで預かってくれ」

それだけ言つて、戦闘に乱入するべく眼を開けた。

「…必ず」

「……」

声は微かだけど、耳を叩くには十二分だった。

そして、揺らぐ世界が死を躰す。もう過熱することはない。海にいくような深さが、機嫌を悪くするだけだ。

「開境しろ——」

仕方がないとばかりに、式は苦笑った。

慈しむような笑みを、『式』は浮かべた。

「——『唯式』」

アイツの空っぽが埋まることへの羨望と、俺の空っぽが埋まらないことの虚無を抱えて。俺はただ、空っぽの境界に立つ。

「よお喜助。久しぶりやなア」

「あらら、久しぶりっスね平子サン」

その日、喜助のもとを訪れていた私は、聞きなれない関西弁の男の声を聞いた。

初めて聞いた関西弁はイメージよりも少し軽く、意外とすんなり耳に入った。

「ん、なんや客でもあるんか？珍しいこつちや」

「これでも駄菓子屋ですからね。近所の子供くらいは、相手にしてますよ」

「アホか。どう見たって女物やないか。こないな靴履いとるヤツがガキなわけあるかい」

あら。意外と見てるみたい。喜助の知り合いらしく、どうやらかなり古い付き合いらしい。さて、私に対してどんな反応を示すかしら。

「何か用っスか？何なら奥で待つつスか？」

「ほな、そうさせてもらおうわ」

ギシギシと音を立てる板張りの床。裏にはルーンが刻んであるから、音から連想される脆さとは、実は縁遠いものだ。

スーツと開かれる襖から覗くのは、金髪おかつぱの男。

…なんか懐かしい男を思い出すわね。これで服装が赤で被ってる帽子がシルクハットなら、ほとんど完璧だったのだけれど。

「お、えらい別嬪サンやないか。喜助、コイツ誰やねん」

「あ、そういえば橙子サン居ましたね。その人は蒼崎橙子サンっス。こつちに来てから、色々世話になってるっスよ」

「へえ。ワイは平子真子ひらこしんじいう者や。よろしゅう」

「蒼崎橙子です。よろしく」

線は細いが、喜助と同じ匂いがする。

死神、というやつなんだろう。

「ほなら、橙子サンと呼ぼか。アンタ、喜助とどんな関係や？まさかコレちやうか？」

「ふふ、うまい冗談ね。けど残念、そんな関係じゃないわ。ただの友人とでも言うべきかしらね」

小指を立てて言ってきた男に、笑顔でそう返した。男はそれに少し引きつった顔で返答した。なにかしたかしら？私。

「それじゃ、私も真子くんって呼んでいいかしら？」

「かまへんで。美人にそう呼ばれるんはむしろ光栄ってモンや。何を聞きたいんや？」

「あなた、死神ね？」

瞬間、空気が凍りつく。刹那の時間だったけど、漏れ出た殺気は歴戦のソレ。慣れていなければ、卒倒してたかもしれないわね。

「分かりやすい反応をありがとう。まあ、手を出すとかそんなつもりはないわよ」

「…はあ。試された…？つーより知ったな？ビックリしたで。アンタ何者や？」

値踏みと疑問の視線。時計塔時代に慣れた者ではあるけれど、本当の戦闘者からのソレは、やはり重みが違う。

「あなたが知ってもしょうがないもの。私からは話さないわ。喜助から聞いたらしいと思うのだけれど」

そう言っただけに開いた襖から零れる視線と、目を合わせる。

ワツ、と僅かに硬直した声が聞こえて数秒後に、襖が開いた。

「ちよ、驚かささないで下さいよ橙子サン。ソレで視ないで下さいよ。一瞬動けなかったじゃないっすか」

「あらごめんさい。少し緩んじやったのね」

まさか『魅了の魔眼』が少し覗いちやっただとは。反省反省。

「喜助、どういうことや」

「あー、橙子サン、いっすか？」

「私は別にいいわよ？あなたたちに不利益にならなければね」

そうして、喜助は『魔術師』の存在を口にした。

「へえー。そないなヤツらがおったんか。つーか、それなら橙子サン今何歳や？」

「あら？知りたいの？」

うつ、と冷や汗を垂らす真子くん。当然よね。だって女に年齢の話は厳禁なんだから。

…尤も、死神は素で長命らしいから、そんな感覚が無いのかもしれないけど。

かくいう私も、そんな感覚は薄れてしまった。今の自分が本物か、人形かなんて忘れてしまった。

「い、いや…ええわ。おつかないわアンタ。正直相手にしようないわ」「私に戦う力なんてないわよ。敵になることもないわ。私はただ、織に興味があるだけ。まあ、存外気に入っているのよ。彼も、ここも」「…まあええわ。そない言うんやったら、ワイも気にせえへん。…とここで織ってだれやねん」

「ああ。それもアタシから話しますよ。端的に言つて——」

——単独で藍染惣右介を殺し得る切り札…ってヤツツス。

全く。きつとアレの本質は殺す者でも切り札でもなんでもないのだろうに。難儀なヤツだよ。

織。自分が殺人鬼であると思ってるうちは、お前は空からのままだぞ。

愛用の眼鏡を外してから、そう呟いた。

「さて、そろそろ仕事に戻るとしようかね。じゃあな喜助。真子。また来るよ」

「はいはい。それじゃ、待ってるっスよ」

「(…？眼鏡外したら人格変わるんか？オモロいやっちゃ) ああ、さいなら」

さて、今度の設計は…と。ああ、その前にあの依頼が残ってたか。また織に持つてくとするかね。

「猟奇的殺人…ねえ。ひと段落したら、教えてやるとしよう」

思わず手庇を掲げて目を細める。

少しだけ傾いて、季節が少しだけ進んでいく。微々たるものだけでも、こんな変わり方もまた、面白いものだ。

縮地は寸分の狂いなく俺をそこに運んだ。

馬鹿げた霊圧同士の激突の余波は、無惨な破壊痕を残す形で目に映る。

「はっ、はっ…。何をやっている。鬼道による援護をしろと言ったはずだが？」

「それ、オマエの台詞じゃ無かつただろ。というかオマエらの戦闘が迅すぎて狙えるか」

そんなやり取りの合間に、横目で虚を観察する。

虚空に立って動かない。切っ先を下に向けたまま、獣の目だけが、こちらを射抜く。

何の意思も感じさせない、がらんどろに見える殺気。心がないというのは、果たして本当なのだろうか。

「そこそこ回復したから、俺も混じるぞ。 凶役にしか使えないけどな。オマエは何とかして仮面を壊せ」

「ふっ、言われなくとも」

2人揃って身体ごと白い虚に向き直る。

大きく欠けた月は、まるで穴のよう。

伽藍を抱えた3つの存在。虚でない俺は、心はあれど空っぽであることが在り方だ。

「手を抜いたら死ぬ…な。だけどこの場じゃ卍解は役に立たないし意味がない。なら、俺の方を変えるしかない」

「なんだと？」

もう一度、刀の柄を握り直す。慣れ親しんだ重みが食い込む。それと同時に、自身を作り替えていく。

使えるものはなんでも使う。捨てられるものは捨てる。

合理的に、1つの意志が柱のように俺を支える。

それは目的ではない。しかし、それしか無いから縋る。

——殺すという意志だ。

何も無いことが自分であるから、俺は全てを殺す。

視界が広がる。線が奔る。まるで子供の落書きだ。この景色を見るたびに同じことを思っている。それでも、血のような赤みを帯びた直死の風景は、気付けば深海のような蒼みを帯びている。

殺すという意志が、殺したいという欲望を超えないように抑え込む。

敵は自分じゃないか。目の前の虚よりよっぽど恐ろしい。

「さて、とりあえず——」

縮地。本来一直線にしか進めず、しかしその方向であるなら音すら越える速さでの移動が可能となる。

されど今なら、自在にそれを使いこなせる。あらゆる方向に行ける。

目にとまることすら許さない。

「——寝てろ」

頭上からの振り下ろし。衝撃と余波で、天蓋の床に激突し煙をあげる。

こんなもので寝てくれるなら、誰も苦勞はしないのだが。

『アア、ガアアアアアア!!』

「うるさいよ、オマエ」

予備動作を省略して駆る。縮地の連発も、今だから出来ること。膂力も今ならあてにできる。

『九戀雲耀』

あの日別の破面に使った技。バカみたいな凶体の破面には通じなかったが、この膂力で放てば少しは喰らうだろう。

捲き上る塵と煙が、視覚から互いを消す。

数瞬後、赤に縁取られた黒が、煙を振り払うようにして空へ駆けた。

「ちっ、虚閃か」

だが腕一本分の間合いにまで迫った黒は、横合いから似たような黒い光に喰らい潰された。

「…フン」

はるか遠くで打ち上がる爆炎。天変地異といっても信じられるだろう。

そして空を見上げる虚から、微かな声が聞こえた気がした。

『助け、ル、俺ガ、助ケル、アア、ガアアツ!!』

突き動かされる由縁。あの虚の全ての原動力。

伽藍に満たされていたのは、己の願望。

自分の仲間を守りたいという、たったそれだけ。

なんだ、空っぽじゃないのか。

…だったらもう、視れるものもない。

「オイ、破アランカル面」

「なんだ」

切っ先を虚に向けたまま、足止めの策を口にする。

「五感を一旦殺せば、隙はできるだろう？」

「具体的にはどのくらいだ」

「時間にして2〜3秒…か」

「…いいだろう」

霊圧の量が圧倒的に上すぎて、一時的に五感を殺していられる時間が極端に短い。完全に殺していいのなら楽なのに。

それも、「助ける」なんてことをしようとするから。

「それじゃ、やるぞ」

「好きにしろ」

そう言つて、破面は上空に飛び上がる。

俺は居合に構えて、改めて眼を開いた。

「直死——」

無限の線から、殺すべき生を定める。

『潰ついでしきよんそう式四相・現げんぎよう行』

その瞬間、虚の世界は死んだ。

光が消え、音が消え、匂いが消え、味が消え、痛みすら死に絶えた。

閉じ行く世界に立つのは己一人。意志なき獣は、それでようやく自覚する。

これが、恐怖なのだ。

瞬間、動きが静止した。時が止まったかの如く。

「タイミング、ドンピシャだな」

墮ちたのは黒い神鳴かみなり。光すら呑み込む、黒い闇が。まるで天から投げ下ろされた槍の如くに、虚の仮面を削り取る。

二本の角は切り落とされ、仮面は無残なヒビだらけ。

膨大な霊圧を込められた槍の一撃は、仮面の修復力を押しつけて破壊を押し広げた。

そしてさらに、黒い神鳴は轟き響く。

「『レル・フィナル・レランパゴ終末雷霆』」

目を覆うほどの黒が、世界を飲み込んだ。神の怒りこそが神鳴である故に、それはまるで何かへの憤怒でもあるようだった。

「なんつー破壊力。殺したんじゃないのか?」

「そのようなミスはしない。だが、アレの仮面は壊れた」

そう、光は遂に仮面をぶち壊した。

破壊は連鎖し、虚は仮面の下に隠れた素顔を晒した。

屍人のように真白な肌と、黄色の瞳。虚ろな表情。伽藍に鳴り響く雷鳴を意に介さず、死んだように落下する。

そのまま大きな音を立てるかと思ったが、直前に張られていた変な壁——オレンジ色の髪の女が張った障壁が、柔らかく受け止めたらしい。

とす、という軽い音を立てて地面にたどり着く虚——黒崎一護。

胸の孔は、虚無塞ぎようがないようだ。

だけどそれは、満たされた伽藍だから。

「一歩間違えれば、そこで死んでいたのは俺だったかもしれない」

「たればの話をしてもしようがないだろ。今はコイツがどうにかなるかが問題だ」

「俺が開けた穴だ。塞がるとは思えん」

「さて、それはどうかかな」

パァン! と、何かが弾ける音がした。

音の方向を見ると、何やら変なものが浮かび、黒崎一護の所までやってきた。

「あの穴はオマエが開けた穴だが、それ以上に虚の孔、つまり心の孔だ。コイツの心には、守りたいだなんて大層純粹ピュアでお熱い思いが満た

「されてたんだぜ？」

「……………」

「虚には無いはずの心が、何故か虚になったはずの黒崎一護は持つてたままだった。多分放置してたら失くしてたんだろうけど、奇跡的に戻れたんだ。コイツの思いはコイツ自身にとつて何よりも重たく手放したく無いもの。抜け落ちることも認めたくない」

孔の上で、肉片と思しきものが回り出す。霊圧が荒び、僅かな光を漏らす。

そして一瞬、眩い閃光が辺りを満たした。

「だから——」

光と煙が晴れる。

伏していたのは、無傷で、孔の塞がった^{死神}人間。オレンジ色の髪が印象的な、俺にとつてイライラするほど純粋な思いを携えた死神。

「——死んでも失くしたりなんかしない。零れ落ちそうなら、孔塞いででも取り戻すんだろうさ。この男はな」

「……………フン、そうらしいな」

僅かな間で、黒崎一護は意識を取り戻したらしい。

何も知らなかったようにガバリと起き上がり、穴が開いていたはずの胸を探る。

「お、俺は…。確か穴が開いて…、それで…」

「黒崎くんっ!」

「のわっ、なんだよ井上!」

「よがっだああ、よがっだよお”お”」

「何泣いてんだ!?! 汚ねえから離れろっつて! ピンピンしてっつから!」

あまりの歓喜に飛びつく女。鬱陶しそうに退けようとする男。

こんな場所でもなければ、微笑むべきなのかもしれないのにな。

「俺の目の前で、俺から意識を外すとはな」

「っ!? ウルキオラ…!」

「あー、もういいよオマエ。現世にでも何処にでも行ってる。女は取り戻しただろ?」

「っ、穂積さん……。だけど、俺はコイツと決着を……」

「悪いが、それは無理だ」

「貴様はあの時殺した。今の貴様に興味などない」

にべもなく拒絶されて、少しショックらしい。虚だったのが嘘のよう
うに、人間らしい。

「……ああ、分かった。井上、霊圧を少し治してくれ」

「うん、分かったよ」

アイツと殺しあうのは少し後、か。

まあいい。しばらくは、静かにしててもいいだろう。

俺もアイツも、巻き添えをさせたい訳じゃないから。

無音の天蓋。静寂の月夜。

穴だらけで傷だらけの地面に、ただ2人のみが立つ。

「やつとか。待ちくたびれたよ」

「…フン、さっさと終わらせるぞ」

方向性は違えど、互いに虚無を抱えるもの。

無くした心の孔を求める破面^{アランカル}。

伽藍を抱え、それ自体が在り方である死神^{殺人者}。

元々は一方的な興味と使命から始まり、引力に引かれるようにして至る今。

伽藍にないはずの質量。だが理など知らぬ。ただ、同じものを持つ故に惹かれたのだ。

斬魄刀ではなく、返してもらった腰のナイフを抜く。

月の光を弾いて、怪しく煌めく。白い刃はその実、血に塗れた殺人鬼の殺し道具。

白い身体に映える黒い翼が広げられた。夜に溶け込むような漆黒だ。それはあらゆる光を飲み込む、空っぽの伽藍。

「フツ——」

「っ——!!」

なんの前兆もない。宣言をして動き出すのなら、それはただの機械的作業。だから、言葉も何もいらぬ。

ささやかな自己暗示と、霊圧と魔力で強化したナイフで以って、破面の槍と切り結ぶ。

衝突による衝撃は小さくはない。しかしそれを気にすることはない。

響^{ソニード}転と縮地で、互いに空を駆る。

「フンッ！」

「ちいっ！」

見ることも叶わない速度域。隠密機動の面目は丸潰れではないだろうか。

逆手に持ったナイフを振り上げ、振り下ろされた槍がかち合う。臂力は破面の方が上であるために、僅かな拮抗の後に叩き落された。

そこを狙って、投げつけられる槍。あの槍は爆発をもたらすものだったはずだ。あれに巻き込まれて無傷でいられる保証はない。

俺は無理矢理身体を起こして、即座に縮地で離れる。

「ぐう……っ」

頬を撫で、身体を持っていこうとする爆風。それに逆らわずに空中へ飛び出した。

それを見て、破面は追いついた。

「終わりだ」

「甘いぞオマエ」

同時に、死が世界を埋め尽くす。

槍に奔る死は非常に分かりやすい。瞬時にそれを見極め、刃を走らせる。

「っ!?!」

ほら、こんなに簡単に壊れる。

「貴様…、その眼は一体何を視ている……?」

「なんだオマエ、コレに興味あるのか?」

「以前戦った時もそうだ。貴様は俺ではなく俺の何かを視ている。さっきのもそうだ。俺の槍が貴様の刃であっさり壊された」

「へえ。案外ちゃんと視てるんだな」

右手の逆手の持ち方を、ナイフを弄んで順手、逆手と交互に持ち替える。

眼は見開いたまま。依然として死は世界を覆い尽くしていた。

変わらず俺の中の絶対。「死」という概念は、そういうものになった。

「まあ、いいか。ああ、俺はオマエを視ちゃいない。俺にはね、モノの「死」が視えるんだ。誰とも違う特別製だ。だから——」

くるくる回るナイフの持ち手を掴み、その切っ先が破面の孔へと向けられる。

二度目の台詞。相手こそ違い、空も違うが。

虚無を抱えたものに言うのは初めてだから、ノーカンでいい。

「——生きているのなら、神様だって殺してみせる」

怪しく光る刃。それが、命を奪う。死を齎す。

「……そうか。ならば、俺の能力は役に立たないらしいな」

「なに？ オマエ、そんな力あったのか？」

「多くの破面は、破面となるときに虚特有の能力が失われる。だが俺は全ての破面で唯一、『超速再生』を持ったまま破面となった。だが貴様が死を視て、殺すというのなら。俺の力は無価値だろう」

「そうかよ。——ああ、殺してやるよ」

そのまま、「直死の魔眼」が見開かれる。殺人鬼としての穂積織が、鎌首をもたげる。

殺せるのは1人だけだという、誰かからの教え。そして殺す1人は果たして、この破面でいいのか。

「——はっ、知ったことじゃない」

縮地で飛び出す。

だが、その鼻先に雷霆の槍が迫っていた。

——関係ない。

「直死——」

ボロリ…と、簡単に崩れ去る雷霆。その先に、破面は立っていた。

「貴様とこうして殺しあうまでに、俺が何もしてないと思ったか」

「……………」

同時に感じたのは、更なる力の発露。重く、重く。なのに眩しい。目を染めるほどの黒。

「——鎖せ」

紡がれる言の葉は、驚くほどはつきりと響いた。

『刀剣解放第三階層』

変化は静かなものだった。

先ほどよりも遥かに強く、意味不明なほど凄まじい霊圧と、微かに流れ出る魔力。

「——驚いたぞ。まさか自力でそんな力を…」

「難儀なものだったがな。だが、この力は諸刃だ」

「代償が無い訳がない…か」

「だが短時間ならば問題ない。その間にケリをつける」

破面は黒輪こくりんを背に、その槍は姿を変えていた。

細身の槍は、その刃が巨大化していた。緑の霊圧は漆黒に染まり、禍々しさすら感じるほどの恐ろしい波動を流す。

姿にも変化がもたらされた。

黒白こくびやくの反転。真黒の髪からは色素が抜け落ち、身体中から凄まじい霊圧が、まるで稲妻のように漏れ出ていた。

「…くくつ、おいおい。本当にオマエ、冗談じゃないぞコレ」

「扉を開いた切っ掛けは些細だったがな」

「何したかは知らないが…。結局は、——変わらないぜ?」

どんなに先を歩もうとも。進化を遂げてしまおうとも。

「言っただけ破面アランカル。生きているのなら殺してみせるって」

「やれるのならな」

「上等だ——」

手始めに死を振るう。それ自体はただのナイフ。だが、俺の眼がもたらす視界内で走る刃は、もれなく死をプレゼントしてやれる。

だが——。

(死が…、見えにくい…?)

何故かはいざ知らず。目の前の破面の死が薄くなっていた。

死の線は存在する。濃淡は単純に死にやすさを示すものであるが、これ程までに薄いことはない。

「どうした。僅かな躊躇いがあるぞ」

「くそ…っ」

なぞれば殺せることがアドバンテージなら、それは掻き消えた。

破面…いや、ウルキオラ・シファアが、右手を俺へと向けた。人差し指が、まるで鎌のような幻想に見える。

「——死ね」

笑えないような霊圧の収束。

ただ一点に集まり、収束していく。

闇は、俺自身はおろか、死の線すらも呑み込んだ。

中々に滑稽なものだった。

「いつからや……」

「……いつから……？ 随分と面白いことを訊くね」

全ては余興に過ぎないというのに。

それに必死こいて抗う彼らの姿は。三流の喜劇のようだよ。

「君は知っているだろう？ 私の鏡花水月の能力は『完全催眠』……。いつ如何なる時でも五感全てを支配し、思うがままに錯覚させる」

ただの事実を口にする。

なのに、平子真子という男は激昂する。

飄々としながらも、かつての上司であるこの男は、案外に沸点が低いのだ。

「せやから……、一体いつから……！ いつから鏡花水月を遣うてたか訊いてんねん!!!」

必死の形相……なのだろう。怒りと驚きと、他の何かが混ざった感情が爆発した問いは、私にとっては甚だおかしい疑問だ。

「——ならばこちらも訊こうか」

どこから始まったのか。その錯覚は。

「二体いつから——、私が鏡花水月を遣っていないと錯覚していた？」

私は発動条件しか教えていない筈だ。そしていつからか完全催眠から逃れたと思ひ込んでいたことは、滑稽というほかない。

平子真子の顔が歪む。それは怒り。己と私への憤怒。

「…シロ…ちゃん…、なん…で…?」

雛森君の問いに、ただ咆哮する日番谷冬獅郎。

そして怒りのままに、私へと突撃してくる。

「藍染——ッ!!」

「待つんだ日番谷隊長!!」

全ての歯車が、壊れていく。

「——隙だらけだ。全て——」

ただ刀を振るっただけ。それだけで容易く壊れる。

死神が、地へと墮ちる。

それは私が、穂積織により墮とされた時と似たようなもの。些細な

ことだが、ささやかな報復だよ。

すると、一帯から火柱が上がる。誰のものかは、分かりやすい。

「お出ましかい? 山本元柳斎重國」

護廷十三隊総隊長。その名を背負いし男が、まるで日輪を背負うように現れた。

「万象一切灰燼と為せ——『流刃若火』」

藍染惣右介を前にして繰り出す我が斬魄刀。

焔熱系最強最古の斬魄刀は、その名に違わず。周囲を焔に包み込み、焼き尽くす。

隊長格は皆やられてしもうた。

されど、仕込みは済ませた。

「君は遅すぎたな。最早この時点で、戦力に数えられる隊長は君一人だ」

余裕を持った表情。焔熱が迸るこの場で、恐ろしい胆力よ。

「君が倒れれば護廷十三隊は文字通り崩壊する。機は逸したのだよ。故に君は出てくるべきではなかった」

「…傲^{おご}るなよ小童」

よくもまあ、そのような言葉が出てくるものじゃて。

本当に、甘いものよ。じゃからお主は小童なんじゃ。

「貴様程度の力で、この儂を斬れると思うてか」

「斬れるなど。いや、もう既に斬っている」

「ほざいたな」

以前の儂ならば、激昂しておったかもしれない。

しかし、ある一人の死神の存在が、停滞しておった儂を動かした。

向けられぬようになって久しい、本物の死を孕んだ殺意。

それが、かつて「十字齋」などと呼ばれた儂を呼び起こした。

「お主が儂の力を警戒しておるのは予測できた事じゃ。故に何らかの策を講じてくるはず」

「ほう…。君は脳筋の傾向があると思っていたが。中々考えるじゃないか」

「儂とお主の鏡花水月に嵌った身じゃ。不用意に動く真似はするまいて」

あらゆる感覚は虚言の世界。

流刃若火を封じる手札を切るはず。故に儂は敢えて、炎を撒き散らす。

『焔熱地獄』…、お主にはこの地獄で死んで貰う」

更に十数本の極大の火柱が噴き上がる。最早この街の贗作。灰すらも残るまい。

「退がれ！ 黒崎一護!!」

「…ジイさん…」

「護廷十三隊でもないお主が、ここに巻き添えにする訳にはいかん」

「ほう？ ならば他の隊士たちはいいというのか？」

「覚悟はできておろう。『一死以て大悪を誅す』——それこそが我ら護廷十三隊の意気と知れ」

さあ、何処から来る…。

『アア〜?』

背後から間の抜けた声。童の声。

じゃがその霊圧は破面のもの。ならば、間違いない。

「来おつたな…」

炎が瞬時に消え失せる。

「!」

「ア〜〜〜…」

同時に刀身が鍛ち焦げたように黒く染まる。

そしてその刀身は白い破面を上下に分かち、圧倒的熱量が分かれた上半身と下半身の殆どを一瞬にして蒸発させた。

『焦刃』しやうじん ツ!!」

「オアアアアアアアア—— ツ!!?」

「貴様…」

「ほう? 儂に対する呼称は『君』では無かったかの? 藍染惣右介」
流刃若火の炎を抑える術を考えるだろうことは、全ての隊長格の間で共通した認識だった。

故に、炎を使わずに灼き尽くす術を用いた。本来は卍解における使い方ではあるがの…。

「儂の『流刃若火』は焔熱系最強最古の斬魄刀じゃ。何故に炎のみを操ると思うてか。熱こそが本質。儂の卍解を知らぬお主には、想像しえぬことであつたか」

「…驚いたよ。折角の策が無駄になってしまいそうだ」

…じゃが果たして、この程度で終わるものであろうか。

これで策が潰えたのであれば、あとは単純な戦闘のみ。

「だが君も、これで終わりだとは思ってはいない筈だ」

「幾らお主が儂の五感を支配しようとも、お主を討ちとることに変わりはない」

「フツ、君も言ったことだ。そしてそれは私にも当てはまる」

…まさか。

いや、なぜその可能性を見落としておつた…っ。

「君も…、いや君たちも。私の卍解を見たことはない筈だ。」

此奴もまたかつて隊長を勤めた男。何故に卍解の存在を見落とし
てしまった…!」

「無理もない。『完全催眠』などという常識を超えた力を見せつけられ
れば、そこに意識を向けるのはね」

「ぐう…っ」

「だが安心したまえ。少なくとも今は使うつもりはない。君たちはま
だ、私の掌の上だ」

「小童が…」

うち焦げた刀身に、再び炎が灯る。

だが藍染惣右介は、変わらせずに余裕の笑みを浮かべおる。

「それでもう一つ忠告だ。私は一言も、彼が炎を封じることしか出来
ないとは言っていないよ」

「!!?」

灼き尽くしたはずの破面は、僅かに残った身体の一部が膨張して
おった。

「炎が封じられるのならば、熱とて封じることが可能だ。何故なら彼
は君が思った通り、君を封ずる為に作り上げたのだから」

「やはり、甘いぞ。藍染惣右介」

爆発。その勢いはこの街を吹き飛ばすことはないが、1キロほどを
吹き飛ばすには余りある。

——誰の熱が、それを為すと思うとる。

「この熱は儂の熱よ。なれば、儂が御しきれないなどあり得ん」

「…ふふ、どうやら君は、私が思っていたよりも進化していたようだ
ね」

「老人を侮るでないぞ。儂より強い死神が千年現れとらんからこそ、
儂は千年、この地位に立ち続けとるんじや」

卍解は使えん。じゃが、似たことは出来よう。日番谷隊長と同じ
く、儂の斬魄刀は始解と卍解の能力の根底に大きな差異はない。卍解
にできることの大半は始解にも可能。

「君を殺すのは、骨が折れそうだ」

「護廷十三隊を、…この儂を。甘く見るでないぞ。藍染惣右介」

闇の中…だろうか。何度も見たくはない光景だ。

落ちていく。堕ちていく。深い深い、底のない穴へ。

閉じた世界の筈なのに、限界はない。

これは、伽藍だ。

『そう、貴方の心象世界。精神の世界。底のない、悍ましいこの場所が貴方の内面よ』

『『式』…か』

『残念ね。あの子はまだ寝てるの。貴方に力を貸したいようだけど、少し眠たげだったから』

『…知らないけどな』

上下も左右も、前後すらも曖昧で。何故こんな境界の無い世界から、境界を創る斬魄刀が産まれるのか。

『彼、凄いわね』

『…ああ』

『悔しい?』

『…さあ。俺とは違うし、比べることもない。アイツは答えを見つけかけてる』

『そうね。…でも、貴方も答えを欲しているはずよ?』

彼…ウルキオラ・シファアは、開いた孔を埋められる答えに手をかけた。

それが、俺を殺すことによって得られるのならば…。

俺にも、在った価値はあるのだろうか。

『そこで卑屈になるのは、貴方の悪い癖ね。その答えを知りたいとは思わないの?』

「…答え……か」

『貴方は、死が恐ろしくないのね?』

「怖いさ。これ以上なく。ああ死にたくない。死にたくなんてない!

誰が好き好んで死にたいなんて思うものか!!」

そういうと、『式』は笑った。

『そう。良かったわ。貴方の本質は変わってない。初めて目覚めた時から、貴方が死を恐怖しているのは、ずーっと変わってない。それは貴方が死を大切にしているから』

「死を……」

『死ぬことを恐れているのは、大事なこと。貴方のことを本気で理解出来るのは私だけ。だってここは、私が在れる数少ない世界だもの。だったら、少しくらい鼻肩してもいいでしょ?』

何を言っているのか、理解が追いつかない。

だけど、喜んでいるのは確かなようだ。

『いい加減に引き延ばすのも、飽きたでしょう? 『唯式』の本質——この世界では「卍解」というのよね? あの時は教えてあげなかったけど、今なら教えてあげられるわ。だって今の織は、何よりそれを求めているのだもの』

距離が、詰まる。あの時から拳一つ分しか空いていなかった距離が、今は無い。

『ふふ、やっと貴方に触れられる。夢じゃない、本物の貴方。もう明けない。それだけで、こんなに喜ばしいことなのね。』

——いい? 織。この力の真名は——』

ああ、と頷き、そう返す。

力が灯る。意識が浮上する。

もう、オレはいない。式と『式』が、俺にはいる。

一人だけど、一人じゃない。

目を開けた時、目の前は真っ黒。

でも眼を開ければ。

「浮世は終わりだ。——先に逝け」

ナイフを黒い虚空に向けて突き刺した。

同時に、黒かった世界が霧散して、月の光が舞い戻った。

「……」

「俺は簡単には死なないぜ？」

「それでも、俺は貴様を殺す」

「やれるものならな」

反転したやり取りが交わされる。

だが、条件は変わった。

「ここからは、俺も本気だ。——卍解」

「その気になるのが遅い。だが、そうこなくてはな……。ならばこちら
も、ギアを上げるまでだ。——重ねて鎖せ、『黒翼大魔』^{ムルンエラゴ}」

誰も気づかない。気づこうともしない。

『無垢識』——開境——」

そんな戦いは、終着へと向かい始めていた。

「――重ねて鎖せ『黒翼大魔』」
 漏れ出るようになっていた悍ましい霊圧が、荒れ狂うように奔る。
 色彩は緑に縁取られた黒。
 全てを呑み込まんとする荒々しい霊圧が、その内槍へと集まりだした。

右手に持った槍。腰を落とし、背を見せるほどに半身に構えて、右腕を引いている。全身に力が漲っているのが、目に見えて分かる。
 初めて見せた構えだ。

「今の俺の力を、ここにを見せてやる」
 背中の翼が、より力強く伸ばされてピンと張る。
 そしてそれよりも力強く、技の名が飛び出した。

『黒き日輪よ、灰に帰せ』
 まるで黒い太陽だ。その黒に、莫大な熱量が込められているのが分かる。

あらゆるものを無に帰さんとして、それが俺という一個人に向けられる。

真つ向から破ろうなどと考えることはあり得ない。
 なにせこれは黒き日輪の熱量であるから。
 だけでも、今の俺は何もないわけじゃない。『式』と、寝ていた式から託されたものがある。

ナイフを腰にしまう。殺人鬼の時間はお終い。ここからは、純粋に、『穂積織』という男が戦う。だから俺は、斬魄刀を抜く。

「――卍解」
 さあ。これが、俺の力の真名だ。

『無垢識』――開境――
 この卍解は、俺にどんな変化をもたらすのか。

ああ。真理は変わらない。この眼とこの刃は、死を視せるだけだ。
 「――へえ。こんな単衣、邪魔なだけな気がするけどな」

赤い革ジャンの代わりに、花の意匠が拵えられた薄い肌色の単衣。

帯もなく、ただ袖を通してあるだけ。丈が長いものだから、その裾は霊圧の床に垂れていた。

死覇装はそのまま。妙に似合わない代物だ。

そして、迫る黒輪に向き直る。

微かな光が、刀に灯る。

「——『雲耀』」

この状態だと、よく見える。

死は拮抗を許さない。黒い熱量は、形を持ったが故に死んだ。

「!!」

「驚くなよ。今まで同じようなものはあつただろう?」

あつさりと霧散した攻撃に、僅かな驚きを見せる破面。

そんなにシヨックだったか…、と言うわけでもなさそうだがな。

むしろ笑みを浮かべてそうだ。

「お前を叩き潰して、俺は答えを手に入れる」

「はっ、殺し尽くしてやるや」

互いの霊圧が跳ね上がる。卍解と、本来の力を手にしたことで蓋が吹っ飛んだ俺も、破面と同じにまで霊圧を高める。

死神と破面。互いにその杵を叩き壊して、踏み越えた一線。

死神と虚の境界を取り除くのが崩玉と聞いたことがあるが、そんなものは必要ないらしい。

「『黒輪の光槍』」

二本目の黒い槍が、今度は左手に現れる。二槍流なんて、する奴が居たんだな。そんな呑気な考えが頭を過る。

その思考を頭を振って掻き消す。邪魔だ。

「何も変わらないのなら、これで終わりだ。穂積織。——
『黒鎖に縛る槍』」

槍が投擲された。よく見ると、槍の石突に黒い鎖が付いていた。鎖鎌と同じ原理で、ある程度自由に動くらしい。

「何も変わらない…ね。——ああ、『無垢識』の能力も大して変わらない。境界に関わる能力だよ。だけど——」

——俺だって変わらない筈がないだろう。

たった一回、剣を振るっただけ。

微かに光る刃が、全てを隔てる境界となる。

『創境』と名付けられる技だ。

これで、正面からくる槍を弾いた。

「フン、まだまだだな。この槍はあらゆる角度から貴様を殺しにかかる」

「だからさ、変わらないはずないって言ってるだろ」

続いて六度。刹那に刃が動く。

『境界識』

隔絶された空間。全方位への完全防御。

これ自体はあつという間に崩れるが、在る間だけは絶対だ。

左右、後方、上下と、縦横無尽に槍が襲いかかるが、それは全て弾かれる。

ジャラジャラと、鎖が擦れる音がする。

そして再び、槍は破面ウルキョウの手に収まった。

「厄介な力だ。力技で押し通るのも困難か」

「そう簡単にはいかないさ。力で押し通れるようなら、それは理じゃない。ただの物理現象に成り下がる。それでも俺は理を背負う身らしいからな。押し通られる訳にはいかないんだよ」

刀を構える。槍を構える。

鎖鎌ならぬ鎖槍。闇色のソレは、奇妙な圧迫感を纏っている。

理を紡ぐ刃。鉄の色は死を纏い、微かな光が神秘的にさえ見える。

新たに再演される戦い。

鎖槍が、俺の斬魄刀と鬩ぎ合おうとして、不意にその形を崩した。

「っ!!」

「仕手を殺す——」

攻撃に対して、受けるでも弾くでもない、俺に許される第3殺の選択す肢を引く。

想定していただろうに、目の前で、しかも手に持つ武器であるからか、僅かな動揺が走る。

それは何とも、致命的だ。

『削り鐘楼』

あらん限りの力を込めて、その身体に刀を叩き込む。

軌道は横薙ぎ。捉えるのも困難な速度だった。

そして俺は目を見張る。

「…へえ。あのタイミングで間に合わせたのか」

「ぐ…っ」

ギリギリで右手に持った槍の穂先を滑り込ませて、何とか躲していた。剣圧で僅かに頬が切れ、血が垂れる。

槍と鬨ぎ合う刀は、ギリギリと鈍い音を立てて震えていた。

今度は俺の方から、槍を振り払う。大きな音を立てて、破面は後方へと吹き飛んだ。

俺はそれを追いかけて、連撃を仕掛ける。一呼吸の間とまではいかないが、一瞬の間に幾重もの刃が破面を襲う。

破面が不意に、左手を薙いだ。

「っ！」

左手には鎖。それは大きくたわんだ状態で、破面の背後に回っていた。咄嗟に後ろへ、弾かれるように飛んで距離を取れば、先ほどまで俺がいた場所を槍が通過していた。

言葉は交わさない。横たわる沈黙。何もない空間。充滿する殺気。

「……………」

破面が、頬に流れる血に触れる。指先に付着した血は赤く、破面の白い肌にはよく映える。

その指先を俺へと向けた。

既視感のある光景。そしてやはり、そこに霊圧が収束する。

だが、放たれると思つた瞬間に、さらに霊圧が跳ね上がった。

「！」

『王虚の黒輪』

闇ではなく光。慣れきつた瞳には痛いほどに眩い。

この攻撃——虚閃は、都合のいい場所に死が見えなかった。

だが、死はある。曖昧なだけで、そこにある。

無いということは、在るということ。曖昧な概念を明確に区切つて

いけば、それは見える。

——『無垢識』の本領は、境界支配。そこに境界を創るだけではない。そこに在る境界を動かすことも、能力の内だ。

だから、見える。

「無駄だよ、ソレ」

「…、何をしても殺す、か。死をなぞるのではなく、触れたものを殺しているようにしか見えないが」

「なぞってるさ。死の線つてのは一種の境界だ。それを動かすなんて造作もない」

「ならば、打ち合いは無意味か。…俺の最大の一撃で以って、終わらせるとしよう」

槍を頭上に掲げる。黒い光が、槍を覆う。

「貴様に死を認識させなければいい。迅さではなく、その概念に死を含ませなければ、そこに死はない」

本気なのは、見るまでもない。

全ては、ここで決まる。

対した俺も、弓を引き絞るように居合の型をとる。暗示された今だから可能な技。そして、今の俺の最大の技だ。

「冥闇を仰げ。緑雷に随え。これで終わりだ——、

『黒輪よ、天地を闢け』！」

全力の攻撃。それは先ほどよりも遥かに強く、大きい。

先程でさえも黒い太陽を思わせたソレは、今や宇宙を連想させるほど。

「はは、死を内包させないだつて？ 無理だよ、ソレ。そこに在る限り、死からは逃れられない」

今、俺でも驚くほどに冷静だ。目の前の宇宙が、魔的に感じるくらい。だから、殺す。

全く。——ああ、吐き気がする。

「死が、俺の前に立つな。——『無垢識』——開境」

直死の魔眼が、世界に死を見出す。

より鮮明に。より深く。

理に手を伸ばし。今ここで、雌雄を決そう。

「両儀の狭間に消えろ——、『無垢識・空の境界』」

力と速さで、刀を振り抜く。

そして、闇と死が拮抗する。

世界から、音が消えた。光が消えた。

刃が、闇を塗りつぶしていく。

境界が、死へと傾いていく。

「じゃあな、ウルキオラ破面」

そして、全てが終わった。真っ白な月が見下ろす、なんら変わらぬ夜がやってくる。

そこには、何もなかった。初めからなかったのだと言い張ってるように。アイツはもう、俺が殺したのだから。

だから、跡形も残らない。もう、どこにも居なくなった。

「——呆気ない……とは言わない。面白くもなんともない。——ただの殺し合いだったよ」

卍解が解けて、単衣が霧散する。いつもの赤い革ジャンの感覚。

「——殺し合い……か。どこまでいっても、俺は人殺しだ。それが、俺のものじゃなかったとしても」

病的に青く、細長い月。たった一振りで砕け散ってしまいそう。

「あと、1人」

在るのが気に食わない、俺の最後の目的。

あとはやっぱり、殺すだけだ。

「凄まじい熱量だ。私でなければ焼け死んでいたな」

「それを受けて尚その余裕か……。やはり、恐ろしい男よ、藍染惣右介」
実に惜しい。その力ゆえに歪んでしまったのじやろう。だがもし仮に。その性格を歪ませる事なく力を振るえていたならば。

きっとこれ以上ない存在になっていただろうに。

益体も無い思考が走る。それは刹那より短い間のこと。

「君の予定外の進化に、ワンダーワイスは死んでしまった。君には手を焼くと思って用意した策だったんだが」

「文字通り焼いてくれようぞ、お主の全てをな」

「少し、傲ってはいないか？ 山本元柳斎重國」

緊張を緩ませない。緩ませることは許されない。彼奴はそれ程の相手よ。

「そもそも君が私に攻撃したところで、既に意味はない」

「…なに？」

無造作に、服の前を開けた。

「それは……」

「私は既に、崩玉を使役することに成功したのだから。主である私には常に、崩玉の防衛本能が働く。攻撃は全て治癒する」

「ならば、それすらも灼き捨てるまでよ」

流刃若火の力を侮るでないぞ。此れは焔熱系最強の刃。森羅万象を灰燼に帰すものなり。

「ふむ…、君と一対一でやり合うのはもう少し先の予定だったが…。
仕方がない。今ここで始末するしかない」

「やってみせろ、小童」

「その増長、目に余るぞ。——【破道の九十七・千年烙星】」

唱えられた鬼道は、破格と称される九十番台の鬼道の中でも一線を画すもの。黒棺・五龍転滅と並び最強の破道にその名を連ねるもの。

天空に現れる、無数の霊圧。一つ一つが桁違いの密度で、まるで流星群の如くに。

詠唱破棄により威力を落としてあるものの、実物を初めて見るものならば分かるまい。

事実、辛うじて意識のある死神たちからは、驚愕と恐怖の声漏れておる。

「それを詠唱破棄で行使するとはの…、敵ながら天晴れと言わざるを得まい」

「贅辞は素直に受け取ろう。何分褒められることに慣れてなくてね。そのせいで、加減ができなくなるだろうが。…いいかな？」

「それで儂を殺せると思うてか。千年、この座に立ち続けた儂の力を甘く見るでないぞ。火力を上げるぞ、『流刃若火』よ!!」

劫火が灯る。灼きつくし、その上を灼く。灰燼のさらに上の概念。――焦滅。灼きつくされる時間すら与えずに消滅させる。

先の破アランカル面で、始解におけるその感覚を掴んだ。まずは、ゆっくりと、ゆっくりと慣らしていこうぞ。

「壱段」

偶々頭上へと落ちていた隕石の如き霊圧塊を、一振りの下に砕く。もともと高温である故、砕けてしもうた。

それにしても、『千年烙星』の範囲が広い。威力を落とした代わりに、精密性と範囲を広げたか。

「貳段」

直径10メートル程度の小さな範囲に、たまさか在了った霊圧塊を砕く。

…まだか。

「参段」

50メートルに範囲を広げ、再び攻撃。やはり砕ける。

「肆段」

100メートル。破片が小さくなり、融解の跡が見える。

「伍段」

500メートル。破片が見えなくなる。代わりに融解してドロリと融けた何かが見えた。

「陸段」

700メートル。液体も僅かになる。見れば、僅かに周囲が融解し出していた。刃にのみ込めた焔熱が、漏れ出たと見る。慣らしは——これにて仕舞い。

「——終段」

1キロ先。薙いだ刃が鞘に戻る音と同時に、塊が焦滅する僅かな音を残して消えた。

そしてそれと同時に、墜落まで秒読みであった全ての攻撃を、ただの一撃で以って消しとばした。

『流刃若火』は能力が単純であるが故に限界は遙か彼方。藍染惣右介、お主を今ここで、灼き捨ててくれよう」

「——驚いた。君の流刃若火が始解のまままでこれ程までの力を隠していたとはね。仮に君の卍解がこの強化版だというのなら、成程確かに、ここでの解放は全てを滅ぼしかねないというわけか」

彼奴の斬魄刀——『鏡花水月』がその刃を顕す。

「君には敬意を表して、残り僅かな時間を死神としての私で相手をしようじゃないか」

「何度も言っておろう。儂より強い者が現れんかった故に、今儂はここにおると。——その傲りを悔いて死ねい」

瞬歩による駆動は互角。切り結べば斬魄刀すら融かしかねない儂の刀を、霊圧で上回るか何かしたのか、難なく受け止める。

驚きなどない。あらゆる感情が、此奴の前には隙となるゆえに。

大山の如く構える儂と、虫の如く飛び回る藍染。

——いや、この見方こそが儂の傲慢か。

「歴戦の猛者とは、まさしく君のことなのだろうな」

「お主ほどの力の持ち主は、儂の生涯でも数えるほどじゃ。喜ぶがいい」

空気中の水分を既に蒸発させるほどの熱。刃に触れることでそれは成される。つまり、儂の熱は完全に刃にのみ宿った。だから、気にすることなく振るえる。

剣圧を巧く制御しなければ、その熱を帯びた剣圧が飛び交ってしまうのが。

「っ、掠る事も致命傷か」

「ここがお主の死地になるだろうて。覚悟せい」

背後に現れた藍染の刃を弾き、その胴体を塵にせんと横に薙ぐ。しかし半歩下がることでそれを躲され、体が流れたところを逆に狙われた。体が流れた方向に倒れてそれを避けた。

下から刀を振り上げる。されど彼奴の斬魄刀が横合いから儂の斬魄刀を弾き、流れるような動作で脳天へと刀が振り下ろされる。

霊圧の床上で身体を転がし、振り下しを辛うじて回避する。

「埒が明かんのう…」

「そうか。では終わらせようじゃないか。このような茶番は飽きてしまった。君との戦いは中々に楽しめたよ」

「では、此方も終わらせるとするかの…」

焔熱を、より猛々しく収束させる。さらなる熱を、炎を。

「――万海を灼き払おうぞ」

空気すら発火して、消えて無くなりそうな熱量を孕む。

無焔の灼熱。不可視の猛火。焔熱系最強の名と、護廷十三隊総隊長の名を背負い、この刃を薙ぐ。

「――『俱利伽羅』アアアアツツ!!」

そして世界が、白く染まった。

「……オマエら、本気でヤバいと思ったぞ」

目の前で談義している涅マユリと破面を目にして飛び出した言葉はソレだった。妥当だと思ふし、当然だと思ふ。

マッドサイエンティストだからこそと言えるのかもしれないが。

「フン、君には言われたくないヨ。反膜ネカンオンを斬り裂いた事だけでも、君の言葉を借りるならば『ヤバイ』というものだ」

「同感だよ。僕たちにとつてはある種最も堅い守りであるのだがね。それをただ何をするでもなく斬り裂くなんて、彼の映像記録を見なければ信じられなかったよ」

「映像？ オマエそんなのいつ撮ったんだ」

「偶然というものだヨ。双極の丘は技術開発局からも見えるからネ。偶々そちらに録霊蟲の目を向けていたのさ。お陰で研究意欲が湧いて仕方がない！ 是非とも解剖させてくれたまえ！」

「お断りだ。それにこの力に関しては詳しい奴が他にいる。俺は主観的にしか言えないが、アイツなら客観的に説明できそうだ」

浦原喜助ではなく、蒼崎橙子の顔を思い出し、かき消す。

これは死神の域でなく、かといって魔術師の域かと言われれば首をかしげるもの。魔術師はこの眼について定義していて、その効果も識っているようだが。

「浦原喜助かネ？」

「いや。死神でもないぞ」

「ほう？ 興味があるネ」

「人種が違う。向こうは科学よりもオカルトに寄ってる」

偽天の空の下、何らかの談義をしていたらしいこの2人は、どうにも俺のことを話のタネにしていたらしい。

…ああ、いつか感じた悪寒はコイツらのせいか。

ふと、黒崎一護と、卯ノ花烈の霊圧が無いことに気付いた。

「ん？ あれは…」

「織さん！」

少し遠くからやってきたのは、虎徹勇音だ。

丁度いい。直接的な怪我こそないが、馬鹿みたいな熱量で灼け爛れたりしてるところを治してもらおうとしよう。

少しずつ治癒は進んでいるが、食欲旺盛な化け物の時よりその進みが遅い。恐らく、理の側へと少し近づいたからというのと、単純に霊圧が阿呆みたいに巨大だからか。

「勇音、この傷治せるか？」

「任せてください!!」

随分と張り切ってるが、この傷は治れば御の字くらいの代物だ。

「うう、治りが遅い…」

「痛みが引けば問題無い。簡単に治るとは思ってたしな」

治療中に聞いた話では、黒崎一護の仲間たちもほぼ完全に治療が終わったらしく、彼らは今こっちで安静にしているらしい。

「涅マユリ。オマエ、黒腔ガルガンタ開けるか？」

「問題ないヨ。だが、一方的に言われるのは癪でネ。何か対価を貰おうじゃないカ」

「——ああ、もういい。ホントはするつもりも無かったんだが。…自分でこじ開けるしかないのか」

眼を凝らす。空間に敷き詰められた線のうち、空間を裂いて壁を超えることのできるものを探す。

真名を知ってから、それが楽にできる。

「…ほう」

「…」

好奇の視線が鬱陶しい。だが無視だ。

腰のナイフを抜き、右手で逆手に構える。弄んで、順手に持ち替える。

「——!!」

「くくっ、素晴らしい！ やはり素晴らしいヨ!!」

「まさか、技術もなにもなく、『斬り裂く』だけで開くなど…!!」

ナイフを振るう。死の線を、ナイフの刃先がなぞる。

それだけで、空間が裂かれる。底なしの闇がその顔を覗かせた。

「勇音、ついてくるか？」

「は、はいっ！」

人1人ほどの隙間に飛び込み、霊圧の床の上をひたすらに走り続ける。

真つ暗な空間に、乱雑な線だけが淡く光を灯す。夜空にも見紛う光景に、俺は心を動かさない。それが恐ろしいものだと思えるがゆえに。

まあ、勇音にはまず見えないのだけでも。

空間は半殺しにして開いたから、時間経過で閉じるだろう。

このやり方では、行き先を固定できないことが欠点か。

——何とかなる。

俺はまだ、俺自身の力の源を、『式』の力の源を知らなかったが故に。安易にそう考えていた。

「斬る——」

いとも容易く斬り裂かれた空間。勇音と共にそこを飛び出す。

降り立ったのは、見覚えのある街。人の気配はチラホラとしかないが、本物だろうか。

それに妙に視界が広い。見渡せば、建物が全て真っ平らにならされていた。刀で斬ったというより、灼かれたような跡がある。

その時、近くに覚えのある気配を感じた。

「っ、浦原か」

「穂積サン。貴方、どうやってココに来たんスか？」

「斬った。そしたら繋がった」

「…その様子だと、かなり進化したみたいっスね……」

「何で分かるんだよ」

「橙子サンが話してたんスよ。穂積サンの進化というか、自覚というか」

…なんとなくムカつく話だが、どうしようもないし正論なので、つきを噛み殺した。

ふと、巨大で異質な霊圧を2つ、感じ取った。

それはたしかに異質だが、霊圧であることが分かる程度に捻れ曲がっただけだった。

「…黒崎一護…か？」

「……………。一心サン、ああ、黒崎サンのお父上に協力してもらって、藍染サンへの切り札を身につけてもらったんスよ」

「……倒せるとは、言わないんだな」

僅かな沈黙に目を細めつつも、その後の言葉に耳を貸す。

「…完全なんて有り得ません。もしかしたら、藍染サンにもほんの少

しの綻びがあるのかもかもしれません。ですが、それに期待してたら勝てないのは当然っす。大丈夫っすよ、既に手は打ってあります」

「ああ、あの封印か？ 確か——」

『九十六京火架封滅』っすよ。あらゆる可能性がありますが、この先は二択。藍染サンが倒されるか、衰えるか。そもそも何かの奇跡でも起きない限り、崩玉により不死となった藍染サンは倒せません」

「——くくっ。さあ、ソイツは分からねえぜ？」

海燕モドキの覚醒。ウルキョラ破面の進化。

ここまで厄介なことが積み重なっておいて、藍染惣右介が簡単にやられるとは考えにくい。

「浦原、行くぞ。——嫌な予感がする」

「：洒落になりませんねえ。穂積サンの直感、当たるらしいですし」

「うるさい。さっさと行くぞ」

ああ、吐き気がする。嫌な予感への悪寒でもあるのだろう。

崩れた街の瓦礫の上から、ただ2人が荒野へ飛び出した。

「――『無月』」

振り下ろされる右腕。鎧のような何か覆った、最後の月牙を握る右の手。

刀は無い。1つとなることが、導き出された結論だった。

其は、『最後の月牙天衝』。

力を全て失うことを代償にして放つ、俺の全てを込めた一撃。

ちらつく前髪のスクリーンの奥に、月牙で両断されている藍染の姿。叫び声すらもかき消され、届かない。

「終わった…のか…?」

離れたところに、倒れ伏す藍染の姿。

完全な両断はなされなかった。だが、即死の域にまで割れたその身体が、再生されているのが目に留まった。

コイツ…! 俺の全霊の一撃すらも耐えるってのか!!? くそつ、理

不尽つつかか、…ああくそ!!

半ば自棄っぱちになっていた俺は、瞬歩でそこへ飛んだ。

そして、完全に再生されたのを見届けた瞬間。

「つ!!?!」

髪の色素が戻り、鎧が剥がれる。

――失われていく。喪われていく。文字通り消え去るように。聞

こえぬ別離の挨拶すらも、既に遙か遠く。天に昇るのではなく、海に沈むように消え去った。

死神の力が、消えていく――。

「…ぐ、…つ。…全く、驚いたよ。君が、私を超えた領域に立つことがあるなんて」

「くそ…つ」

「だが終わりだ。ここで君を殺して、仕上げを残すのみとなる」

…これで、終わりじゃない…だと?

ここまで空座町からくらを滅茶苦茶にしておいて、まだ何かを残しているってのか。

「王鍵の創生。確かにそれも目的の1つだ。——だが、私が一番成し遂げたいことはそれじゃない」

「何だと…？ それじゃテメエは何がしたかったんだ」

「——人殺し、と言ったところかな」

——ふざけんじゃねえ。これほどまで多くの人を犠牲にしておいて、そのくせ人を殺したいだど？

動かない身体に、力が籠る。だが、それは身体を動かす力足り得なかった。

もう、起き上がる力も抜けていった。斬魄刀を手にしたままの藍染が、ゆっくりと俺にとどめをささそうとしていた。

「っ!!」

「そいつは…!!?」

そんな時に突然突き立てられた赤い光。胸の中央に、咎人の証の如くに。

そして、霊圧を2つ感じ取った。

「やーつと発動したみたいっスね」

「へえ。…アレがオマエの作ったっていう、封印か？」

浦原さんに穂積さん。俺の知る限りでも最上級に強いかもしれない2人が、飄々とこの場に現れた。

「…こんなもの…っ!」

「それはさつきも言った通り、アナタを封印するために開発した新しい鬼道っス。——『九十六京火架封滅』。今のアナタじゃ、脱出は叶わない」

「…そう、か」

そして、ふと藍染はその動きを止めた。

「——やっつと、相見えたか。穂積織」

「やっぱり、ただじゃいかないか。——ああ、やっつとオマエを殺せる」
唐突な会話に、浦原さんも俺も怪訝な表情を浮かべた。

そして、次に発せられた言葉に驚愕し。そこから始まる何かが悪れた殺し合いを、俺はただ見ていることしか出来なかったのを、今はまだ知らない。

やっと。やっとだ。

同じではない。空っぽでもない。

『在る』ことが気に喰わないという、ただそれだけの理由で。

——やっと、殺せる。

「互いに待ち望んだ時が来た。王鍵の創生より先に、やっておきたいことがね」

「カツコつけるなよ。待ち望んだなんて誰が言った。俺はただ、オマエを殺したいと思っただけだ」

浦原と黒崎一護の視線を横目に、封印架に閉じ込められている藍染と向き合う。

「俺はオマエのことが嫌いで、在ることが許せない。だから殺す」

「奇遇だね。私も、君のことが心底気に喰わないと思っただけなんだ」

俺は斬魄刀を抜いた。藍染は身体に少しだけ力が入った。

もう殆どが封印に囚われた今、何が出来るというのか。

その答えは、すでに口元までせせり上がっていた。

「卍解」

封印架が爆砕した。霊圧の暴威が、封印架の強度を食い尽くしたのだ。

「…なんだこれ、髪が…」

俺は何故か、姿も変わっていた。髪が異様に伸び、その長さは丈を超えようとするところまで伸びていた。

単衣は少し前と同じような、白と黄色を基調とした花柄の、雅な代

物。

いつそ俺には勿体ないくらいだ。

それに、死覇装の方にも変化があった。卍解の深度が深まったのか、単衣の内側も桜色や白の着物となっている。ことごとくが女性用に近い代物で、少々違和感を感じるが、無為なことだろう。

「ほう、それが君の卍解か」

「…、なんかイヤな感じだな」

「そうかい？ 私としては、それなりに有用な能力ではあるがね」

風にはためく黒いロングコートが、一番の変化だろうか。俺と同様に、斬魄刀自体に変化は無かった。ただ、身に纏う雰囲気为重苦しくなり、今の俺ですら僅かに圧迫感を感じてしまう。

その目には何が映るのか、俺には見えない。

「君の方こそ、大きく変わっているね」

「オマエも同じようなものだろ。…まあ、見た目が変わりすぎてる自覚はあるがな」

俺のことを知る者が今の俺を見ると、おそらく性別が分からなくなる。むしろ初見で女と判断されること請け合いだ。

別にそこには劣等感コンプレックスがあるわけじゃない。気にしちやいけないんだらう。

「では、卍解の名を訊こうか」

「…まあ、いいか。当然、オマエも言うんだろ？」

剣を握る手に、力が籠る。肩の力が抜ける。

切っ先を向けて、その真名を口にした。

「卍解——『無垢識』」

「卍解——『鏡花水月荒耶識』」

風が強く吹いた。荒野には何も無いが、砂煙だけが間を埋める。

崩玉の力は、不老不死程度しか残っていないという。願いを叶えはしなかったが、崩玉の持ち主としての崩玉の防衛本能が働き続ける。齎される力は超常ではない。だが、卍解の力は不明だ。『完全催眠』を超える力があるとは考えにくい。卍解だから強いとは限らない。それでも、直感が叫ぶ。

——これは危険だ。手加減も何もなく、ただ殺せ。

ウルキオラ

破面との戦いを経て、思ったことがある。それは俺が何度か口にしたことではあるけども、俺が得たこの戦いをする理由とも言える。

俺はこの男が在ることが気に喰わない。ただただ殺しあえるところでいたのに。獲物を前にしても何も思わない。

ああ、俺は本当に、コイツがいることが我慢できないだけなんだ。

藍染惣右介と俺は、進む向きが反対の規格外だ。

誰にも理解できない特別な内包した存在。

圧倒的な才能。五感全てを支配する能力。

死を視る魔眼。曖昧を明確に変える能力。

進化退化を続ける、進む向きが違う2本の線が描く螺旋。絡む事もなく、触れることすらも稀。

決して矛盾を孕むわけではなく、しかし整合する訳でもないのに。

いっそ、矛盾していればいいのに。何でもなく、そう思った。

「最後の戦いだ。華々しく飾ろうじゃないか」

「思ってもないことを言うなよ。戦いじゃないし、華々しいものでもない。分かっているんだろ？ これはただの殺し合いだつてさ。殺伐したものになりこそすれ、華々しくなんてなりはしない」

「その服装の君には、言われたくないがね」

「俺の意思じゃない。ほっとけ」

この着物を見るまでもなく『式』のものだ。つまり、俺の——『唯式』の本来の力の根源は『式』にあるということ。

だから俺も、俺の意志に関係なくこんな姿になる。

「さあ、始めようか」

「——その前に、だ」

首だけを回し、黒崎一護と浦原喜助の方を見た。

苦しそうな呻き声を吐き出しながら、四つん這いのまま。

浦原喜助はそれが何なのかを理解しているのか、なんの手も出していないかった。

そこにいられると、余波で死にかけるだろうから。自力でそこを退いてもらう。今の俺なら、なんでも出来てしまいそうだ。こんな感

覚、破面ウルキョウと殺し合つてた時にはなかつた。

ふわりと、五体を大地に投げ出して苦しむ黒崎一護の前へ舞い降りた。

眼で視ると、なにかが凄まじい勢いで遡って行っているのが視えた。その様は、逆流とでもいうべきか。

「まあいい。とにかく黒崎一護。オマエにはここから離れてもらわなくちゃいけないんだ。今オマエの中で起こってる何かを少しの間殺してやる。その間に逃げろ。浦原、オマエもだぞ」

「どういう、ことだ、よ……？」

「——何となくではありませんが、それが良さそうだ。巻き込まれて死にたくはないっすからね」

「物分りが良くて助かるよ。じゃあ、さつさと行つてくれ」

一方通行の流れを塞ぎとめるのは、本来はかなり無茶なことだ。いつかは氾濫することになるから。だが、少しの間だけだから大丈夫なはず。

そう考えて、乱雑な線に刃を走らせた。一瞬で苦しさが晴れたことに驚いていたみたいだが、それをすぐに流し、浦原とともに離れたのを確認した。

「最終ラウンド——と言うべきか。決着はここで着く」

「ああ。互いに生き残るなんて甘つたれた幕引きはない。ここでどちらかが死ぬ。——殺される」

風が荒ぶ。砂煙を運ぶが、視界は確保されていた。都合よく間に挟まれた位置に咲いていた離弁花の白い花卉が、煽られてはためいていた。

死を視る魔眼が、世界に理を現す。そこに死はあるのだという自己主張が、視神経を通じて脳みそを叩く。

——砂煙が晴れて、あれよあれよと飛ばされて。残り一枚になった最後の花びらが、耐えきれずに空へと舞った。

「ハアッ!!」

「——っ!」

無言の開幕ベル。鏡花水月の名を冠する刀の刃が、俺を殺しにか

かっってきた。

ここに、全ての螺旋が集まり出した。

最後の戦いは、血みどろの殺し合い。形容詞の一言も見当たらない、原始的で、合理的な戦いが、無人の荒野で幕を上げた。

乱雑に積み重ねられたブラウン管。粗い画質の映像は、遠目では何が映っているか分からない。

半ば錆びている蝶番のついたドア。辛うじて確保されてる動線を一步外れば、身の置き場もないほどにばら撒かれ、積み重ねられたハードカバーの本やら束のような書類やら、——よく分からないインテリアのような、アンティークのようなレリック。

床は申し訳程度に敷き詰められた床板と、それが剥げてしまっている部分がある。

それでも人がいる程度の生活感を覗かせる、たった2人の伽藍堂がらんどう。そんな廃墟じみた空間。——言うまでもなく、橙子の事務所だ。

俯瞰風景を覗いていた亡霊を殺してから少し間が空いていた時期で、俺の身体にはまだ包帯がいくらか巻かれていた。

この義骸はどうやら霊体とのリンクが強いらしく、霊体の受けた傷が義骸の受けた傷のように出力される。そのせいで、本来無傷のはずの義骸にも生々しい傷跡が残る羽目になった。

だがこの痛みが、生きていくということを教えてくれる。霊体ではなく器子で構成された肉体の齟齬が、不快感になって「在る」という実感を与える。

「…なんだよ」

「いやなに、その義骸とやらを作った身としては、どうやら満足してもらえたようで何よりだよ」

顔に出したつもりは無かったのだが、雰囲気には出るものらしい。嫌なところを突かれて顔を顰めながら、淹れたばかりのコーヒーを口にする。ブラックの苦味が喉を駆ける。

「というか、この義骸オマエが作ったのか」

「喜助からの頼みでね。義骸というのは本来、魂魄が入る器のようなものでしかないらしいんだが、それは少し特別製だ」

「どのあたりがだよ?」

自分の身体をしげしげと見回してその差異を探す。しかしその違

いとやらは違和感としてすら感じられない。霊体と肉体のリンクと齟齬そご以外では。

「そのリンクだよ。分かってて惚とほけてるんじゃないだろうな？」

「…その機能、いるのか？」

「オマエには必要だろう。受けた傷が知らない間に治ってました、だなどと、殺人嗜好症の気があるオマエには許せないんじゃないか？」

否定する要素が見当たらない。言いくるめられるのにはイラツとするが、当たっていることにいちいち言い返すほどツンツンすることもない。コイツは寧ろそうした行動の揚げ足をとるタイプの人間だ。

「まあ、その義骸えいがいについては追々話すことにしよう。織、お前は『易経えいけい』というのを知ってるか？」

「『易経』？ なんだそりゃ」

橙子の唐突な話題転換。聞いたこともない単語の意味を聞かれた。それに対する答えは当然「知らない」になるわけだが、どうにもコイツの話は、俺の根幹にあるものに触れる。殺人思考とはまた別の琴線こじょうに触れてくる。

腹立たしいことに、そういう理由から総スカンできない。コイツの話はなをな。

「『易経』というのは中国における儒教の五大經典の一つだ。今では占術うらなに受け継がれる教えではあるんだが…、ここじゃ関係ない話だな」
「それで？」

「易経内で広義の定義を遡さかのぼっていくと、六十四卦から八卦に至る。六十四卦とは八卦を重ねたものだからな。そして八卦は四象から流れ出たものだ。さらにこの四象を遡ると、両儀りょうぎに辿り着く」

「……」

その言葉に、その単語に。わずかな反応を示す。

「この両儀を辿ると太極たいごく——魔術師私たち風かぜに言えば、『根源』に行き着く」
「両儀と、…根源……」

「織。お前も何となく気付いてたんじゃないのか？ お前自身の本来の名を」

「養子だつてのには何となく気付いてたさ。家族ではあるけれど、そ

ここに繋がりは無いってことに」

「そうだろうな。『穂積』というのは、聞けば名のある商家らしいな？」

『穂を積む』というイメージが、地道な努力からの成功を連想させたんだろう」

その推量は決して当てずっぽうではない。そのイメージは恐らく共通に抱けるものであり、共感を得ることもできる思考だろう。事実、俺の養父も口伝ではあるがそういう思想で名付けられたものだと聞いたことがあった。

「だがな織。『穂積』という名に本来そういう意味は込められていないんだ。『穂積』は饒速日命ニギハヤヒノミコトに連なる一族で、火を司るとされる。実は温泉を見つけたなどという記述もあるらしいがな」

無反応を貫いて、そのまま話を促した。

「ぶつちやけた話、由緒ある一族と言ってもいい。由来が口伝で伝えられているようだから失伝したのかもしれないが、そういう意味では『両儀』と繋がっていてもおかしくはない」

「……そっか、アイツの名前……」

「……、何か思い当たることでもあったのか？」

「いや、何でもない。けどな橙子。俺はどこまでいっても穂積の人間だ。俺の起源は両儀のものでも、俺はやっぱ穂積織という存在なんだ。だから、両儀の名前はアイツに押し付けてやる」

そもそもその話、俺の起源は多分、「アイツ」に由来するはずだ。

嫺やかで、穏やかで。何でも知ったような、見透かした口ぶり。式は知らないだろうけど、織ヒは分かる気がする。

殺人衝動も、虚無という起源も。或いは、全てを隔てるこの力さえも。

『式』、——否、『両儀式』から流れ出たものなのだ。

「…、アイツというのは誰かは知らないが——。織、お前は」
「分かってる。橙子、もういい」

醒めない夢はない。明けない夜もない。そも、永遠という概念は無い。だけど俺が動かなきや、いつまでもそのままだ。

己の内の殺人衝動。それを見つめる。自分の意思で。

そうすればきつと、何かが変わる。

それはきつと、ほんの少し、自分寄りの殺人衝動。

「で、何処に行くんだ？ 織」

モノで溢れかえる部屋の動線を辿って、ドアの前に行き着く。暗色のドアを前に投げかけられた橙子の質問に、立ち止まった。

「——ああ」

満たされる沈黙。ブラウン管の微かなノイズと、橙子の煙草の燃える音だけが漂い、その空間を我が物顔で陽光が横切る。

「忘れ物を、探しに行ってくる」

ノブをひねって開け放ち、俺は伽藍の堂を去った。足早にでも、ゆっくりでもなく。ただ自分の思うままに。

「忘れ物…か。さて、両儀でありながら穂積である事を決めたお前が、それを見つけて帰って来た時の顔が楽しみだ」

煙の龍——『煙龍』と銘打たれた煙草の煙が踊る。微動だにしない固まった空気を混ぜるように。

今となつては減っていく一方のクソ不味い煙草の味を噛み締めて、橙子は煙を吹き出す。

その時浮かべていた表情は、傍目には分かりにくいだろうがきつと、柔らかく笑ってたんだろう。

無人の荒野。清々しいまでに開けた大地の上で、二振りの刀が舞

う。

鉄の音が反響し、戦う二人の耳を叩く。

黒髪をオールバックにした男は、自らを傷つける刃など意に介さずに攻撃を続ける。

鳥のように真黒な髪を足下まで伸ばした人型は、男か女かの見分けすらつかないが、自らの攻撃をまるつきり無視してやってくる男の攻撃を躲しながらその腕を振るっていた。

「君に付けられた傷が再生するということは、君はまだ本気じゃないということかな？」

「うるさい。オマエ、不死だとかそんなやつになってるから視えにくいんだよ」

まるつきり視えないわけではないけれど、思わず目を凝らしてしまう程度には視づらい線。直死の魔眼はただ視覚化するだけだから、濃淡の補正なんてしてくれない。

それに、コイツの卍解の能力すらもまだ分からない。

鏡花水月荒耶識——。アラヤ識というのはよくわからないが、そのネーミングには必ず意味があるはず。というか、そうでなくても何となく俺の卍解と名前とか能力とかが似ている気がする。

少なくとも鬼道系で、何かを誤魔化したり弄ったりする力を持つんじゃないか。そう思考の隅で取り留めもなく考えた。

そんな思考の時間は一瞬よりも遥かに刹那。須臾とでもいうべき間隙。しかし、今の俺たちならばそれでも殺すには事足りる時間でもある。

「っ…」

「どうした？ さっきから攻撃が当たっていないが、余計なことでも考えているのかな？」

よく回る舌だ。縮地と崩玉による空間移動は、結果に差異がほとんど無く、俺とコイツは移動先で激突を続けていた。

——いや。むしろこれは——？

そんな横槍じみた思考が再び挟み込まれるが、あいも変わらずそれを無意識で処理して、身体は半ば反射で動いている。

極限の集中がもたらす時間感覚の延長。引き伸ばされたその間に交わされる幾百の剣戟。一つ一つが空気を震わせ、大地を揺るがすかの如く鳴動する。

「そろそろ、君も飽きてきたんじゃないか？　ただ剣を交わすだけで満足はしないだろう」

「…何が言いたい」

「いい加減、互いの卍解の本質を示そうという話だ」

本質。そう言われて、身構えた。先に見せられるのは俺だと思つて。

そしてその通りになる。藍染惣右介は刀を水平に構え、刃に空いた手を添えた。

「砕ける——『鏡花水月荒耶識』」

ふと、気がついた。

「五感が、正しく動いている……」

完全催眠から解放されていることに。全てが真つ当な働きをしている。現実という名の織物テクスチャの上に被さっていた虚構の布が取り払われていた。

『鏡花水月』の能力が解除されているんだと、すぐに思い当たった。

「気づいたかな？　今、私の『鏡花水月』による完全催眠は解かれた。それは君だけでなく、全員同じことだ。こうしなければ卍解の力を使えなくてね。君は完全に騙せなかったが、その他大勢に対しては完全催眠程度で十分だから、この卍解は使うことはないと思っていたよ」「なんだ、じゃあオマエの卍解も、完全催眠に似た能力なんだな？」

「結果的には、だ。まずは体感してみるといい」

まずは小手調べだ。

そう言い放ち、切っ先を俺へと向けて咥くのは。

「【千手皎天汰炮】、【飛竜撃賊震天雷砲】、【双蓮蒼火墜】」
「っ!!?」

ただ咥いただけで、その全てが全く同時に発動し、そして俺へと殺到する。

そう、小さく口にした言霊は鬼道の名前。そしてそれは、完全詠唱

したものと同等の威力。

縮地を行使して、その場を瞬きの間に退いた。その数瞬後、さつきまで俺がいた場所が霊圧に喰らいつくされた。それを俺は離れた場所から俯瞰する。

「やはり速いな。その速度は私を超えている」

「そりやどーも。つか、その能力は何なんだ。さっきのだけじゃ分からないぞ」

「まだまださ。ゆつくりと、ゆつくりと明かすのが楽しいんだからね」
また眩かれる。少し聞き覚えのない単語を頭にして。

「【歪・飛竜撃賊震天雷砲】」

まるでホーミングミサイルだ。逃げるたびにしつこく追いかけて回される。鬱陶しいことこの上ない。

確かこの破道は八十八番だったか。ならば。

「【縛道の八十一・断空】」

八十九番以下の鬼道を全て防ぐことのできるコレなら問題ないはず。

「フツ…、無駄だ」

だが、本来その攻撃を防ぐことになるはずの壁は、ほんの僅かな拮抗の後にあっさり壊れてしまった。

こうなると、もう殺すしかない。打ち消すのは苦手だからな。

死が見えにくいのは相変わらず。だが在るのは確か。故に殺す。

エネルギーの塊に対して、まるでスコーンにフォークが突き刺さるような軽やかさで刃が突き立てられた。そして、そのままあっさりエネルギー塊は霧散した。

「どうやらこの手は悪手のようだね」

「鬼道の改変…？ 詠唱すらせずにそんなことが…」

「そら、次だ。気を抜けば死ぬぞ」

続く攻撃がどんなものかは不明だが、対処はできるはずだ。そう考えて、集中力を高めた。

不意に、藍染惣右介の気配が増えた。

「なんだよそりや…」

この眼を持つから分かる。それは幻影だとか、残像だとかいうちやちなものじゃあ断じてないのだと。そこに形があるからこそ、その気配は生きているのだと、分かってしまう。

どういうことかは分かるだろう。藍染惣右介が物理的に増えたのだ。全く同一の存在が、同じ空間に同じ時間に存在する。だからと言って互いの存在がメンガー並行世界の藍染惣右介であるのスポンジのように崩れることもないらしいが。

自身を、いとも容易く寸分違わぬように創り上げた。あらゆる物理法則を無視した、まるで文字通り神の所業だ。

「ふむ…、こういうのを『えげつない』とでも言うのかな？ 君から見れば」

「ああ、確かにえげつない。でも、そこに生きているなら殺せる」

「そう、か…。まだまだ改善の余地はあるようだね」

改善…？

相変わらず何を言ってるのか全くわからないけれども、何となくヤバいことをする予感はある。

「全く…、君という存在に綻びが在れば、そこから付け込めたものを…。その綻びがないとはね」

それは多分、蒼崎橙子や浦原喜助ならば笑って否と返すような台詞だっただろう。アイツらは俺のことを知ってるから。

ガワしか見ていないからこそその発言にとれる。他人の精神メンタルすらも推し量れない概念なのに、「況や俺の精神をや」というやつだ。

『万象には綻びが存在する』…と言っていたかな？ 当の君にはそれがないというのは不思議な話だ」

「橙子なんか聞いたら鼻で笑いそうな台詞だな。でも俺だっていち人間なんだ、殺せる程度の綻びはあるだろうさ。ま、そんなもんを簡単には見せないけどな」

綻びの存在に例外はない。だからその綻びをコイツの前に見せたら、それで終わりになるだろう。コイツの言から察するに、コイツはその綻びをこじ開けるつもりだったのだろうから。

「それで？ オマエの力は一体何なんだ？ 口にした鬼道を完全な形

で発動したり」

周りの、3人の藍染惣右介を見渡して。

「こうして、本物の藍染惣右介を引つ張り出してきたり…って。一貫性もクソもないだろうが。推定も何もあったもんじゃやない」

「そんな君なら、すでに当たりはついてるんじゃないか？」

「…ああ、クソ。だからオマエは嫌いなんだ。…ああ、限りなく当てずっぽうに近い直感でな！」

「私としても君の能力が聞きたいんだ。互いの推量を聞きあうのも、いいんじゃないか？」

「大体そもそも殺し合いの最中に能力の明かし合いなんてナンセンスだろ。まあ、間違つて確信するよりはマシなのか。そうでなくても、俺自身の能力は知ってるだろう」

「今までの君の戦いを見ていても大まかにしか把握していなくてね。君の斬魄刀の能力は不思議だよ。反膜ネガシオンを斬ったことに始まり、帰刃したアーロニーロを一太刀のもとに倒してしまうなど、むしろ君の方こそ一貫性が無いんじゃないか？」

それもそうだ。そもそもそれは二つの力を以って成されたことだからな。

俺自身の——直死の魔眼と。

俺の斬魄刀の——境界を操る力と。

それでも、俺の本領じゃないのは分かってる。

だけど、これ以上は、『無垢識』の深奥は到底、穂積俺織では潜ることが叶わない領域。

本当なら、ソコまで行かなければならないのかもしれない。

だけど、俺は穂積織であることを決めた。故に、『両儀式』でなくてはならないその領域には行けない。

——ああ、それでもいい。それでもいいけど。何か、悔どこしいと感じる伽藍がある。

この衝動は一体、何処から流れ出たものなのだろうか。俺か、それとも『式』か。

いいさ。今はただ、この刃で殺そう。きっとそれは俺の意思であ

り、『式』の意味だろうか。

繰り広げられる剣戟。交わされる言の葉。激しくぶつかり合う霊
圧。

黄土色の荒野は、もはや目も当てられない惨状を呈していた。

それでもなお、二つの影は戦い続けている。一際大きく、刃が交わ
された。

「ハアツ、つたく。まだ本気じゃないなオマエ」

「それはこちらの台詞だ。まだ殺す気にはなれないのかな」

そんな事はない。織は心の中でそうごちた。

純粹な自分だけの殺人衝動でない。だから、100%で解放した
「直死の魔眼」を制御できるかが分からないのだ。

今までは無意識でやっていたことが、意識下に引っぱり出された。
織は心の内で悪態をついた。

だが今の状態では千日手。いい加減に覚悟が必要になることは分
かっていた。だから、織は腹を括った。

「チツ。——ああ、分かったよ。あの時は遠目だったが、今回はこの距
離だ。目をかっぽじって見やがれ」

そうして、織の世界は一変する。視界一杯に自己主張する死、死、
死。触れれば崩れ、突けば死ぬ。あまりにも脆く儂い。常人の心など
軽く壊してしまうだろう風景。

俯瞰が主観に。見方を変えるだけで、生は死へと突き落とされる。
それが直死の魔眼。

蒼い両眼。燦然と在るソレを目の当たりにして、藍染惣右介は恐怖
を抱いた。

——そうだ。その眼だ。その眼が見たかった。私に恐れを抱かせ
た眼。絶望に心を折る諸人の中に、唯一死を覗かせた魔眼。

きつと、世界すら殺してみせるのだろう。だが、そうでなくては面
白くない。まだこの手に斬魄刀は在る。

崩玉の意思が先か。それとも私の能力が先か。いや、もう迷う必要
などない。あちらが見せたのなら、こちらもまた晒してみせよう。

「穂積織。君のその眼に対して、私の力を見せよう」

そう言つて、藍染惣右介は右手の刀を虚空に翳した。完全催眠を手放し、荒耶識を名乗った斬魄刀。織は己の眼を、決して藍染から離さぬままに佇んだ。

「――歪めろ、『鏡花水月荒耶識』」

言の葉が空間に溶けていく。藍染の顔に浮かぶのは、何が由来かも分からない不気味な笑み。

織は訝しんだ。もともと視えている範囲なら世界の異常には敏感な質である。それは鏡花水月の完全催眠下でも真実を視ていたことから明らかだ。その織をもつてしても、変化が知覚出来なかつた。だからこそ怪しいと感じる。何も無いなんてあり得ない。

「……オマエ、何をした」

「さて、私が何かしたのかな？」

「惚けるな。解号唱えておいて『何もしてない』だなんてあるものかよ」

特に目の前のコイツについては。織は内心でそう付け加える。

「それは君も同じだろう。卍解しても変化がないのは」

「俺は変わってるからいいんだよ」

「見た目のことかい？ それは関係ないと思うが」

無駄なやり取りだ。だが情報を引き出すことはできる。断片どころかマイクロン以下の微生物みたいな情報かもしれないが。

少なくとも、変わっていることだけは確信できた。

「ない」ということは「ある」という事。コイツについては、という枕詞を織はひっそりと付け足した。

「こんな話をしていても時間が無駄になる。最後の闘いだ、華々しく飾ろうじゃないか」

「闘いを華々しく飾ろうだなんて、そんなこと考えた事ないね。命のやりとりを美しく見せるのは芸術家の仕事アーティストだろ。俺たちはただ殺しあえばいい」

織はそう淡々と吐き捨てる。織にとって、殺し合いが華々しくあることなどあり得ない。命のやりとりが美化されることなど、考えただ

けでもゾツとする。

そもそもこれを見る客がないのだから、エンタメになることなどあり得ないのだが。

「九戀雲揚——」

不意をつく形で飛び出す真空の斬撃。その数は九つ。一瞬の間に重ねられた斬撃は、迷うことなく藍染惣右介へと殺到した。

「ウルキオラから聞いているよ。その技は知っている」

「だからどうした」

聞く耳など持たない。貸す必要すらない。織の意識はたった一つの殺人対象に収束している故に。

「だから、無駄だということだよ」

手に持ったままの刀を薙ぎ払う。真空の斬撃は巨大な霊圧に押しつぶされて消えた。しかし織に動揺はなかった。

「だったら手数を増やす。臂力じゃ勝負つかないからな。——【破道の五十九・玻璃鳶】！」

切っ先を前へ。刃が光り出し、その光が無数に分裂した。この鬼道は単純に、霊力で出来た鋭いナイフを無数に生み出すもの。手にとって武器としても、そのまま撃ち放ってしまってもできる。

織はその刃を、死へと向かって擲った。死が描く凶形は、知覚されていないければ現れない。視えない者には、何ももたらさない。死は平等なれども、関わらなければ知らんぷりだ。

「勿体ぶるのは、もうやめようか」

微かな笑み。嘲るでもなく、喜ぶでもなく。別の何かを持った、薄ら笑い。

すると。

「……、何をした」

見上げる藍染惣右介の両腕は完全フリー。——斬魄刀が消えたのだ。その様はまるで空気に溶けるような、織にとってはどこかで見たことのある絵面。そして空間に僅かに現れた、不自然な死。

だからこそ、織は思い至る。直感が、まるで雷のように。

「…オマエ、世界の方に触れたのか」

「ほう…。そこまで分かったのか」

織が思い出したのは、随分前にであった八代目剣八を名乗る男。空間に溶けるような消失は、その時に見た。

その力に思考を走らせる織。一方の藍染は、改めて自身の力を確認していた。

（やはり、これでも彼には触れられない。ああ、そうでなくては…！）
鏡花水月荒耶識。その力はシンプルで、世界を改変する能力だ。五感を支配することで実体のない幻覚を以って他人を支配するのではなく、そこに実際に存在を創り出し他人を操る。

さらにこれには世界からの修正力が生じないのが最大の特徴だ。世界を騙すのではなく、世界をかくあるべしと定義して正すのだ。

かつて織は、鏡花水月の能力を『現実^{テクスチャ}に張り巡らされた織物』と称した。ならばこの力は正しく現実そのものになる。

だから視えにくい。現実を改変するのではなく、これは現実にすり替わるとでも表現されるから。されど虚数にあらず。それは事実である。

「似たようなのを視たことがあるからな。あれは世界に同化する類^{たぐい}だったはずだが、オマエはどういうのなんだろうな？」

それを確認するように織は飛び出して攻撃を繰り返す。斬魄刀を失った藍染はそれを直接受けるわけにはいかない。的確に死をなぞる刃。死は見えなくとも、刃の斬撃軌道は把握できる。辛うじてといったところではあるが、藍染は織の攻撃を捌いていた。

一方の織も、ただ避けられてばかりではない。この状態で、さらにかなり深度が深まった自己暗示の恩恵を得て。織の斬撃は攻撃中もその軌道が曲がるようになった。直線ではなく曲線。そのうえ己が剣術が神域^{無垢識}のそれに至ったゆえの3次元的攻撃変化。わずかに届かなければ半歩踏み込んで確実に獲る。切り口が浅いという直^{直感を感じた}未来が見えたのなら攻撃の速さを上げる。もともと速さだけなら卓越した身だ。人の限界を超えた変化すべては無意識だった。

藍染の体に傷が増えていく。趨勢は明らかに織に傾いていた。それでも織は違和感を感じ続けていた。

(まだコイツは何もしていない…。集中しろ、いつ仕掛けてこようが、すべて殺すために)

突き、薙ぎ払い、袈裟斬り。人外に至った攻撃を紙一重で躲し続ける。間に合わなくとも致命傷ではない。治らない傷ではあるが、この程度の痛みなど意にも介さない。

藍染が、大きく後ろへ飛んだ。即座に追撃を掛けるが唐突に目の前現れた岩石や木などの障害物に妨害されて、手が届かない。

「チイツ」

『荒耶識・三重結界』

そしてその障害を殺しつくした織をさらに阻むのは、金色の三重結界。常人が相手ならばここで終わりだ。例え流刃若火といえど、この結界を突破することは難しいだろう。

だが。だが目の前の相手は無垢に至った殺人鬼。なんであろうと、形を持つのなら殺して見せよう。

そういわんばかりに結界陣に刃を突き立てる。そして須臾の間に一つ目の結界は砕け散った。

「やはり、紙くずも同然か。これでも強力な結界なんだが」

「何回同じことを言わせる気だ。わかりきってるんだろうが」

そのまま二つ目、三つ目も破壊され、藍染は腹部に蹴りを喰らって後方に吹っ飛ぶ。しかし自ら飛ぶことにより軽傷以下で済ませた。これで織との距離が取れた形になる。先程の攻撃も含め、藍染にしてみればこの結界ですらも時間稼ぎ以外の要素はない。先に織が吐き捨てたとおり、すでに藍染は嫌というほどにそのことを理解しているから。

そして。

「ようやく、完全にすり替わった」

「なんだと？」

まるで神のごとくに。両手を広げて、そう口にした。

「世界は全て、私の意思のままに」

「…どういう、っ!!」

背後から、突然斬りつけられた。織はまるで獣じみた直感で身を捻

り、辛うじてそれを浅い傷で躲した。

確実に動いていなかった。しかし攻撃を受けた。

「…『世界は意のままに』か。なるほど、嘘偽りは無いってことか。任意のものを、任意の場所に、任意のタイミングで。作り出せるし壊せもする。全く、殺すしか能のない俺に比べて羨ましいかぎりだ」

「心にもないことを。だがその通りだ。これが私の『鏡花水月荒耶識』だ。くくっ、さあ。ここからが本番だ」

趨勢は傾いた。神にも等しき創造と破壊の力。万能の人。全知全能。ネガティブな要素が足並みをそろえる。

しかし。それでも織は眼を閉じない。むしろ口角を上げて笑みを浮かべてすらいた。

「神様？　ハッ、知ったことじゃないね。なんであろうと、生きているなら殺してみせる」

一際怪しく、鮮やかに瞬く魔眼。神を名乗る男をとらえて離さない。それは改めて布告した殺人予告だ。

世界の根底を担う荒耶識と世界の外側に佇む無垢識。交わることはない二つの存在。傍観するのは宙の理。

そして再び、極大の殺気をまとって。互いの攻撃が交差する。

大地が海のようにうねり、星が悲鳴を上げる。それでも星の抑止力は傍観を決め込み、故に介入する存在などいるはずもない。

織は刃を振るい、藍染は霊圧で作り上げた刀を手にする。時折鬼道も織り交ぜながら、天地鳴動の戦いは繰り広げられていた。

『即身・三重結界』

「直死——、っ」

視えにくい。さつきよりも死が遠のいている。手繰り寄せるには時が足りない。この視え方は橙子が見せてくれた聖遺物の感じに近い。だが藍染はそんなものに目をつける筈がない。崩玉の特性か、斬魄刀の力か。

知ったことでは無い。どちらにしたって俺には殺すことしかできないんだ。

「躊躇い…というよりは迷い…、君の心ではなく単に私にそれが視えない故の停滞があるね」

「…分かるのかよ。視えないくせに」

「君の動きから推察しただけさ」

「オマエじゃなくて、オマエの斬魄刀だ。さつきからオマエの使う技全部視えづらなんだ。ぼやけて、焦点が合わない。死を拒絶するんじゃないくて、悟ったような」

「…鏡花水月か。彼も人が悪い。それは多分彼の悪戯だろう。気にしないでくれ…、と言いたいところだが」

白々しい。元々の行動と性格が先入観となって、全ての言動へ信が置けない。信じられるのは多分、己の考えたことのみ。

人の理と宙の理そら。本来は交わることのない螺旋が、ここに相克する。

「視えないからこそ視えるんだよ。気が散って仕方がない」

「諦めてくれとしか言えないがね」

「ああ、そうかよっ」

本来ならば、一瞬で着く決着。そうならないのは、俺がこの場に何

かを見出し、それを藍染も見出したからか。

「……」

藍染が目を見張る。

——雰囲気が変わった。さて、一体何をしてくれるのかな……？

俺から見ればそれは喜悦の表情だった。苛立ちが湧き上がるほど、ゾツとする笑みだ。

「…無垢識、開境——」

以前までの瞬間的な開放ではなく、継続的な発動。踏み入れた先に視える世界は、たった一人の世界だ。

鬱陶しく思いつつも妙に馴染む着物をたなびかせ、縮地を使って懐へ踏み込む。

俺が立つ境界である『無垢識』は生命の集合無意識より逸脱し、理に寄る場所だ。だから、鏡花水月では俺には干渉できない。

そうして入り乱れた刃の果てに、何かを視た。

光が、迷いを断ち切った。死が鮮明に映り、これ以上なく視界が広がる。

「さあ、幻想の終わりだ」

だから、これで最後。俺がそう決めた。

女々しく、ダラダラと引き伸ばし続けた想いと決別し、俺自身を手に入れる。

起源が虚無であつても、その果てに得られるものまでががらんどろかなんて分からない。だって、未来だけは俺にも殺せないんだから。

「ああ、穂積織。私も、ここで幕をひこうと思っていたよ」

呼応するように藍染が手を広げる。全てを見下すように、しかしその目にはかつて見られなかった光が視えた。

斬魄刀が鳴る。無垢識に至り、ついに鏡花水月の束縛力を上回った

『九字』の神秘が、空間を覆い尽くした力を断ち切った。

「っ、まだそんな力があるのか」

「こいつは元々のこの刀の力だ。やっとまともに使えたがな」

最後は純粹に剣技を以って。——否。自らの想いの丈を以って。

「両儀の狭間に消えろ——」

「集い、砕け散れ——」

全霊を賭して、その刃を振るう。

「——無垢識・空の境界」

「——荒耶識・鏡花水月」

人類の集合無意識の力で理を従えた刃。

星に根差す理でなく、宙の理を宿す刃。

拮抗は、果たして一瞬だったのだろうか。それとも数秒ほど続いたのだろうか。感覚が加速していて、記憶すらも吹っ飛びそうな。

覚えているのは、無垢識で流れる中に視えた、深海に落ちた赤色の死。めがけたのはその一筋だけだったということ。

だからほとんどないけど、それでも残るものはあった。

「——、終わった、か」

「ああ、終わりだ」

息を漏らすようにして捻り出した、藍染惣右介の声。

あの拮抗の果てに倒れたのは、藍染惣右介の方だった。

死の線をなぞり、点を斬り裂き、その身体は袈裟に裂けていた。

人間の集合無意識は、人間のものである。ならば生きているのだと、きつとそういうことなのだろう。

もう、藍染の身体には死の線がはつきりと見えている。崩玉は死んだのだろうか。それとも何処かに消えたのだろうか。

——死が足音を立てている。

「穂積織」

「…なに」

「君が、あんなものに従っていられるのは、何故だ」

「…あんなもの…?」

「霊王」

「…ああ。いたな、そんなやつ」

そう漏らすと、ふふ、と変な笑い声が聞こえた。呆れたようなニユアンスがあるのは、気のせいじゃない。

「すまない。実に、君らしいと思ったただけだ。…それで、私の質問には答えてくれるのかな?」

「……俺にはさ、モノの死が視えてるんだよ。『直死の魔眼』ってやつだ。だからオマエに言った通り本当に、生きているなら神様だつて殺せるんだよ」

何度も口にした事実。しかしそれを耳にしてなお、藍染は俺を見て離さない。ただ、待っているんだと、嫌でもわかってしまう。

「だから。だから俺にとって霊王がなにかと言えば、なにも変わらない。結局俺にとっては、ただナイフ一本で殺せてしまうものでしかない」

「…っ、ははっ、はははははははははは！」

「…何がおかしい」

何かを抱えた、気持ちの悪い張り付いた笑みではなく、吹っ切れたような透き通った感じを抱かせる笑い。

そこには、殺意を抱くことはなかった。

——笑われたことについては別なのだが。

「いや、すまない。そうか。霊王も殺せる、か」

「…？」

訳の分からない言葉で自己完結したらしい。側には全く理解ができなかった。

「ならば私が取って代わったところで、——殺されていたことに変わりはない。いや、そもそも霊王すら眼に入っていないのか」

「さあな。というか、仮に霊王になったオマエに殺意を抱くかは知らないぞ」

「きつと抱くさ。君にとって、私が藍染惣右介である限り。その記号名前を持つ限りは」

言葉が出ない。憎たらしいことに、それは正鵠を射ていたのだろう。思わず漏れそうになる舌打ちを堪えた。

「私と君は似て非なるものだ。一人だと知っていて、それしか知らない。背中を向けて歩んでも、それは同じだ。私はそれが何かを知りたかったんだ。君という存在を知らなかったから、こういうことになったが」

「…俺とオマエじゃ、持ってるものが違う。俺は回帰して、オマエは

進化する。藍染惣右介。俺がオマエを殺したいと思ったのは多分、オマエの存在に答えを感じたからだ。がらんどろが埋まりそうな答えを」

「…」

「オマエは『虚無』で、それが当たり前だと思つた。それでも欲したから、斬魄刀と力を失くした」

代償ではない。ここで答えを得てしまったから、それを目敏く崩玉が見つけた。奪われ、失い。けれど満足している自分がある。藍染惣右介は、笑つていたんだ。

「……ああ、そうか」

空を見て、得心がいったのか。

「オマエが何を見て、何を求めて、それをどこに求めたのか。そんなのは俺には関係ない。でも、オマエはそうしないと答えを得られないし、自分が自分じゃいられなかったんだ。醜くても、汚くても、そうだとわかっていても認められない。受け入れたら変わってしまう。

変化を恐れたから永遠であろうとし、誰よりも一人だったから王であろうとした。だからオマエは何も成さない。何も救わない。

俺だつてそうだ。何も成せないし、救う事もない。殺すことしか能のない殺人鬼だ。そこには、俺以外に意味を見いだせない。

俺たちは誰よりも弱い。繋がる事がないから、抱え込んだものを取りこぼす。——だからオマエは天に立とうとし、俺はそれを殺したんだ」

答えは欠片でも、きつと忘れない。

それは光でなくとも、誰かの光に変わりゆくもの。

視えない傷跡に染み込むように。あるいは埋めるように沈みこむ。

それはきつと、独唱ソングにも同じくらいに奥底に届く代物であるから。

だから、俺たちはたった一人の走者ランナーとも言える。競争されることのない孤独を抱えるがゆえに。

「穂積織。私は私なりの答えを得た。もう私はいなくなるが、果たして君がどう歩むかを、ゆるりと眺めることにするよ」

時間だ。死が身体に張り付く。逃れることはない。崩玉も死んだ。

境界は再び定まり、世界はあるべき色を取り戻す。

「——ハッ。最期まで口の減らないやつだよ、ホント」

最後に吐いた息も、残ることはない。今生で最後に遺した言葉は、機械的に俺の脳に終われるだけ。何も無い。何も残らない。最大の敵であったはずの藍染惣右介はその実、最も救われるべき人間であったのに。

抑制、封印。靈力で編まれた衣は解け、容姿は元に戻った。ただ、髪が伸びたのはほとんどそのままなのだが。

置いてきたものは沢山あるが、得られたものもある。

自分よりの殺人衝動というものが、微かに灯ったのを感じていた。

「さ、戻るか」

日常へ踏み出した一步。相変わらず視える景色は脆いだけけれど、それでも確かに在るのだ。

踏みしめて、思い知る。空を見上げて、ふと笑みを零す。

それだけで意味を知れる。全てが終わったのだと、心から実感したんだ。

61ーエピローグ

「……」

藍染惣右介という男は、その骸すら残すことなくこの世を去った。荒耶識——阿頼耶識に介入した代償とでも言うべきだろうか。崩玉の力を少なからず借りていたとはいえ、解放直前にそもそも崩玉から拒絶されていた身だ。こうなることは、恐らく本人も分かっていたのだろう。俺がここで死んでいたとしても、こうなるのが遅くなっただけだ。

「っ…、やっぱ痛いな、クソ」

強引に踏み入ったアイツと、そもそもの機能を解放しただけの俺。セコい感じがするが、払った代償は俺の方が軽い。とはいえ、身体はガタガタでボロボロ。満遍なく痛みを主張し、そもそものが貧弱な身体でしかない俺には耐え難い。

だがここで倒れるのは言うなれば共倒れ友のようにも感じられて癪なので、立っているのはただちっぽけな意地を張っているだけだ。辛うじて霊力は残っていた——搾りかすのようなものだが——ので、それを使って瞬歩でその場を辞した。

「お、終わったんすかね」

目印にしたのは浦原の霊圧。そこに跳べば、へたりと座り込んだ黒崎一護と、いつもの飄々とした風体の浦原喜助がいた。

「なあ、穂積さん…」

その声には力はない。むしろ無力感すら感じさせる声音。

「戦ってる時の藍染は…、何考えてたんだ？」

胸の裡に抱え込んだ疑問が、言の葉となって零れ落ちる。

「…そんなもの、俺が分かるかよ」

「…あんたは！ 穂積さんは藍染と刀を合わせて、あいつの声を聴かなかったのかよ!？」

「んなもん、聴こうとも思わない」

「なっ…」

突然くだらないことを言い出すものだから、素で答えてしまう。だ

が、故にこそそれは本音である。

「当たり前だ。俺はアイツを殺すと決めた。なら、それ以外考える必要はない。心の声が聴こえるだろ？ 幻聴だよ、ソレ」

「違うー。あいつからは孤独のイメージが流れ込んできた！ ……ずっと、ずっと1人だったんだ。だからみんなと同じになりたかったんじゃないのかよ！」

「…はあ」

思わず頭を抱える。本気でそんな事を考えているのかと。剣を合わせれば相手の心が分かるなんて、俺には分からない。そんなことであの戦いを表現しないでほしい。

「なあオマエ、どうしたんだよ？ 互角に戦えるようになって、アイツに同情でもしたか？ 助けたいとか思ったのか？」

「っ……」

「他人の心情は受け手の主観でしかない。正しいも何もない。俺と藍染惣右介は似たようなもんだけど、本質が違う。ベクトルの違う同じだ。だから俺なら助けられたとか言うなよ」

「それは…」

「何も為せない、何も救えない。オマエみたいな英雄気質の奴には分からないさ。仲間と呼べるものは俺たちにとって薄っぺらいものではない。故に俺たちは奥底に繋がりを持たない。だから手にした全てを取りこぼす。それを求めると言うのなら、アイツの方がよっぽど立派だ」

進化、そして退化。相克する螺旋は過去と未来へ、あるいは――。

ああいや、そんなことは考えるだけ無駄になったんだっけ。螺旋の片柱は途絶え、あとは一方通行になったのだから。

「だからアイツは天に立とうとした。王になろうとした。そうすれば繋がりの何もかもが必然としてやってくる。手にできないのなら手にさせる。そうやって繋がりは勝手に出来上がる。――ああ、でもオマエが言いたいのはそれじゃないのか」

天に立つ――おそらくは霊王になるとか、そう言う意味合いなのだろう。その繋がりは謂わば王と臣下とでも言うべきか、あるいは上司

と部下とでも言うべきか。どちらにしる一方通行でしかない。

『友』とでも呼べる繋がりがあるれば、アイツはもつとマシになったってか?」

「……………」

「それはない。確実に。友と呼べる存在が居たとして、ソイツは藍染惣右介の感情っていうのを解ると思うか? 友人っていうのは他人よりもソイツの感情を理解するんじゃないんだ。推量できるだけでしかない」

尤も、全ては後の祭りではあるが。死んでしまった男のことを考えるのは、ただの空想で、妄想だ。なら俺にとって考えるだけ無駄な話だ。

「全ては終わったんだ、黒崎一護。もう、この世にいない奴のことは忘れろ。そうした方がいい」

「……………」

諦めきれないという雰囲気。一体コイツの何が藍染惣右介に執着しているのだろうか。

藍染惣右介にまつわるものが、コイツの中にもあるのだろうか。

そこまで考えて頭をふった。益体のないことだと。

それは自分で答えを得るしかないものだと、そう口にした。

「相変わらず辛辣っスねえ」

「うるさい。それよりもアイツ、ちゃんと死んだからな。うまく俺のことは隠し通してくれ」

「はいはい」

崩玉と融合した藍染惣右介は、俺以外から見ればまさしく不死身とでもいうべきものだった。それでも完全ではない。完全ならば、それは死すらも受け入れることはない。故にそも、完全などあり得ないのだ。

ちなみに俺のことを隠し通すよう言ったのは、偏に面倒事はゴメンしたいだけという、至極個人的な理由である。

まともに見ていたやつがいるとも思えないが、遠見していたやつがないとも限らない。霊圧にしたって感覚で捉えられないだけで、装

置はソレを捉え得る。

涅あたりが感づいてみる。厄介になるのは目に見えている。

「ちなみに、もしバレたらどうしますか？」

「……隠居でもするか」

手を伸ばす。届かない。

手を伸ばす。届かない。

いくら繰り返したかも分からない。

後について現世にやってきても、いつものように煙に撒かれる。

結局、私は回道を使つて傷を癒しただけ。結局、何も変わらない。

隔絶した差。それに唇を噛み締めた。

「私は……っ」

戦える。そう思っていた。卍解で破面を倒せたんだ。自信だつてあつた。

——それでも。ああ、私はどこまでも凡百に同じ。

曰く、卍解である『凍雲十景裏淵』は、殺すのではなく墮とす力だという。

凍雲の言葉は、浅学である私には分からなかった。

『勇音よお』

凍雲は画を描くのが好きだという。どこから持つてきたのかも分からない筆を手に、今日もまた画を描いている。

『おれはあんたの中から色んなものを見てきた。卯ノ花さんも、清音も、花太郎も。あんたの想い人だつてな』

赤い、華やかな着物。それに反する白さを持つ、氷の結晶のような髪飾り。吐く息は白く、雪さえ降りそうな寒さの中、それを嘲笑うよ

うに筆を進める。

『正直ぞつとしたぜ？ 初めて見たときは腰抜かしたもんだ。穂積織つてえのはさ』

筆は止まらない。それでも言葉は飛び出し続けていた。

『あれは目指すものじゃないぜ。狂つてなきやあ、あの隣には立てない』

何も言えない。事実だと思つてしまったから。

斬魄刀は持ち主の魂から生み出される存在だから、持っている基準は同じだ。だから彼女が何をもちつてそう言つているのか、理解できてしまう。

『それでも、あんたは手え伸ばすのかい？』

その言葉に、私は凍雲を見据えて答えとした。強い意志を込めた、淡い空色の瞳で。

『ははっ。ならおれも腹を括らないといけねえなあ』

そうして彼女が浮かべた笑みは、呆れたようで楽しげな、覚悟の籠もつたものだった気がする。

どれだけ遠くても、手を伸ばすと決めた。

私だけでは届かなくても、私自身である彼女と共に。

『さあ主様。おつとめだ』

「ええ。私は諦めません。いつかきつと、貴方の隣に立つまで」

私のことを「主様」などと言つた凍雲は、それでこそだ、と茶化すような言葉で私を焚きつけた。

「それにしても、随分と無茶苦茶にしてくれたものだ」

「いやあ、転界結柱が思ったより早く壊されちゃったもんスからね。応急処置はしましたが、むしろこの程度の被害で済んで良かったつよよ」

僅かに霞んだ、それでも鮮やかさを損なわない紅い髪。ラフなワイシャツ姿だが、それを押し上げる豊かな胸よりも目つきの悪さに引つ張られるせいか、色気よりも鋭さを感じさせる。

対する男は、この場所にそぐわない甚平姿。白と緑の縞模様の帽子。軽薄な口調と時代錯誤な服装は、それでもその男の雰囲気うきぐさぎを明確に形作っていた。

「橙子サン、手伝ってくださいますか?」

「…はあ。仕方なからう。タダ働きは御免だが、私の事務所の結界を見直す良い機会だろう。ルーンくらいしか使えるものはないがな」
「それで十分つよよ」

女——蒼崎橙子は口に煙草を啜えたまま、懐から指揮棒に似た木の棒を取り出した。

「それは?」

「概念礼装だ。銘は特には無い。世界樹の枝かなにかで出来ててな。ルーンの効力を跳ね上げるんだよ」

「ほーう。なーんか曰く付きっぽいスね」

「曰くのない品物なんぞ世の中には無いさ。全ての存在は縁を持つてこの世界に在るんだからな。現に私にもお前にも、曰くとも呼べる過去くらいあるだろ?」

その棒を軽く動かしながら地面に文字を刻む。これを虚空で振り回していれば、皆が幻想する魔法使いがいたのにと、浦原は付け焼き刃の現代文化を思い出しながら考えた。

過去は過去だと割り切ることができれば、どれほど楽だろうか。

浦原喜助にも、蒼崎橙子にも、四楓院夜一にも、そしてそれは穂積織とて例外では無い。過去は現在に絡みつき、現在はそれを土台に聳え立つものだ。

穂積織は一度記憶を失い、そして新たに穂積織として生きることを決意した。だがそのベースにはやはり、過去の穂積織がいたことは間

違いない。

蒼崎橙子は第五魔法の家系だが、それを継承することは叶わなかった。それでも彼女が蒼崎を名乗るのはきつと、その名に彼女の起源があるからだろう。

時に、時間を一本の木に例えるのなら。

過去はその人物の根である。未来とはその人物の枝葉である。

——それ故に。過去無き者に未来はないのだ。

それを分かっているからこそ、彼らはそう振る舞うのだろう。

「さて、とりあえず瓦礫はぶち壊してやったぞ。全く、私自身は魔術師としてはもうあまり強くはないんだかね。礼装持ってきておいて正解だったな」

「おー。流石っスねえ。なら、あとはこっちでやりますよ」

「ああ。私は事務所に戻るよ。さつきも言ったが、次は霊体にも効く結界を張ることにする」

効果が数百倍にまで膨れ上がったルーンが、散らばった瓦礫をいとも容易く粉碎した。さらにおまけとばかりにルーンをいくつか刻み、蒼崎橙子は踵を返した。

紫煙が揺られ、空へと解ける。空はここであったことを何も知らないと言わんばかりの青さだった。

刻まれたのは地面のあらゆるヒビを塞ぐルーンとそれを補強するルーン。同様にして効果が膨れ上がったルーンは、蒼崎橙子が考えた通りの効果を発揮した。

「便利っスねえホント。ま、片付けの手間が省けましたってコトで」

そういうと浦原喜助はいつものように、面倒な事後処理を始めたのだった。

山本元流斎重國は、あの時の自身の最大火力である大技『俱利伽羅』を防がれ、そして敗れた。

自身の卍解に似たその技は、始解の最中において最も強い技。とある男に触発され、かつての若き自分の闘い方に戻している中で掴んだ、対人の技。

だが相手は藍染惣右介。人の理を超え、阿頼耶識へと至った者。元流斎と戦っていた時はまだ不完全ではあったが、それでも自身を概念的に超えかけていた。

所詮自身は人である。人でないというのなら死神とでも言おう。されど理は超えられぬ。超えられなければ只人に同じ。

「ぐう…っ」

その肉体は。その精神は。その技量は。人としての極致に至っている。完成形と言い換えてもいい。

だがそれはやはり、先がないことを示す。

故に戻すのだ。未熟な頃の己に。

あの時手に取らなかつた技を。歩まなかつた道を。

老練なる技量を携え、その思考は燃え盛る炎の如き、若輩の自身のものへ。

「ほおおおう…」

空気を追い出すようにして深く息を吐く。歳を重ねてなお筋骨隆々たるその肉体から発せられる熱量は、周囲の景色を歪める陽炎と化していた。老いた。老いた。

——それがどうした。

一際大きく陽炎が揺らめく。杖の姿が剥がれ落ち、その刀身が真なる姿を顕す。

「万象一切灰燼と為せ——」

その限界をこそ灼き尽くそうぞ。

「——『流刃若火』!!」

解号により、解き放たれた刀身が燃え盛る。始解にして既に超然たる——。かつてそう評された炎は、今ここにおいては洗練されたそれ

ではなく猛威を振るう災害のそれである。

——我に燃やせぬものはない！ さあ壁よ立ちはだかれ。貴様らを尽く灼き尽くすぞ！ ——

焔熱系最強最古の斬魄刀は伊達ではない。具象化した本体すらも自然現象たるゆえに、その本質は人理に属さない。ともすればかの大英雄の持つ毛皮すらも灰と化す事が出来得るかもしれない。

燃え盛る炎こそがこの男の本質。そして魂である。

故にその起源とは単純。——即ち『灼熱』である。

灼熱の意志。灼熱の魂。灼熱の力。

万物を燃やし尽くすというその言葉に、一切の偽りはない。

「儂に火を付けてくれおつてからに、小童め」

巨木なれど、立ち枯れも同然の気質だった。それに火を付けたのは他でもない。

穂積織と藍染惣右介。

前者は死を幻視するほどの殺気を突きつけてきた。後者は若輩ながらも最強最古たるこの老翁を打ち倒した。

これに燃えずしてなにが男か。なにが炎か！

刀を正眼に構える。そして上段に持ち上げて振り下ろす。その繰り返し。

若き頃はどつしりと太陽の如く構え、圧倒的な力で破壊した。

だが今は。

「ふんっ！」

終始すら知覚させない速さで振り下ろした両腕。その切っ先は地面スレスレに静止した。そしてその先には、左右に割れんとする大地の姿。

速さと威力の両立。齡千を超えてついに見出した境地。初歩的にして単純だが、決して容易な事ではなかった。そう、己の肉体のみでそこに至るには。

穂積織は、速さにおいて比肩するものは少ない。あらゆるものを壊してみせるが、それは彼の『直死の魔眼』あつてこそ。

藍染惣右介は元より卓越した力を持っていたが、崩玉の力を得ると

破壊力に傾倒してしまった。

速さと力は、片方に傾倒してしまう天秤になる。

その均衡を保ち、そして高めていく境地。肉体一つで至れるのか。この齢で至れるのか。

「…ふん。その程度の壁で儂を止められると思うなよ」

燃えるような魂は、天をも焦がす不遜なる力。歳に似合わぬ傲慢。

——人として、その果てへと至らん。

未だ頂に立ちはだかる最強の牙が、静かに研ぎ澄まされていた。

まだ見ぬ敵が現れるのかもしれない。果たしてその時、自分はどんなっているのだろうか。強くなっているのだろうか。

そう考えるその顔は先人たる一人の死神の顔ではなく。まるで若き頃の移し身のようなだった。

現世。某所にて。

「随分と大変だったそうじゃない？」

「あ？ …知ってるのか？」

「喜助から聞いたわ。終戦の立役者なんだってね？」

眼鏡をかけて煙草を吹かす。クソまずい煙草だと聞いたことがあるが、それを嬉々として吸うなんて、などと織は内心で考えていた。

「結果論だ。俺もアイツも、自分のことしか考えてなかつたからな」

「いいじゃない。人間なんてそんなものよ。誰かのためにだなんて言う人ほど信用できないわ。だってそれこそ自己満足のためなんだから」

「性格悪いって言われるだろ、オマエ」

「お互い様ね」

両儀式であればさらりと流すのだろう。しかし互いを罵り合うようなその会話は、この中では日常と同じであった。

応接間のように配置された椅子とテーブル。そのうちテーブルには、コンビニのレジ袋が置かれていた。

「またそれ買ってきたの？」

「文句あるのかよ。言っとくけど、やらないからな」

「ケチくさいわね。まあ、そんな気分じゃないわよ」

ハーゲンダッツ。初めて食べたのはこっちに来てからだが、どうも式が欲しがっているアイスだった。

いつの間に、という思いはあった。なにせ織は見たことも聞いたこともないのだから。

式曰く、『さあ？　なんでだろうな。ただなんとなく、食べたいなつて』とか何とか。きつと『両儀式』は笑っているのだろう。

ストロベリーは式が、バニラは織が食べるのがいつもの習慣だった。

「随分馴染んだわね。もういくつになるかしら」

「こっちに来て半年…くらいか？　本当は副隊長が来るのはマズいんだが、重霊地つてことで特例だ」

「ふーん」

木製のスプーンでアイスを食べ進める。斬魄刀は浦原喜助のところに置いてあって、今頃はストロベリーを食べているのだろう。転身体で具象化して、夜を歩き回るのだ。

おかげで織の手持ちの武器はナイフだけ。苦手な高位鬼道などを全力で使い倒すしかなかった。

なにせ虚相手には殺すだけはいけない。斬魄刀とはただの武器ではなく、堕ちた後の罪を祓うものであるゆえに。

「崩玉…といったかしら？　過程はどうあれ『願いを叶える』といったのは」

「ああ…」

眼鏡のつるを持って、眼鏡をケースにしまった。目付きの悪さは相変わらずだ。

「魔術師の間にも、『願望を叶える』という代物はある。聖杯といってな。莫大な魔力を以って願いを叶えるのだそうだ」

「へえ。それがどうしたんだ？」

「過去、その聖杯を巡って裏で戦いがあったそうだ。その結果、まともに願いが叶えられた事はない。：いや、ささやかで俗物的なものは除いて、の話だが」

「……」

突然切り出されればこれだ。織は唐突で突拍子もない橙子の話が嫌いだった。なぜならそれは、彼にとって無視できないもので、そして正鵠を射ることがあるから。

「恐らくその崩玉というのは宝具級の代物だろう。いや、あらゆる願いを無差別に具現化するのであればそれはもはや権能にすら届きかねん。だが、だからこそこの世から消えたのだろう。一部始終は喜助から聞いている。お前が殺したことにより崩玉は消え去ったのだとな」

「：…どうかな。あれは殺すより前に崩れていたし、放っておいても消えてたんだろう。俺根源に近づこうと無理した代償だ」

「ふん、なるほどな。崩玉を聖杯に例えたからこそ分かり易い。聖杯崩玉自体は孔を開ける為のもの、というわけか」

文字通りの皮肉である。崩玉は超越者としての藍染惣右介に、虚のような孔を開けたのだから。そして同時に根源への孔も開こうとしたというわけである。

魔術要素——すなわち神秘が介入できるかと言われれば、蒼崎橙子には答えられない。霊魂とはそれそのものが神秘を内包するものであるからだ。物質界から星幽界へのアクセスは星幽界からの一方通行。いくら冠位の称号を持つ魔術師だとしても、それは変えられない。い。

「崩玉がどこかで神秘を取り込んだ。だから聖杯と似たことを出来たんだろう。喜助の話を知りただけだと、人に霊力を与える程度しか出来ないようだからな」

「：…なら多分、藍染の斬魄刀だろう」

思い当たる節はあった。藍染惣右介の斬魄刀『鏡花水月』だ。

どうにも独立した意思で、別の行動をしているような節があった。

「ほほう、……何か昔の知り合いに似てるな」

「知るか。……とこころで」

「ん？」

織は言葉を区切った。蒼崎橙子は首を傾げた。

まるで何かを思い出すように天井に目を向けること3秒。

「ああ、黒崎一護だ。どうなったか知ってるか？」

「あの派手な髪色の男か？ 元気でやっているみたいだぞ？ 霊力は

丸々失くしたようだがな」

「派手云々はオマエが言ったことかよ。…そうか」

インスタントコーヒーの黒い水面に、波紋が揺れる。

映し出される自分の顔は相変わらず。だが、少しだけ笑っていた。

そしてふと、映り込む景色に違和感を抱く。

「なあ橙子」

「なんだ？」

天井の方を指差して、こんなことを口にした。

「あの扇風機みたいなの、いつ付けたんだ？」

「お前らがここを壊しかけた次の日からだ、戯け」

ホコリひとつない新品のシーリングファンが、何食わぬ顔で回って

いた。背面の大窓から溢れる光だけが、光源ではなくなっていた。

橙子は犯人たる織に向けて、苛立ち混じりの目つきを飛ばした。

当然、織は何も知らない。きよとんとした顔のままである。

「……全く」

少しだけ、変わった気がした。

それはきつと、ほんの少しだけだけど。

「報復とか無しだからな」

殺人鬼から人へ^{自分}。完全には変わらないけれども。

そんな、自分よりの殺人衝動だ。

千年血戦篇

#1 Souvenir

一際、静かな日だったと思う。

比較的季節感覚の薄い尸魂界にも、いくらかの四季は訪れる。そんな中にも殊更に、針と軋む静けさだった。

「やな感じだな……」

つい先日現世から帰ってきて。あの男との決着を付けてから何回目の現世渡航だっただろうか。

そういえば一回目の時は朽木たちは完現術フルブリンゲなる力を持つ奴らとよく分からない諍いに割って入ってたそうだが、そうしてる同僚らによそに、俺は俺でまた奇な戦いに身を投じていた。

お陰で左腕がトんだが、そこはそれ。冠位の人形師とからしい橙子が、特製の義手を作ってよこしてくれたので、まあよしとした。

そんな過去を思い浮かべていると、背後から咳き込む音がして、思わず呆れた視線を向けた。

「いい加減休んだらどうです？ 隊長の仕事くだとか言うより、休むのが先だと思っけど」

「はは、これは私にしか出来ないからね。それにこれでも調子はいい方さ」

「こうも言われたら誰だって、はいはいそうですか、と呆れるほかないだろう。」

「それはそうと、君の直感をよく当たるからな。もしかして、何か起こりそうか？」

掘り返すように、うちの隊長——浮竹隊長がそんなことを言った。確かにその自覚はあるが、いつも確信はないのだ。ゆえの直感であり、式いわく、啓示とは全く違う曖昧な代物である。

だが、これは。

「そうかもしれないね。とりあえず外出てきますよ」

「ん？ どこに行くんだ？」

そう言われると俺は、手元の紙袋を掲げて見せた。

「頼まれものを届けに。紅茶と洋菓子ですけど」

謎の人物の襲来。

それは音もなく、匂いもなく、あるいは空気の揺れすらなかった。

たったひとつ、霊圧の揺れを感じるのみ。

「ぐう、っ」

それでも、男には矜持があった。前線に出ることは久しく無かったとはいえ、かつてかの『ノ字齋』を『十字齋』にした、兵としての誇りが。

「こうも、容易く……！」

驕りだったのか、弱くなったのか。しかし、ここで引くという道はなし。そう奮って、手にした斬魄刀を力を込めて握りしめた。

「おのれ……旅禍！」

「辛えなあ、弱えなあ、ダセエなあ！ その程度かよ、死神つてのは！」
筋骨猛々しい大男。聖人のような白服に身を包んだ、極悪人の顔だった。

槍のように伸びた、霊子で出来た武器が墓標のように地を穿つ。雀部が打ちのめされた力だ。

「何人殺したっけなあ、もう3ヶタは行ったんじゃねえか？ そろそろ三途の川にも行列が出来ちまうなあ」

メリケンサックのようなものをつけた拳から、再び武器が作り出される。

強者の余裕とも取れる、腹立たしいまでの力の差。

「総隊長が奮起なされているのだ……。私がやらずして、何とする!!」

あの日に回帰しながらも前に進む自らの憧憬に、さらなる決意を固めた。

「卍解……!」

「くっ、来やがったか!」

旅禍のその掌には、星を象った銀のメダル。

構うものかと、活と霊圧を叩き込む。

「『黄煌巖霊離宮』!」

雷が、まるで宮殿のような美しき社を空に描く。久しい感覚に震える身体を鞭打ち、その手綱を繰る。

「待ってたぜえ、その卍解を!」

「何っ!?!」

だが、それを狙ったかのように旅禍の手にあるメダルが展開し、そこに自らの力が引き摺り込まれていく。

「これはっ!?!」

「辛えだろ? 卍解を『奪われる』つつのはよお」

動揺し、察した時には全てが遅かった。空の離宮は旅禍の手に渡り、自らには卍解を喪った愛刀のみが残された。

「き、貴様あつ!」

自らより強者であるこの男を相手に、卍解なしでは到底戦えない。雀部はそれを理解した。分け身たる斬魄刀『巖霊丸』の真の力を奪われて、怒らぬはずもない。

「ふはははっ! 辛えなあ! 辛えよなあ! 奪われちまうんだもん
な、私の愛しき人^{マイ・フェアレディ}つてやつをよお!」

ああ、この場合は男になつちまうのか? などと呑気に宣う旅禍を他所に、雀部は文字通りの絶体絶命。最古参の副隊長の、死に際であつた。

「あれ？ いねーのあの人」

「今は丁度、外周の門の警備におるはずじゃ」

「つか、なんでアンタと話してんの俺」

割といいとこのお土産なんだけどな、と半ば現実逃避しながら、目的の人物がいないことに徒労感を滲ませた。

そういや確かこの総隊長、紅茶嫌いつつーか、緑茶派だったよーな。時折茶会開いてるって話、聞いたことあるな……。

まあそれはそれとして、それならその外周の門に向かうしかないか。そうして踵を返せば、背後に突き刺さる好戦的な視線。

杖を両手でついでいても、その威容は以前にも増して圧を伴っていた。

(何かしたっけな……、心当たりはなくても無いような気がしなくても無い)

自らで限りなく可能性を下げながら、その視線をスルー。死神同士としての殺し合いで、俺に勝ち目は無いし、そもそも殺そうとすら思えないのだから土俵にだって俺は立つてないのだ。

そう心の中で言い張ってその場を去る。追いかけることはなかった。

「さーて、どこにいるかな」

普通に閉じていた霊圧知覚を開けば、その範囲は瀧霊廷くらいなら網羅出来る。外周の門って瀧霊門のことだろうし、じゃあ4つのうちのどれかになるわけだけど、にしても副隊長が赴くような仕事なのかコレ？

湧き出る疑問をぶつくさと唱えながら探ると、ふと、霊圧が揺れた。

「これは……」

警備……にしてはかなりやる気だしてる気がするけれど、相手は何者だ？ というか戦ってないか？

「なんにせよ、行くか」

何分距離もあるし、巻きでいこうか。

一番隊副隊長・雀部長次郎忠息は血みどろの重傷だった。

もはや息をするだけの肉塊にも等しく、ただ地に伏せるのがせいぜいの有様だ。

「辛えなあ、生きるのは。今、楽にしてやるよ」

俺の糧になれ。そう呟かれた一言に、雀部は悔しさを滲ませる。

(ここまで……か、せめて総隊長には、この事実を伝えなくて、は)

「おーい雀部さん、アンタの土産届けに来たぞ」

ギシ、と鋼が軋む音がした。相変わらずの淡々とした口ぶりが、今日この時に限ってはよく耳に馴染む。

「ほ、づみ……、なぜここに……」

「なぜって、そりゃ土産届けにだけど。行ってたじゃん、現世の洋物」
場にそぐわない発言と行動に、悪人顔の旅禍も真顔になっていた。

ややあって、穂積は周りを見回したのち、ため息を吐いた。

「で、なにこれ？」

「旅禍あ？」

この人をボロ雑巾にできる旅禍とか、なんだそれ。霊圧は知らないけど、こいつはその程度の強さはあるのか。

「つか、旅禍にしては随分小綺麗っつか、俺らを意識した服っつか」

白を基調にした、簡単ながら豪華を感じるデザイン。なんか既視感を感じるのだが、それを思い出すよりも早く、目の前からヒントが飛んできた。

靈子で構成された槍。それが、更なる既視感を誘う。

「もしかしてオマエら……」

ソレが俺の中で重なり、1つの答えをはじき出す。メリケンサックに施された星の意匠。そこから伸びる槍が、その穂先を俺に向けて待機していた。

「死にな、死神」

大きく振りかぶって投げる、というよりは大きなテイクバックから殴り放つという言葉がしっくりきた。槍の石突にあたる部分を投げる動作の中で殴るように放つことから、言葉にするにも限界があるというものだ。ふと、石突を蹴って撃ち放つようなスタイルの槍が頭を過ぎるが、それはそれで人智を超越した代物だろう。

「逃げるぞ」

「すま、ない……」

槍の一撃は軌道も読み易く、足の速い俺にしてみれば幼子の突進程度だ。たまに痛い時もあるのがミソ。

ぐったりとした雀部を抱えれば、非力な俺では戦うなど到底無理な話。こんなだから、常々朽木や隊長目付役の2人から『もやし』とか言われるんだろうな。

「逃げられると思ってるのかあ?」

「うるさい。『六杖光牢』」

流石にうんざりしてきたので、詠唱破棄で縛道を起動して、巨軀を抑え込んだ。激痛が走るが、アレなら直ぐに破るだろう。それでも時間稼ぎには十分だ。

「揺れるぞ、我慢してくれ」

縮地術で地を駆ける。瞬歩や響歩に比べて直線的にしか移動出来ず、融通の効かないところはあがあるが、速度は頭抜けて速い。地を縮め

るその技法は、神仙の技にも等しいのだとか。速けりやいいんだけど。

だが奴さんもしつこいもので、ストーカーじみた執念で追跡をかけてくる。道中で不運にも出会でくわした哀れな一般隊士に穴を開けていき、なぜかさらに霊圧が大きくなる。

「なんだありや。殺せば殺すだけ強くなるのか？」

「わか、らぬ……」

この状態でもこの男は意識を保ち、かつ敵の観察を続けていた。滅私と奉公——その先はあの爺さんだろうけど——の精神は、全くもつて目に痛い。

「流石に追いつかれはしなさそうだ。このまま四番隊舎行くぞ」

「待て、先に総隊長殿に、お伝えしなければ」

「死にかけが何言ってるんだ。んなもんはちやんと死を遠ざけてから言ってくれ。土産が無駄になったら困るんだよ」

というかアンタの頼みなんだけどな。実は腕にその土産の紙袋を通したままであり、それがカタカタと揺れて音を立てている。それを見た雀部はふと口許を緩めて、そうだったなと細く呟いた。

そうしているうちに辿り着いた四番隊の隊舎に、なぜか正門にいた勇音が目に入った。急患、と一言だけ告げて押し付けると、その急患の容態と正体に慌てふためく様が少し可笑しくて。ついでに腕の土産も置いとくよう言付けて、さっさと大きくなり続ける霊圧の直上に足を向けた。

「つと、」

玩具を見つけた子供のような、似合わない笑顔だった。極悪だという自覚くらいはしていてもraithたい。

「フアンゲン鬼ごっこはお終いか？ 足が速いみたいだが、さぞ人気者だったんだらうなあ」

「ふあ……？ よく分かんないけど、遊戯がやりたいなら帰って親とやってもらえよ。随分とイイ教育されてきたんじゃねーの？」

そう言いながら、斬魄刀を抜いた。殺す気もなければ、そういう風にも見れない。伽藍の身体は、秩序ルールの中からやるべき事を勝手に探

す。

「今の俺は何人殺したっけな、数えるのも辛えなあ。頭が良くねえもんでな」

「なんだよ、安っすいマードーズ・ハイか？」

目の前のソレは、愉快犯的大量殺人鬼。

一時の快樂で人を殺す。それは『殺人』に意味を望む俺の、最も忌み嫌うことだ。

軽く、刀を構える。嫌悪感が殺気を孕み、『眼』が、世界に一枚の布を被せた世界を捉える。

「何しに来たかは知らねえけど、オマエはここで潰す」

「辛えなあ、出来もしないことを口にするのは」

同時に霊子の槍が現れ、それが一瞬で目の前に飛来した。

「——人が当たり前のように殺されて死ぬのなら、」

空気を割いてくる槍の先に、伸ばした刀の鋒をことも無げに重ねていく。

『眼』が1つだけ、世界がズラしてしまえば。そこはもう、赤黒い線が渦巻く点の場所。

「物が壊されて死ぬのも、また当たり前だろ」

だから、酷く脆いものが壊れるように、槍は消えてなくなった。

「な、あ……」

自信があつたのか何なのか、起きた現象にそいつが僅かな戸惑いを見せれば、俺みたいなやつにだってグサリとやられてしまう。

強かろうが、不死だろうが、形かたちを持つてあるのなら関係ない。

英雄にもなれない殺人鬼は、殺人鬼にすらなれない殺人鬼に、至極あつさりあつさりと殺された。

そうして終わった後にふと、捕まえれば良かった、などという感想がポツリと溢れていた。

#2 Blue On The Red

事の委細と所感は、まあ仕事だしと書類上で報告した。そして面倒ながら当然、戦闘した当事者として隊首会議にも呼ばれた。多くの下級隊士が亡くなったという初っ端の報告のせいも、暗く澱んだ雰囲気になった隊首会議だが、その中心となった議題は言うまでもない。

「それで、穂積織。キミの意見を聞こうか」

今や瀨靈廷のあちこちで話題となつていゝ旅禍の件だ。直接戦つて生きているのが俺と雀部しか居らず、後者は未だベッドの上であるから、こうして俺は仕方なくここにゐるわけだ。

嫌に耳に響く声は、ここ最近かぶり物とメイクの変遷が多い涅マユリのもの。現世で突如起きた虚の急速且つ一方的な殲滅と流魂街住民の突然の消失、そしてそれと時を同じくして起きた今回の襲撃。何者なのか、という問いに対して、恐らくアイツの中ではとつくに結論は出てるんだろうが、そそのようなものはなかったのだろう。涅は至極つまらなさそうな表情だった。

「意見も何もないぞ。あるのは結論だけだ」

「構わんヨ。話したまえ」

やっぱり。しかし、どうせ俺の結論を補完するために総隊長の爺さんから白羽の矢を打たれるんだ。遅いか早いかだ。

深く息を零して、直感任せで納得のいく言葉を押し出していく。

「結論。奴は滅却師だ」

「その根拠は」

俺の言葉に涅以外の各隊長が少なからず驚きを見せる中、総隊長の爺さんが湛然と問いかける。

「直感だが、敢えて言うなら奴が持ってた武器と戦い方だ。恐らく技術開発局が解析してるとは思うけど、アレの武器には星の意匠があった。黒崎の仲間の滅却師と同じやつ」

そう言うと、大体のヤツはイメージができるだろうか。……多分無理か。主に更木剣八。

「あと、霊子を集めて圧縮、それを武器として使う、撃ち出すって戦い方も同じ。科学者サマには短絡的に聞こえるだろうけどな」

軽い気持ちで科学者サマをなじって、それで話は終わりだ。後は魂魄消失の件やら何やらの話が交わされたが、それほど間をおかずにやたら重苦しい話から俺は退けられた。仕方ないのでその足で隊舎に戻って、そのままふらりと歩き回っていた。

そういえば会議の途中、雀部から聞いたのか、正解を奪われるという話を総隊長が切り出した時の驚き様と言ったら、一周回って面白いくらいの代物だった。涅はそれについても調査をしているらしいが、悪いけどこれは浦原喜助の領分な気もする。

どんよりした空気が立ちこめる外へ出れば、空は雲量8程度の、曇りみの晴れみみたいな模様。申し訳程度の青も、すぐに隠れてしまった。まあ、内から外、そんな感じで空気が変わるだけでも気分は変わるものだ。

肩と首を軽くポキ、と鳴らして、肺から勢いよく嫌な空気を吐き出していると、会議が終わったその足で、後ろから浮竹隊長がやってきた。

「災難だったな穂積。よく生きていてくれた」

「土産渡しに行っただけなのに、って話ですけど」

全くもってその通りである。形を気にするような土産でなかったから良かったというものだ。

すると、そういえばと思いついたように浮竹隊長が手を叩いた。

「行木と斑目も、現世で虚と交戦して大怪我をしたらしいぞ」

「なんでアンタが先に知ってるんだ」

「いや、君が伝令神機を部屋に置き忘れてたんだが」

通知に律儀に反応したのかこの人。いや、置き忘れてた俺にも非はあるんだろうけども。置き忘れに関しては素直に謝って、その2人の話を聞くことにする。そういえば帰ってきたんだっけか。四番隊にいるらしいが、まだ報告も聞いてないなとそこまで聞いて思い至った。

「2人とも重傷だったそうだが、一護君たちが助けてくれたそうだ。

揃って無事らしいぞ」

「面倒なタイプの借り作っちゃまったかなあ。礼くらいはしとかなきゃか」

「そうだな、いくつか土産も見繕っておこう」

「次はこつちの土産か……」

気分は運び屋、あるいは小間使いか。これだから借りは作りたくないんだ。相手が黒崎一護だからまだマシなのだろうが、これが浦原や涅だつたら目も当てられない。

現世に行く機会を作るか、あるいは黒崎一護たちがコチラに来るか。何にしてもタイミングが合えば渡すくらいの感じで行こう。どうせ向こうもそれほど重く考えちゃいないだろうし。

「しかし、滅却師か……」

また浮竹隊長が暗い顔で暗いことを話し出す。現隊長格でも古参で、身体こそ弱いものの、霊圧に関しては割とえげつないものを持っているウチの隊長は、憂うときの雰囲気絵になる。——という俺の現実逃避。

死にやすそうで死ななさそうな、そんなこの人の不思議な景色は、初めて見た時から今でも忘れられない。

そしてその感覚とは似て非なるけれども、あの滅却師の中にもそんな線があった。

「殺せば殺すだけ上がる霊圧……つてのは、流石に滅却師のデフォルト能力とは思いたくないけど」

「なんでそれを言わなかったんだ？」

独り言のような呟きに、叱るでも責めるでもなく、純粹な疑問としてそう問うた浮竹隊長に、俺は確証がないからとしか答えられなかった。あれがそういう能力なのか、それとも暖気運転の代わりに殺戮なのか、という話である。

——まあ、終わった話ではあるが。それは始まりでもある。

「何にせよ、俺らは宣戦布告された側です。どうせすぐに来ますよ」

ドンとほら、世界の死に際。青く塗りつぶされて目に痛い、赤い世界だ。

青く立ち上がる柱は、間近で見れば最果ての柱にすら見えてしま
う。世界を支えるには不甲斐ない脆さだが、その威容は滅却師の面子
を見せつけるには十分だったんだろう。

「ぐあつー！」

「あゝあゝあゝ」

「数が多いし、普通に強いぞコイツら」

早速かと舌打ちして浮竹隊長は別の場所に駆けていった。お陰で
自由なのはいいが、如何せん数の多さが鬱陶しいことこの上ない。

それにコイツら、分かっではいたけど手数も多い。近距離から遠距
離まで、武器の揃いもいい。……死神にも言えることかコレ。

「ちつ、『破道の三十三・蒼火墜』」

一対一を繰り返すのは悪手。疲れるから。だから纏めて吹き飛ば
したいと思うが、コイツら破面かそれ以上に硬いんだが。少なくとも
蒼火墜程度ではかすり傷くらいにしかならない。

「なぜ静フルート・ウェーネ血装が効かないのだ!？」

「この、死神風情が!!」

「この男、まさか!？」

「はいはい」

空っぽの義務感——要するに仕事だから。ポリシーはあるけどそ
れはそれ、これは穂積織という人間のやるべきことである。

便利なものがあれば手を伸ばしてしまうのは性さがというものだから、
このくらいなら許して欲しいものだ。式は多分つまらなさそうにし
てるんだろうし。

線を斬って点を刺す。硬さ自慢の盾も、死ねば土くれ同然。鍛えた
であろう腕を、俺の刀があっさり切り捨てていく。

積み重なる死体の山を見れば、この前の滅却師のことを言えないな
と自嘲の声が溢れてくる。

「うお、霊圧が荒れ狂ってるぞ……」

隊長格も参戦して、瀟靈廷は混沌としていた。こんな中では下級席次の隊士は肉人形も同然だろう。

面倒なんだろうなあ、と当たり前のことを考える。

歩けば即座に殺気の筈。過剰殺意の海を渡りながら、波間から跳ねてくる矢を叩き落として、またも山を高くしていく。

どうにもヘイト集まりすぎな気がするけど、探す手間が省けるので妥協だ。

「さて、どこから行くかうか」

歩を進めれば、血の海の中。それでも隠せない脆い世界の感覚も、もう慣れたものだった。

「こりやまた、ばったばったと」

疲れたと言わんばかりの顔で、白い屍の上に立つ。指先についた返り血を屍の服で拭い、深く息を吐いた。

雀部の言葉で、敵は卍解を奪う——『卍解奪掠』を可能としていることが分かった。ベッドの上の雀部は確かに、盛りしきに立てかけられた斬魄刀に視線を向けていたし、その横に置かれた銀色のプレートと刀身を交互に目をやり、失意に沈んでいるようだった。

しかし涅が解析をするまでもなくその事実が判明した以上、こちらから卍解を使うことはないだろう。

故に、この戦いに勝機はない。

卍解を使わないというたった一つの縛りが、死神の終わりを告げた。始解までしか使えない状況でどうしろと、というのが大半の死神の本音だろう。

——で、だからどうした。

相手より強い必要はない。死なせば勝ちだ。

「そうは思わないか、滅却師？」

「我が同胞を、ああも殺し尽くすか」

行木と斑目は、運が良かったらしい。真つ二つにされた先輩を前にして、逃げる事が出来たのだから。

そうして立つのは、目深にフードを被った冷徹な優男。右手の刀には、血の1つもなく、まるで血で汚れることを拒むかの如くに。

「どうせ雑兵だろうに。仲間想いで部下想いとは、いい上司みたいだな、オマエ」

これがポーズなら笑ってやれたが、コイツは本気だ。末端まで同士だと思つてやがる。もしかして滅却師って結構意識高いのか？

行木と斑目を背後に、解放さえしていない斬魄刀を自然体に手にす

る。

「フルート・ヴェーネ静血装をこうも易々と……。やはり貴様は危険のようだな、穂積織」

「え、なに、俺のこと知ってるのかよ？」

一方的に知られているとは、なんとなく嫌な感じだ。しかもかなりの危険物扱い。

「陛下は藍染惣右介という男を高く評価していた。その知性、思想、力、あらゆる面でだ」

「出歯亀してたのかよ、趣味よくねーぞ」

俺にしてみれば侵入されたことより、観察されていたことの方が気持ち悪い。どこまで筒抜けになっていたのやら。

「だが、その藍染惣右介は死んだ。他ならぬ貴様の手によつてだ」

「オマエら、マジでどこから見てたんだ？ 現世での戦いだったと思うけど」

「故に、陛下は貴様も評価している」

男は俺の言葉を完全に無視し、全く分からぬ陛下とやらを持ち上げながら、ただただ事実のみをつらつらと口にしていく。

「そしてそれ故に、貴様は危険であると。陛下は判断なされた」

「藍染惣右介のついで、みたいな言い方は癪だな。で、それがどうした？ 言いたい事は決まってるだろ？」

手にした剣から滲む霊圧が、その答えである。——が。

「言うまでもあるまい。しかし貴様は運が良い。今の私は早急に陛下のもとに馳せ参じねばならないのだ。貴様の相手は、我が同胞たちで十分だ」

「はっ、なるほどな」

逆回しのように引つ込む殺気。毒気を抜かれ、斬魄刀の柄から手が離れる。致命的な隙に、しかしコイツは目を瞑っていた。

周囲が死ぬ気で戦う中、まるで浮世離れた呑気なやり取りに、背後の死神たちが茫然とする。

「なら行けばいい。オマエらの侵攻を止めるのは俺らである必要はないしな」

「その不遜、高くつくぞ。穂積織」

驚きの空気を背中で感じながら、そう吐き捨てた冷面の滅却師を見送った。

「だそうだ。生きてて良かったな」

「いい、いい、いや!? あれは止めなきやなやつでは!? 呑気してる場合ですか副隊長!?!」

「そりゃそうだけど、今はオマエ達を四番隊のどこまで送るのが先だ。下手な死人は出さないに越したことはないんだ」

同隊の身内ならなおさら。主に書類が増えるのがいやだという意味で。人でなしなのは今さらだし。

追わねばならないのは分かっているが、しかしさっきの話で向こうが俺を妙に警戒しているのが分かってしまった。この前のヒゲ面はそんな素振りを見せなかったのに。あの男がただ頭が弱かっただけなのか、その警戒感の共有がごく一部でしかなされていないのか。それは知らないが、この調子だと向こうの作戦勝ちというか、普通に負ける。次に繋がる何かを残すことなく、だ。

「これは直感だけど、向こうはこっちの戦力を結構把握してる気がする。厄介そうなやつは特に気をつけろ、みたいな。例えばさっきの話だと生前の藍染惣右介とか、今なら多分更木剣八とかがそうなんじゃないか?」

「更木……十一番隊の更木剣八隊長ですか……」

ややあって思考回路が機能し始めた行木と斑目が、俺の言葉に対して何とか口を動かしていた。虚のソレとは違う、捕食本能明確に殺そうという意思をその身一杯に受けるのは初めてだろうに、なかなかの強心臓だ。

「お、またまたお出ました。有象無象だけどなかなかどうして、捨て駒にするにはオーバースペックだ。オマエら、やれるか?」

「が、頑張ります」

対虚の戦闘は兎も角、対人の殺し合いはそうそう経験しない。稽古とはまるで違う、この殺意の海を渡る手段は、自らに携えたその斬魄刀のみだ。それ以上を望むなら、力を手に入れるしかない。

「足止めだけでいい。コイツらの防御は斬魄刀の刃を通さないからな」

「で、でも副隊長は……」

「俺ならどうとでも出来るんだよ。そら、気張れよ」

真つ当な弓から、青い霊子の矢。白服の滅却師が、らしい攻撃を仕掛けてくる。面制圧を狙ったであろう矢の弾幕を、行木らを庇うようにして切り払い、刀の間合いへと近づいていく。

死は万象へ平等に、けれど存在には不平等に走る。卍解はおろか、始解すらもしていない今の状態では、生死の境界を手繰ることは出来ない。3人の滅却師を彼岸へ渡すためには、1対1を3回行う他ない。速さを売りにしていても、コイツらはその隙を突こうと考えるくらいには質の高い雑兵だ。

だからこそ——だ。

「こ、のおっ!!」

「ああああ!!」

刀の間合いに入れば、矢を打つ体勢を作り出すことは容易ではない。本能的に構えた腕に霊子の回路が走るのを目にしながら、その盾ごと1人を渡す。

間髪入れずに斑目の側に飛び、また1人。

振り向きざまに死角から斬魄刀を投げ、点を突いて最後の1人。

たったそれだけのことだが、2人は肩で息をするほどに消耗していた。

よくやった、と褒めるべきだろう。足止めとはいえ、明らかな格上と鏢迫り合いをやるのは、それだけで神経をすり減らすものなのだ。——というのはまあ、俺自身の記録にそう遺されているだけのことだが。

「十分だな。オマエら、後はもう休んでろ」

「は、はい……」

情け無い声で、へろへろと声を漏らす行木と、そんな声もでない斑目。終わったという感じを出す、まあそんなことはないわけで。この辺りの敵の数が少ないうちに、コイツらをさっさと四番隊舎に突っ

込む。

「織さん!!」

「勇音か、早速で悪いがアイツらを任せた。この辺りのは散らしていくから」

ドタドタと慌て気味にやって来た四番隊副隊長の虎徹勇音。なんだかんだで長く深い付き合いになったが、それゆえに『任せる』なんて言葉がふつと口をついて出てくる。……まあ、悪いことではない。

「わ、私も……、戦えますから!」

身長差の都合で、勇音が見下ろす構図。いつものへなつとした顔とは違う、何かを決めた顔つきだった。

戦えますという意味表示は、コイツには似合わないなど、そう思った。

「オマエは癒し手だろうに。それに多少強くなっても、流石に今回は相手が悪いだろ」

「でもっ、私も織さんの力に」

「あのな、背中の子供は1つじゃないんだぞ」

焦りを感じているのだろうか。そんなもの、オマエを感じる必要はないのに。

でもオマエは、多分待てないだろう。俺がどう言う人間か、コイツの視点から見たソレは分からないけど、よほど危なっかしいだろう。そんなに大怪我を何度もした覚えはないのだけど。

「オマエにはオマエの今やるべき事があるはずだ。なら、まずはそこからだ。俺のことはその後でいい」

俺は返事も聞かず、我儘に押し付けて走り去った。目の端に見えた泣きそうな、あるいは悔しそうな顔は、見なかったことにした。

「私は、貴方を助けたい、支えたいって。それが私のやるべき事なのに……っ」

「恐怖……か」

朽木白哉は、敵の滅却師の言葉を正確に受け止めていた。

「正解は使うことが許されず、しかし同時に負けることも許されない。いい。」

「万全の敵との戦いに、これほど不利な条件を突きつけられているというのに。」

「ソウ、理由ノナイ恐怖コソ、真ノ恐怖ナンだ」

「そうか、これが貴様の言う『恐怖』か」

カタカタと震える手を、湧き上がる恐怖を踏み潰して抑え込む。背後にいる恋次が、私が倒れても彼奴を倒してくれるはずだと、希望を見出しながら立ち続ける。

——甘えだ。それは恐怖に屈そうとしている私の、弱さゆえの。

「本能カラノ恐怖ニハ、命アル限り抗エナイ。羽虫ノ如ク群ガルソレヲ、誰も振り払ウコトナド出来ハシナイ」

本能が、恐れている。恐怖の無い戦いなどなく、そうした恐怖を振り伏せて来たというのに。私の中の誇りが、激情が。恐怖を振り払って身体を突き動かす。

「ぐ、が……」

「驚イタ。強靱ナ心ダよ。デモ、コレデオ終イダね」

腹を貫かれ、全てが恐怖へと渦を巻いて流れていく。隊の皆も、最愛の家族も——。

湯船の栓を抜いたように流れ出て、ふと最後に残ったものがあつた。

それを理解した瞬間、世界に色がついた気がした。血の気が引いた手に、赤みがさすほどに。

「ナニ？」

「——そうか、そうだったな」

笑いが溢れるほど、軽くなった。それは恐らく、随分昔の記憶。

「貴様如きの幼稚な恐怖などで、私は止まらぬ」

理解できない故の恐怖を、私は感じたことがあつた。

『オマエには見せたことなかったっけか。この眼』

理解できない恐怖を知った今、理解してはいけない恐怖があることを思い出した。私はあの時、恐ろしくも美しいものを見たのだ。

「そう感じるように仕立て上げられた——、作られた恐怖など恐るるに足らぬ。真に恐怖すべきものを、私は既に知っているのだから」

暗く輝く青と赤。照らされた羽虫が露と消える。——もう、負ける理由はなくなった。

「散れ、『千本桜』」

「ナゼだ——、恐怖ガ、通ジナイ？」

この滅却師は言った。『恐怖』は『死』に繋がっていると。ならばそれこそが。

「生命が死を恐れるという当然の事実を、貴様は力にした。そしてそれゆえに」

動揺が動揺を呼び、霊子の収束が不安定となる。静血装なる盾の上からでも、千本桜が傷をつける。

「オオ、オオオ——」

「——終わりだ、滅却師」

悍ましき声を上げる滅却師の、硬い盾を貫いた。地獄からの呼び声にもとれる断末魔は、ぱたりと途切れた。

#4 Re. play is not to do
most

ウエコムンド
虚圏。濃密な霊子密度が原因してか、開闢以来不毛の大地が広がる世界だ。

「何故だ、貴様、虚圏がどうなってもいいというのか!？」

「彼女がどうなろうと、僕は興味が湧かないね」

「ハリベル様が、ハリベル様がいなくなれば、お前だって——」

破面の女はそこで悟ったように言葉を切った。無意味だと感じたのだ。

相手は稀代の変人だ。真つ当な話で説き伏せるなど不可能なのだ。

だが、あるいは。求める環境が保障されなくなればと。一片にも満たない糸に縋りたい。今は、ただそれだけだ。

「霊子を、吸収してる……!？」

虚圏は尸魂界と同じく、万物が霊子で構成された世界である。滅却師完聖体とキルゲ・オピーなる男が呼んだ力は、虚はおろか、人も、能力すらも、問答無用で徴収し続けた。

「ぐ……」

「茶渡くん!」

アヨンなる怪物を吸収したせいか、その姿は神聖さとかけ離れた異形と化していた。霊子の徴収は止まることなく、井上織姫と茶渡泰虎

は死をも覚悟した。

「っ!？」

徴収が止まる。突然の攻撃に、キルゲの強奪の手が止まった。まるで銃声のような音に、井上と茶渡は首を傾げた。このような場所にそんな武器は存在するはずはないのだ。

だが、そんなものを考え得る存在がここにはいるのだ。

「——全く、先程から五月蠅い奴らだね。静かにしてくれたまえよ」
遠くから来たはずの声は、やけにはつきり耳に届いた。

「ティア・ハリベルももう少し王らしく守ってくれば良かったんだけど、それは過ぎた話だね。——さて、滅却師」

毒々しさを感じさせるピンク色の髪。ねっとりとした声。破面を除けばこの場の全員が初対面のはずなのに、この男がどういう人間かは、皆一瞬で理解した。

「研究の邪魔をしてくれたんだ。サンプルになるくらいの償いはしてもらおうか」

滅却師は貴重だからね、と言葉と裏腹に愉しげに笑う男に、キルゲは苛立ちを込めながら努めて丁寧な言葉を選んでいく。

「……貴方は何者ですか」

「……そこからかい？ 僕の名前を告げることに、メリットは感じないが……。それより僕は君の名前の方が知りたいね」

「質問に答えなさい」

「急かすなよ滅却師。ただでさえ美しくないその姿が、さらに目も当てられなくなるぞ?」

そこで男は辺りを見回して、やっと自身への視線を感じ取った。なるほどと、意味もわからないままにくつくつと笑って。

「僕はザエルアポロ・グランツ。科学者さ」

しん、と鎮まりかえる空間に興味もなく、スタスタとザエルアポロは歩を進める。

「再現性はまずまずか……。やはり僕が直接この目で見なければ、これ以上の正確さは出力不可というわけかな……。?」

「……何をしているのです」

あるはずのない銃声が、不毛の大地を穿った痕——銃痕を指で撫でながら、そこにキルゲの不快な苛立ちを含む声が投げかけられた。

ザエルアポロは口角が上がった笑みの顔のまま、大層上機嫌に、まるで自慢話を友に語るかのごとく、大袈裟なジェスチャーを加えて語る。

「穴蔵から拝借してきたものの試運転と確認だよ。最近やつと出来上がったものでね」

「……意味が分かりかねますが、まあいいでしょう。あなたもここで死になさい」

「死——か」

その言葉にピタリと、ザエルアポロは手を止めた。そして徐に立ち上がり、ここで初めて滅却師の姿に焦点が合った。

「死を克服する。僕の至上命題さ。循環の中の一プロセスにしてしまおうとした結果が、我が帰^{レスレクション}刃の奥の手だがね。しかしまあそれでは足りないんだよ」

不満と愉快さを同時に含む声音に、募るのはキルゲの苛立ちとキルゲ以外の困惑だ。

「穴蔵の禁忌、直死の死神。こんなものがあると、殺されることによる死が克服できないんだ。僕の命が他人の天秤の上、などというのはいくらでもない。だからまずは、手始めに禁忌を解こうかだね」

ザエルアポロが掌大の箱を持つ左手を掲げると、途端その周りに霊子が集まり、今度は何と滅却師の矢が弾幕を張り始めた。

「なぜ破面如きが、我らが神聖^{ハイリツヒ・プファイル}滅矢を！」

「生きていたら、是非とも感想を聞かせてくれたまえよ。滅却師」

ザエルアポロの霊圧で作られた弾幕の矢に飲まれ、キルゲの断末魔は轟音に掻き消されるのみだった。

「ふむ、結果は上々といったところか」

「あれはアタシも知らないモノでしたが、何なんスか？」

「さてね。現象の解析はお手のものだろう？　浦原喜助」

ザエルアポロはやはり機嫌良く、浦原喜助は未知の現象に疑問が絶えない。

「なんというか、妙な既視感を覚えますが……。穴蔵の禁忌っスか、あとで聞いとこ」

その宛てが誰かは言うまでもないだろう。

「それで、結局アレは何なんスか？」

「答えが欲しいのか？　僕はどうやら君を過大評価していたようだな」

「それは結構。……所有者の意思を反映する、まるで崩玉のような力。アテにするつもりは有りませんが、害の有無くらいは判断しておきたいんス」

そう言つて浦原喜助が目を向けたのは、ザエルアポロの手にある真つ白な箱だった。掌サイズのそれは何の紋様もなく、無機的な存在感を見せる。

「君が創つた崩玉は意志を持つてしまった。それはそれで面白いが、未知数の可能性であると同時に、未知数の欠陥でもあった」

かつての己が創り上げた、全ての始まり。破壊すら儘ならなかったはずのそれは、藍染惣右介と共に消え去った。だが、あつてはならないものと分かつていても、それをこういう形で指摘されるとムツとくるものがあつた。

しかし押し留めたつもりの不満は、どうやらザエルアポロには分かつてしまつたらしい。

「そんな顔をするな、不満に思うのは分からんでもないよ。だが、この手のモノに意志が宿れば、我々の手を易々と超えていくのは明らかだ」

「それはそうスね。ですが」

「未知を明かしたいなどという探究心故ならば、それでも構わんさ。

「ただ僕にとって、あれらは道具に過ぎないのさ。道具に意志など不要だろうか？」

「ならソレは、意志の無い崩玉だとしても？」

「そう思えば、のっぺらな箱の存在感が重くなる。分からないことの不気味さが、ズシリと音を立てるような。そんな存在感だった。」

しかしザエルアポロは、それに否という。

「これは私の意思や心を取り込むことはない。ただただ無機的に値を取り込み『値』を吐くだけさ」

——ただの『値』では、ないのだがね。

その一言に、深い意味があることは分かった。それだけだ。

「……分かりました。アナタが無造作に使うことはないでしょう。それに恐らくその箱が影響する範囲は、そこまで大きくないはずですし」

「はは、やはり先ほどの言葉は撤回しようか。……君は恐ろしい科学者だよ」

してやったり、と目元に少しだけ喜色が滲む浦原喜助はそれを隠した。本心を悟らせない飄々さはいつも通りだ。

「瀨霊廷が侵攻されているのだろうか？ 涅マユリから知らせは受けていたんだ。奴に死なれては困る」

「そうそう死なないだろうが——、という台詞は、涅マユリへの理解が成せる発言か。浦原喜助は意外な繋がりにより少し驚きを覚えつつも、これ幸いとザエルアポロの手を借りることに成功したのだった。」

「ついでだ。暇してるあの男の手も借りておけ。ちようどネコ科だ」

「アハハ、そんな可愛いものでもないでしょう。虚ですし」

シュテレンリッター

星十字騎士団は護廷十三隊に対し、戦力で圧倒していた。卍解を使うことが出来ず、隊長格すらもその凶刃に防戦するしかない状況で、辛うじて致命的に至っていないだけだった。しかしそれも、最早時間の問題である。

「やれやれ、大変なことになったねえ」

京楽春水は、生来の軽薄さをこの期に及んでも変えない。いつも通りでいられることが、彼の強みだ。

「思った以上に堅いな、貴様らは」

「そりやどうも。アンタこそ強いねえ」

解放した京楽の斬魄刀『花天狂骨』は、兇戯のルールで戦う斬魄刀。影や色を始めとする鬼事が多いが、どうも興が乗らないらしい。京楽のリズムが作れない。

「どうしてボクの相手には銃使いが多いんだろうね」

破面の戦いでもそうだったことを思い出しながら、間合いの不利をどうするべきか、京楽は思考を止めない。

今のところ相手の滅却師——英国紳士風の男は、あまり動きを見せていない。瞬歩1つで潰せる間合いを、京楽相手にさせない技量は賞賛に値するだろう。

「他もそれなりに苦戦しているな。あと少し脆ければ、既に終わっていたものを」

「護るのが本業だから、簡単にはやられてあげられないんだ」

刀と銃身が火花を上げる。ギアを上げた京楽は、より間合い詰めていく。銃床で殴る方が——とすら思える間合いにあつて滅却師は銃身で鏝迫り合いながら、銃の間合いを維持すべく銃口を走らせる。

「卍解は使わんのかね」

「奪いたいんでしょ、知ってるんだよこっちは」

「使わねば勝てぬというのにか」

「使ったら負けちゃうからさ」

それに、と京楽は1つ息を入れた。我が師の霊圧が、その腰を上げたのが分かった。

「やあつと、動いたみたいだしね」

京楽が口角を上げて笑うと同時。絶望の青い柱から、希望を見出す赤い柱が噴き上がる。炎熱系最強最古の斬魄刀を手に、最強最古の死神が動いた。

『賊軍は全て、儂がこの手で叩っ切る』

激しい憤怒に、久しく己が本気を振る舞える歓喜がひとしづく。千年前の因果を清算すべく焔もえ上がるのは、殺伐たる殺気を湛えた剣の鬼である。

時々、たまに。おかしいな光景を目にすることがあった。それは俺にしか視えないものだから、そういうものかと納得していた。

死は絶対だが、確認しようのない不確かな存在だ。だから、それは固定されずに流動するし、植物の枝葉のように大きくなったり枯れたりもする。

それでも死はそいつだけのものであり、誰かを巻き込むように手を伸ばすことなどなかった。

「まただ……」

まるで俺を指すように、辺りの死がこちらを向く。ふと気を抜けば絡め取られてしまうような危うさをすら感じてしまう。それらを躲しつつ、気味の悪さで込み上げてくる不快感を飲み込んだ。

青い柱が消えた今、瀨霊廷は各所で戦いが起こっている。隊長格を筆頭に敵の主戦力とかち合っているようだが、正解を使えば奪われる恐れもあり劣勢もいとこころだ。

雑兵どもですら席官クラスの戦闘力を持つというのに、それだって数を用意してるなら質でこちらが負ける。勝ち目なんて見えやしない。負けていないのは運がいいのと、諦めの悪さに他ならない。もはや意地になってると言ってもいい。

「しっかし暑いね。というより熱い」

それはそうと、さつきから猛暑通り越して酷暑と呼ぶのすら生温いくらいに熱い。人がまともに生きられるような環境かよコレ。俺の心象世界にある冷蔵庫の、その冷凍室にある式のアイスが食べたい。

こんな地獄みたいなことになってるのは、まあ言うまでもなくあの爺さんの仕業だ。ウチの隊長曰く『焔熱系最強最古の斬魄刀』という触れ込みらしいが、こんな光景を簡単に作り出すならそれも真実なのだろう。

そして滅却師としてこの地獄ではのうのうとしてられないだろう。あの防御力が果たして熱も防げるのかは気になるな。

「兄は、無事だったか」

「白哉か。そっちは——白星か。そいつは吉報だな」

「兄のおかげだ」

……？ 話が分からんが、まあそういうこともあるのか？ 朽木白哉とその副官である阿散井恋次は、一番に勝ち星を挙げていた。その過程で俺が役に立ったそうだが……。

「総隊長が全霊を賭しているのだ……、我々も闘わねば」

「隊長、まずは手当てを！」

「阿散井の言う通りだ。可能な限り万全にしてこい。四番隊とその隊舎は幸いにも無傷だ。直ぐにも治してくれる」

実際何人か隊士を放り込んできたし。勇音は戦わなきゃって顔してたが、役割つてのがあるから気にしないでいいと思う。……『凍雲』ってどうなんだろうな、滅却師相手だと。

「ほら、さっさと行け」

「く……、すまない」

阿散井に肩を借りて四番隊隊舎に向かう朽木白哉を背に、またまた群れをなすやつらをサクサクとナイフで切り捨てていく。そろそろ面倒なやつとかち合いそうではあるが、その時はその時だ。

「あの人、ただのナイフでなんであんなあつさり斬れてるんすか？」

「さて、な。我々には理解できるはずもない」

正しい自己評価は苦手なタチだが、多分合ってるだろうと思う自らの性格に、飽きっぽいというのがある。無人駅を通り過ぎる特急電車のような、そんなイメージで俺の興味関心は過ぎ去っていく。

「ぐう、おのれ……！」

しかし、そもそもそんな話をする以前にもはや誰も気にしていないのが現状だ。あれだけ堂々と振る舞われては、何も言うことなどあるまい。

「随分苦戦してるみたいだな、狛村隊長」

ぴくりと震える耳。振り向いた顔はまさに犬。副隊長からは人狼だと言われているが、犬と狼の見分けなんて素人につくはずもなく。

「穂積副隊長か。……またワシを犬か何かと思っておるな？」

「いいだろ別に。この前現世のアイテムで喜んでたくせに」

「……見てたのか」

「見えた」

そして本人も犬寄りの気質があるらしい。忠誠心の高さもその一つなのだろう。肩の力を抜いた狛村左陣との間に気の抜けた、弛緩した空気が漂い始めた。

「なに、ほっこりしてるのよ!?!」

そしてそんな空気の中を、怒った声と共に切り裂く霊子の火の玉。咄嗟に飛び退いて躲すと、着弾した地面には見た目以上の破壊力が伺えた。

「へえ、そういう能力もあるんだな。殺しまくって強くなるやつとい
い、バラエティ豊かなことで」

『殺しまくって強くなるやつ?』?もしかしてアンタがドリスコール
を倒したの?」

どうにも上から目線の女であった。自尊心が高くて面倒くさそう
な、さっきの金髪イケメンとは随分と毛色の違う滅却師だった。

「そのドリスコールってやつがもじゃひげの大男なら、間違いないな」
「ふーん、そ。アンタみたいななよよした奴にやられるなんて、アイ
ツも情けないわね」

随分と好き勝手言ってくれるものだ。少なからず気にしてるとっ
のに。身長が小柄なはずの朽木ルキアとそれほど変わらないんだ。

「アンタらが中解つてのを使わないのも、あたしらのコレを警戒して

るってわけね」

そう言つて見せてきたのは、星の意匠が刻まれた掌サイズの板のよ
うなものだった。どうやらその板が、卍解奪掠のキーアイテムとなる
ようだ。随分と自慢げにぺらぺら喋つてくれたが言うまでもなく、分
かりきつたことだ。

「ま、卍解を使おうが使うまいがあたしには勝てないってことなのよ。
分かった？」

「あ、話終わった？ 橙子の話と違って興味湧かないからさ、悪いな」
タイミング良く声が途切れたので俺がそう言つてやると、粕村左陣
が呆れたような目を向けてくる。本音だから仕方ない。ところが滅
却師の方は、興味を持たれないということがお高いプライドに傷をつ
けたらしく。

「――殺す」

殺意を満たした瞳で、俺を見据えた。